

市来町埋蔵文化財発掘調査報告書(7)

県営農村活性化住環境整備事業大里地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

Uenjhou Tumenjhou ato
上 城 詰 城 跡

2000・3

市来町教育委員会

序 文

本報告書は、平成5・7～9年度県営農村活性化住環境整備事業に伴う上城詰城跡発掘調査報告書です。

上城詰城跡は山全体が中世山城であり、平成5年度に実施した確認調査で約30000㎡の範囲に埋蔵文化財が残存していることが判明しました。山城は規模も大きく遺構もしっかりしており、鹿児島県でも有数の城で考古学上貴重なものとして開発行為に対し議論を繰り返し、平成7年度に開発計画の見直しも検討されましたが、住民の要望もあり緊急発掘調査が開始されることになりました。

調査では、県内でもめずらしい旧石器時代の遺構が検出されました。この遺構は何の目的で使用されたものかは判明しませんでした。市来町を闊歩した旧石器時代人の貴重な足跡であります。また、平成8年度の調査では県内でも初めてだという火縄銃の玉が出土し、中世の戦いをほうふつとさせてくれました。今回の調査は山城全体の一部の調査であり、今後の開発行為により必要とされる調査では、更なる貴重な発見が為されることでしょう。

このように、旧石器時代から中世に至る貴重な成果をまとめた本書が、多くの方々の文化財に対する関心を高め、より一層ご理解いただき、更に今後の調査研究にご活用いただければ幸甚に存じます。

また、本報告書を発刊するにあたり、発掘調査中や報告書作成においてご指導・ご協力いただきました関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

2000年3月

市来町教育委員会
教育長 江 口 英 雄

報 告 書 抄 録

ふりがな	うえんじょうつめんじょうあと							
書名	上城詰城跡							
副書名	県営農村活性化住環境整備事業（大里地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	1							
シリーズ名	市来町埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第7集							
編著者名	新町 正・西久保 敏彦							
編集機関	市来町教育委員会							
所在地	〒899-2192 鹿児島県日置郡市来町湊町3305番地 ☎0996-36-3111							
発行年月日	2000年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うえんじょうつめんじょう 上城詰城	かごしまけん 鹿児島県	4636	3・4	31度	130度	上城詰城跡確認調査	227m ²	県営農村活性化住環境整備事業大里地区に伴う埋蔵文化財発掘調査
	ひおきぐん 日置郡	12		43分	17分	1994.06.07	13,000m ²	
	いちきちょう 市来町			48秒	35秒	1994.06.25		
	おおさと 大里					1995.11.07	13,000m ²	
						1996.03.26		
							1996.06.07	
						1996.12.20		
						1997.09.18		
						1998.03.20		
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
上城詰城跡		旧石器時代		土坑		台形石器・剥片		
		縄文時代 早期		縦穴式住居		土器・石鏃・石斧		
		縄文時代 晩期				土器		
		弥生時代中期		ピット		土器		
		中世		ピット, 土坑, 土墨		土師器・青磁・白磁		

例 言

1. 本書は，県営農村活性化住環境整備事業（大里地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は鹿児島県伊集院耕地事務所の受託事業として市来町教育委員会が調査主体となり，実施した。
3. 本書の執筆・編集等は，平成5年度から8年度までが新町が行い，平成9年度は西久保が行なった。
4. 遺物の実測・トレースは主に新町・坂口・池之上が行い，拓本は松崎・児玉が行なった。遺物の写真はH5～8年までは新町が，H9は西久保が行なった。
5. 本書に用いたレベル数値は，海拔絶対高である。
6. 本書に用いた遺物番号は，発掘年度・土器・石器の種類に関係なく通し番号とし，挿図・図版の番号と同一である。





上城詰城全景



平成7年度遺構空撮



L・M・N・O-1・2・3区 遺構空撮

本文目次

序文	1
報告書抄録	2
例言	3
図版	4
目次	8
第1章 確認調査の経過	14
第1節 調査に至るまでの経過	14
第2節 調査の組織	15
第3節 調査の経過	17
第4節 整理・報告書作成業務の組織	17
第2章 遺跡の位置及び環境	17
第1節 位置及び環境	19
第3章 確認調査	19
第1節 調査の概要	19
第2節 標準土層	19
第3節 各トレンチの概要	21
第4節 表面採集遺物	25
第5節 トレンチ出土遺物	28
第4章 平成7年度発掘調査の経過	29
第1節 調査に至るまでの経過	29
第2節 調査の組織	29
第3節 調査の経過	29
第5章 平成7年度全面調査	31
第1節 地下レーダー探査	31
第2節 平成7年度確認調査の概要	31
第3節 縄文時代の出土遺物・遺構	40
第4節 弥生時代の出土遺物・遺構	47

第5節	中世の出土遺物・遺構	49
第6節	小結	70
第6章	平成8年度発掘調査の経過	72
第1節	調査に至るまでの経過	72
第2節	調査の組織	72
第3節	調査の経過	72
第4節	DE-12~15区およびFG-7~10区の土層	74
第7章	平成8年度全面発掘調査	75
第1節	調査の概要	75
第2節	旧石器時代	75
第3節	縄文時代	81
第4節	上城詰城跡時代	87
第5節	小結	101
第8章	平成9年度全面発掘調査	103
第1節	平成9年度の調査の経過	103
第2節	発掘調査の組織	103
第3節	調査の概要	103
第4節	出土遺構	106
第5節	出土遺物	108
第6節	小結	120
第9章	まとめ	121
第1節	上城詰城について	121
第2節	市来氏について	124
第3節	その後の市来氏・河上氏の動向	125
第4節	市来氏の貿易について	126
第5節	上城詰城跡の居住者	127

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図	18
第2図	トレンチ配置図	20
第3図	表採遺物	21
第4図	1~9トレンチ	22
第5図	11~20トレンチ	23

第6図	トレンチ土層断面（一）	24
第7図	トレンチ土層断面（二）	25
第8図	4・5トレンチ遺物分布図	26
第9図	トレンチ出土遺物	27
第10図	平成7年度トレンチ配置図	32
第11図	1トレンチ拡張	33
第12図	1トレンチ土層堆積状況	34
第13図	2トレンチ遺物出土状況	35
第14図	3トレンチ遺物出土状況	36
第15図	トレンチ内出土遺物（一）	37
第16図	トレンチ内出土遺物（二）	38
第17図	トレンチ内出土遺物（三）	39
第18図	D-2区西壁土層図	40
第19図	縄文時代遺構位置図	41
第20図	縄文時代遺構（一）	42
第21図	縄文時代遺構（二）	43
第22図	縄文時代遺構（三）	44
第23図	縄文時代竪穴状遺構	45
第24図	弥生時代の遺構	46
第25図	ピット内出土遺物	47
第26図	遺構配置図	50
第27図	中世の遺構（一）	51
第28図	中世の遺構（二）	52
第29図	中世の遺構（三）	58
第30図	中世の遺構（四）	59
第31図	遺構内出土遺物	60
第32図	S K-12出土遺物	61
第33図	柱穴遺構（一）	62
第34図	柱穴遺構（二）	63
第35図	柱穴遺構内出土遺物	64
第36図	遺物集中グリット（F G-1区）	65
第37図	F G-1区出土遺物（一）	66
第38図	F G-1区出土遺物（二）	67
第39図	グリット図	68
第40図	旧石器時代遺構	76
第41図	旧石器時代遺構実測図	77
第42図	S K-9出土遺物	78
第43図	旧石器時代遺物分布図	80
第44図	旧石器時代出土遺物（一）	81

第45図	旧石器時代出土遺物（二）	82
第46図	表面採集遺物（縄文）	83
第47図	縄文時代出土遺物（一）	84
第48図	縄文時代出土遺物（二）	85
第49図	縄文時代遺物分布図	86
第50図	縄文時代の集石遺構	88
第51図	表面採集遺物（中世）	89
第52図	中世の遺構分布図	90
第53図	堀切1の平面及び遺構分布図	91
第54図	堀切1内出土遺物（一）	92
第55図	堀切1内出土遺物（二）	93
第56図	堀切2の平面図	94
第57図	中世の遺構（SK-13）	95
第58図	中世の遺構（SK-14）	96
第59図	中世の遺構（SK-15・16）	97
第60図	中世の遺構（SK-17）	99
第61図	中世の出土遺物	100
第62図	中世の遺物出土分布図	101
第63図	平成9年度調査区位置図	104
第64図	L～O-1～3区遺構配置図	107
第65図	出土遺物（土器）	109
第66図	出土遺物（石器1）	110
第67図	出土遺物（石器2）	111
第68図	出土遺物（土師器）	112
第69図	出土遺物（土師器・黒色土器）	113
第70図	出土遺物（須恵器）	114
第71図	出土遺物（磁器）	116
第72図	出土遺物（石製品）	117
第73図	土師器編年案	123

表 目 次

表1	周辺遺跡分布図	17
表2	平成5年度トレンチ出土遺物一覧表	28
表3	平成7年度縄文時代遺構計測表	47
表4	平成7年度縄文時代遺構内出土遺物一覧表	47
表5	平成7年度弥生時代遺構計測表	49
表6	平成8年度旧石器時代出土遺物一覧表	78

表7	平成8年度遺構内出土遺物一覧表	79
表8	平成8年度縄文時代出土遺物一覧表	84
表9	中世の出土遺物一覧表	89
表10	堀切内出土遺物(石器)	98
表11	堀切内出土遺物(土器)	98
表12	出土土器一覧表(H9)	118
表13	出土石器一覧表(H9)	118
表14	出土黒色土器一覧表(H9)	118
表15	出土土師器一覧表(H9)	119
表16	出土須恵器一覧表(H9)	119
表17	出土磁器一覧表(H9)	119
表18	出土石製品一覧表(H9)	119

図 版 目 次

図版1	上城詰城跡位置図	4
図版2	上城詰城全景	5
図版3	平成7年度遺構空撮	6
図版4	L~O-1~3区遺構空撮	7
図版5	1T4T発掘状況	130
図版6	6~7T発掘状況	131
図版7	8T16T発掘状況	132
図版8	19T・文化財保護審議会開催	133
図版9	堀切1地表面観察・3T発掘状況	134
図版10	5T・2T発掘状況	135
図版11	発掘風景・1T発掘状況	136
図版12	1T・DE-2・3区発掘状況	137
図版13	SK-12検出・遺物出土状況	138
図版14	P23遺物出土状況・縄文時代遺構検出	139
図版15	SC-1掘り下げ・SK-3(1/2カット)	140
図版16	堀切1検出状況・遺物出土状況	141
図版17	平成8年度調査風景・三木靖先生指導	142
図版18	遺物出土状況(土師器・青磁)	143
図版19	FG-1区遺物出土状況・堀切2土層断面	144
図版20	旧石器時代遺構検出・白磁出土状況	145
図版21	DE-12・13区発掘状況	146
図版22	L~O-1~3区調査風景	147
図版23	表採遺物・トレンチ出土遺物	148

図版24	トレンチ内出土遺物（一・二）	149
図版25	トレンチ内出土遺物（二・三）	150
図版26	縄文時代遺構（三）・PIT内出土遺物	151
図版27	PIT内出土遺物	152
図版28	柱穴遺構内出土遺物	153
図版29	F G - 1 区出土遺物（一・二）	154
図版30	S K - 9 出土遺物・旧石器時代出土遺物（一）	155
図版31	旧石器時代出土遺物（二）	156
図版32	表面採集遺物（縄文）・縄文時代出土遺物（一）	157
図版33	縄文時代出土遺物（二）・表面採集遺物（中世）	158
図版34	中世の遺物	159
図版35	堀切1内出土遺物（一・二）	160
図版36	S K - 12 出土遺物	161
図版37	S K - 12 出土遺物	162
図版38	S K - 12 出土遺物	163
図版39	S K - 12 出土遺物	164
図版40	S K - 12 出土遺物	165
図版41	第65～66図出土遺物	166
図版42	第67～68図出土遺物	167
図版43	第68～69図出土遺物	168
図版44	第69～70図出土遺物	169
図版45	第70～71図出土遺物	170
図版46	第71～72図出土遺物	171

第 I 章 確認調査の経過

第 1 節 調査に至るまでの経過

市来町教育委員会では、文化財の保存・活用を図るため各開発機関との間で事業区内の文化財の有無及びその取り扱いについて事前に協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議により、大里地区の住環境整備事業を行なう伊集院耕地事務所は、実施計画区内の埋蔵文化財の有無について市来町教育委員会に照会した。市来町教育委員会は、実施計画区内に周知の遺跡「上城・詰城」が存在することが判明したためその取り扱いについて、県教育委員会文化課（当時）と協議をした。その結果、市来町教育委員会は、県教育委員会文化課の指導と県立埋蔵文化財センターの協力を得て確認調査を実施することになった。

第 2 節 調査の組織 〈平成 5 年 6 月 7 日～平成 5 年 7 月 2 日〉

1. 所在地 鹿児島県日置郡市来町大里
2. 調査の目的 県営農村活性化住環境整備事業大里地区
3. 調査の組織

調査主体者	市来町教育委員会			
調査責任者	〃	教 育 長	松 崎 孝	
調査庶務	〃	社 会 教 育 課 長	橋 口 正 己	
	〃	派遣社会教育主事兼社会教育係長	吉 嶺 梓	
	〃	主 事 補	奥之園 勝	
調査担当者	〃	主 事	新 町 正	
現場指導者	県立埋蔵文化財センター	主 任 文 化 財 主 事	新 東 晃 一	
現場指導者	鹿児島短期大学	学 長	三 木 靖	

調査対象面積……30000m²

発掘面積……約226.75m²

1 T(10m×2m)	5 T(10m×2m)	9 T(11m×1m)	13T(9m×1m)	17T(5m×4.5m)
2 T(10m×2m)	6 T(8m×2m)	10T(9m×1m)	14T(5m×1m)	18T(4m×1m)
3 T(10m×2m)	7 T(8m×2m)	11T(4.5m×1m)	15T(4m×1m)	19T(4m×2m)
4 T(10m×2m)	8 T(8m×2m)	12T(4m×1m)	16T(6m×1m)	20T(4.5m×1.5m)

※ 確認トレンチは、事業計画内を上城から詰城に向かって任意に設定した。

第3節 調査の経過

確認調査は平成5年6月7日～平成5年7月2日の間に実施され、調査の経過については毎日の日誌抄をもってかえる。

【日誌抄】

- 6月4日 プレハブ設置
- 6月7日 上城・詰城跡確認発掘調査開始。
樹木伐採，1～4トレンチ設定，掘り下げ。
- 6月8日 上城の土塁部分の伐採，詰城の伐採（道の確保）。午後より雨が激しい為，作業中止
- 6月9日 皇太子御成婚の為，休日。
- 6月10日 1～4トレンチの掘り下げ。詰城の伐採。無縁墓発見。詰城の縄張り探査。現代の旧墓地跡確認。
- 6月11日 1トレンチ～4トレンチの掘り下げ。新たに5トレンチ設定。トレンチ配置図作成（200分の1）。A～E杭設定。詰城の伐採。墓域確認。長期研修生2人（松本町，喜入町）本日より参加。
- 6月14日 2トレンチ，3トレンチ，5トレンチ掘り下げ。新たに詰城に6～7トレンチ設定，掘り下げ。午後より9・10トレンチ設定。詰城の伐採。
- 6月15日 詰城の伐採。11トレンチ～13トレンチ設定掘り下げ。午後3時過ぎに雨が激しくなり作業中止。
- 6月16日 雨の為，作業中止。室内整理。
- 6月17日 雨が激しく降りしきる中，鹿児島短期大学学長三木靖先生現場指導。残存状況が良く規模も大きな山城であるとの教示。詰城の伐採。11トレンチ～13トレンチ掘り下げ。午後より作業中止。
- 6月18日 伐採のち，14トレンチ，15トレンチを新たに設定掘り下げ。レベル移動。
- 6月21日 4～15トレンチ掘り下げ。
- 6月22日 雨のため，作業中止。室内作業。
- 6月23日 16～18トレンチ設定。14～15トレンチ掘り下げ。
- 6月24日 空中撮影実施。16～18トレンチ掘り下げ。19～20トレンチ設定。
- 6月25日 雨の中，平板実測（2・7・8トレンチ）を行なう。午後より作業中止。
- 6月28日 1・3～5トレンチの掘り下げ。3トレンチの遺物取り上げ（Ⅱ～Ⅳ層）。3・9・11・12・14トレンチの遺構配置図及び土層断面図作成。15・16・20トレンチの精査。2・3トレンチの埋め戻し。
- 6月29日 6・13・15～19トレンチの遺構配置図及び土層断面図作成。3・7～9・11・12・14トレンチの埋め戻し。
- 6月30日 6・13・15～19トレンチの埋め戻し。5トレンチの遺物取り上げ。1・10トレンチの土層断面図作成。午後より雨のため作業中止。
- 7月1日 雨のため，作業中止。
- 7月2日 4・5・20トレンチの遺構配置図，土層断面図作成。4トレンチの遺物取り上げ。4・5・10・20トレンチの埋め戻し。

第4節 整理・報告書作成業務の組織

調査主体者	市来町教育委員会				
調査責任者	〃	教 育 長	江 口 英 雄		
調査庶務	〃	社 会 教 育 課 長	宇 都 隆 雄		
〃	〃	主幹兼社会教育係長	吉 田 裕 史		
〃	〃	派遣社会教育主事	宮 司 和 弘		
〃	〃	主 任	芹ヶ野 幸 淑		
調査担当者	〃	主 査	新 町 正		
	〃	主 事	西久保 敏 彦		

〈整理作業員〉

児玉千香子，坂口ひろ子，松崎道子，池之上えみ子

〈指導助言協力者〉 敬称略

鹿児島短期大学学長 三木 靖，鹿児島県立埋蔵文化財センター課長補佐 新東 晃一，中村和美，文化財課上野原遺跡整備班 池畑耕一，太宰府市教育委員会 中島恒次郎，金峰町教育委員会 宮下貴浩，

第2章 遺跡の位置及び環境

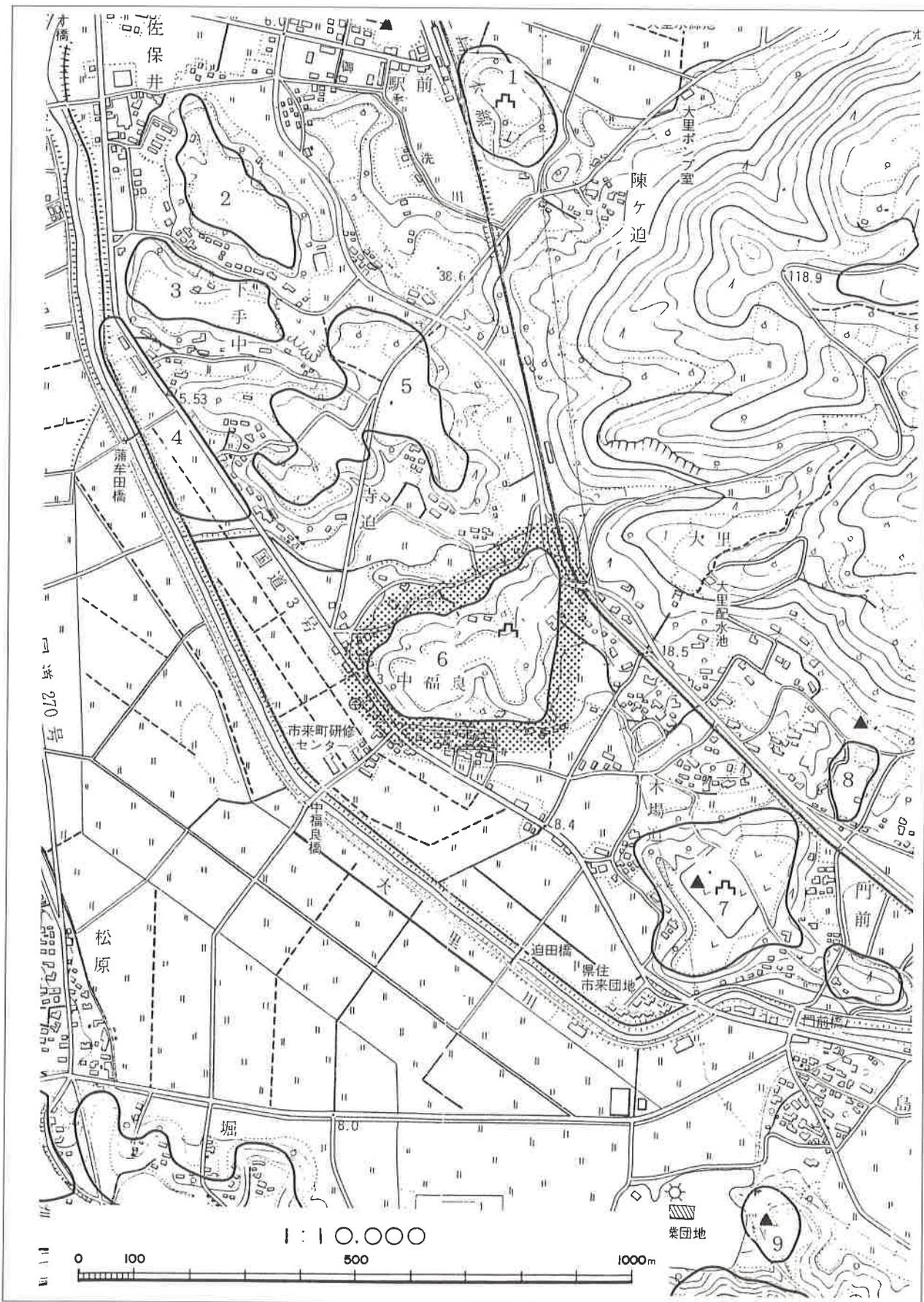
第1節 位置及び環境

市来町は日置郡の最北端に位置し、北は串木野市と接し、南から東には東市来町と接している。東側は山地が多く、西側には吹上浜が広がっている。西側の八房川下流と南西の大里川下流には低地が開けている。この低地を囲むように小台地が存在し、その内の一つに上城詰城跡が築かれている。すぐ隣の台地には鍋ヶ城跡があり、郷土誌によると上城詰城は鍋ヶ城の出城であったと考えられている。伝説では、源頼朝の子を孕んだ丹後局が薩摩に下向し、当時市来地頭であった惟宗民部大夫廣言のもとで子を育て、その子が後に島津家初代忠久になったとしている。上城詰城跡の隣の台地に構築された鍋ヶ城跡の頂上には、今でも惟宗廣言の墓と伝えられている古い墓が立っている。また、市来町には旧石器時代から近世にかけての遺跡が数多く存在し、判明しているだけで63ヶ所の遺跡が周知されている。これらの遺跡は、様々な開発行為に伴い発掘調査がなされている。

平成6年に発掘調査がなされた戸崎原遺跡では、掘り込みのある集石遺構が検出され、平成8年度の上城詰城跡の発掘調査では台形石器を伴う土坑が2基検出された。また、平成9年度に調査が実施された瀧之段遺跡では、縄文時代草創期初頭の石鏃が土器や細石器とともに41本も検出され、縄文時代草創期初頭の石鏃では、全国で最も多い検出数となった。また最近では、川上地区で多々良製鉄跡も発見された。このように町内には貴重な遺跡が数多く存在している。

表1 上城詰城跡周辺の遺跡

	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物
1	佐保井東原遺跡	大里佐保井東原ほか	台地	中世	土師器・青磁
2	中尾東原遺跡	大里中尾東原ほか	台地	中世・近世	土師器・青磁・染付・陶器
3	大里田圃遺跡	大里大里田圃ほか	沖積地	弥生・古墳	弥生式土器・成川式土器
4	原ノ園原遺跡	大里原ノ園原ほか	台地	弥生・古墳・中世・近世	土器・土師器・陶器
5	重信城跡	大里重信上城	台地	弥生・中世	黒髪式土器・土師器
6	鍋ヶ城跡	大里木場迫	台地	9～13世紀	土師器・須恵器・青磁
7	本寺屋敷遺跡	大里本寺屋敷	畑地・墓地	古墳・中世・近世	成川式土器・土師器



第1図 周辺遺跡分布図

第3章 確認調査

第1節 調査の概要

上城詰城跡の整備開発行為部分に、任意に20ヶ所のトレンチを設定し、調査を行なった。トレンチの幅は以下の通りである。

1 T (10m×2 m)	2 T (10m×2 m)	3 T (10m×2 m)	4 T (10m×2 m)
5 T (10m×2 m)	6 T (8 m×2 m)	7 T (8 m×2 m)	8 T (8 m×2 m)
9 T (11m×2 m)	10T (9 m×1 m)	11T (4.5m×1 m)	12T (4 m×1 m)
13T (9 m×1 m)	14T (5 m×1 m)	15T (4 m×1 m)	16T (6 m×1 m)
17T (5 m×4.5m)	18T (4 m×1 m)	19T (4 m×2 m)	20T (4.5m×1.5m)

第2節 標準土層

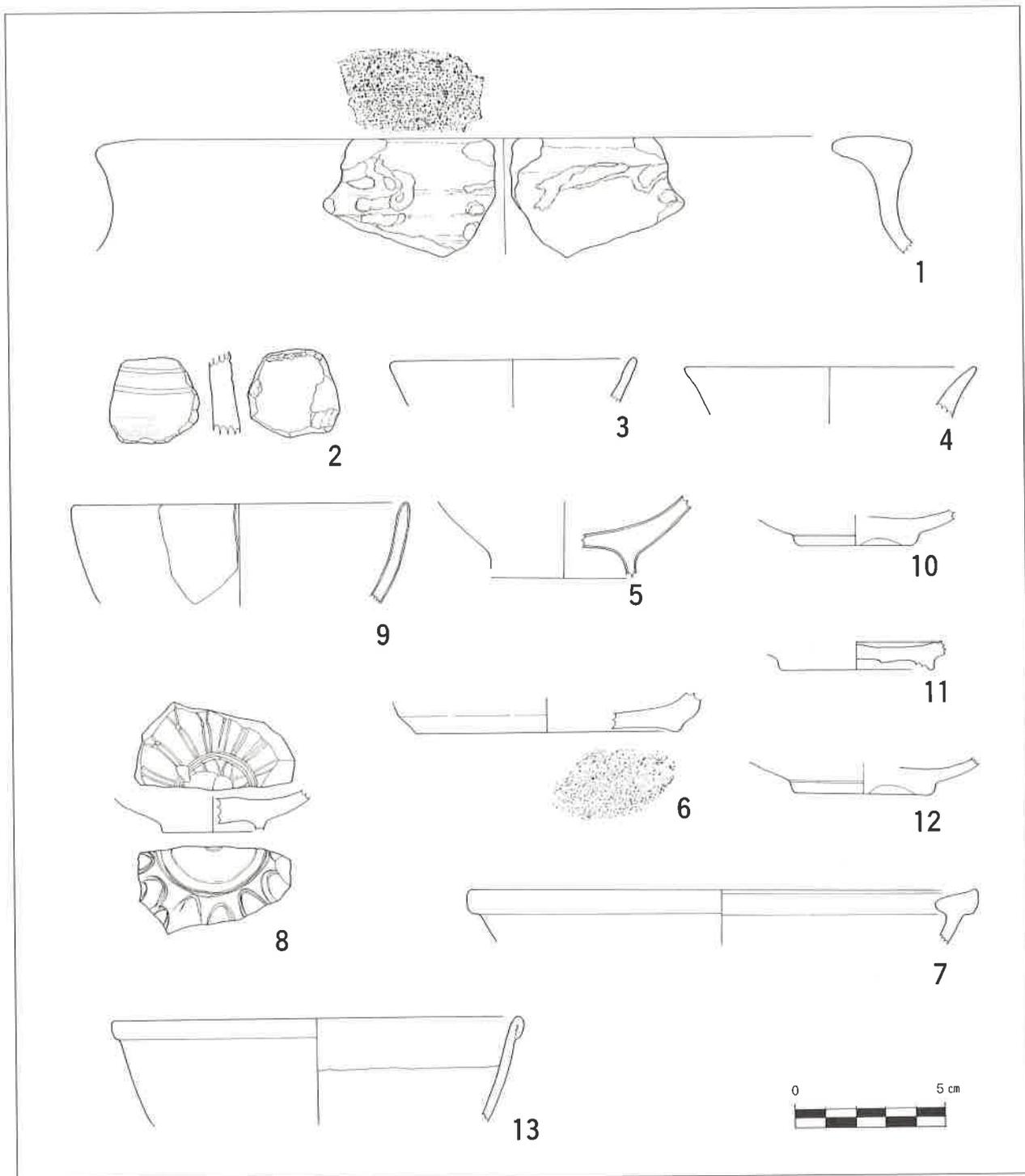
確認調査で深掘したのは、上城部分の特に1トレンチと4トレンチだけである。その他は、遺構面及び遺物確認面での検出で終えている。

1・4トレンチ土層堆積状況

I	耕作土 茶褐色土層	旧耕作土
II	黒褐色土層	中世・縄文晩期該当
III	明黄橙色パミス	アカホヤ火山灰二次堆積層
IV	淡褐色土層	
V	茶褐色粘質土層	
VI	淡茶褐色粘質土層	旧石器時代該当
VII	シラス	



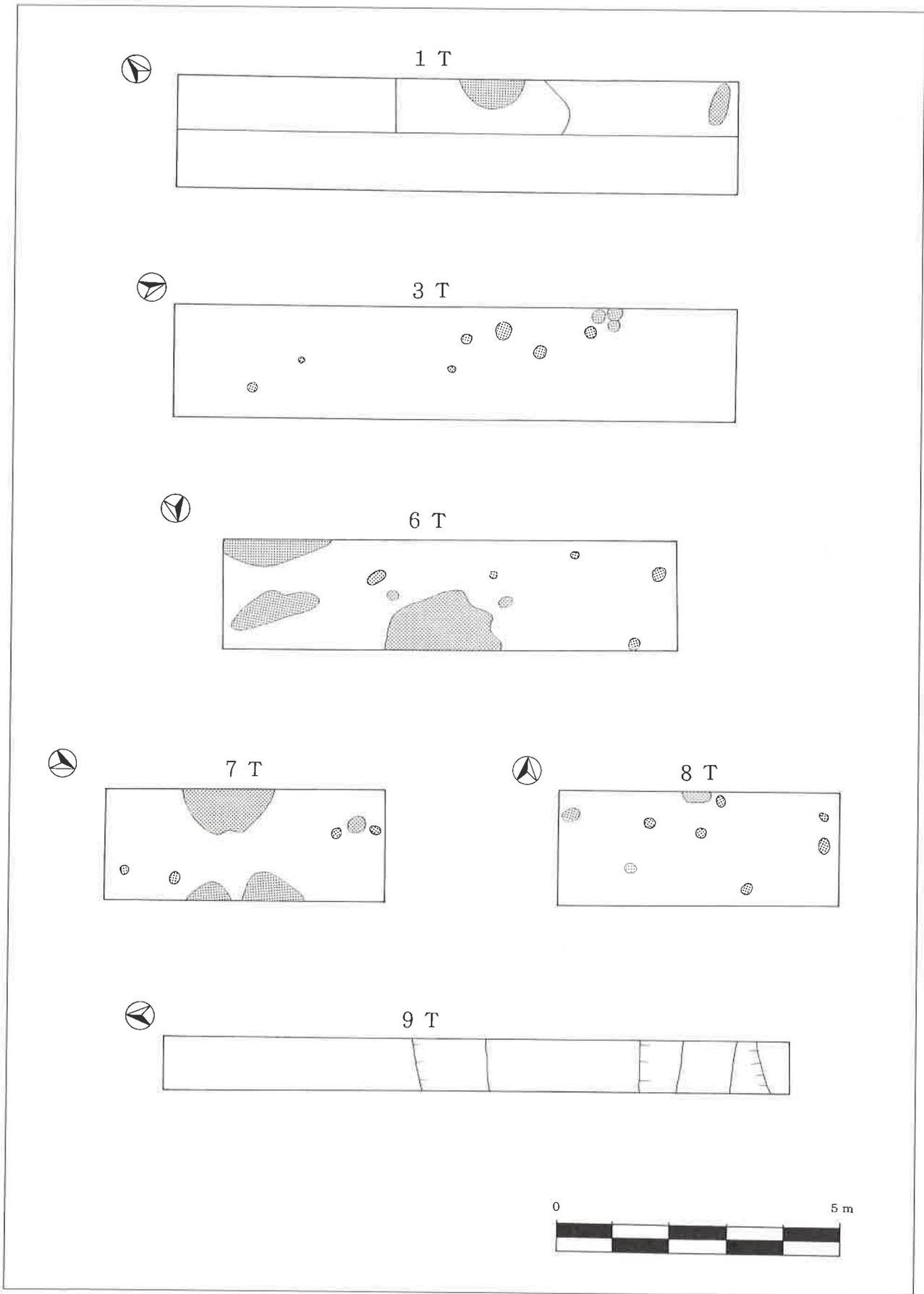
第2図 トレンチ配置図



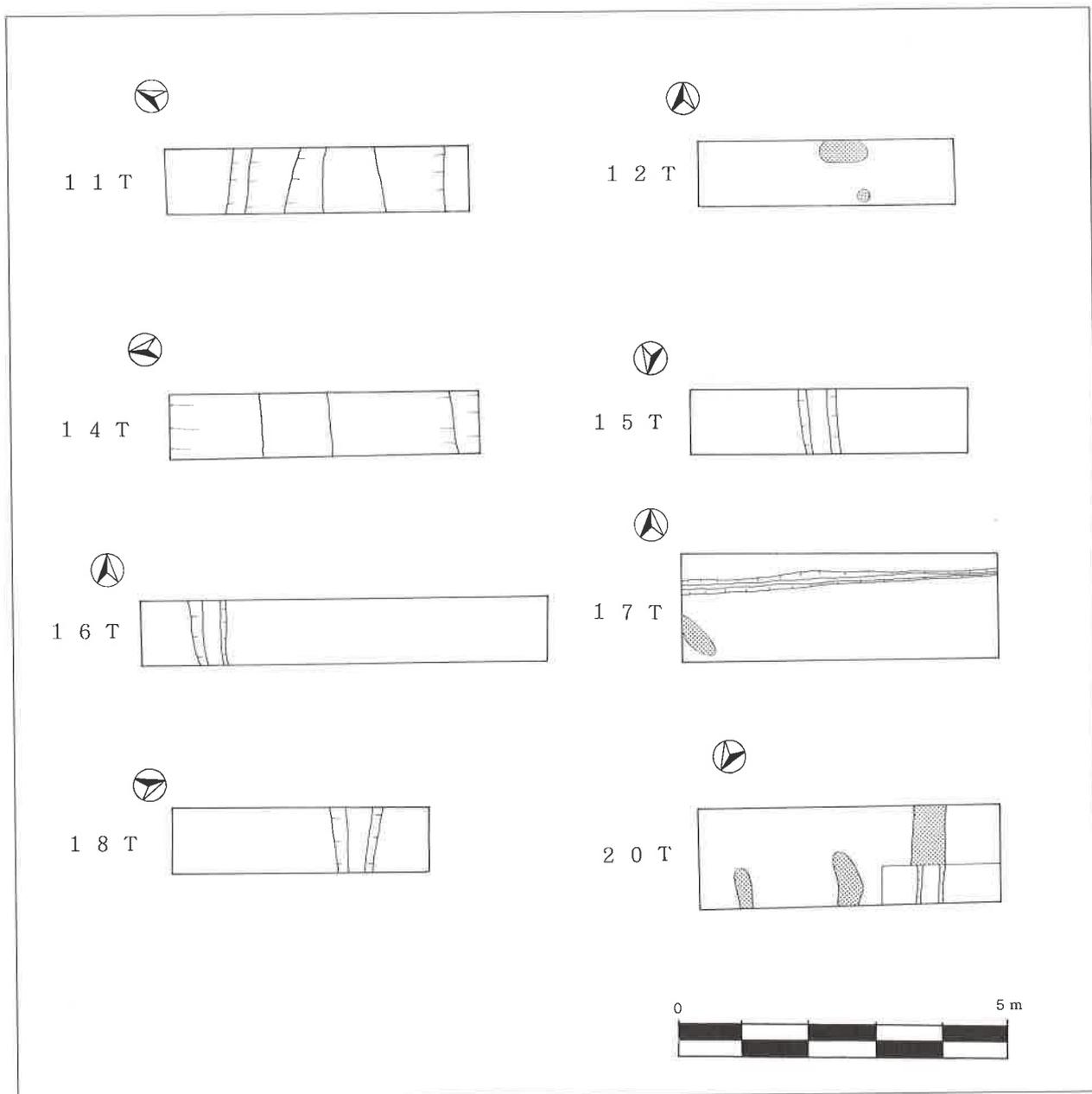
第3図 表採遺物

第3節 各トレンチの概要

- | | |
|--------|--|
| 1 トレンチ | I層より近世陶磁器・土器片，V層より縄文土器4点出土。 |
| 2 トレンチ | I層より近世陶磁器・土器片，III層面に土坑（落ち込み）・ピット（柱穴）確認。 |
| 3 トレンチ | I層より近世陶磁器・土器片・石器（黒耀石），IV，V層より黒耀石2点・縄文土器（早期）数点出土。ピット（柱穴）確認。 |

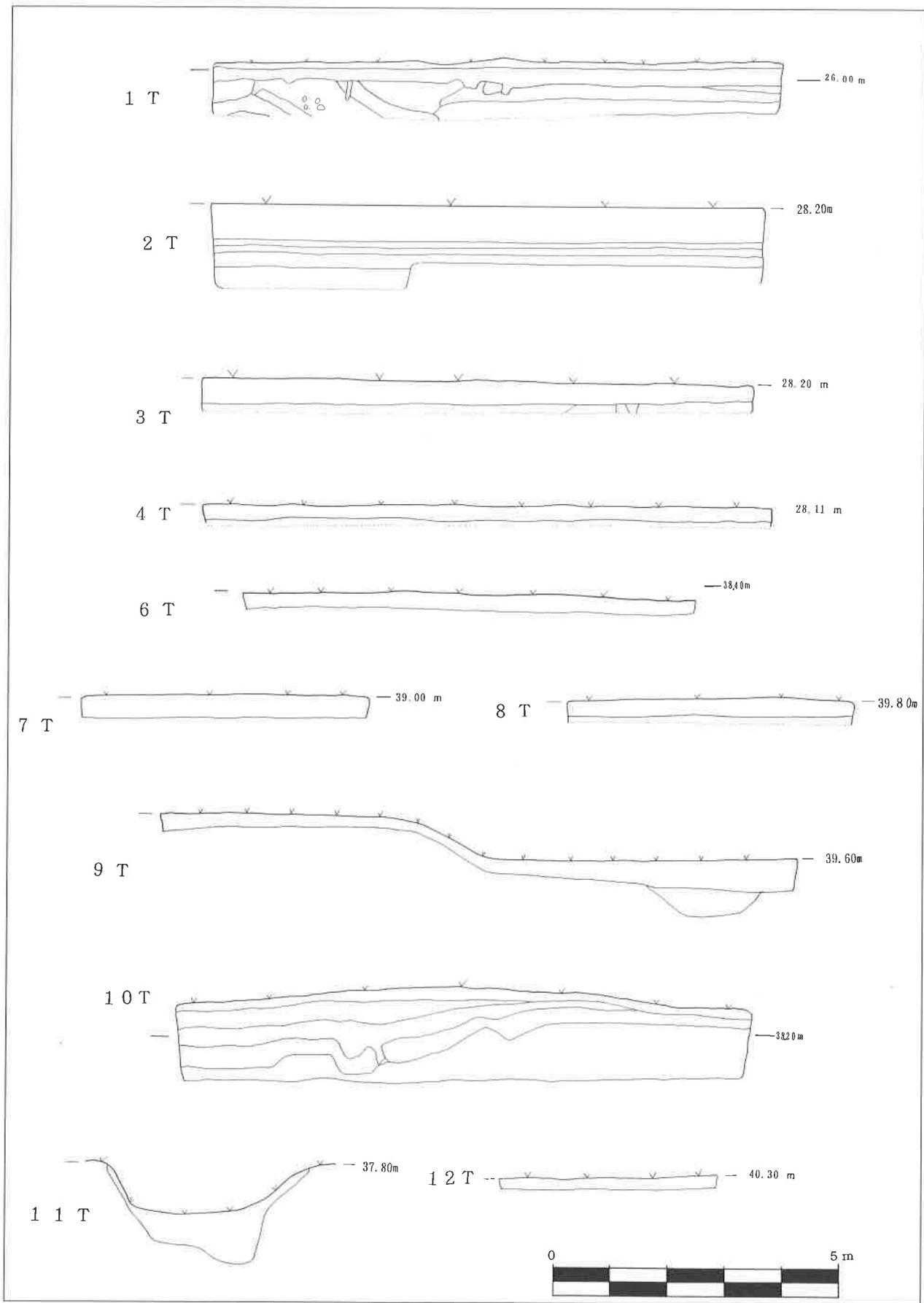


第4図 1~9トレンチ

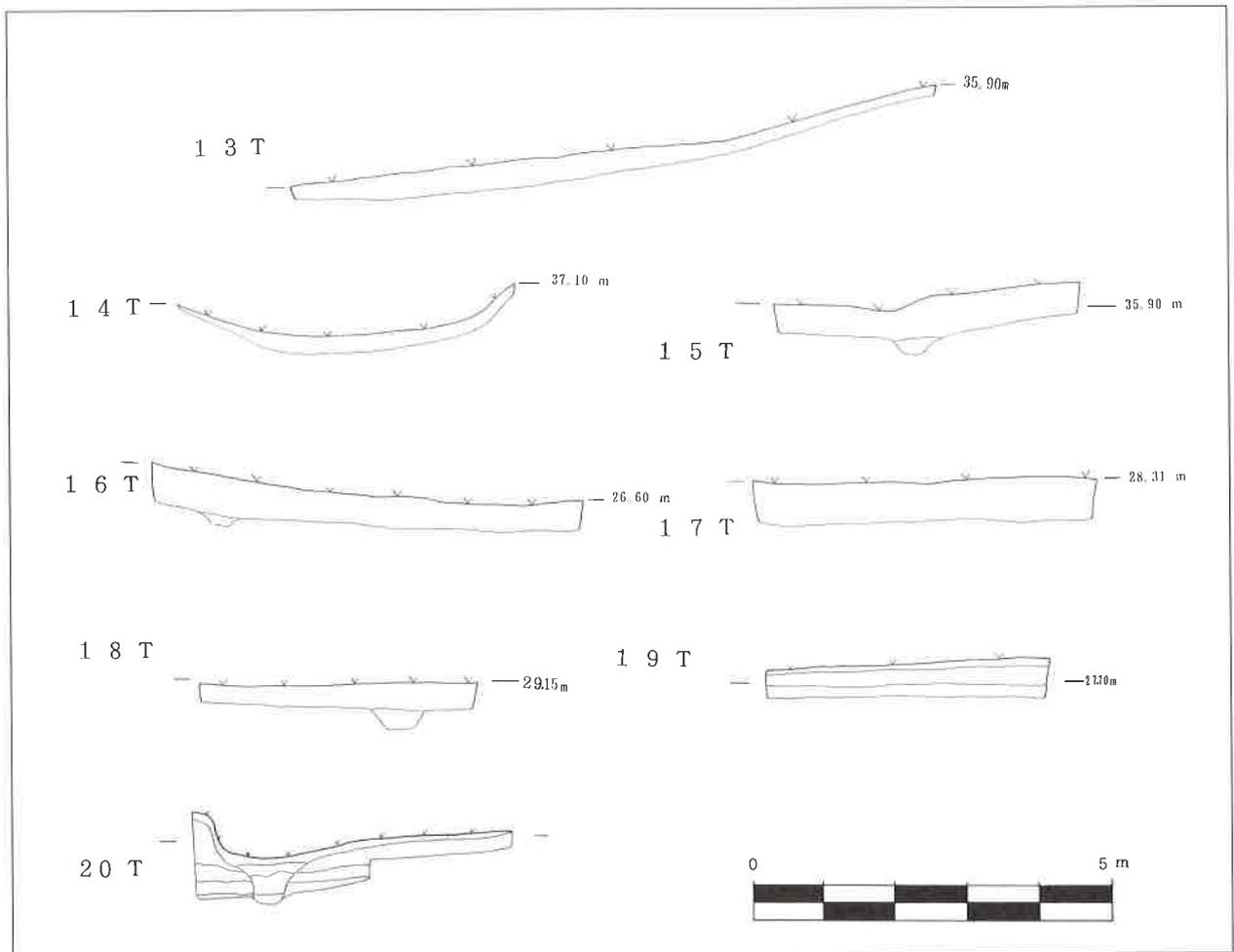


第5図 11~20トレンチ

- | | |
|--------|--------------------------------------|
| 4トレンチ | I層より近世陶磁器・土器片, II層より土師器・縄文土器(晩期)・磨石。 |
| 5トレンチ | I層より近世陶磁器・土器片・鉄滓, II層より土師器・縄文土器・鉄滓。 |
| 6トレンチ | III層面に土坑(落ち込み)・ピット(柱穴)確認。染付・青磁出土。 |
| 7トレンチ | III層面に土坑(落ち込み)・ピット(柱穴)確認。 |
| 8トレンチ | III層面に土坑(落ち込み)・ピット(柱穴)確認。青磁片出土。 |
| 9トレンチ | 空堀確認。陶器片2点出土。 |
| 10トレンチ | シラスまで検出。 |
| 11トレンチ | 堀切確認。 |
| 12トレンチ | III層面に土坑(落ち込み)・ピット(柱穴)確認。 |
| 13トレンチ | シラス面まで検出。 |



第6図 トレンチ土層断面(一)

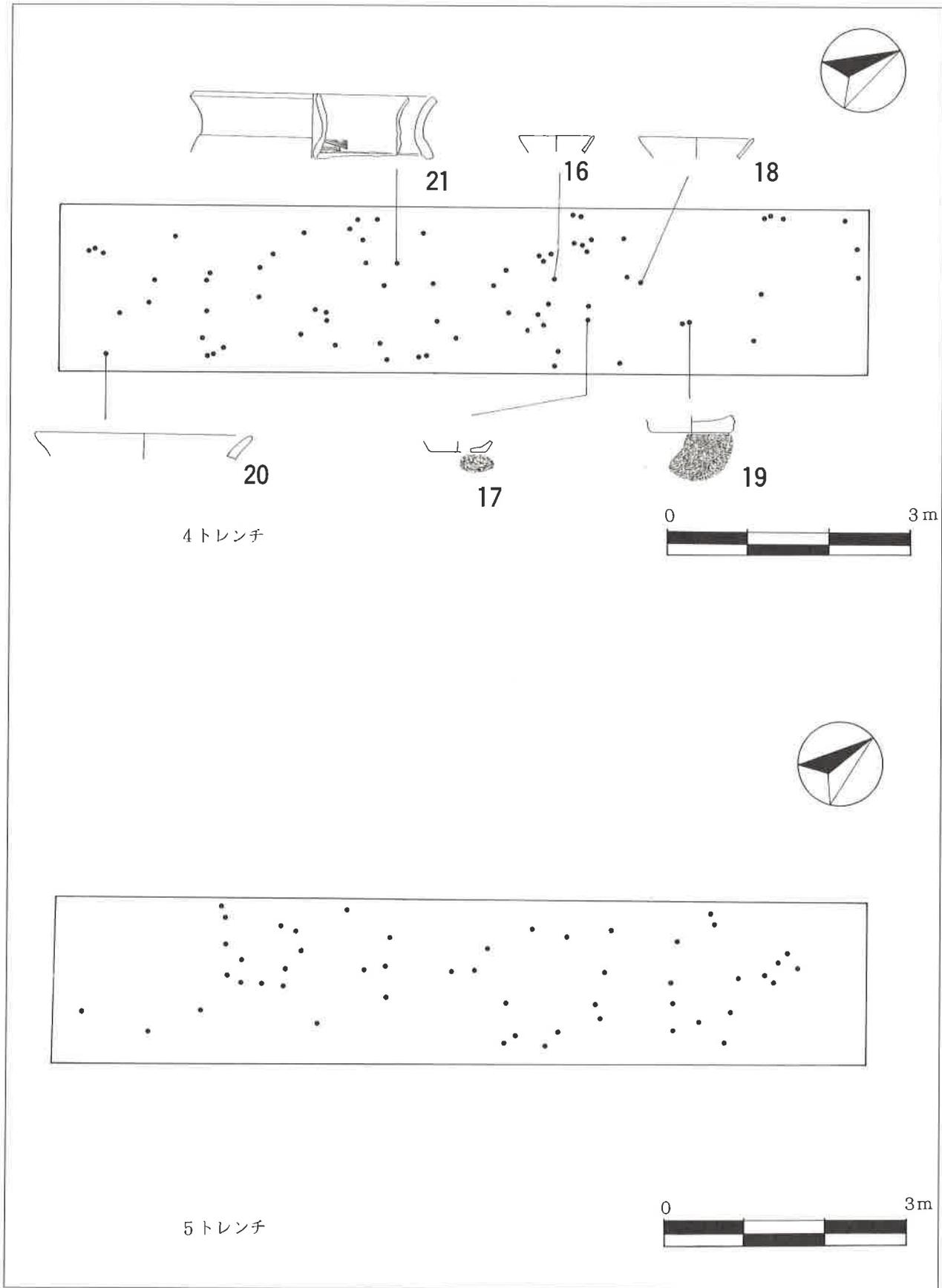


第7図 トレンチ土層断面 (二)

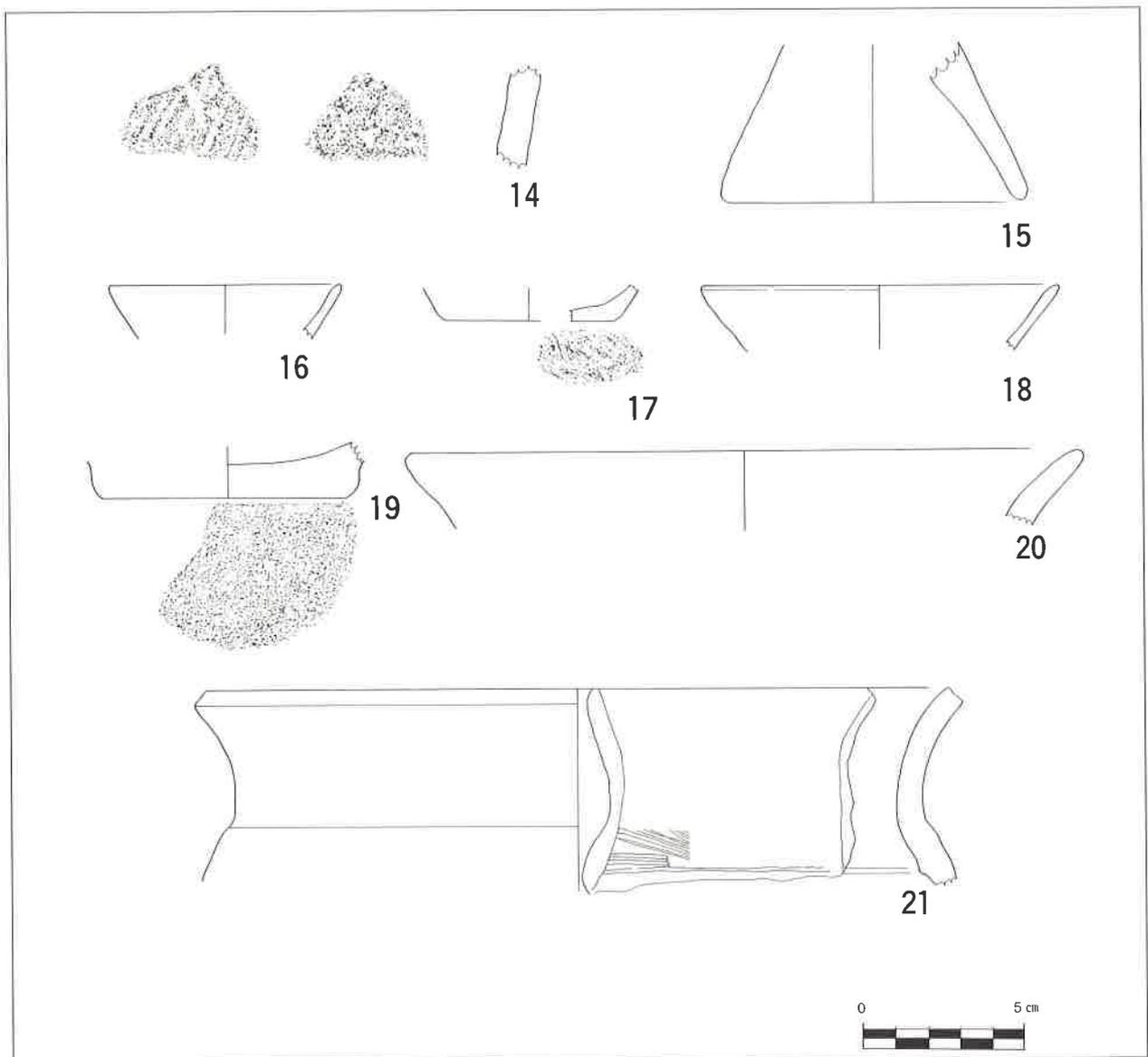
- | | |
|--------|--------------------------------|
| 14トレンチ | 堀切確認。 |
| 15トレンチ | 溝確認。 |
| 16トレンチ | 溝確認。 |
| 17トレンチ | I層より近世陶磁器・青磁，IV層上面にII層の落ち込み確認。 |
| 18トレンチ | IV層に溝確認。 |
| 19トレンチ | シラス面まで検出。 |
| 20トレンチ | 土塁・溝・土坑（落ち込み）・ピット（柱穴）確認。 |

第4節 表面採集遺物 (図3)

1～2は1トレンチ表面採集遺物である。1は陶器の口縁部である。口径27.6cmで口縁部に釉垂れが見受けられる。2は円盤状陶器片である。直径約3cmである。3・4は2トレンチからの表面採集遺物である。両遺物とも土師器口縁部破片である。3は口縁部が内彎気味で，器壁が薄い。焼成は良好である。4は口縁部が外反している。焼成は良好。5～7は3トレンチからの表面採集遺物である。5は陶器で高台を有する碗である。唐津焼であろう。6は土師器坏で，底部は糸切りである。焼成は良好で，底部からの立ち上り部分に一段の稜線が認められる。胴部は内彎気味で器壁



第8図 4・5トレンチ遺物分布図



第9図 トレンチ出土遺物

は厚い。7は陶器で、小型の鉢であろう。口縁部平坦面に貝目跡が残る。8は内外面に二重網目文を施す肥前系の染付碗である。9～12は4トレンチからの表面採集遺物である。9は青磁碗で、釉薬に貫入が見受けられる。10は白磁皿で、見込みに重ね焼きの底部痕跡が残る。11は青磁碗で見込みに沈線が一条巡らされる。底部見込みは蛇の目凹形高台である。12は11と同じく白磁皿で、高台は折り高台である。共に15世紀の白磁である。13は白磁碗で、口縁部は玉縁を呈する。玉縁部分は折り重ねて作られており、極めて薄い。焼きも良好である。よく見ると釉薬にコバルトが見られる。染付を意識した新しい玉縁口縁白磁かもしれない。

第5節 トレンチ出土遺物 (図9)

14は1トレンチ出土である。斜めに貝殻条痕文を施している。縄文時代早期に該当する土器である。15は3トレンチ出土の成川式土器である。恐らく甕の脚部であろう。16～21は4トレンチ出土

の遺物である。16～20までは土師器である。16・18・20は口縁部破片である。16は、口縁部が内彎気味で器壁は薄い。17は小皿で、底部は糸切りである。底部からなだらかに約45度の角度で立ち上がっている。18は口縁部付近に一段の稜線が認められる。器壁は薄めである。19は土師器底部片で、柱状高台である。20は甕の口縁部であろう。21縄文時代晩期の土器で、頸部と口縁部の境に段がついている。器面は丁寧に研磨されている。

平成5年度 トレンチ出土遺物一覧表

図	番号	遺物番号	出土区	層	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	年代	備考
3	1	表	1 T	表	陶器	甕	27.6	—	—	17世紀初頭	
	2	表	1 T	表	円盤状陶器	深鉢	—	—	—		
	3	表	2 T	表	土師器	坏	8.3	—	—		
	4	表	2 T	表	土師器	壺	9.8	—	—		
	5	表	3 T	表	白磁	碗	—	4.9	—		
	6	表	3 T	表	土師器	坏	—	8.8	—		
	7	表	3 T	表	陶器	小鉢	17.3	—	—	17世紀初頭	
	8	表	不明	表	染付碗	碗	—	3.5	—	18世紀初頭	二重網目文
	9	表	4 T	表	青磁	碗	11.5	—	—		口縁部
	10	表	4 T	表	白磁	皿	—	4.1	—	15世紀	抉り高台
	11	表	4 T	表	青磁	碗	—	5.3	—		
	12	表	4 T	表	白磁	皿	—	4.8	—	15世紀	抉り高台
	13	表	大手門	表	白磁	碗	14.0	—	—		玉縁口縁
9	14	表	1 T	表	縄文土器	深鉢	—	—	—	縄文時代早期	貝殻状痕文
	15	15・26	3 T	Ⅱ	成川式土器	甕	—	9.6	—	古墳時代	脚部
	16	79	4 T	Ⅱ	土師器	坏	7.3	—	—		
	17	96	4 T	Ⅱ	土師器	小皿	—	5.3	—		
	18	93	4 T	Ⅱ	土師器	坏	11.3	—	—		
	19	104	4 T	Ⅱ	土師器	柱状高台	—	7.6	—	9世紀後半	
	20	5	4 T	Ⅱ	土師器	甕	21.2	—	—		
	21	48	4 T	Ⅱ	縄文土器	深鉢	23.4	—	—	縄文時代晩期	

第4章 平成7年度発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

平成5年度に県営農村活性化住環境整備事業大里地区に伴い確認調査がなされた結果、計画区域全域に中世の山城の遺構や、縄文時代の遺物等が確認された。再三の協議がなされたが、計画の変更は町民の要望も強く出来ないため、市来町は市来町教育委員会に緊急発掘調査を依頼し、記録保存の道を選んだ。平成7年度を初年度として5ケ年の計画により発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査の組織 <平成7年11月7日～平成8年3月26日>

1. 所在地 鹿兒島県日置郡市来町大里
2. 調査の目的 県営農村活性化住環境整備事業大里地区
3. 調査の組織

調査主体者	市来町教育委員会		
調査責任者	〃	教 育 長	松 崎 孝
調査庶務	〃	社会教育課長	橋 口 正 己
〃	〃	社会教育課長補佐	宇 都 隆 雄
〃	〃	派遣社会教育主事兼社会教育係長	木 原 健 一 郎
〃	〃	主 事 補	奥 之 園 勝
調査担当者	〃	主 事	新 町 正
〃	〃	主 事 補	西 久 保 敏 彦
現場指導者	鹿兒島短期大学	学 長	三 木 靖

調査対象面積…… 1 3 0 0 0 m²

第3節 調査の経過

発掘調査は平成7年11月7日～平成8年3月26日の間に実施され、調査の経過については毎日の日誌抄をもってかえる。

【日誌抄】

○11月7日(火)～11月10日(金)

BC-1・2区より掘り下げ、遺構・遺物を多数確認。1～2トレンチ設定。

○11月13日(月)～11月17日(金)

BC-1・2区より掘り下げ、遺構・遺物を多数確認。平板測量。

○11月20日(月)～11月24日(金)

ABC-1・2区の掘り下げ。1トレンチ拡張。3・4・6・7トレンチ設定。DE-2・3区

設定掘り下げ。

○11月24日(月)～12月1日(金)

湊・湊町老人クラブ見学。1トレンチ精査および平板測量。2・3トレンチ拡張，掘り下げ。鹿児島市教育委員会出口浩氏来跡。

○12月4日(月)～12月8日(金)

B～E-1～3区掘り下げ。2・3トレンチ遺物取り上げ。歴史探訪サークル見学。2・3トレンチ拡張部掘り下げ。串木野市教育委員会濱田純一氏来跡。

○12月11日(月)～12月15日(金)

B～E-1～3区掘り下げ。DEFG-1区遺構検出。県立埋蔵文化財センター新東晃一氏指導。

○12月18日(月)～12月22日(金)

DEFG-1・2区遺構検出。セクションベルトの土層断面清掃。

○1月8日(月)～1月12日(金)

1トレンチの土層断面図作成。D-2・3区土層断面図作成。FGH-1～3区の遺構検出および掘り下げ。県立埋蔵文化財センター戸崎勝洋・中村耕治・牛之濱修の各氏および鹿児島県考古学会会長の河口貞徳氏来跡。

○1月16日(月)～1月19日(金)

FGH-1～3区の遺構検出および掘り下げ。土坑の精査。市来町文化財保護審議会開催。

○1月22日(月)～1月26日(金)

FG-1区遺物取り上げ。土坑実測。学級OB会見学。C～H-1区土層断面図作成。

○1月29日(月)～2月2日(金)

堀切の精査。FG-3区掘り下げ。弥生時代のPit確認，掘り下げ。堀切プラン確認。FG-3区遺構精査。鹿児島短期大学学長の三木靖氏指導。

○2月5日(月)～2月9日(金)

FGH-1～3区のPit掘り下げ。DE-1区遺構配置図作成。ABC-1～3区Pit実測。EF-3区精査。

○2月12日(月)～2月16日(金)

EFGH-3区掘り下げ。FG-1区遺構配置図作成。

○2月19日(月)～2月23日(金)

EFGH-3区掘り下げ。FG-2区遺物取り上げ・遺構配置図作成。FG-3区遺構配置図作成。H-1・2区遺構配置図作成。堀切の掘り下げ。D-2・3区セクションベルト精査。

○2月26日(月)～3月1日(金)

堀切の掘り下げ。A～H-1～3区までの遺構精査。

○3月4日(月)～3月8日(金)

空中撮影実施。堀切の精査。FG-4区遺構配置図作成。市来町婦人会見学。道具の清掃。

○3月11日(月)～3月15日(金)

堀切の掘り下げ。

○3月18日(月)～3月22日(金)

堀切の精査および写真撮影。

第5章 平成7年度全面調査

第1節 地下レーダー探査

確認調査の結果、開発地域すべてに埋蔵文化財が確認できたが更に慎重を期すため、応用地質株式会社へ地下レーダー探査を依頼した。結果、多数の遺構の痕跡や堀切の深さなど観察できた。また廓かどうか分からない削平地にレーダーを通し、遺跡かどうかの判別にも活用した。この結果をもとに、遺構などが密集していた部分を中心に全面調査を開始することにした。グリッドは11m毎に設定し、南から1・2・3・西からA・B・C・の順に任意に設定した。しかし地下レーダーが入らない小さな削平部分はトレンチを任意に設定し、確認をすることとした。

第2節 平成7年度確認調査の概要

平成7年度は詰城部分の細かな確認をするために、7つのトレンチを設定し、確認を行った。1～3・6～7トレンチで遺物の出土が見られた。その他のトレンチでは遺物遺構とも検出されなかった。以下各トレンチ毎に概要を説明する。

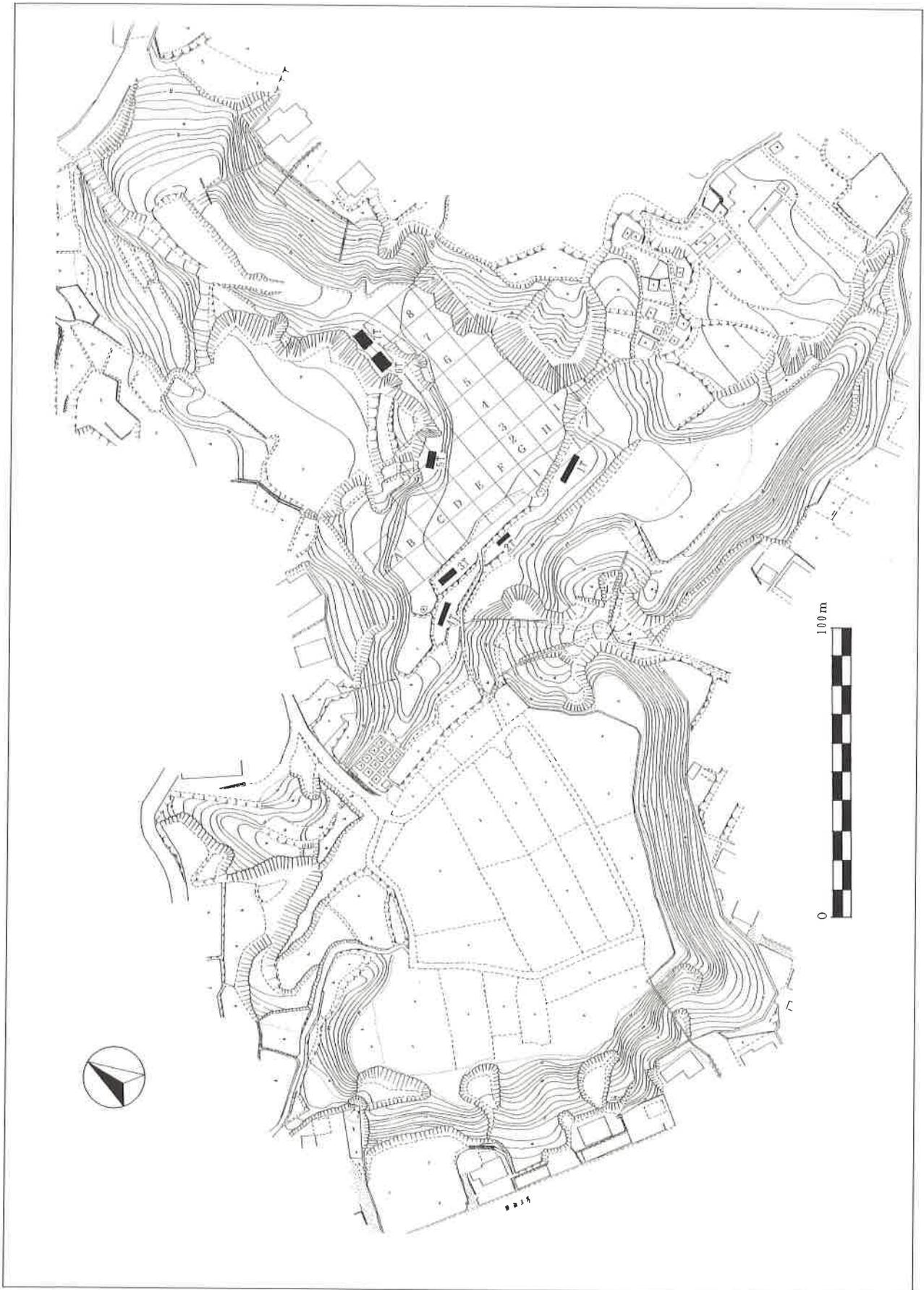
1. 1トレンチ（図11・12）

1トレンチは長さ12mに設定し、土層は表土の下が茶褐色土層で青磁片が1点と図化できなかったが土師器片が多数出土した。図化した青磁は碗で釉薬に貫入が見受けられる。体部下で張り出しを持つ。（図15の22）

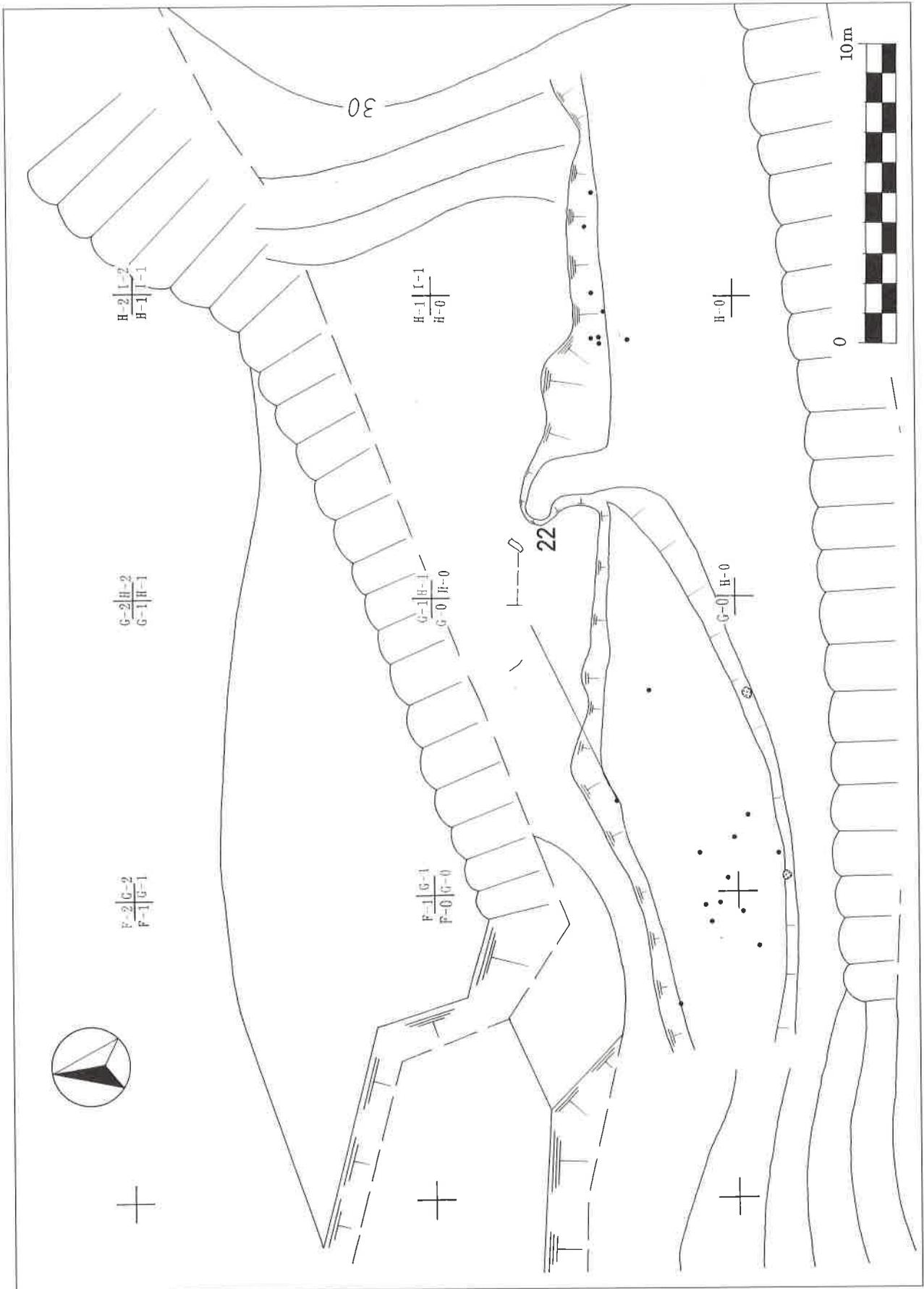
遺物が確認されたため、1トレンチを更に拡張し調査を行った。その結果、廓であることが判った。一部深堀により、版築の状態が見てとれた。また、土留めとして使用したであろう木材の柱穴が確認できた。

2. 2トレンチ（図13）

2トレンチは長さ6mで、Ⅱ層（茶褐色土層）から遺物が集中して検出された。その中の青磁（図15・32）の一つには火を受けた痕跡が見受けられた。青磁は28～32・37である。28～30は口縁部破片で、30は口縁部から口唇部へかけてくの字形に外反している。31は青磁の胴部破片で、鎬連弁文が施されている。23～27・33はすべて白磁である。23・24は口縁部が玉状に膨らむ玉縁口縁白磁碗である。玉縁の幅は約1.4cmである。25は内面に櫛搔文を施す。24と27は同一固体の可能性はある。33は端反碗の口縁部付近の破片である。26・27は白磁の底部片である。26は高台が付き、見込みは釉剥が施されている。34～36は瓦器で、摺鉢である。34は内面に薄く櫛搔き状の沈線を施す。35も内面に櫛搔文を施すが、使用により研磨されている。36は口縁部破片である。37は青磁碗で細形連弁文を外面に施す。見込みに、一条の圈線文を呈する。38は陶器の甕であろう。外面に「〇稀」の刻印が見受けられる。39は鉄製品で、刃物のようである。

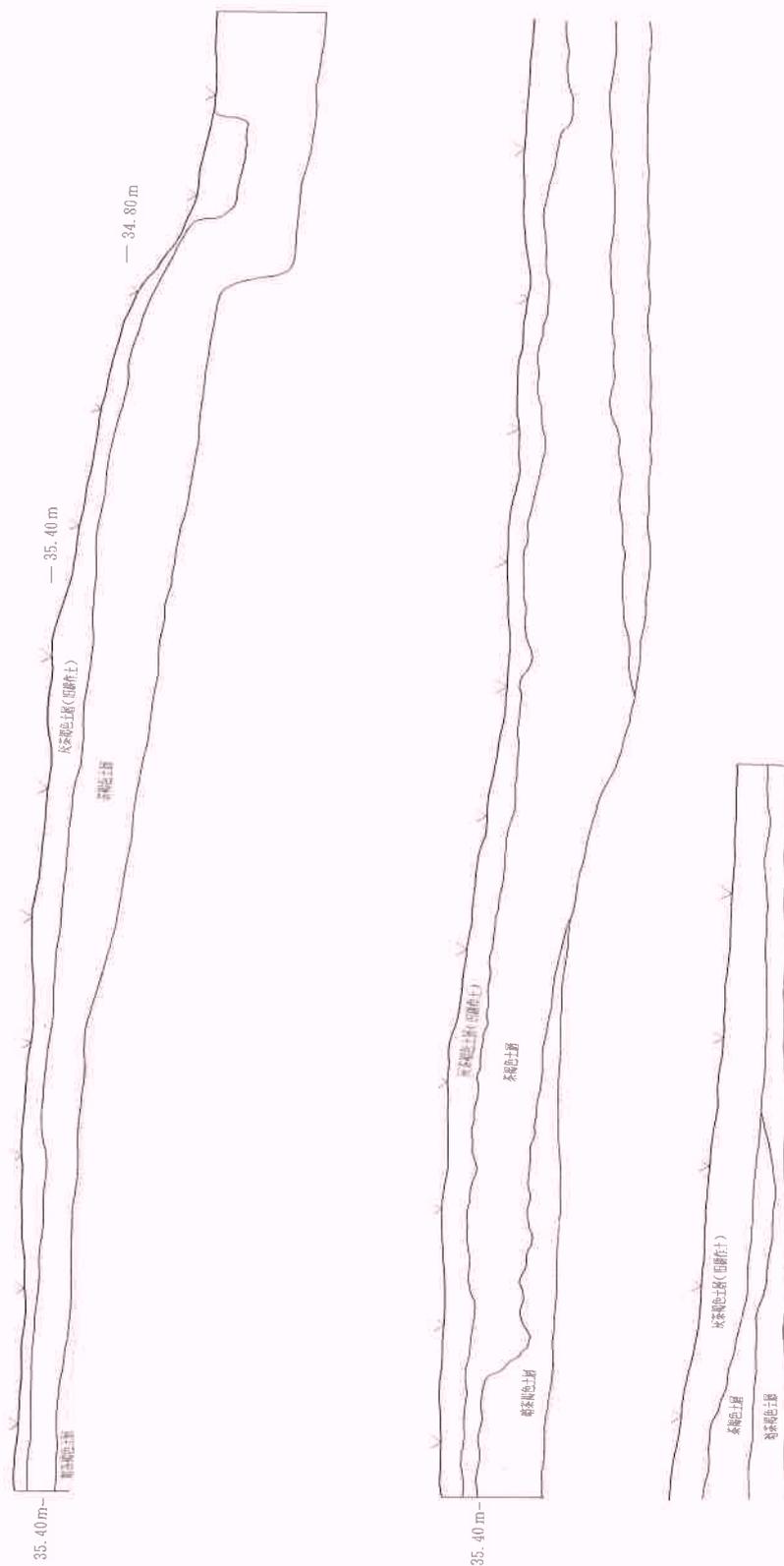


第10図 平成7年度トレンチ配置図

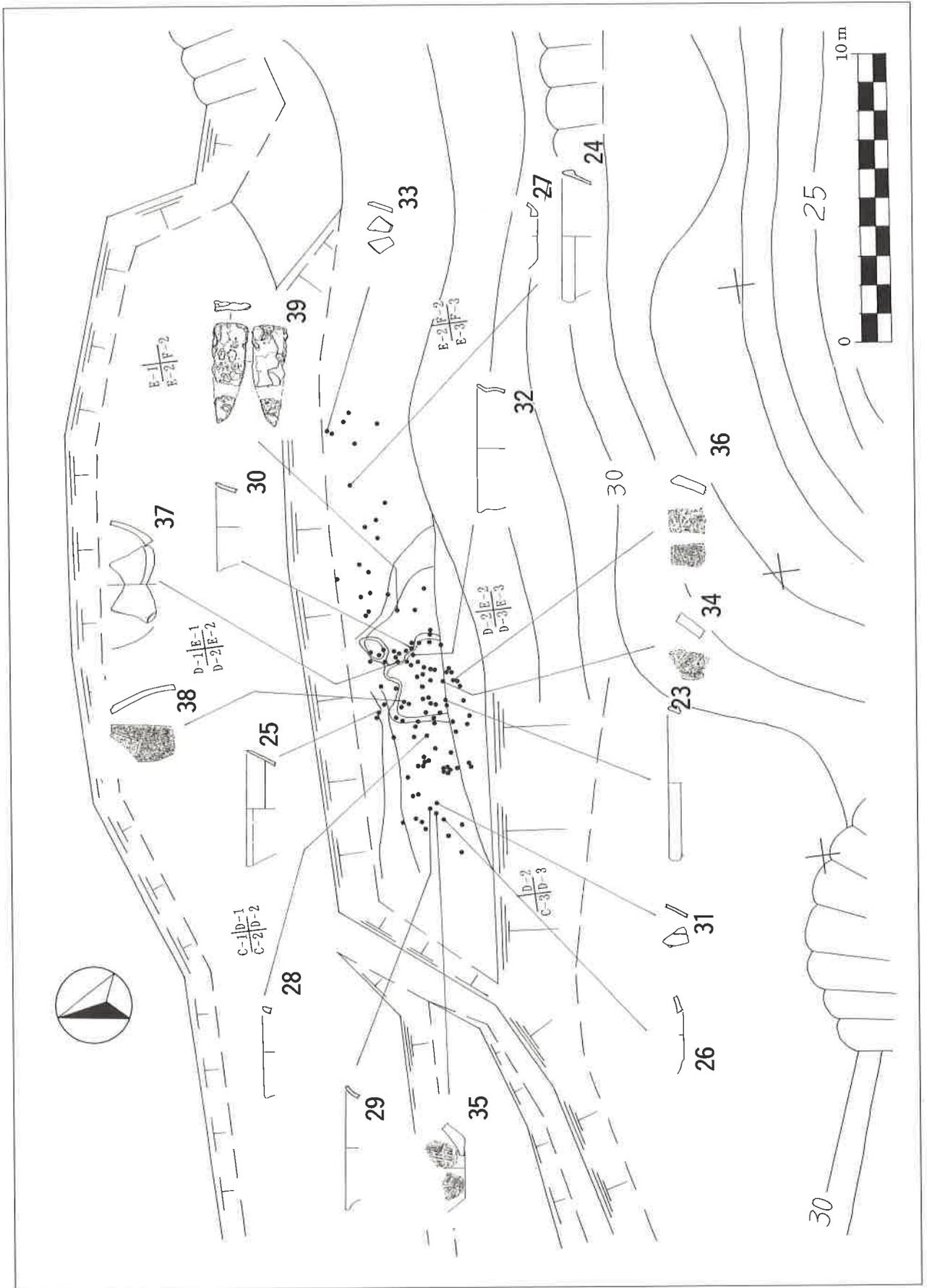


第11図 1トレンチ拡張

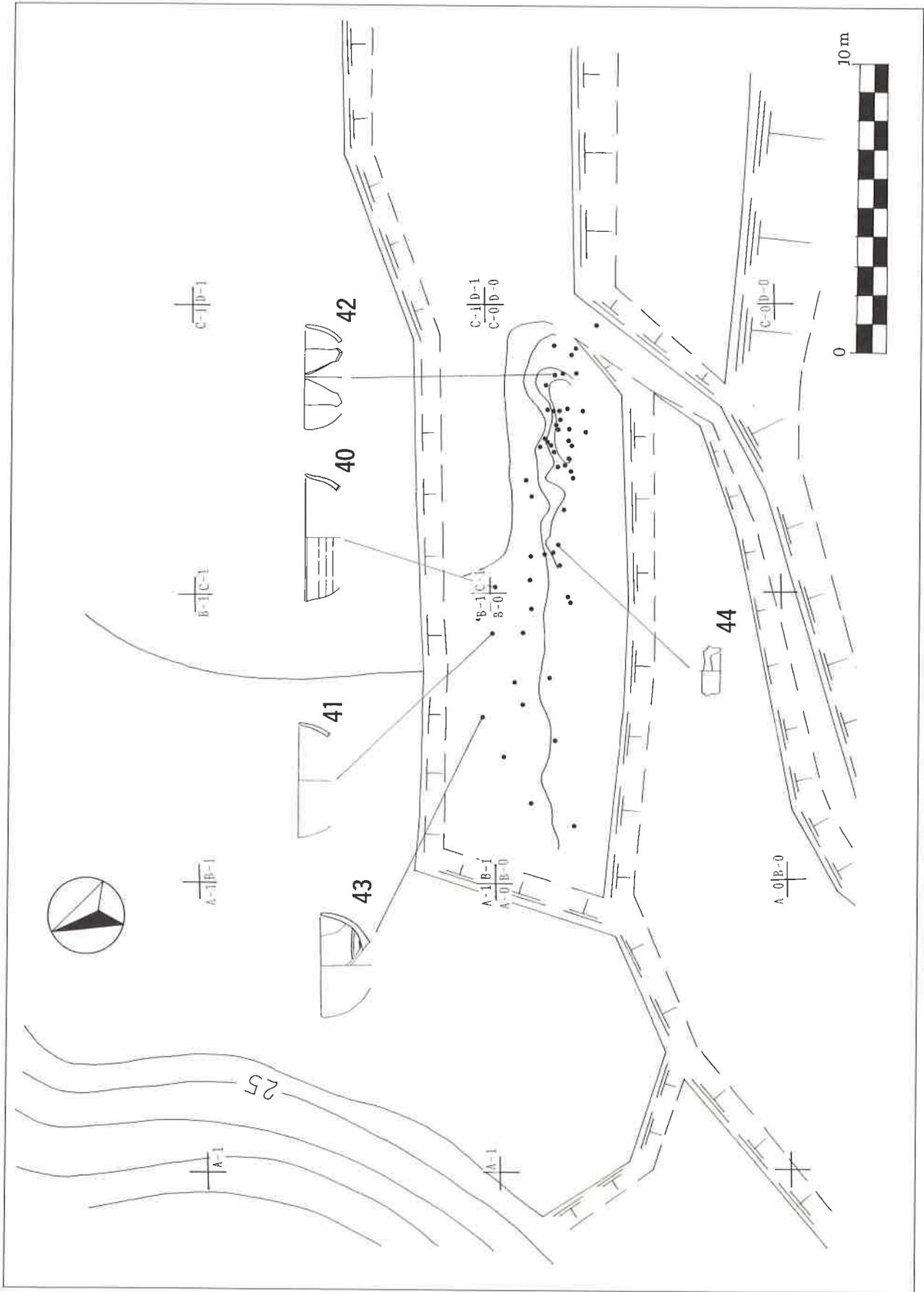
1 トレンチ拡張 (北→南)



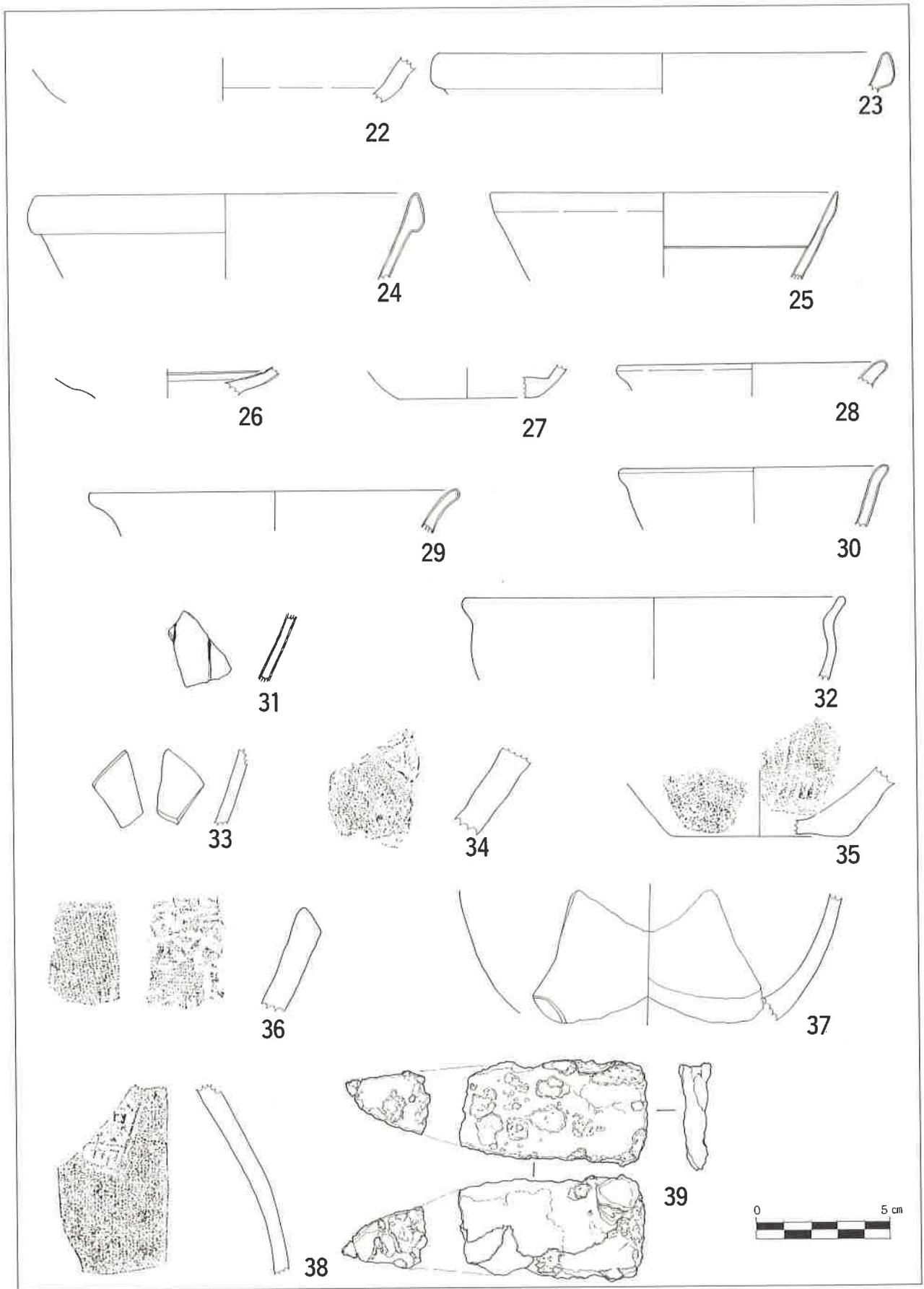
第12図 1 トレンチ土層堆積状況



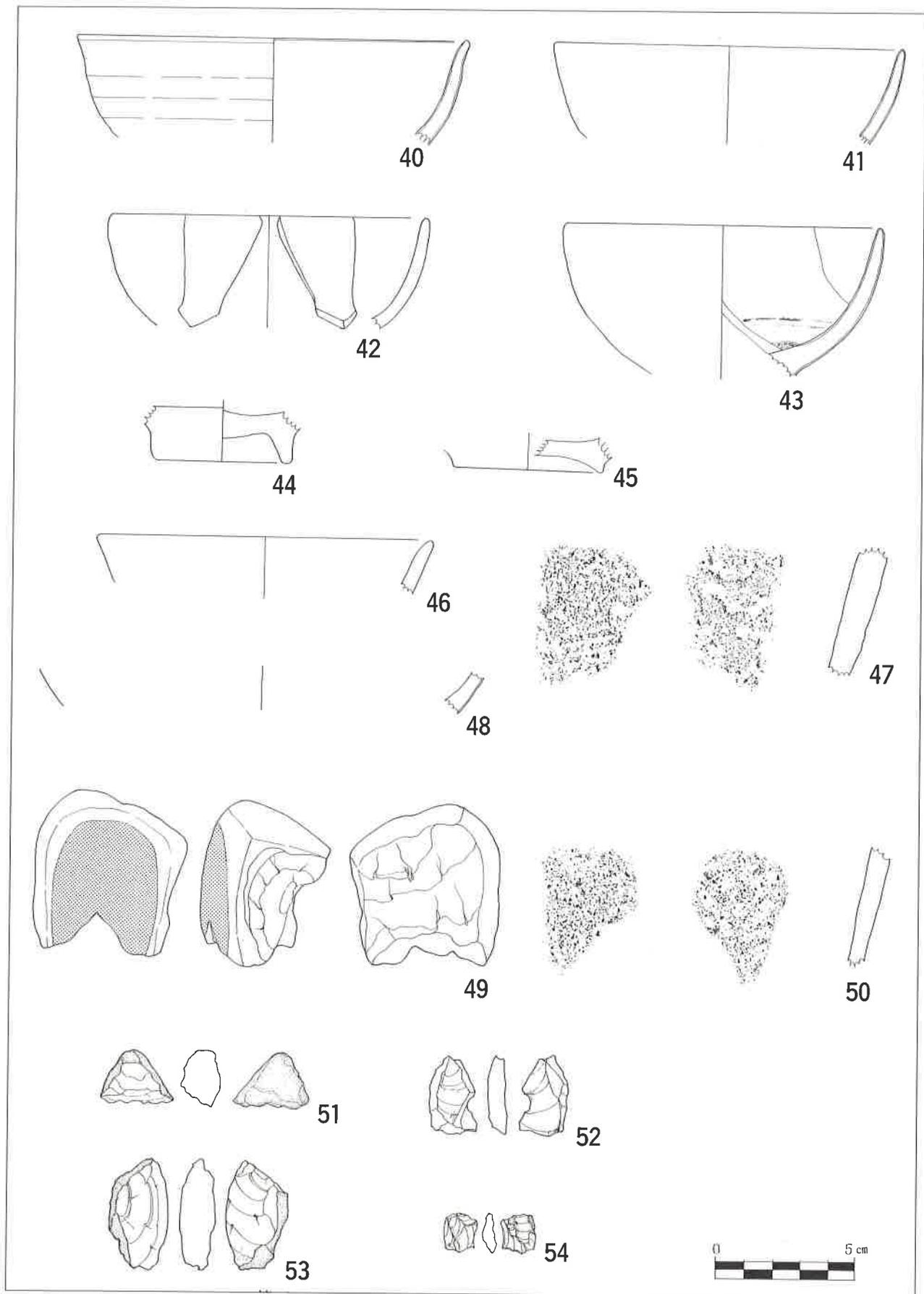
第13図 2 トレンチ遺物出土状況



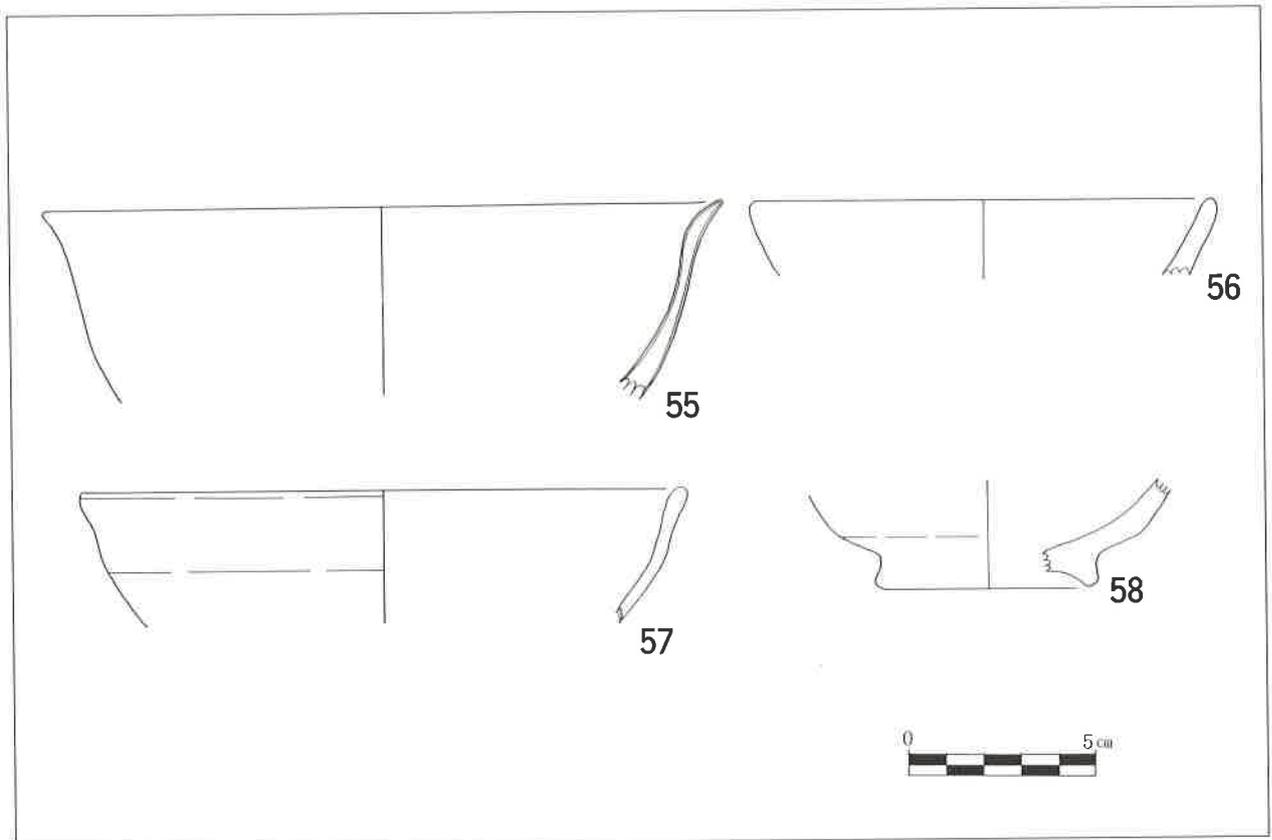
第14図 3トレンチ遺物出土状況



第15図 トレンチ内出土遺物（一）



第16図 トレンチ内出土遺物 (二)



第17図 トレンチ内出土遺物（三）

3. 3 トレンチ（図16）

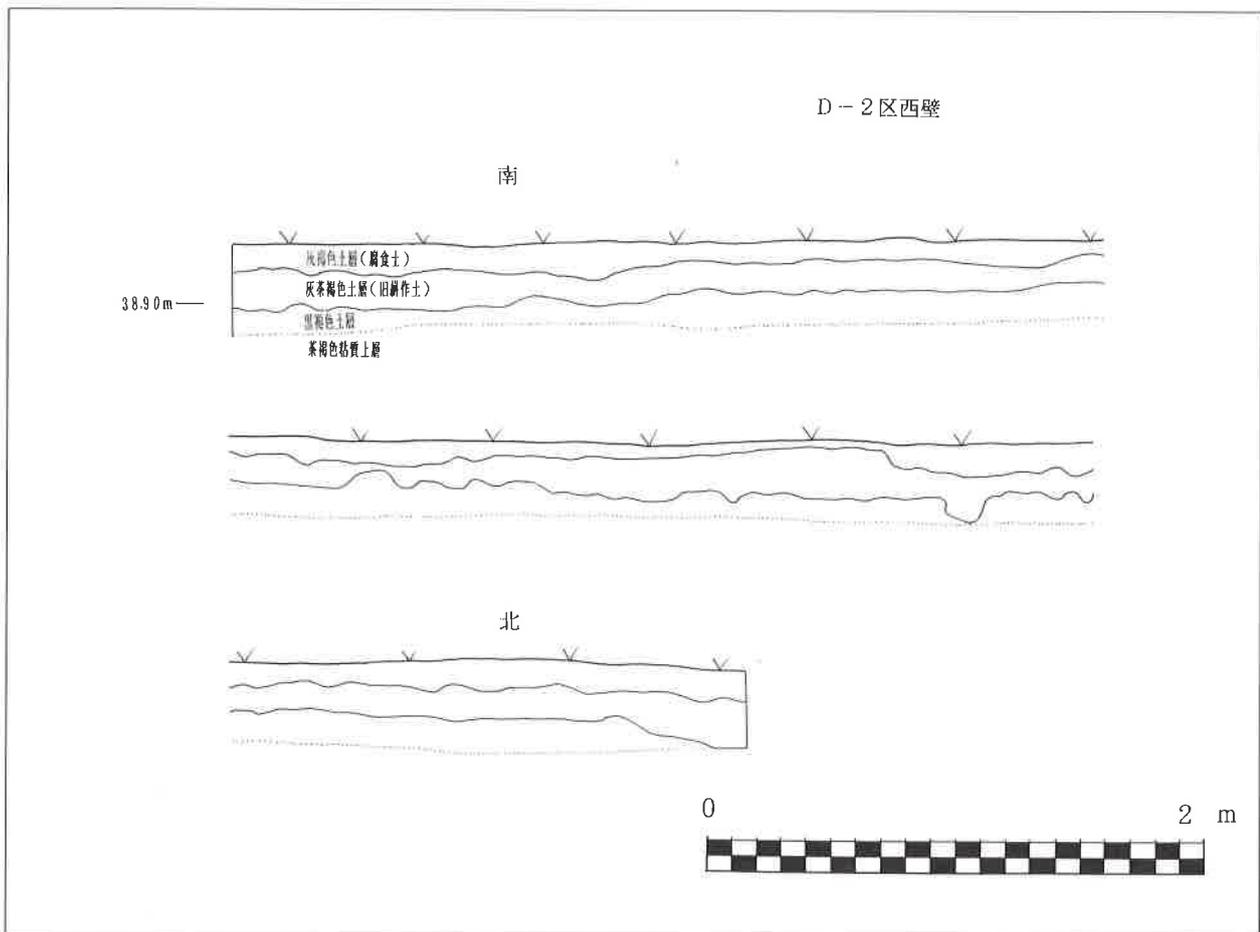
3 トレンチは長さ7 mで、遺物はⅡ層（茶褐色土層）から出土した。40は白磁碗で、口禿口縁である。41・44は青磁碗である。41は口縁部破片、44が底部破片である。44は青磁碗の底部破片で、釉薬には貫入が認められる。42・43は染付碗で、見込みに二重の圈線文を施す。43は見込みに釉剥が認められる。

4. 6 トレンチ（図16）

6 トレンチは長さ7 mで、遺物はⅡ層（シラス混じりの茶褐色土層）から出土した。45は内黒土師器の碗で、底部破片である。高台は断面三角で、短い。46も内黒土師器の碗で、口縁部は若干外反気味である。器壁は厚い。47は縄文時代早期の土器で、円筒系条痕文土器である。48は青磁碗の底部付近の破片である。

5. 7 トレンチ（図16・17）

7 トレンチは長さ7 mで、遺物はⅡ層（シラス混じりの茶褐色土層）から出土した。49は磨石である。石材は安山岩である。50は縄文土器で、文様等は見受けられないが胎土や色調などから縄文時代早期の円筒系条痕文土器と思われる。51～54は縄文時代の遺物で、すべて剥片である。石材は、51・53・54が黒耀石で、52が鉄石英である。55は端反白磁碗である。口径は18cmである。56～58は内黒土師器碗である。56・57は口縁部破片である。56は口唇部は内彎気味で、器壁は厚い。炭素の付着は不良である。57は口唇部が玉状に膨らむ。胴部に一段の稜線が付き、器壁は薄い。型造りの



第18図 D-2区西壁土層図

可能性も指摘できる。炭素の付着は不良である。58は高台は断面三角で、底部からの立上りに一段の稜線が認められる。炭素の付着は不良である。

第3節 縄文時代の出土遺物・遺構

1. 標準土層 (図18)

調査区は最近まで、一部墓として使用されていた部分があり、かなりの攪乱があった。(図19)土層は耕作土の下に、Ⅱ層(黒褐色土層)があり、これが弥生時代から中世までの包含層で、その下層のⅢ層より縄文時代の遺物が確認された。縄文時代の遺物遺構は平成7年度の調査区の中で、まばらに検出された。土坑が5基、住居址と思われる遺構が1基検出された。以下遺構ごとに説明を行うことにする。

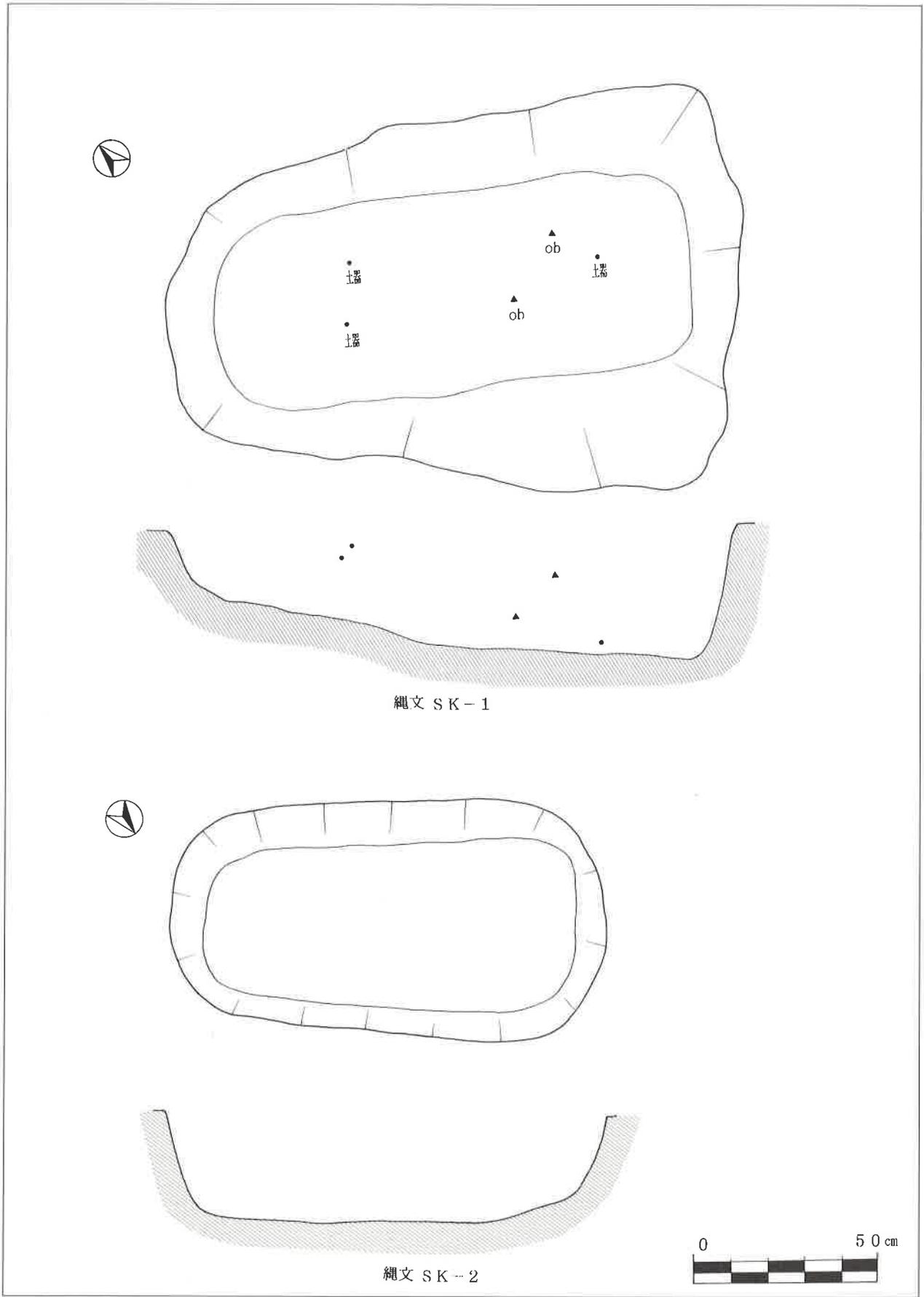
2. 縄文時代の遺構 (図20～23)

SK-1は、F-1区から検出された。長軸は155cm、短軸は107cmである。楕円形を呈し、図化出来なかったが、埋土中には土器片が3片、黒耀石製の剥片が2片検出された。

SK-2は、G-2区から検出された。長軸は119cm、短軸は65cmである。遺物等は検出できなかった。



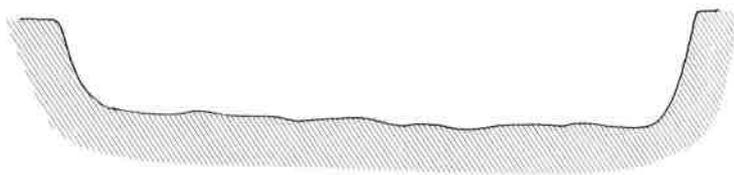
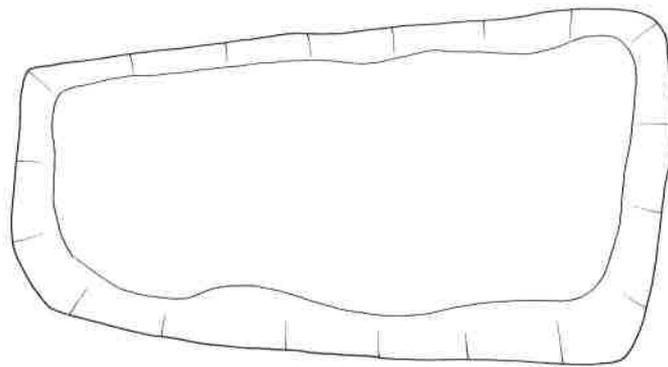
第19図 縄文時代遺構位置図



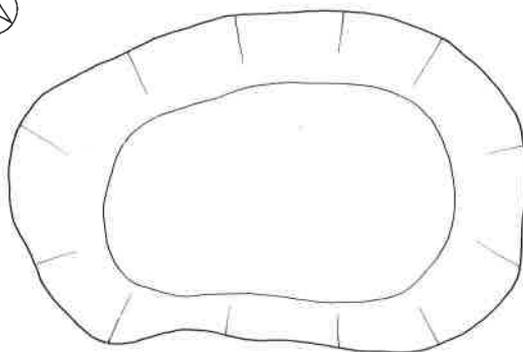
縄文 SK-1

縄文 SK-2

第19図 縄文時代遺構位置図



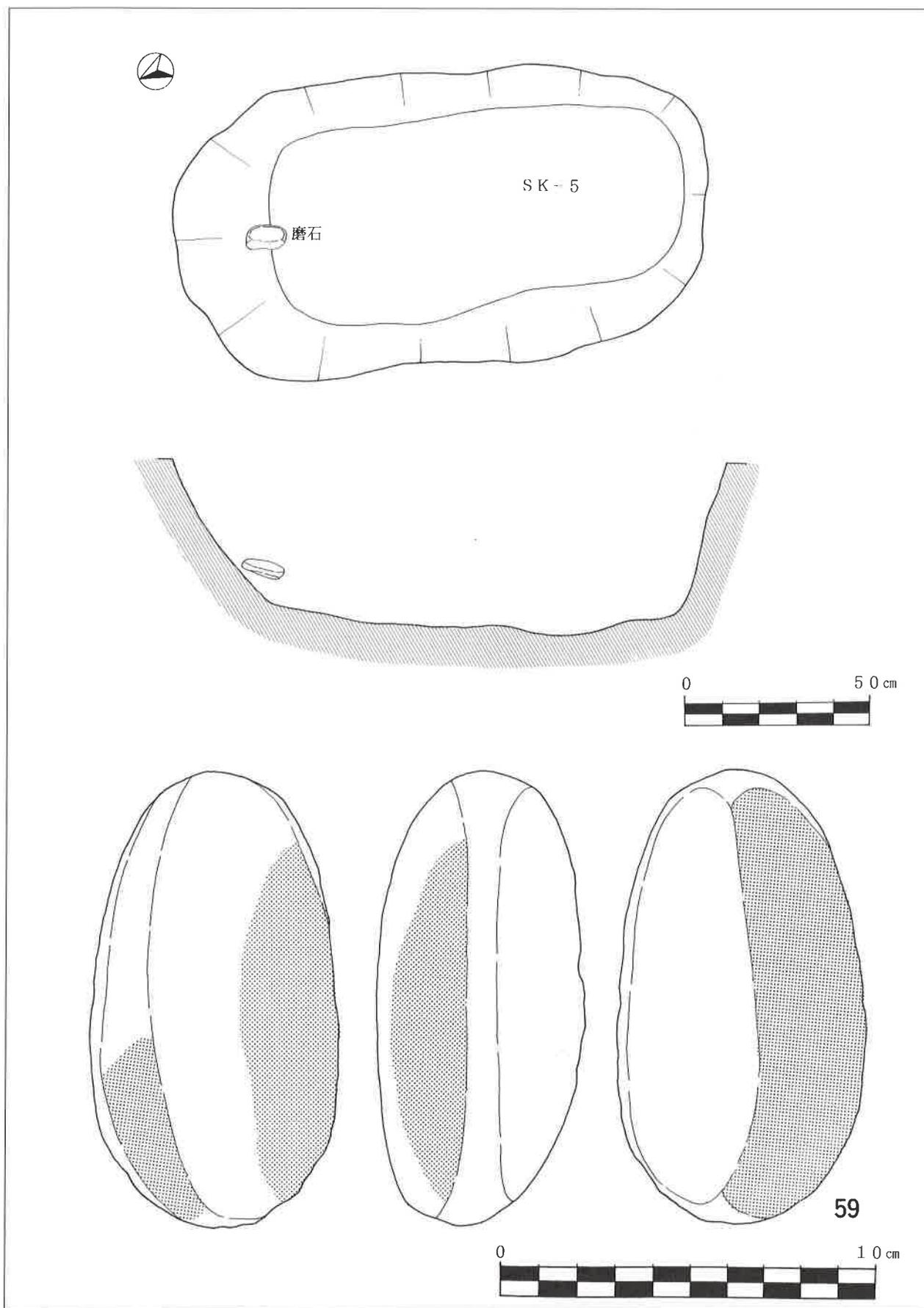
縄文 SK-3



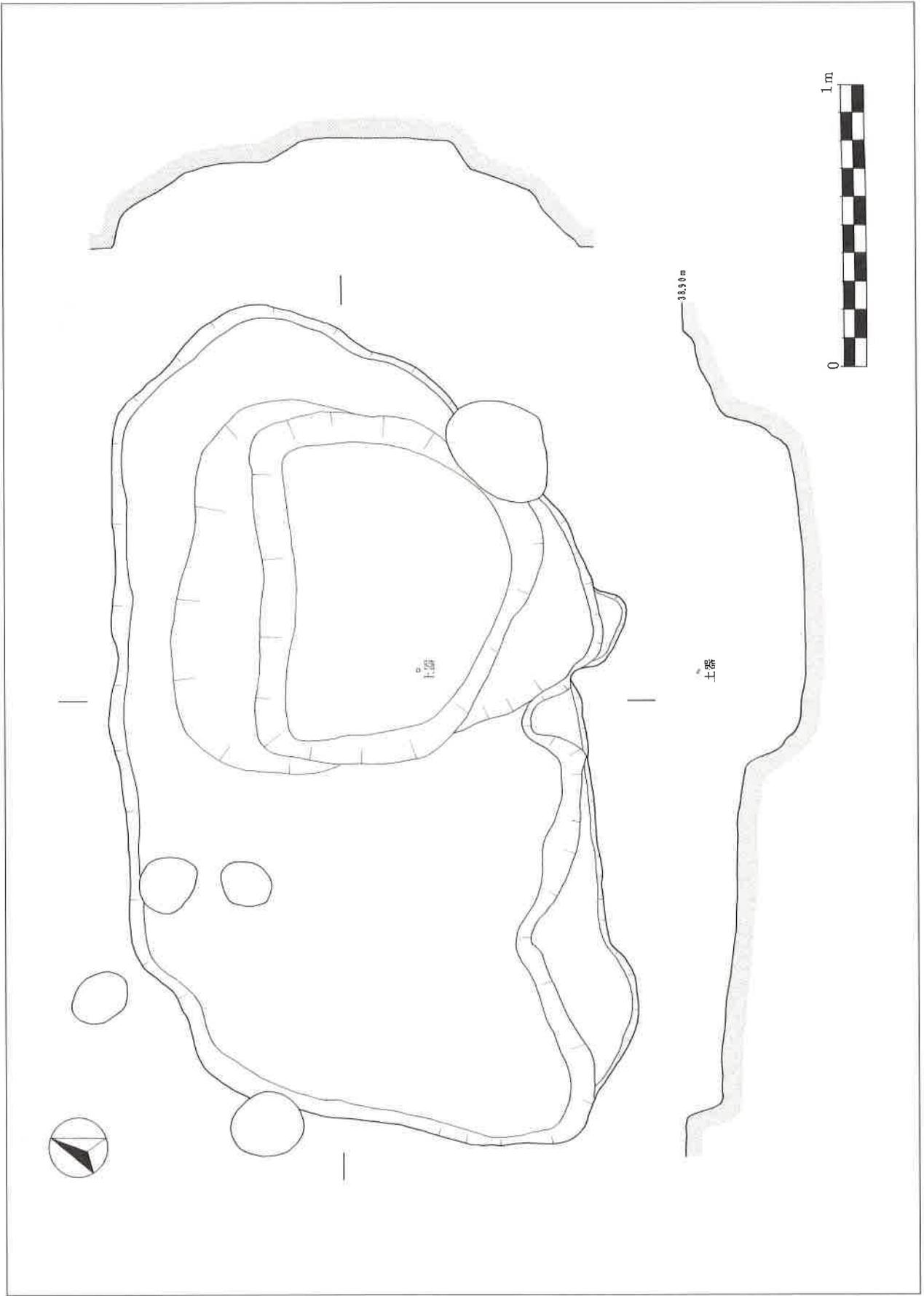
縄文 SK-4



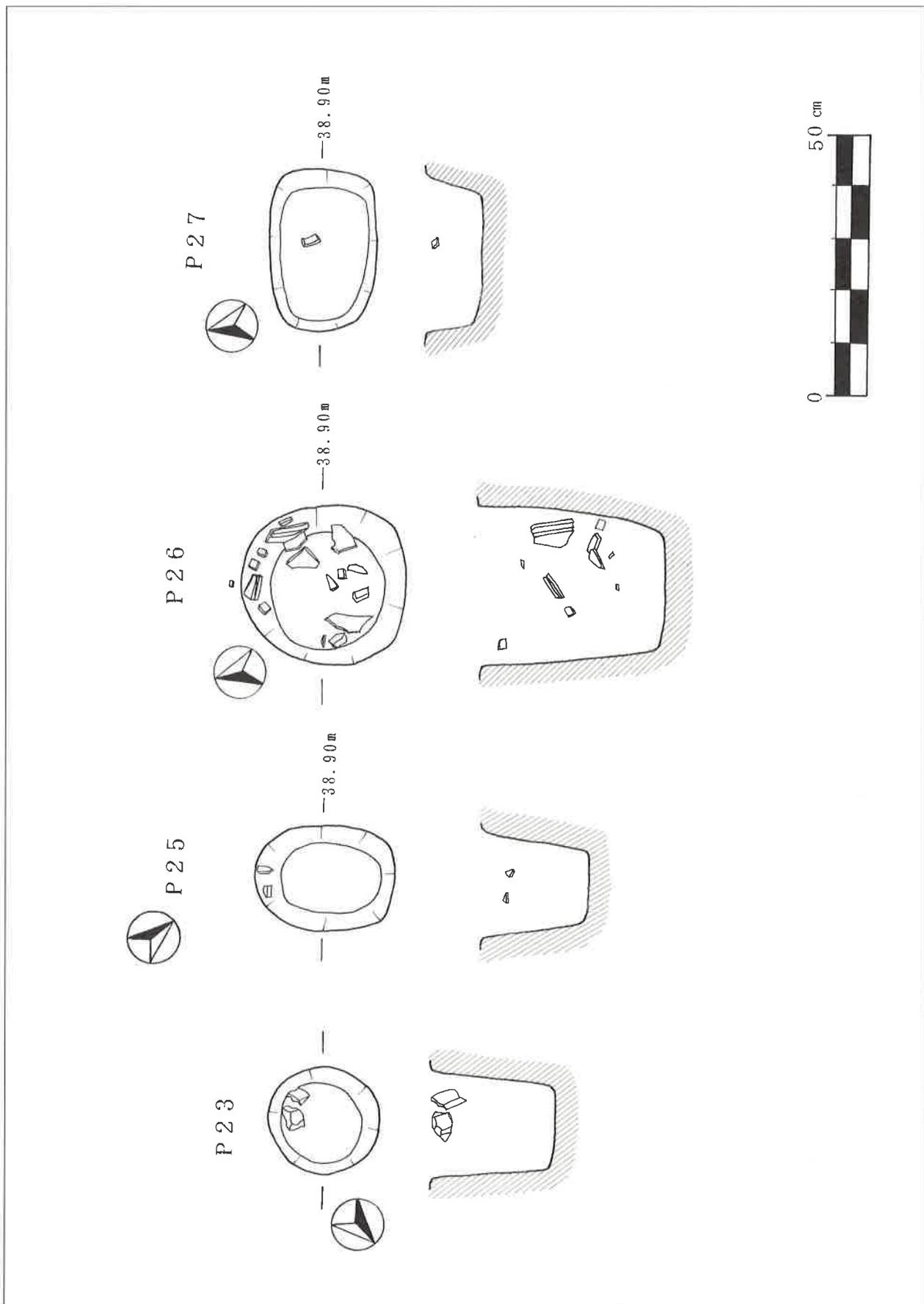
第21図 縄文時代遺構 (二)



第22図 縄文時代遺構 (三)



第23図 縄文時代豎穴状遺構



第24図 弥生時代の遺構

S K-3は、H-2区から検出された。長軸は128cm、短軸は72cmである。遺物等は検出されなかった。

S K-4は、G-3区から検出された。長軸は103cm、短軸は67cmである。遺物等は検出されなかった。

S K-5は、H-4区から検出された。長軸は144cm、短軸は77cmである。磨石が検出された。

今回検出された縄文時代の土坑は、一番大きい土坑がS K-1で、一番小さいのがS K-4である。平均値は長軸は約130cm、短軸は約78cmで、S K-3が最も平均に近い。土坑はすべて楕円形を呈している。床面はほぼフラットで、立上りもなだらかに立ち上がっている。出土遺物の中で黒耀石破片や土器片などが出土しているが、摩耗が観察され流れ込みであろう。磨石は完形品で、床面近くから検出されており、この土坑の目的と何らかの関係があるものと推察できる。

S C-1は、縄文時代早期の住居址状の遺構である。長軸は278cm、短軸は164cmで、埋土中より縄文時代早期の円筒系貝殻条痕文土器片が検出された。

平成7年度 縄文時代遺構計測表

図	遺構	出土区	縦(cm)	横(cm)	深さ(cm)	出土遺物
20	S K-1	F-1	155	107	37	土器・黒耀石
	S K-2	G-2	119	65	30	
21	S K-3	H-2	128	72	23	
	S K-4	G-3	103	67	43	
22	S K-5	H-4	144	77	47	磨石
23	S C-1	H-2	278	164	42	土器

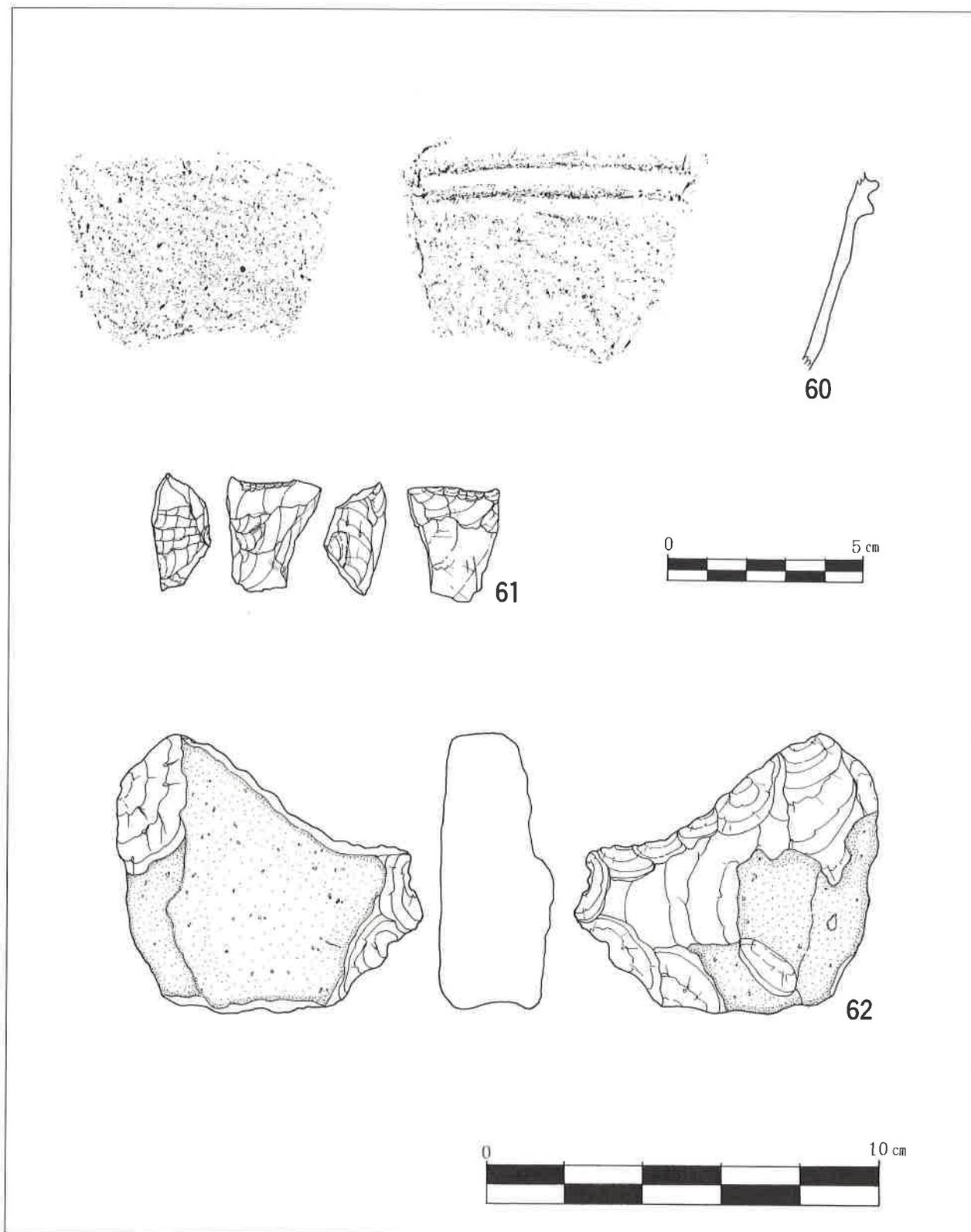
平成7年度 縄文時代遺構内出土遺物一覧表

図	番号	遺物番号	出土区	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	年代	備考
22	59	NO1	SK-5	磨石	安山岩	12.2	6.5	5.5	592	縄文時代早期	

第4節 弥生時代の出土遺物・遺構 (図24・25)

1. 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構は、G-2・3区に集中して検出された。すべて柱穴(Pit)で、図24のP23・25~27がそれである。P23・25~27からはすべて弥生式土器が検出され、特にP26はPit内に多量の炭化物とともに唇状突帯文の弥生式土器が埋納されていた。弥生時代の遺構(Pit)は他にもあるかも知れないが、遺物等が検出されなければ中世の遺構との区別がつかない。



第25図 ピット内出土遺物

2. その他の遺物 (図25)

61はP40からの出土で、旧石器時代の台形石器である。石材はチャートである。

62はP46からの出土で、礎石であろう。両 Pit とも時代は不明である。

平成7年度 弥生時代遺構計測表

図	ピット	出土区	縦(cm)	横(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
24	P 2 3	G-2	21	21	25		
	P 2 5	G-3	20	22	21		
	P 2 6	G-3	31	32	37	土 器	炭化物多量検出
	P 2 7	G-3	32	21	12		

第5節 中世の出土遺物・遺構

中世の遺構は土坑7基、遺物が出土し中世と確認できた柱穴は、36検出された。土坑の中には土師器が11個も出土した遺構も検出された。遺構（Pit）は調査区全面に拡がり、建物群を想定出来る。土坑も Pit が付くものが確認され、以下の通り特記すべきものを取り上げた。

1. 中世の土坑（図27～30）

SK-1は、C-1区から検出された。長軸は107cm、短軸は45cmである。遺構の一部に Pit がある遺構である。偶然重なったものなのか不明である。遺物等は確認できなかった。

SK-2は、B-1区から検出された。長軸は154cm、短軸は59cmである。土坑中より土師器が2片出土している。この土坑は Pit が土坑を切っている。

SK-3は、C-1区から検出された。長軸は116cm、短軸は40cmである。土坑の末端に Pit が掘られている。

SK-4は、C-1区から検出された。長軸は81cm、短軸は46cmである。中世の土坑の中で一番小さい土坑である。これも末端に Pit が掘られている。

SK-5は、C-2区から検出された。長軸は115cm、短軸は27cmである。土坑の中に Pit が3個掘られている。これは Pit を構築する際に掘ったものであろう。

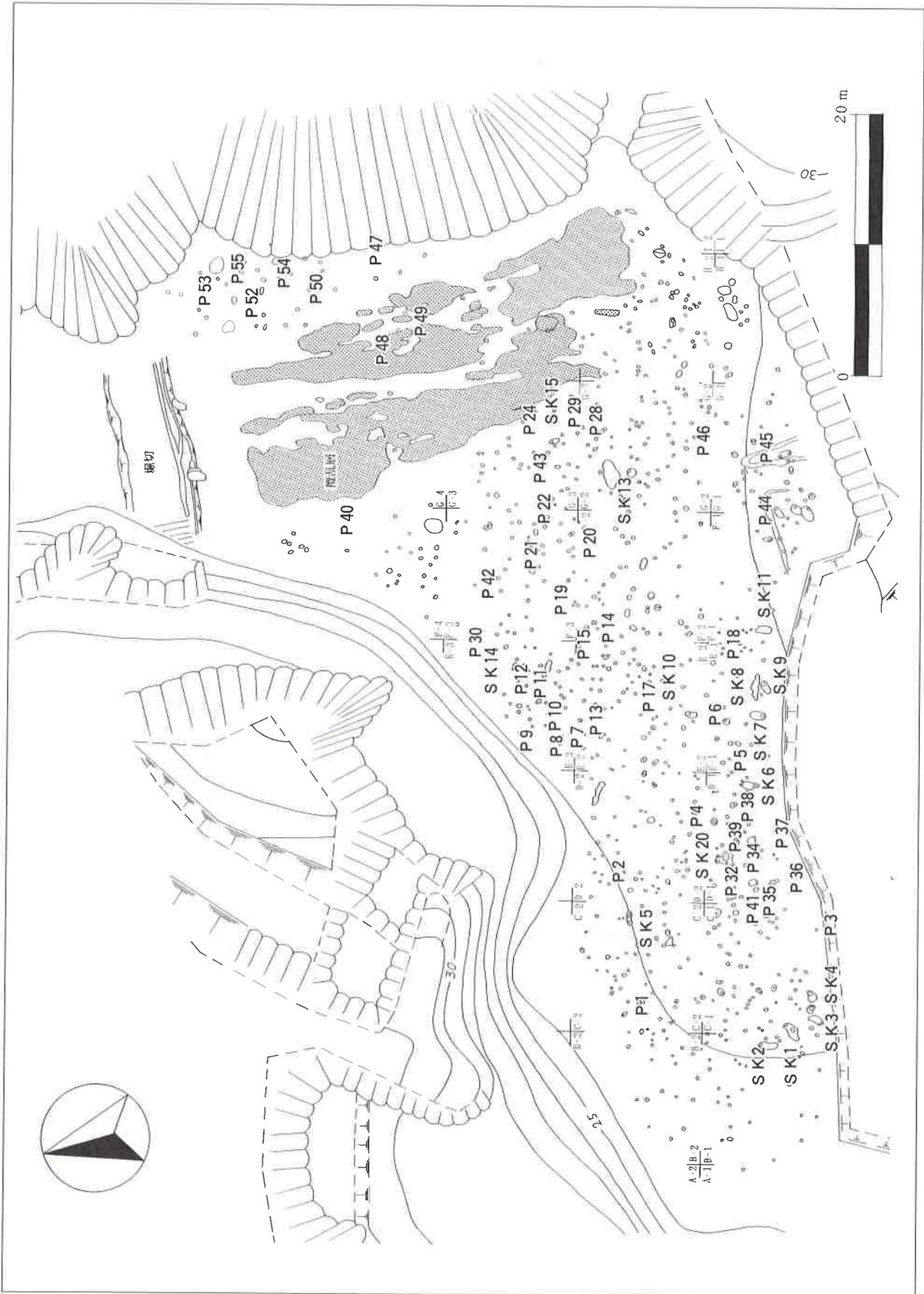
SK-6は、D-1区から検出された。長軸は136cm、短軸は53cmである。これも土坑の末端に Pit が掘られている。重複している Pit も見受けられる。

以上これら土坑の平均値は、長軸が118cm、短軸が45cmである。これに最も近い遺構は、SK-3である。土坑の末端に何のために Pit を設けたのか不明である。山芋の掘り方にも似ているが、山芋のそれは山芋が付いていた痕跡が残っていたが、詰城跡の土坑ではそれが無く、また Pit も円形である。更にSK-5の様に、土坑の中に3つの Pit が掘られた例や、SK-6の様に Pit の掘り直しをしている例などから何らかの目的を持って造られたのであろう可能性が考えられる。いまの所は類例を待つしかない。

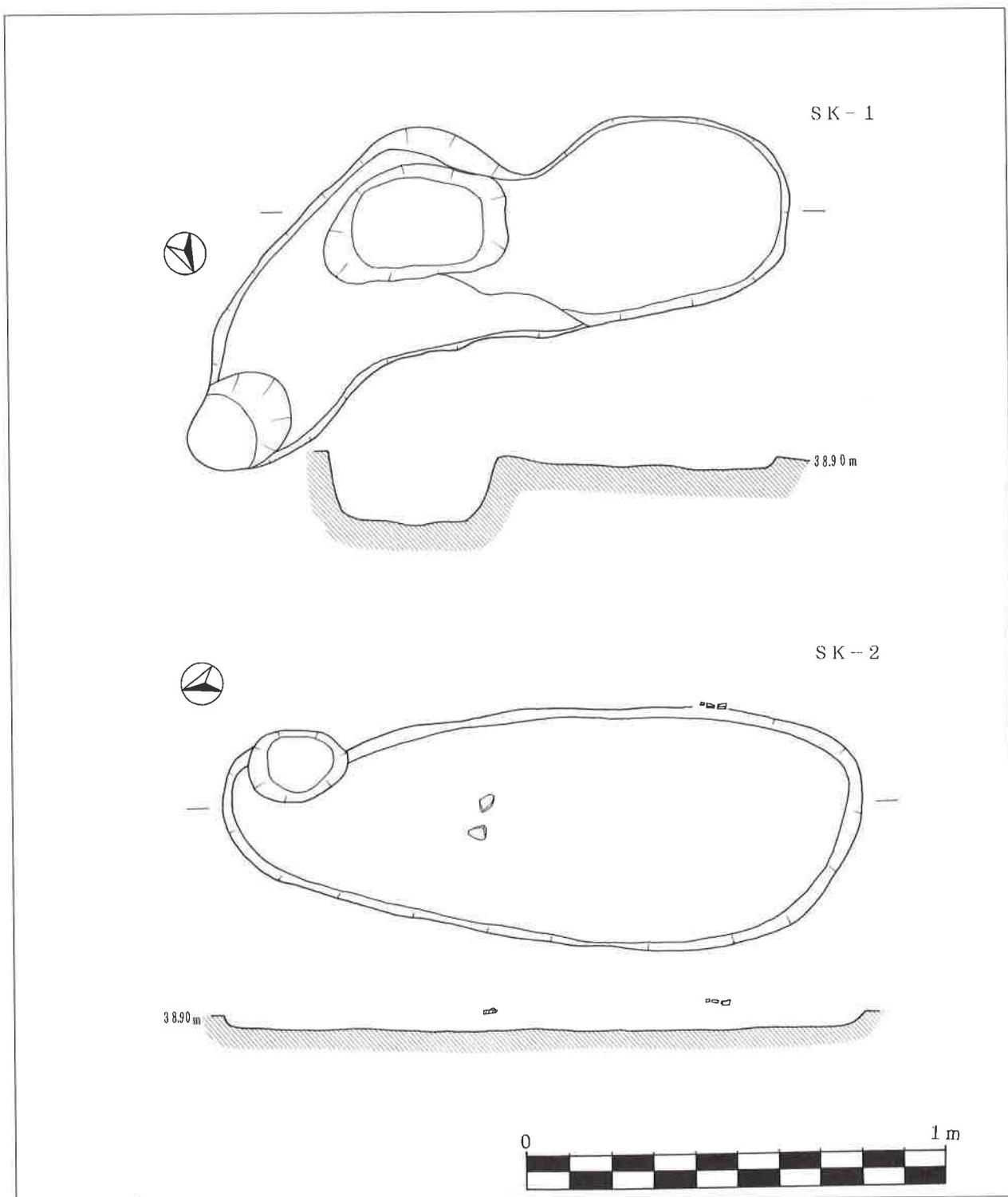
2. 特殊な遺構（図30・32）

〈発掘状況〉

SK-12は、H-1区から検出された。長軸は155cm、短軸は54cmである。炭化物が混じった埋土中から、坏が7、皿が4検出された。図30の通りである。土坑上部が少々削平を受けており数的にはこれですべてかどうか判らない。筆者の偏見であり妥当であるか判らないが、図面で見れば右

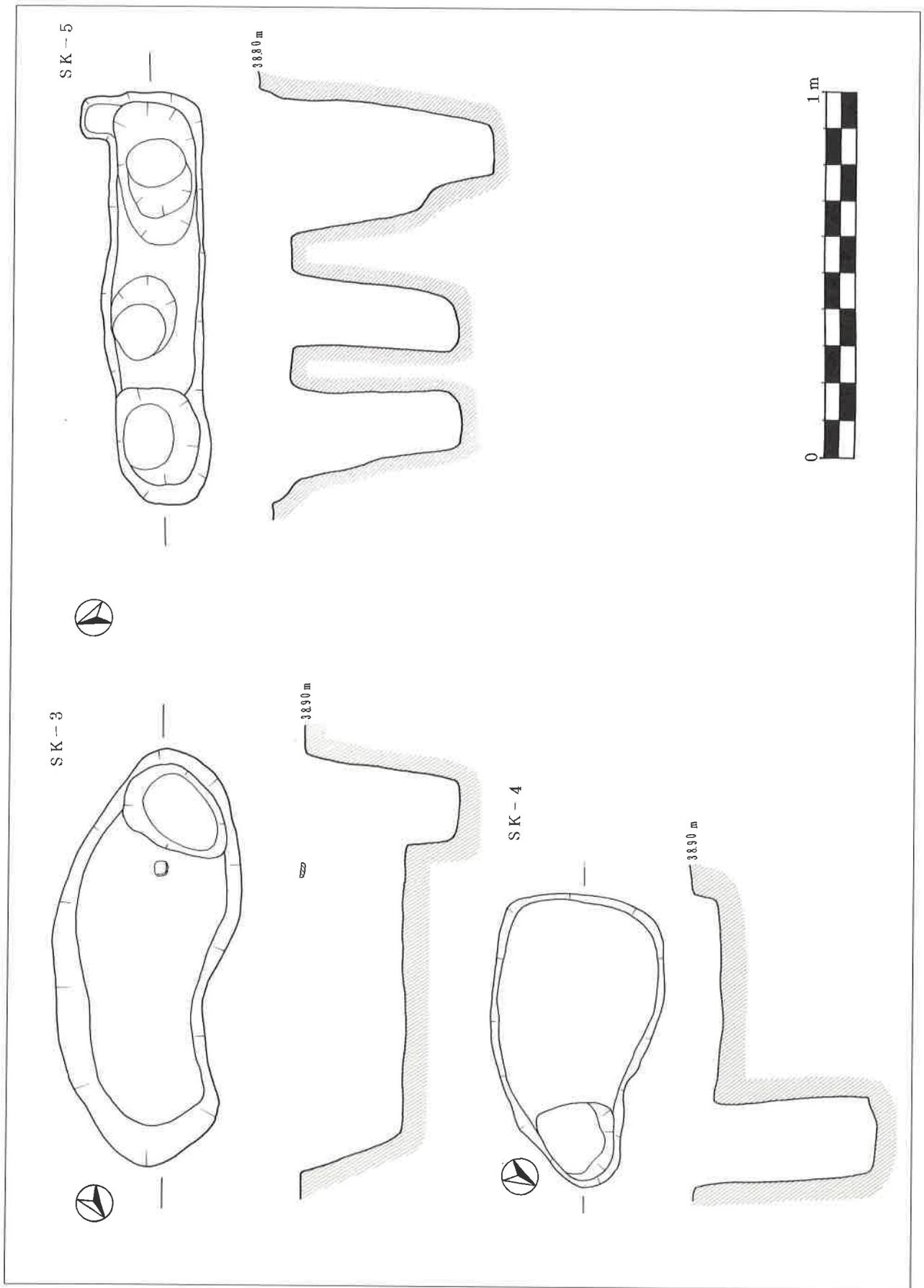


第26図 遺構配置図



第27図 中世の遺構（一）

半分に坏が3，皿が3分布しており，左半分に坏が4，皿1の配置である。土坑の左半分から出土した坏は図32の65・69が底部面を上にしてすなわち伏せた状態で検出された。残り2つの坏（図32の67・72）は底部面を上にして埋納されていた。皿（図32の74）は壊れた状態で，まとまって検出された。土坑の右半分から出土した坏は，1つ（図32の66）が底部を上にして埋納されていた。図32の75は66と底部を合わせるようにして要するに，底部を下にして検出された。もう一つ出土した



第28図 中世の遺構 (二)

坏（図32の68）は、独立して検出された。皿（図32の70・71・73）は70が底部を下にして置かれ、その上に重ねるようにして73が検出された。71は独立して検出された。

〈遺物について〉

坏は65～69・72・75の7つで、それぞれ同じ特徴が見受けられる。口径は順に13.8cm／13.8cm／14.8cm／13.7cm／13.8cm／13.8cm／13.7cmで、13.8cmに基準値があるようだ。また器形も口縁部は丸みを帯び、底部から胴部にかけて緩やかに伸び胴部中央で屈曲し少し立上り気味に口縁部へと続く。底部の角は丸みを持つ。皿（70・71・73・74）も底部角は丸みを持ち、約45度の角度で伸び口縁部末端で少々外反する様だ。口径は順に8.7cm, 7.2cm, 7.6cm, 7.2cm で、70が他の3つに比べて大きい。基準値は7.2 cmにあるようだ。これらSK-12から出土した遺物の年代は、67が耳皿風の器形を呈しており、詰城のPitや土坑などから玉縁口縁白磁碗や端反白磁碗、内黒土師器などが検出されている点から、12世紀の中頃から13世紀前初頭を想定している。

3. 中世の柱穴（図33・34）

すべて遺物が検出された柱穴だけ図化してある。P 1～14・P 21・P 24・P 28・P 31～35・P 40・P 43～55がそれである。

P 1はC-2区に位置している。直径は22cmで深さ31cm、土師器の坏（図35の76）が検出された。この坏は口径9.3 cmでSK-12から出土した坏と器形は同じである。P 2はD-2区に位置している。直径は33cmで深さ32cm、成川式土器の脚部が検出された。P 3はC-1区に位置している。直径は26cmで深さ34cm、端反白磁碗の口縁部が検出された。内面に圏線文及び櫛搔文を施す。P 4はD-1区に位置している。直径は54cmで深さ65cm、土師器底部が2片（図35の79・80）検出された。両遺物とも糸切底である。79・80は焼成は不良で、SK-12から出土した遺物と似ている。底部は糸切りであるが、ナデ調整を行なっている。P 5はE-1区に位置している。直径は25cmで深さ32cm、土師器が出土している。P 6はE-1区に位置している。直径は25cmで深さ35cm、土師器が出土した。P 5・6とも図化出来なかった。P 7はE-3区に位置している。直径は26cmで深さ34cm、内黒土師器（図35の81）の底部が出土した。高台は断面三角で、器壁は薄い。炭素の付着は良い。P 8はE-3区に位置している。直径は23cmで深さ35cm、土師器片と拳大の礫が出土した。土師器は小片のため図化出来なかった。P 9はE-3区に位置している。直径は23cmで深さ30cm、内黒土師器の口縁部破片（図35の82）と外面に緑色の釉薬を掛けた青磁の甕の破片が出土した。82は口縁部が内彎気味で、器壁は厚い。内面は横へらみがきである。P 10はE-3区に位置している。直径は32cmで深さ35cm、土師器破片と小礫が出土した。土師器は小破片のため図化出来なかった。P 11はE-3区に位置している。直径は19cmで深さ21cm、内黒土師器の口縁部破片（図35の83）が出土した。83は、口縁部が若干内彎気味で82の土師器と酷似している。P 12はE-3区に位置している。直径は33cmで深さ50cm、内黒土師器の口縁部破片（図35の85）と焼けた小礫が出土した。85は口唇部が細くなり、器壁は薄い。P 13はE-3区に位置している。直径は35cmで深さ59cm、土師器の小片が出土したが、図化出来なかった。P 14はE-2区に位置している。直径は26cmで深さ25cm、白磁碗の口縁部破片（図35の84）が出土した。P 21はF-3区に位置している。直径は24cmで、深さ21cm、土師器の小片が出土しているが図化できなかった。P 24はG-3区に位置している。直径は36cmで深さ20cm、土師器の小片が出土しているが図化できなかった。P 28はG-3区に位置している。直径は24cmで深さ14cm、土師器の口縁部（図35の86）が出土した。P 31はF-4区に位

平成7年度 土坑内出土遺物一覧表(一)

図	番号	遺物番号	出土区	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	年代	備考
31	63	NO 2	SK-2	土師器	坏	12.4	—	—		
	64	NO 1	SK-2	土師器	坏	15.1	—	—		
32	65	NO 1	SK-12	土師器	坏	13.8	5.5	3.2	13世紀初頭	
	66	NO 7	SK-12	土師器	坏	13.8	7.2	4.4	13世紀初頭	
	67	NO 3	SK-12	土師器	坏	14.2	6.2	3.3	13世紀初頭	
	68	NO15	SK-12	土師器	坏	13.7	6.3	4.3	13世紀初頭	
	69	NO 2	SK-12	土師器	坏	13.8	7.3	4.2	13世紀初頭	
	70	NO 9	SK-12	土師器	小皿	8.7	6.3	1.7	13世紀初頭	
	71	NO17	SK-12	土師器	小皿	7.2	5.3	1.2	13世紀初頭	
	72	NO 4	SK-12	土師器	坏	13.8	6.2	4.7	13世紀初頭	
	73	NO10	SK-12	土師器	小皿	7.6	5.9	0.9	13世紀初頭	
	74	NO 5	SK-12	土師器	小皿	7.2	5.7	0.9	13世紀初頭	
	75	NO 8	SK-12	土師器	坏	13.7	6.9	4.5	13世紀初頭	

平成7年度 ピット内出土遺物一覧表

図	番号	遺物番号	ピット	出土区	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	年代	備考
35	76	NO1	P 1	C-2	土師器	坏	9.3	4.3	3.4	13世紀初頭	
	77	NO1	P 2	D-2	成川式土器	高台	—	13.0	—		脚部
	78	NO1	P 3	C-1	白磁	碗	15.8	—	—	12~13世紀	端反
	79	NO1	P 4	D-1	土師器		—	—	—		糸底・ヘラナデ
	80	NO2	P 4	D-1	土師器		—	—	—		糸切底
	81	NO1	P 7	E-3	土師器		—	6.3	—		内黒
	82	NO1	P 9	E-3	土師器		15.6	—	—		内黒
	83	NO1	P 11	E-3	土師器		11.5	—	—		内黒
	84	NO1	P 14	E-2	白磁	碗	17.0	—	—	12~13世紀	
	85	NO1	P 12	E-3	土師器		11.6	—	—		内黒
	86	NO1	P 28	G-3	土師器	坏	10.7	—	—		
	87	NO1	P 32	D-1	白磁	碗	16.2	—	—	12~13世紀	玉縁口縁
	88	NO1	P 33	D-1	土師器	坏	11.6	—	—		口縁部
	89	NO1	P 34	D-1	土師器	坏	9.1	—	—		
	90	NO2	P 34	D-1	土師器	小皿	9.1	6.0	1.1		
	91	NO1	P 47	H-4	土師器	小皿	8.3	7.2	1.2		糸きり後ナデ調整
	92	NO1	P 48	H-4	土師器	小皿	7.9	6.7	1.4		糸きり後ナデ調整
	93	NO3	P 48	H-4	土師器	坏	16.3	—	—		
94	NO1	P 52	H-5	白磁	碗	—	6.0	—	12~13世紀	玉縁口縁	
95	NO1	P 53	H-5	白磁	碗	16.7	—	—	12~13世紀	玉縁口縁	

図	遺構	出土区	縦 (cm)	横 (cm)	深さ (cm)	備考
27	SK-1	C-1	107	45	3	
	SK-2	B-1	154	59	3	土師器
28	SK-3	C-1	116	40	29	
	SK-4	C-1	81	46	7	
	SK-5	C-2	115	27	8	
29	SK-6	D-1	136	53	19	
30	SK-12	H-1	155	54	9	土師器

平成7年度 遺構計測表 (一)

図	ピット	出土区	縦 (cm)	横 (cm)	深さ (cm)	備考
33	P 1	C-2	22	22	31	土師器
	P 2	D-2	33	24	32	土師器
	P 3	C-1	26	24	34	白磁
	P 4	D-1	54	42	65	土師器
	P 5	E-1	25	22	32	土師器
	P 6	E-1	25	23	35	土師器
	P 7	E-3	26	20	34	土師器
	P 8	E-3	23	19	35	礫
	P 9	E-3	23	22	30	陶器(甕?)
	P 10	E-3	32	25	35	礫
	P 11	E-3	19	18	21	土師器
	P 12	E-3	33	30	50	土師器
	P 13	E-3	35	24	59	土師器
	P 14	E-2	26	24	25	白磁
	P 21	F-3	24	20	21	土師器
	P 24	G-3	36	25	20	土師器
	P 28	G-3	24	19	14	土師器
	P 31	F-4	22	19	36	土師器
	P 32	D-1	40	31	43	白磁
	P 33	D-1	41	28	58	土師器
P 34	D-1	26	24	49	土師器	
P 35	D-1	32	25	49	土師器	

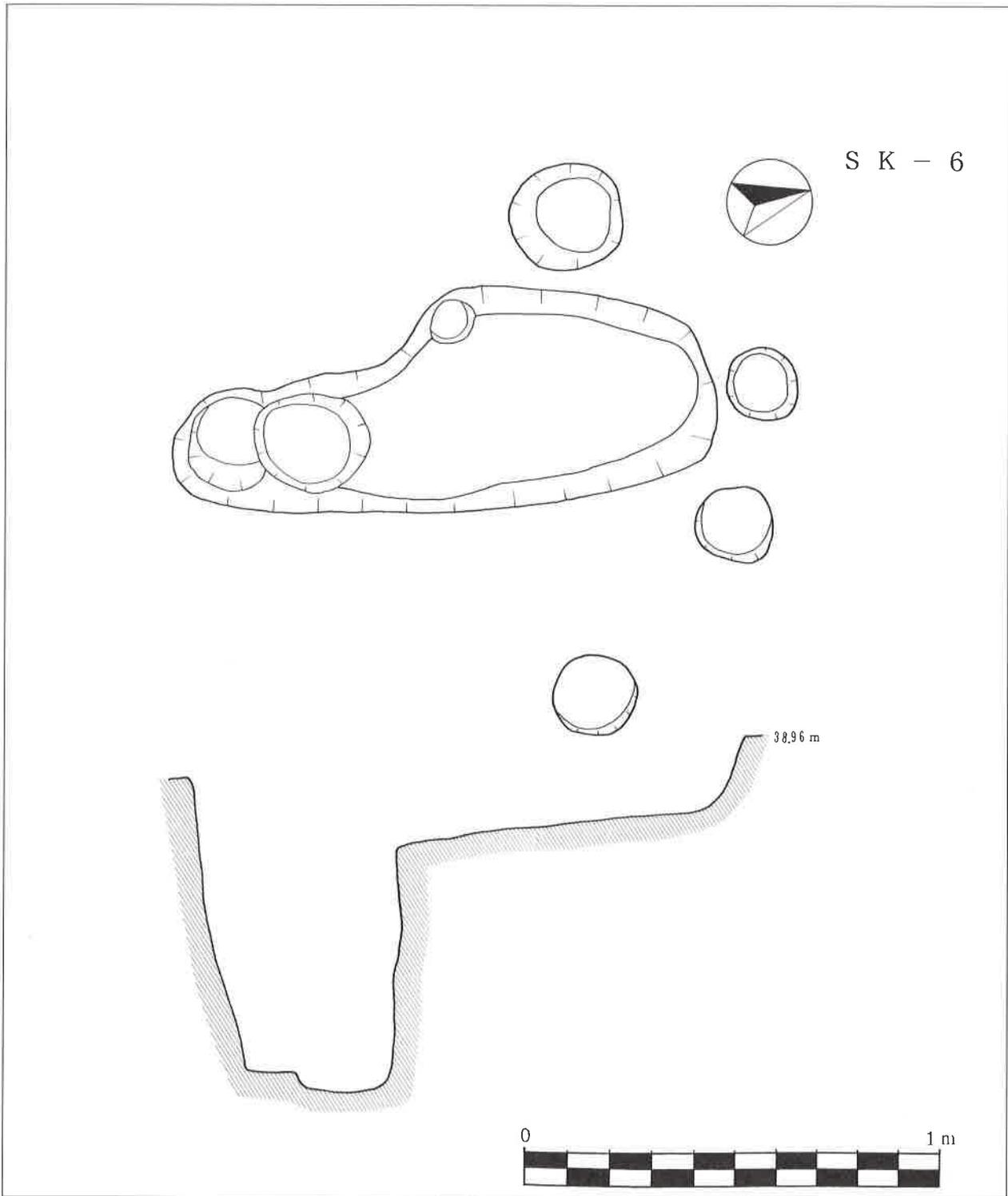
34	P 40	D-1	21	21	24	台形石器
	P 43	G-3	18	18	17	土師器
	P 44	F-1	70	29	55	土師器
	P 45	G-1	38	30	58	礎石
	P 46	G-2	29	27	28	礎石
	P 47	H-4	36	28	29	土師器
	P 48	H-4	20	18	26	土師器
	P 49	H-4	22	20	22	土師器・礫
	P 50	H-5	24	24	39	縄文土器
	P 51	H-5	24	21	63	土師器
	P 52	H-5	31	31	56	白磁
	P 53	H-5	20	20	11	白磁
	P 54	H-5	31	22	56	土師器
	P 55	H-5	27	22	14	蛋白石

平成7年度 ピット内出土遺物一覧表

図	番号	遺物番号	ピット	出土区	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	年代	備考
35	76	NO1	P 1	C-2	土師器	坏	9.3	4.3	3.4	13世紀初頭	
	77	NO1	P 2	D-2	成川式土器	高台	—	13.0	—		脚部
	78	NO1	P 3	C-1	白磁	碗	15.8	—	—	12~13世紀	端反
	79	NO1	P 4	D-1	土師器		—	—	—		糸底・ハラナデ
	80	NO2	P 4	D-1	土師器		—	—	—		糸切底
	81	NO1	P 7	E-3	土師器		—	6.3	—		内黒
	82	NO1	P 9	E-3	土師器		15.6	—	—		内黒
	83	NO1	P 11	E-3	土師器		11.5	—	—		内黒
	84	NO1	P 14	E-2	白磁	碗	17.0	—	—	12~13世紀	
	85	NO1	P 12	E-3	土師器		11.6	—	—		内黒
	86	NO1	P 28	G-3	土師器	坏	10.7	—	—		
	87	NO1	P 32	D-1	白磁	碗	16.2	—	—	12~13世紀	玉縁口縁
	88	NO1	P 33	D-1	土師器	坏	11.6	—	—		口縁部
	89	NO1	P 34	D-1	土師器	坏	9.1	—	—		
	90	NO2	P 34	D-1	土師器	小皿	9.1	6.0	1.1		
	91	NO1	P 47	H-4	土師器	小皿	8.3	7.2	1.2		糸きり後ナデ調整
	92	NO1	P 48	H-4	土師器	小皿	7.9	6.7	1.4		糸きり後ナデ調整
	93	NO3	P 48	H-4	土師器	坏	16.3	—	—		
	94	NO1	P 52	H-5	白磁	碗	—	6.0	—	12~13世紀	玉縁口縁
	95	NO1	P 53	H-5	白磁	碗	16.7	—	—	12~13世紀	玉縁口縁

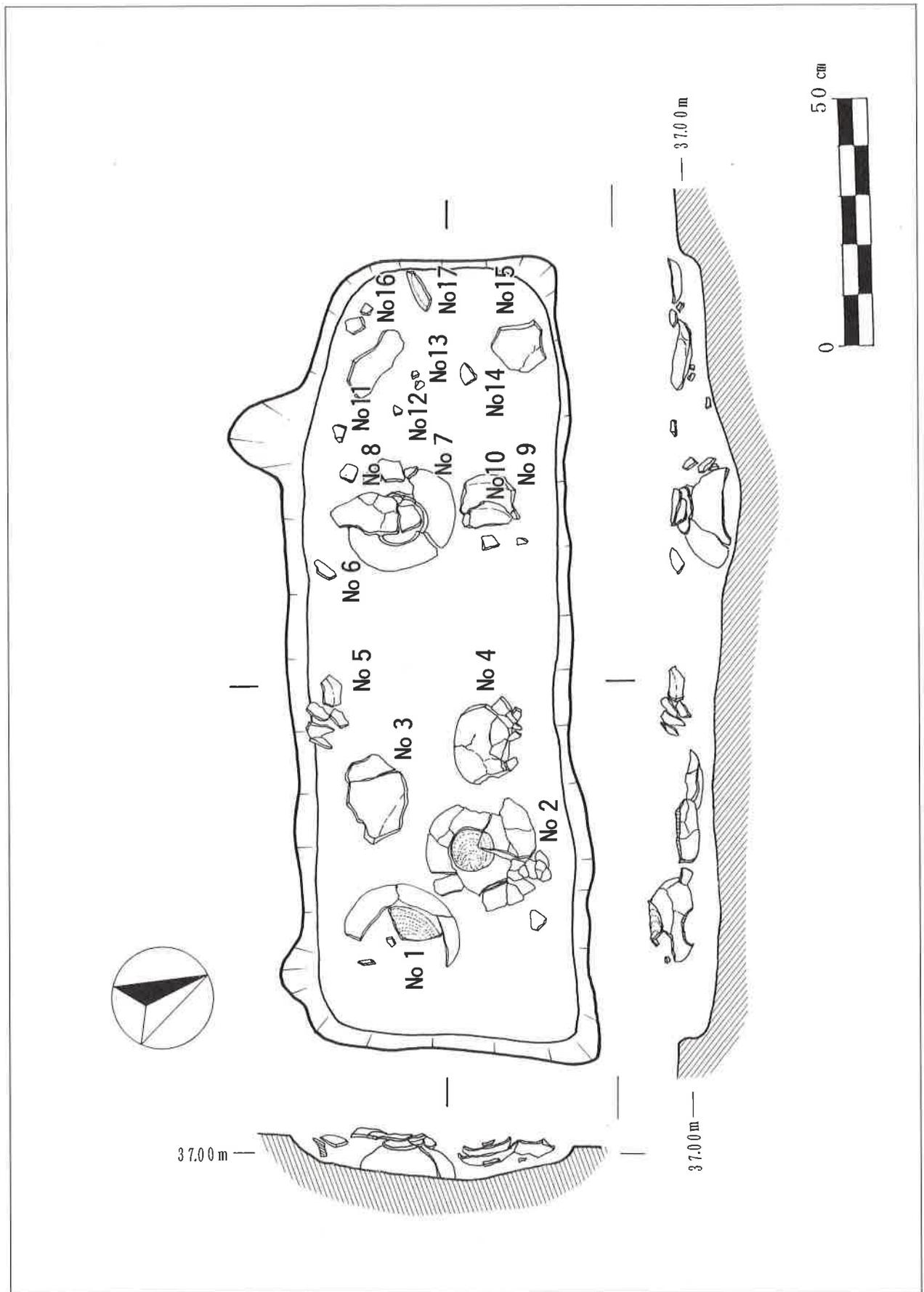
平成7年度 FG-1区出土遺物一覽表

図	番号	遺物番号	出土区	層	種別	器種	口径(cm)	低径(cm)	器高(cm)	年 代	備 考
37	96	202	FG-1	Ⅱ	白磁	碗	12.0	—	—	12~13世紀	玉縁口縁
	97	209	FG-1	Ⅱ	白磁	碗	16.4	—	—	12~13世紀	口縁部・端反・横線文
	98	267	FG-1	Ⅱ	白磁	碗	13.6	—	—	12~13世紀	口縁部・端反・横線文
	99	314	FG-1	Ⅱ	白磁	碗	9.8	—	—	12~13世紀	口縁部
	100	448	FG-1	Ⅱ	白磁	碗	10.1	—	—		口縁部・端反
	101	221	FG-1	Ⅱ	白磁	皿	9.4	—	—		口縁部
	102	237	FG-1	Ⅱ	白磁	碗	9.3	—	—	12~13世紀	口縁部
	103	402	FG-1	Ⅱ	青磁	盤	34.3	—	—	15世紀	
	104	248	FG-1	Ⅱ	青磁	碗	15.8	—	—	14~15世紀	口縁部・雷文
	105	410	FG-1	Ⅱ	青磁	碗	10.9	—	—	14~15世紀	口縁部
	106	328	FG-1	Ⅱ	青磁	碗	13.8	—	—	14~15世紀	口縁部
	107	231	FG-1	Ⅱ	青磁	碗	15.8	—	—	14~15世紀	口縁部・雷文
	108	319	FG-1	Ⅱ	青磁	碗	17.9	—	—	14~15世紀	口縁部
	109	203	FG-1	Ⅱ	青磁	皿	—	7.0	—		底部
38	110	199	FG-1	Ⅱ	青磁	稜花皿	12.5	—	—	14~15世紀	口縁部
	111	273	FG-1	Ⅱ	青磁	碗	15.1	—	—	14~15世紀	口縁部
	112	249	FG-1	Ⅱ	青磁	碗	—	—	—		
	113	495	FG-1	Ⅱ	縄文土器	深鉢	—	—	—	縄文早期	貝殻条痕文
	114	461	FG-1	Ⅱ	弥生土器	大甕	32.9	—	—	弥生中期	
	115	281	FG-1	Ⅱ	弥生土器	甕	—	—	—	弥生中期	口唇状突帯
	116	387	FG-1	Ⅱ	須恵器	甕	—	—	—		
	117	245	FG-1	Ⅱ	土師器	坏	8.7	—	—		口縁部
	118	468	FG-1	Ⅱ	土師器	坏	—	8.9	—		
	119	251	FG-1	Ⅱ	土師器	小皿	—	4.8	—		糸切底
	120	241	FG-1	Ⅱ	土師器	小皿	—	5.2	—		糸切底
	121	550	FG-1	Ⅱ	土師器	坏	10.6	—	—		
	122	256	FG-1	Ⅱ	土師器	坏	13.8	—	—		口縁部
	123	445	FG-1	Ⅱ	土師器	小皿	—	6.4	—		糸切底
124	386	FG-1	Ⅱ	土師器	小皿	6.2	4.7	1.3		内外朱	
125	452	FG-1	Ⅱ	不明		—	—	—		石板?	
126	282	FG-1	Ⅱ	土師器	小皿	6.8	5.9	—			

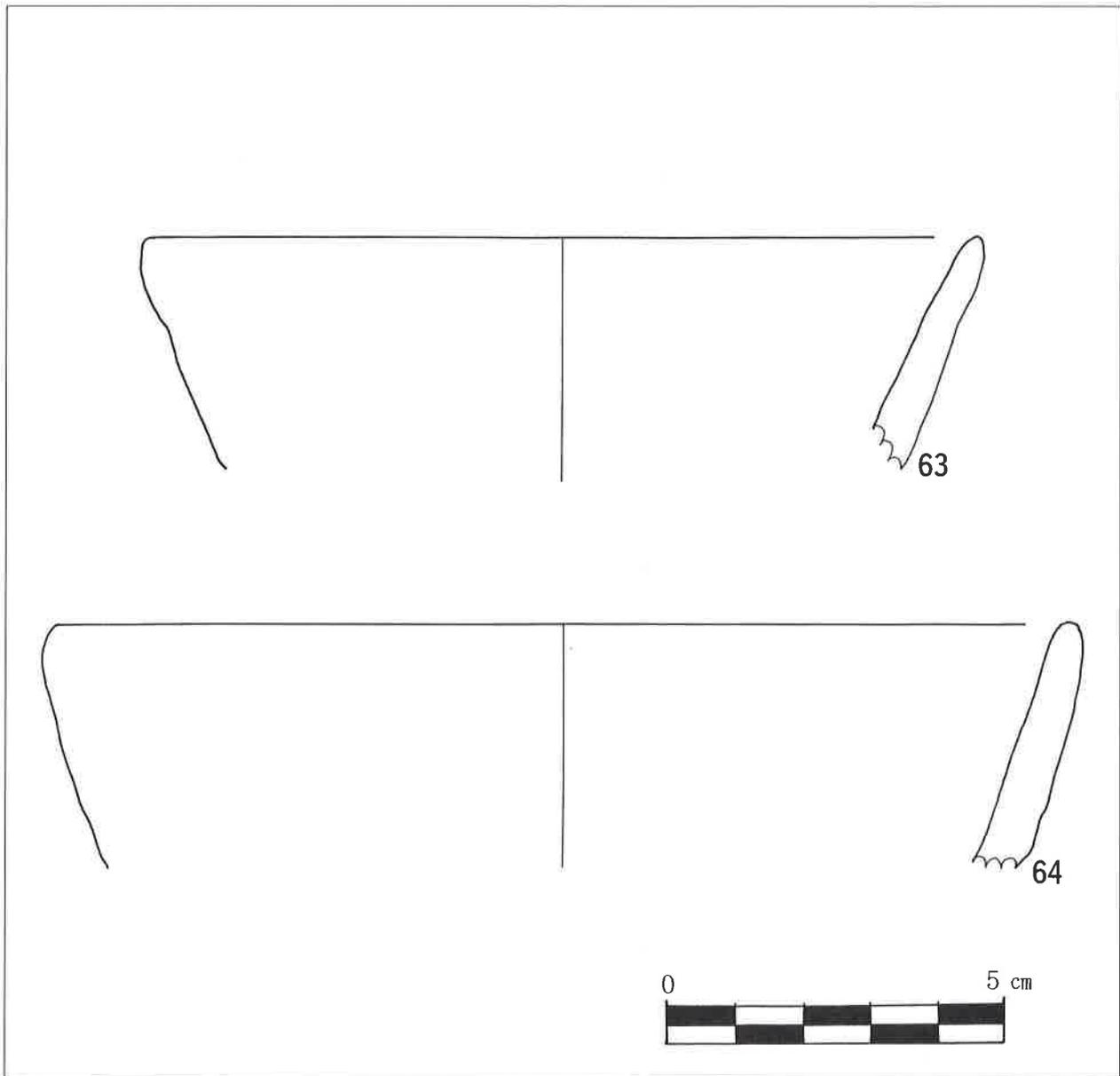


第29図 中世の遺構（三）

置している。直径は22cmで深さ36cm，土師器の小片が出土しているが図化できなかった。P32はD-1区に位置している。直径は40cmで深さ43cm，玉縁口縁白磁碗（図35の87）の口縁部が出土している。P33はD-1区に位置している。直径は41cmで深さ58cm，土師器の坏の口縁部（図35の88）が出土した。88は，口縁部が内彎気味で胴部に一段の稜線が付く。SK-12やP1の遺物と酷似している。P34はD-1区に位置している。直径は26cmで深さ49cm，土師器の坏（図35の89）と小皿

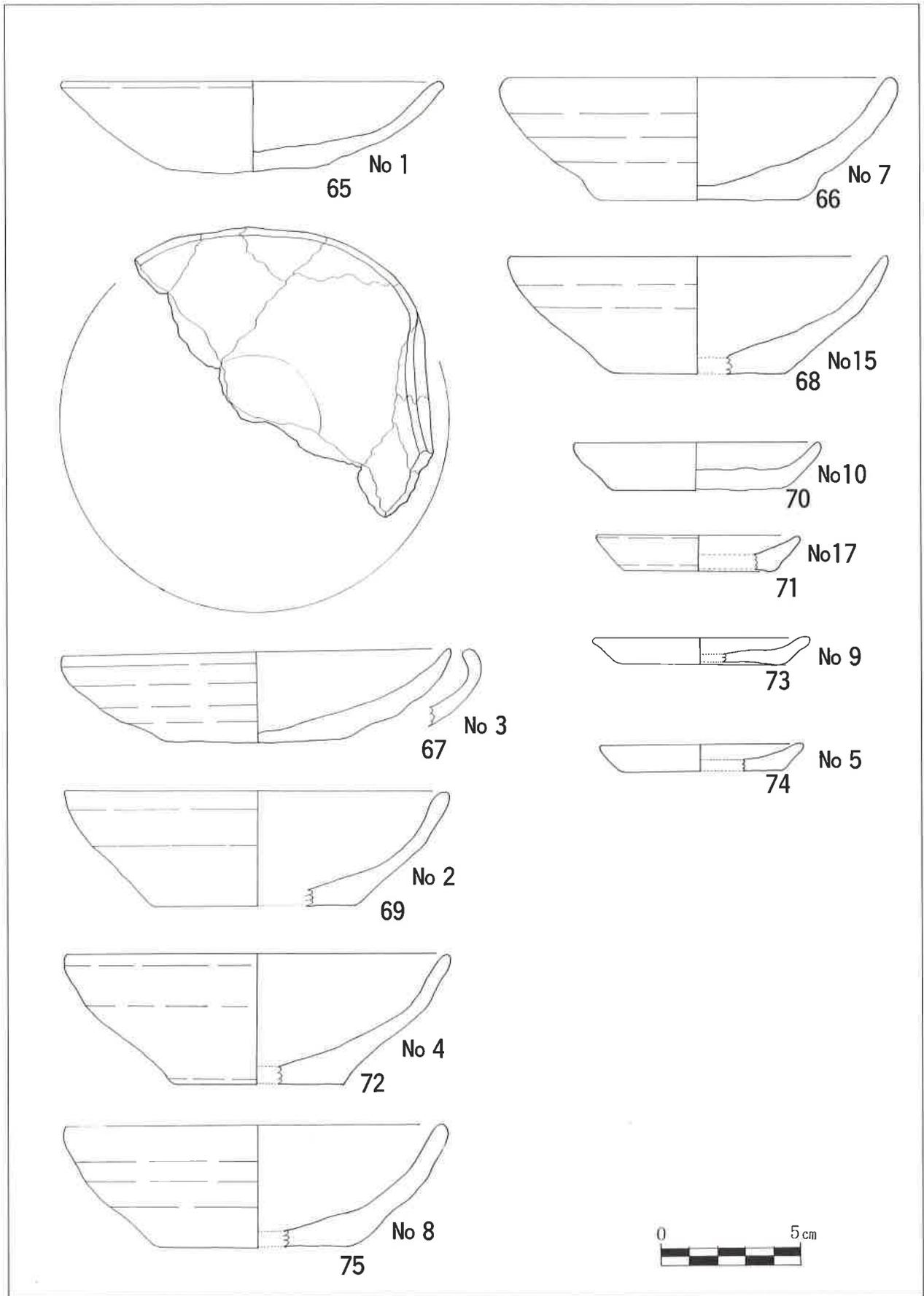


第30図 中世の遺構（四）

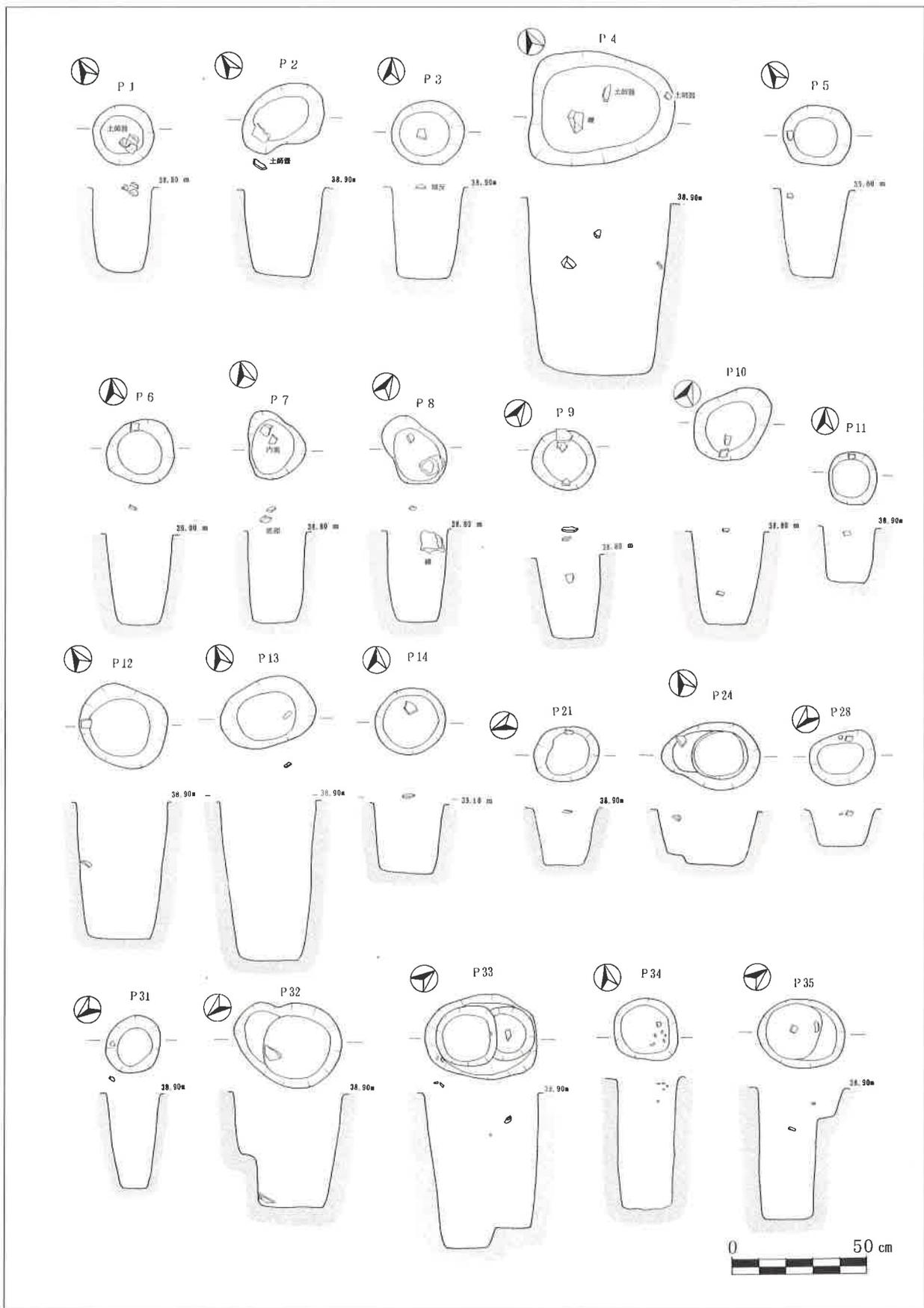


第31図 遺構内出土遺物

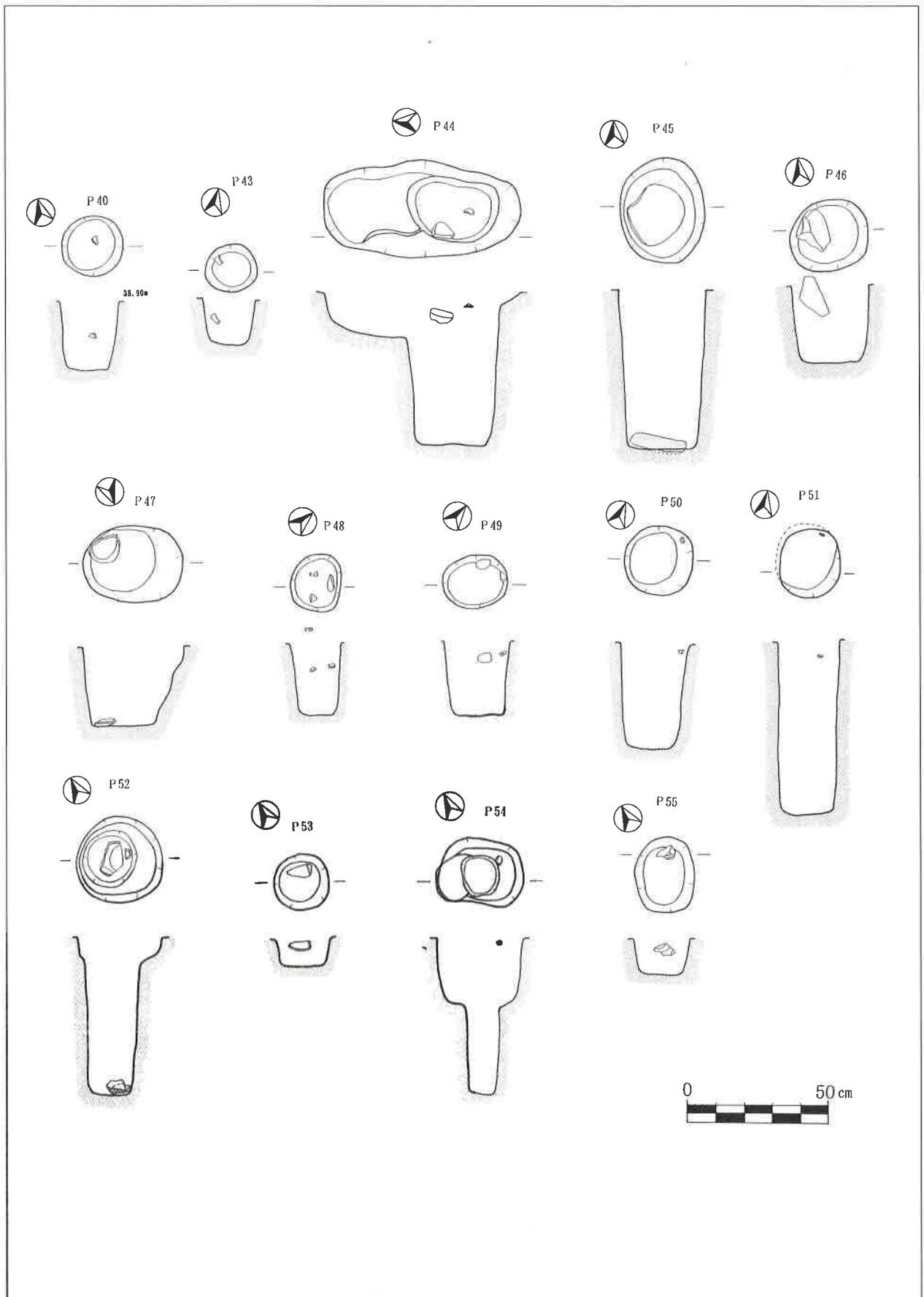
(図35の90)の口縁部破片が出土した。両遺物ともSK-12やP1の遺物と酷似している。P35はD-1区に位置している。直径は32cmで深さ49cm、土師器の小片が出土しているが図化出来なかった。P40はD-1区に位置している。直径は32cmで深さ49cm、台形石器(図25の61)が出土した。恐らく流れ込んだものだろう。P43はG-3区に位置している。直径は18cmで深さ17cm、土師器の小片が出土したが調査中に紛失した。P44はF-1区に位置している。直径は70cmで深さ55cm、土師器の小片が出土しているが図化出来なかった。P45はG-1区に位置している。直径は38cmで深さ58cm、Pit床面に礎石が確認された。P46はG-2区に位置している。直径は29cmで深さ28cm、礎石が確認された。P47はH-4区に位置している。直径は36cmで深さ29cm、Pit床面付近から土師器の小皿(図35の91)が出土した。底部は糸切りで、ナデ調整を行なっている。内面も磨いている。また底部角が突出している。P48はH-4区に位置している。直径は20cmで深さ26cm、土師器の坏が1片(図35の93)、土師器の小皿(図35の92)が2片出土した。92は糸切り後ナデ調整。口



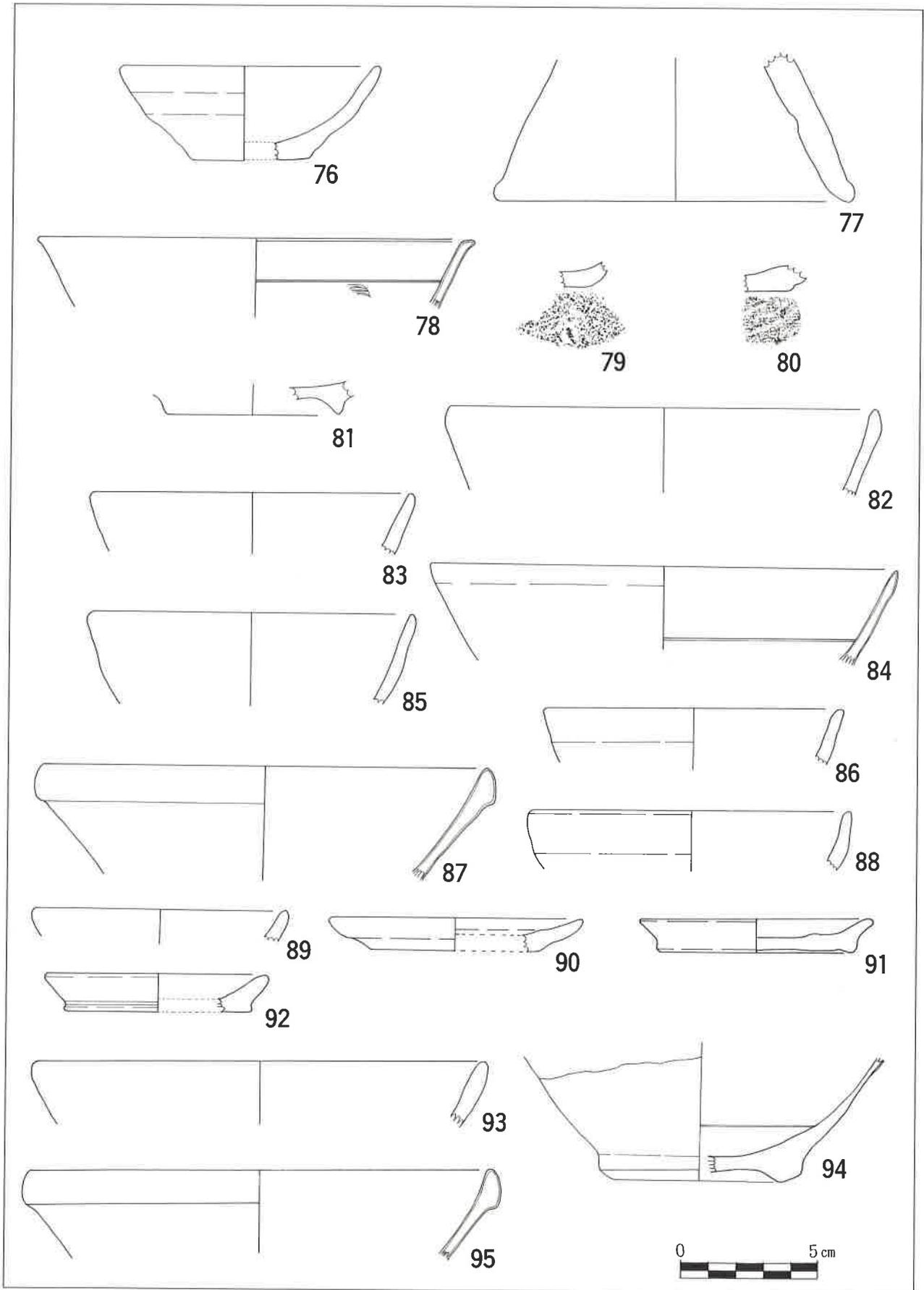
第32図 SK-12出土遺物



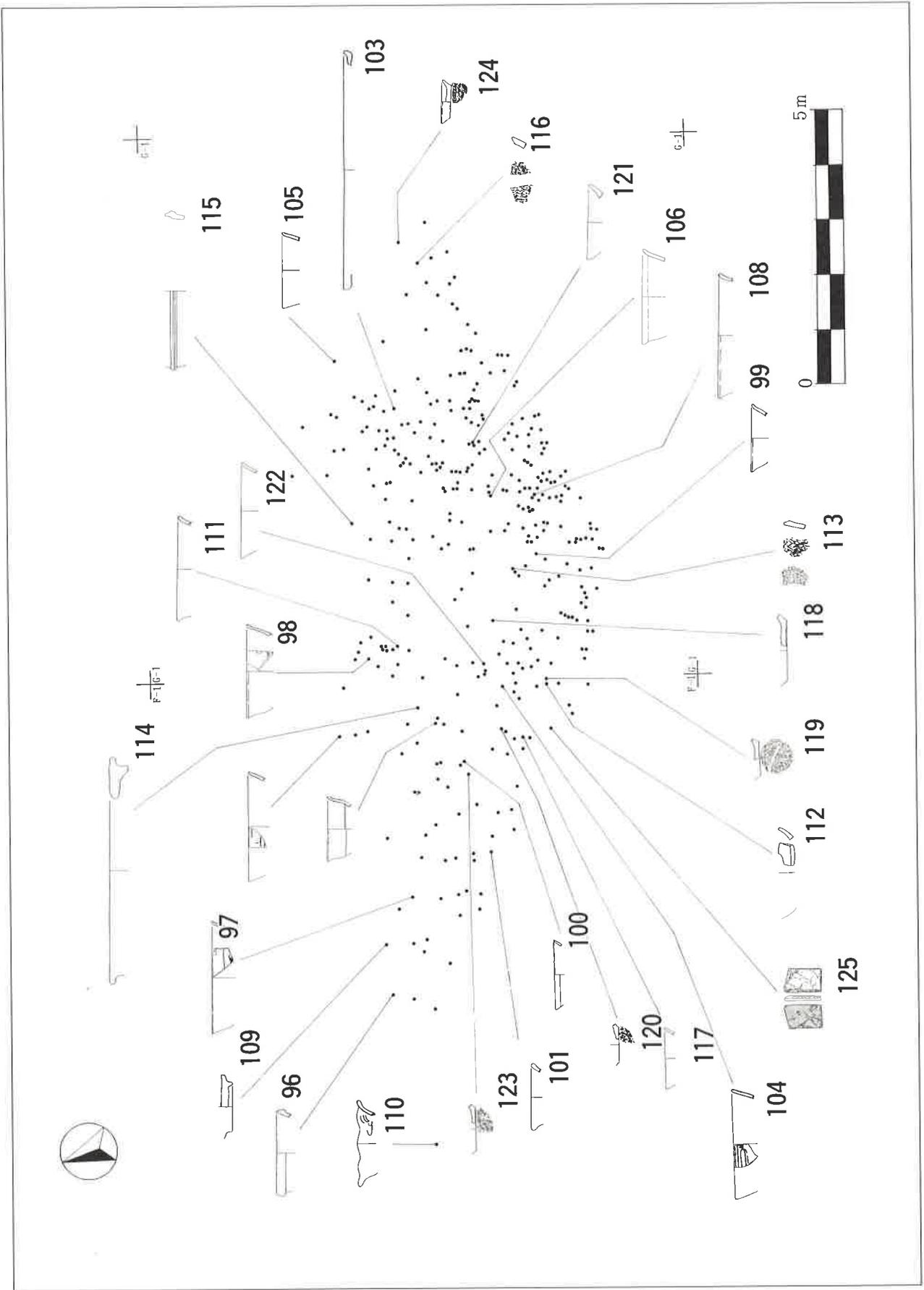
第33図 柱穴遺構 (一)



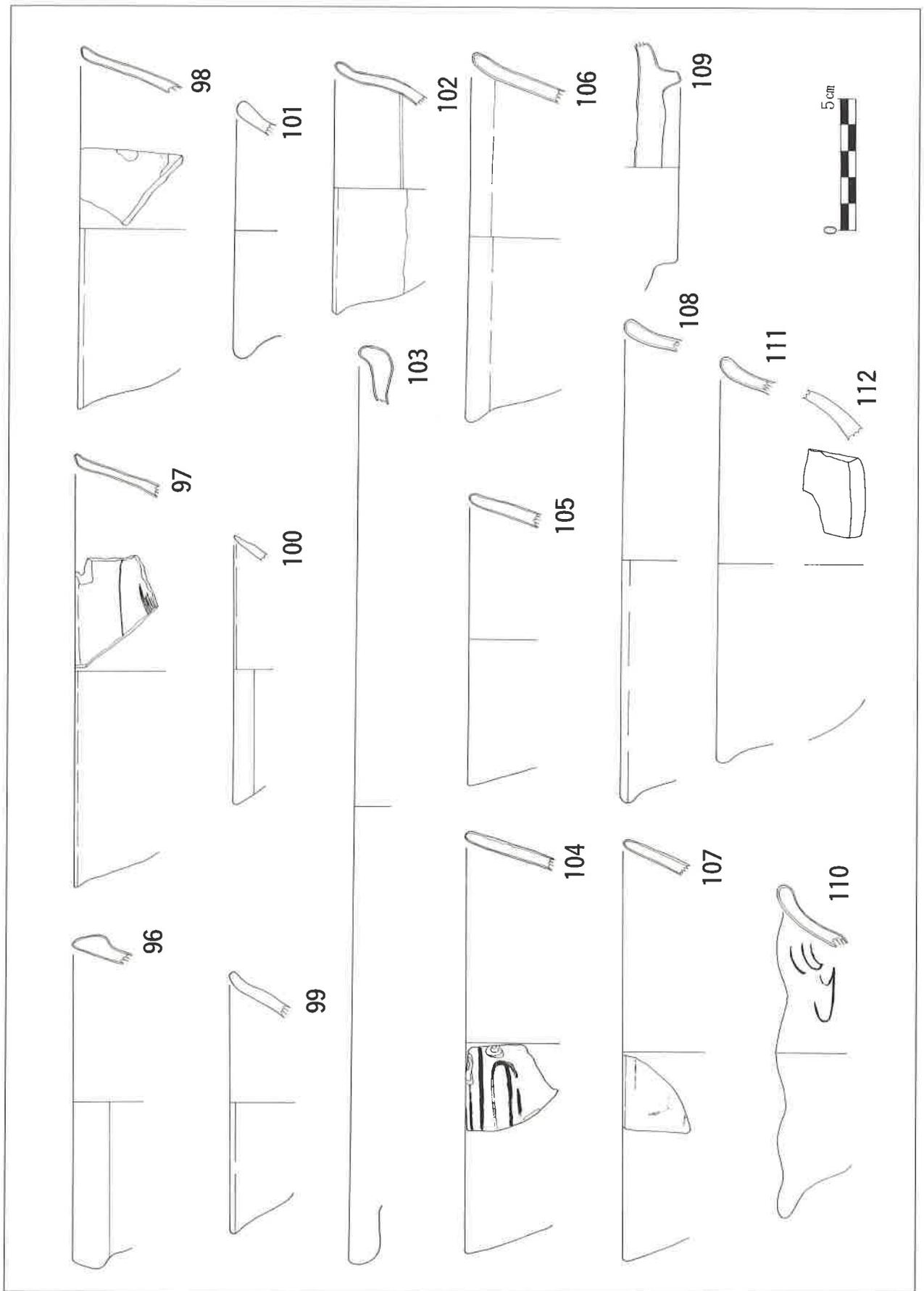
第34図 柱穴遺構 (二)



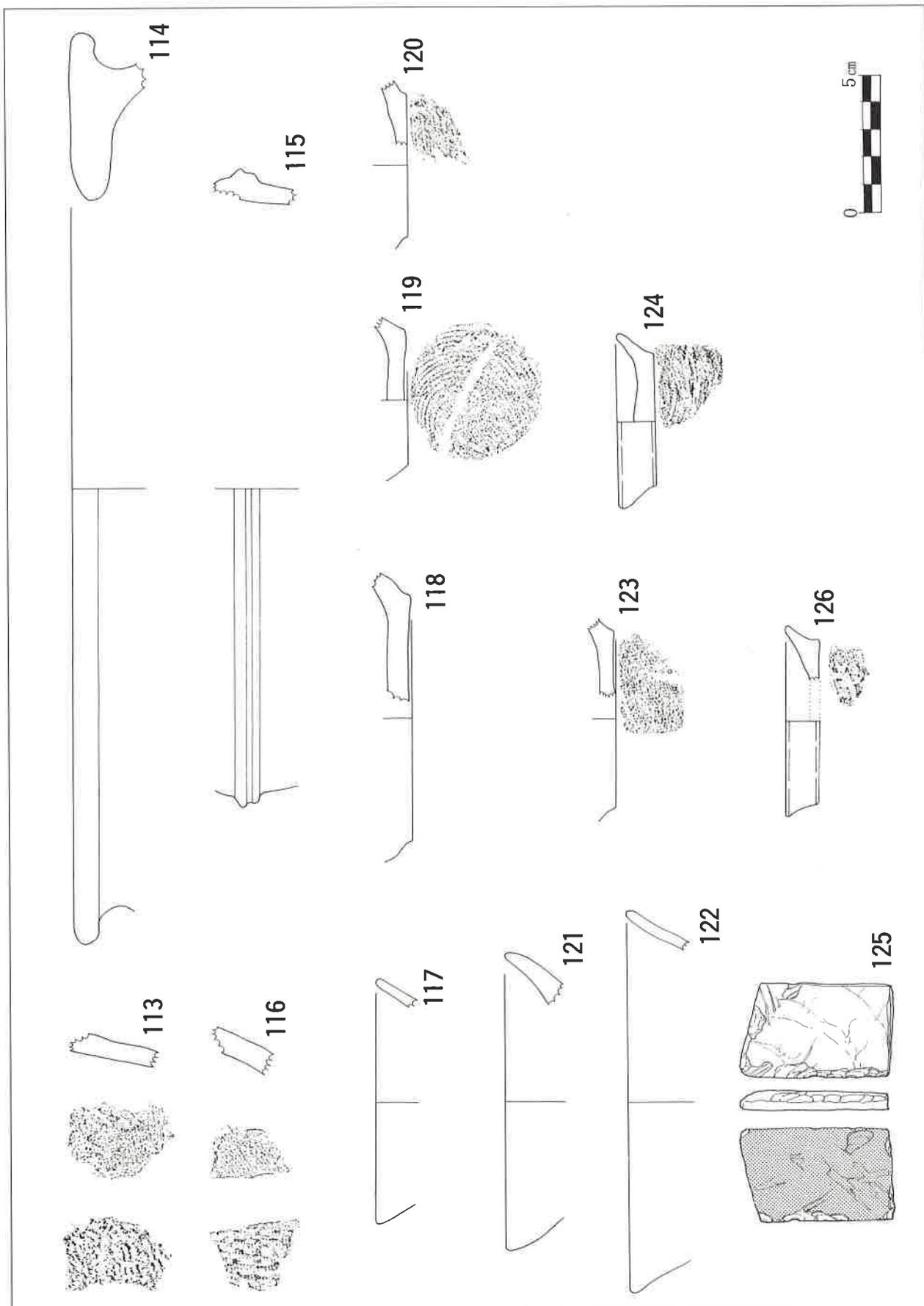
第35図 柱穴遺構内出土遺物



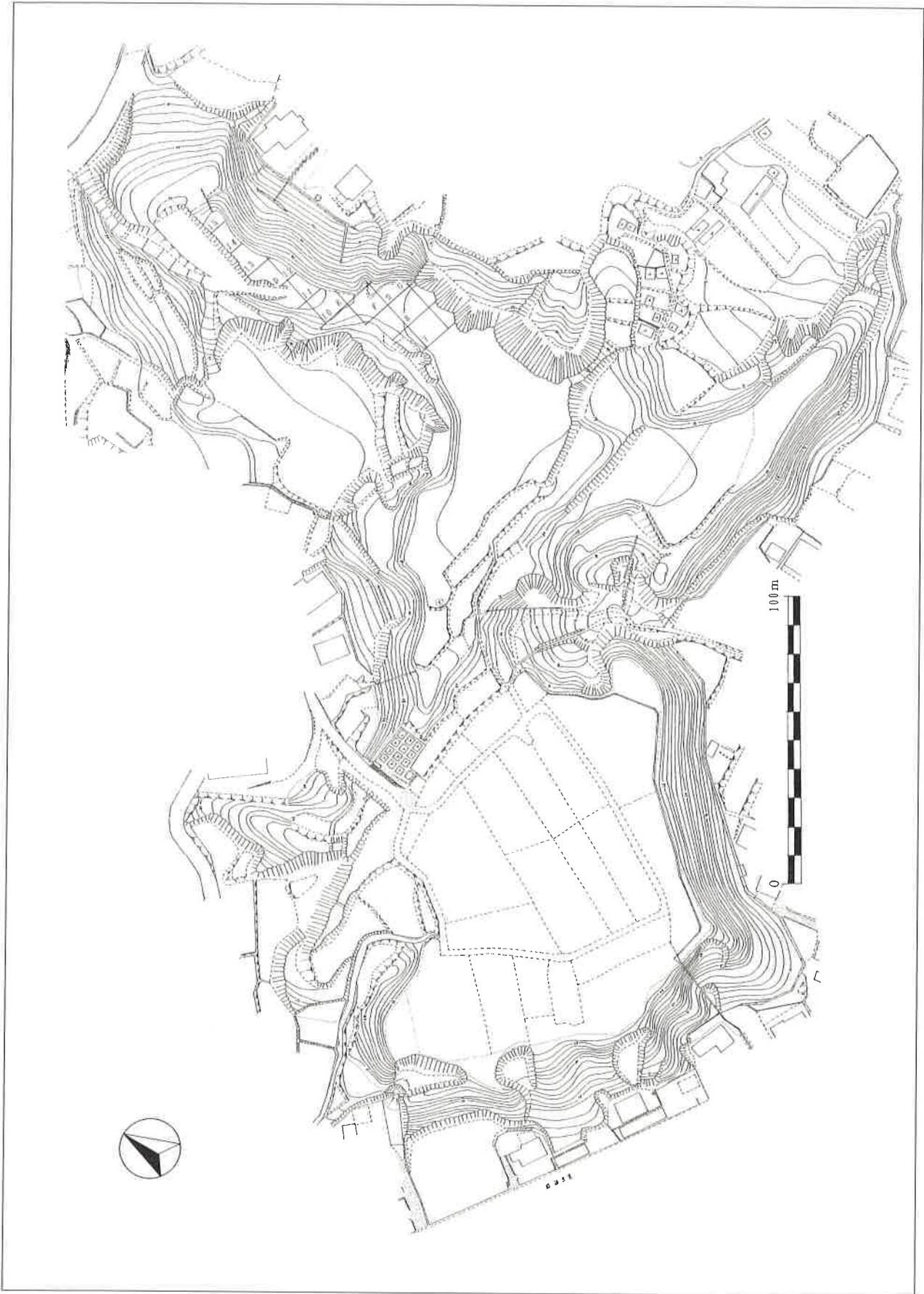
第36図 遺物集中グリット (FG-1区)



第37图 FG-1区出土遗物(一)



第38图 FG-1区出土遗物(二)



第39図 グリット図

縁部は外反しており、底部角は突出している。93は内彎気味で、焼成は不良である。P49はH-4区に位置している。直径は22cmで深さ22cm、土師器の小片と礫が出土しているが図化出来なかった。P50はH-5区に位置している。直径は24cmで深さ39cm、縄文時代早期土器の小片が出土しているが図化出来なかった。恐らく流れ込みであろう。P51はH-5区に位置している。直径は24cmで深さ63cm、土師器の小片が出土しているが図化出来なかった。P52はH-5区に位置している。直径は31cmで深さ56cm、玉縁口縁白磁碗の底部（図35の94）が出土した。P53はH-5区に位置している。直径は20cmで深さ11cm、玉縁口縁白磁碗の口縁部破片（図35の95）が出土した。P52の玉縁口縁白磁碗の底部とP53の玉縁口縁白磁碗の口縁部破片は同一固体の可能性が考えられる。P54はH-5区に位置している。直径は31cmで深さ56cm、土師器の小片が出土しているが図化出来なかった。P55はH-5区に位置している。直径は27cmで深さ14cm、蛋白石の原石が出土しているが図化出来なかった。

4. FG-1区（図36～38）

FG-1区は平成7年度調査区の南側に位置し、一段低い廓（平成7年度の第1トレンチ）との連絡道があったことが壁面の観察でわかった。FG-1区は他の区に比べて一段低くなっており、遺物は黒色土層の埋土から検出された。

〈白磁・青磁〉

96～102までが白磁で、103～112が青磁である。96は玉縁口縁白磁碗の口縁部で、口径は12cmである。玉縁の幅は1.4cmである。少し緑色を呈す。97は端反白磁碗で、内面には櫛搔文を施す。口径は16.4cmである。緑色が少々入っている。98は端反白磁碗で、内面には櫛搔文を施す。口径は13.6cmである。同じ端反白磁碗でも98は97よりも器壁が厚い。99も端反白磁碗である。他の端反碗と比べて小型である。100は端反白磁碗である。色調は黄色味を帯び、口径は10.1cmと小型である。101は白磁の皿と思われる。口径は9.4cmである。102は端反白磁碗である。体部は露胎している。口径は9.3cmである。103は青磁の盤である。口径34.3cmである。104は青磁碗で、口縁部に雷文を施す。105は青磁碗で、口縁部に文様を施しているようではっきりとしない。106は青磁碗で、口径は13.8cmである。口縁部上部が外反している。107は青磁碗で、外面に雷文を施す。口径は15.8cmである。108も青磁碗である。口唇部が膨らみ、口径は17.9cmである。109は青磁皿で、見込みに釉剥が見受けられる。釉薬は高台部分まで施釉されている。110は青磁輪花皿で、口径は12.5cmである。やはり口唇部部分は膨らむ。111は青磁碗で、口径は15.1cmである。これもやはり口唇部部分は膨らむ。112は青磁碗の胴部である。やや透明感のある水色がかかった釉薬を施釉する。釉薬には貫入が見受けられ内面には一条の圏線文を施す。

〈土師器その他の遺物〉

113は縄文時代早期の土器である。円筒形を呈し、外面に貝殻条の施文具による条痕文を施す。114は弥生時代の大甕の口唇部破片である。口唇部平坦面は幅約6cmを計り、口径は32.9cmである。胎土に石英や小礫、長石などを多く含む。115は弥生時代の甕であろう。胴部に唇状突帯文を一条巡らす。胎土に石英や小礫、長石などを多く含む。114と同時期の所産であろう。116は須恵器の胴部破片で器形ははっきりしない。外面に格子状の敲きを有する。117は土師器の坏である。口径は8.7cmである。焼成は良好で、器壁は薄い。118は土師器坏の底部片である。底部角は突出し、立上りに一段の稜線が認められる。119は土師器の小皿である。底部は糸切りで、器壁は薄い。120は土

師器の小皿で、底部切離しは糸切りである。焼成は良好で、底部角は突出している。内面はなでみがきである。121は土師器坏の口縁部破片である。口縁部は内彎気味で、P 1の遺物と酷似している。122は土師器坏の口縁部破片である。薄く丁寧に撫でられ焼成も良好である。口径は13.8cmである。123は土師器の小皿で、底部切離しは糸切りである。器壁は薄い。124は土師器の小皿で、底部切離しは糸切りである。口縁部は内彎気味で器壁は薄い。125は粘板岩製の石器で、用途は不明。割れた一側面以外は奇麗に研磨され整形されている。表面も側面と同様に研磨されているが、裏面は母岩からの切離した状態のまま残っている。126は土師器の小皿で、底部切離しは糸切りである。

第6節 小 結

平成7年度の調査では、古くは旧石器時代の遺物から縄文時代、弥生時代、鎌倉室町時代までの人々の痕跡が確認された。以下各時代ごとにまとめてみることにする。

〈旧石器時代〉

平成7年度の調査区では包含層が確認できなかったが、D-1区のP40から台形石器が検出されている。恐らく、今後調査を広げれば確認できると思われる。

〈縄文時代〉

平成7年度の調査区にまばらに遺構等が確認できた。その中には住居趾状の遺構（SC-1）もある。当該期は縄文時代早期で、新東晃一氏の提唱する柵ノ原式土器、河口貞徳氏のいう前平式土器が出土した。

〈弥生時代〉

町内では、山城等の丘陵地帯で弥生時代の遺物が今までに出土若しくは表面採集されていたが、ここ上城詰城跡で初めて弥生時代の遺構が検出された。Pit状の遺構の中に炭化物と共に弥生時代中期の土器が検出された。

〈上城詰城跡時代〉

調査区全域に渡り、土坑、Pit等の遺構が検出された。特にSK-12は、土師器の皿や坏が一括で出土し、その出土状態からして祭祀的な意味合いを持つ遺構であると思われる。このような祭祀的な意味合いを持つ遺構は、県内では金峰町の山野原遺跡で2基検出されている。両遺構とも古代の遺構であり中世ではない。特徴として浅い掘り込みの土坑に坏や須恵器甕などが伏せてもしくはきちんと据えてあるのが特徴である。金峰町の例では1基の土坑には上屋構造が有ったらしく、Pitが確認されている。また、鹿屋の中ノ原遺跡でもPitの中より完形の土師器が2点出土し、報告書によると地鎮祭に関わるものではないかと考察している。土師器はヘラ切りで、古代の祭祀遺構である。県外では福岡市で祭祀的な意味合いを持つ遺構が多数検出されている。1988年に刊行された『福岡市埋蔵文化財調査報告書第184集』「都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告(Ⅱ)博多」の701号Pit(小土坑)とされているものも祭祀遺構(地鎮祭等)として報告されている。浅い土坑中より折り重なるように土師器皿が11枚出土している。更に岩手県平泉町の柳の御所遺跡でも地鎮具埋納跡としての遺構が検出されている。長辺95cm、深さ30cmの長方形の土坑中より小型のかわらけ八枚と、密教法具が納められていた。ここで改めて上城詰城跡のSK-12をみてみると、浅い掘り込みの土坑中に坏や皿などが11点出土しており、他の例から考えると地鎮祭としての意味合いが強いと考えられる。今後の資料の増加を待ちたい。遺物に関して言えば、内黒土師器、玉縁

口縁白磁碗，端反白磁碗，口禿白磁碗，鎬連弁文青磁碗など十二世紀から十三世紀の遺物が数多く遺構に伴って出土している。次にFG-1区を中心に十四世紀から十五世紀の遺物が出土している。遺物には青磁が多い。その他少量ではあるが，十六世紀の遺物も出土している。

(参考引用文献)

- 1996 三浦謙一『別冊歴史読本 城郭研究最前線』「柳之御所遺跡」
- 1988 力武卓治・大庭康時『福岡市埋蔵文化財調査報告書第184集』「都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告(Ⅱ)博多」
- 1988 荒牧宏行・田中壽夫『福岡市埋蔵文化財調査報告書第181集』「南八幡遺跡」
- 1990 新東晃一他『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(52)』「中ノ原遺跡(Ⅱ)・中原山野遺跡・西原掩体遺跡」
- 1985 山崎純男『福岡市埋蔵文化財調査報告書第121集』「多々良込田遺跡Ⅲ」
- 1995 宮下貴浩『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(7)』「山野原遺跡」

第6章 平成8年度発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

平成5年度に県営農村活性化住環境整備事業大里地区に伴い確認調査がなされた結果、計画区域全域に中世の山城の遺構や、縄文時代の遺物等が確認された。再三の協議がなされたが、計画の変更は町民の要望も強く出来ないため、市来町は市来町教育委員会に緊急発掘調査を依頼し、記録保存の道を選んだ。平成7年度を初年度として5ケ年の計画により発掘調査を実施することとなり、平成8年度も下記の期間で調査を実施することになった。

第2節 調査の組織 〈平成8年6月7日～平成8年12月20日〉

1. 所在地 鹿兒島県日置郡市来町大里
2. 調査の目的 県営農村活性化住環境整備事業大里地区
3. 調査の組織

調査主体者	市来町教育委員会		
調査責任者	〃	教 育 長	松 崎 孝
調査庶務	〃	社 会 教 育 課 長	宇 都 隆 雄
〃	〃	派遣社会教育主事兼社会教育係長	木 原 健一郎
〃	〃	主 事	奥之園 勝
調査担当者	〃	主 任	新 町 正
〃	〃	主 事 補	西久保 敏彦
現場指導者	鹿兒島短期大学	学 長	三 木 靖

調査対象面積……13000㎡

第3節 調査の経過

発掘調査は平成8年6月7日～平成8年12月20日の間に実施され、調査の経過については毎日の日誌抄をもってかえる。

【日誌抄】

○6月7日(金)～6月14日(金)

草刈り。堀切精査。平成7年度調査遺構の清掃。

○6月17日(月)～6月21日(金)

第一の堀切にミニトレンチ設定、掘り下げ。写真撮影。遺構の掘り下げ。GH-7・8区掘り下げ。

○6月25日(月)～6月28日(木)

- GH-7・8区掘り下げ。旧石器時代の遺物出土。
- 7月1日(月)～7月5日(金)
雨が激しく、土砂が流失。対策のため土嚢積み。GH-7・8区掘り下げ。
- 7月8日(月)～7月12日(金)
DE-12～14区掘り下げ。旧石器時代遺物出土。
- 7月15日(月)～7月19日(金)
DE-12～14区掘り下げ。黒耀石破片検出。
- 7月22日(月)～7月26日(金)
DE-12～14区掘り下げ。
- 7月29日(月)～8月2日(金)
DE-12～14区掘り下げ。火縄銃の玉検出。
- 8月5日(月)～8月9日(金)
DE-12～14区掘り下げ。
- 8月12日(月)～8月16日(金)
DE-12～14区掘り下げ。
- 8月19日(月)～8月23日(金)
GH-7・8区掘り下げ。旧石器時代の遺構検出。
- 8月26日(月)～8月30日(金)
GH-7～10区掘り下げ。GH-7・8区遺物取り上げ。火縄銃の玉の取材。
- 9月2日(月)～9月6日(金)
GH-9・10区 Pit 掘り下げ。マスコミ取材。
- 9月9日(月)～9月13日(金)
FH-7～10区掘り下げ。堀切精査。
- 9月17日(月)～9月20日(金)
FH-7～10区掘り下げ。遺構検出。
- 9月23日(月)～9月27日(金)
堀切の土層断面精査。FH-7～10区までの遺構清掃。
- 9月30日(月)～10月4日(金)
FH-7～10区掘り下げ。写真撮影。
- 10月7日(月)～10月11日(金)
FH-7～10区掘り下げ。Pit 掘り下げ。
- 10月14日(月)～10月18日(金)
FH-7～10区精査。旧石器時代遺物出土。
- 10月21日(月)～10月25日(金)
FG-7～10区精査。西側に縄文時代の遺物が確認される。
- 10月28日(月)～11月1日(金)
現場休み。
- 11月4日(月)～11月8日(金)
FG-7～10区精査。旧石器時代の遺構検出。

- 11月11日(月)～11月15日(金)
FG-7～10区精査。旧石器時代の遺構掘り下げ。
- 11月18日(月)～11月22日(金)
旧石器時代の遺構を2基確認，精査。
- 11月25日(月)～11月29日(金)
遺構実測図作成。
- 11月31日(月)～12月4日(金)
写真撮影。FG-7～10区精査。
- 12月7日(月)～12月11日(金)
FG-11区掘り下げ。縄文時代遺物出土。
- 12月14日(月)～12月20日(金)
FG-11区掘り下げ。現場指導を受ける。

第4節 DE-12～15区およびG-7～10区の土層

これらの区は腐食土の発達が少ない、厚さ約10cm程度であった。表土下は、部分的に黒褐色粘質土層が堆積し、これには中世の遺物が含まれる。F-8区とE-13～15区にみられる。その下層には茶褐色粘質土層がみられ、縄文時代早期の遺物を包含する。この土層はF-8区にみられる。その下層にはシラスの二次堆積の腐食土が発達した層（礫混じりの黄褐色砂質土層）があり、旧石器時代の台形石器・ナイフ等が確認できた。

土 層 図

腐 食 土	
黒褐色粘質土層	中世……………土師器・玉縁口縁白磁等
茶褐色粘質土層	縄文時代……………前平式土器
黄褐色砂質土層	旧石器時代……………台形石器・ナイフ
シラス該当	

第7章 平成8年度全面発掘調査

第1節 調査の概要（第39図）

平成7年度に調査を実施した区より北側を今年度は中心に実施することにした。グリットは7年度に引き続き使用することにした。今年度の調査区には地下レーダー探査により、堀切があることが確認されている。地上でもその痕跡が見受けられた。また、その他の時代の遺物も多数検出され、以下、時代ごとに説明することにする。

第2節 旧石器時代

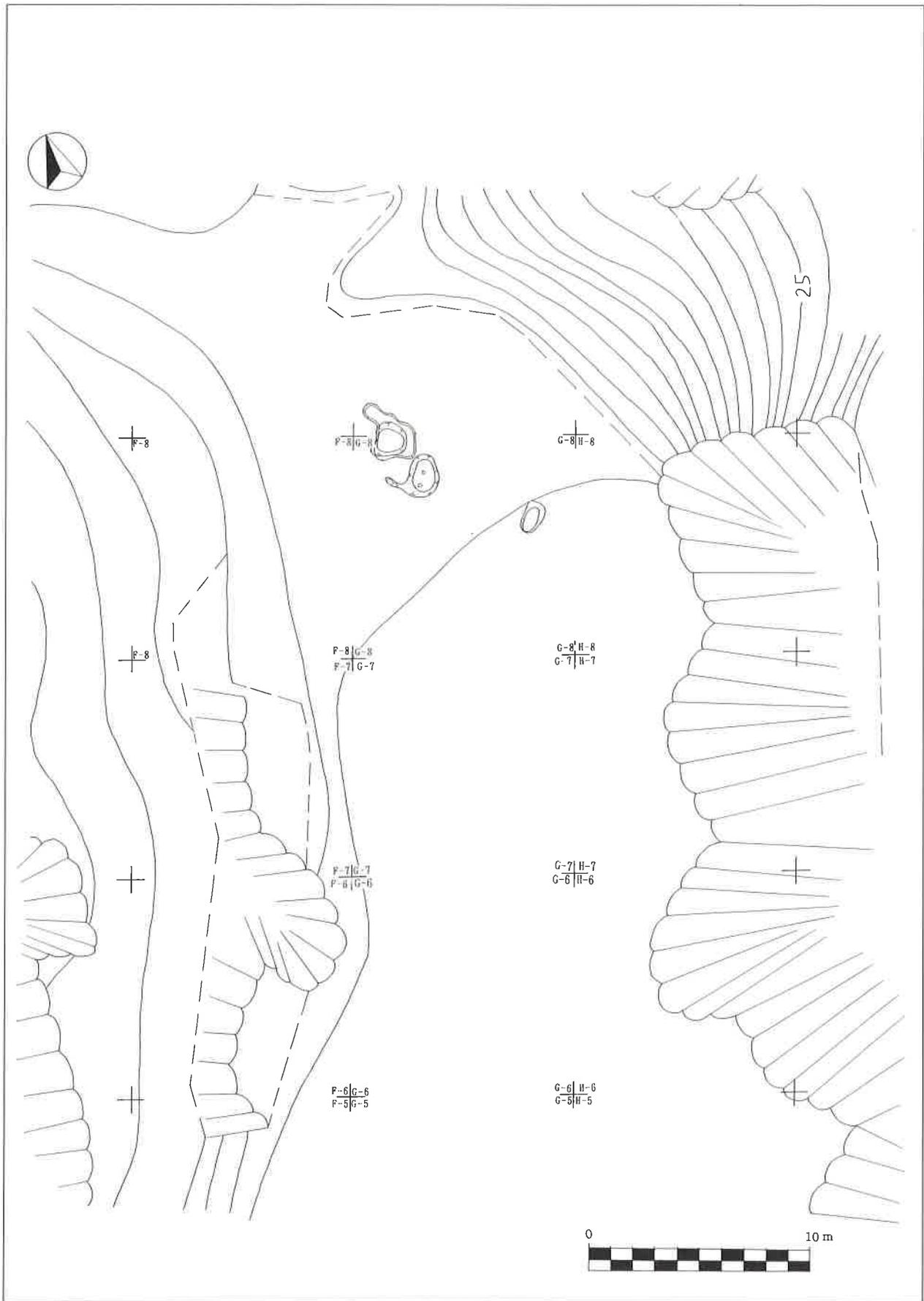
旧石器時代の遺物・遺構は、G-7区～D-13区に集中して確認できた。包含層は暗茶褐色土層下のシラスの腐食土である。遺構はシラスの上部付近まで掘り下げて確認した。以下、遺物・遺構について述べることにする。出土遺物の中で、黒耀石は種類が複数あり、ここで便宜的に以下の5つに分類したいと思う。

〈黒耀石の種類〉

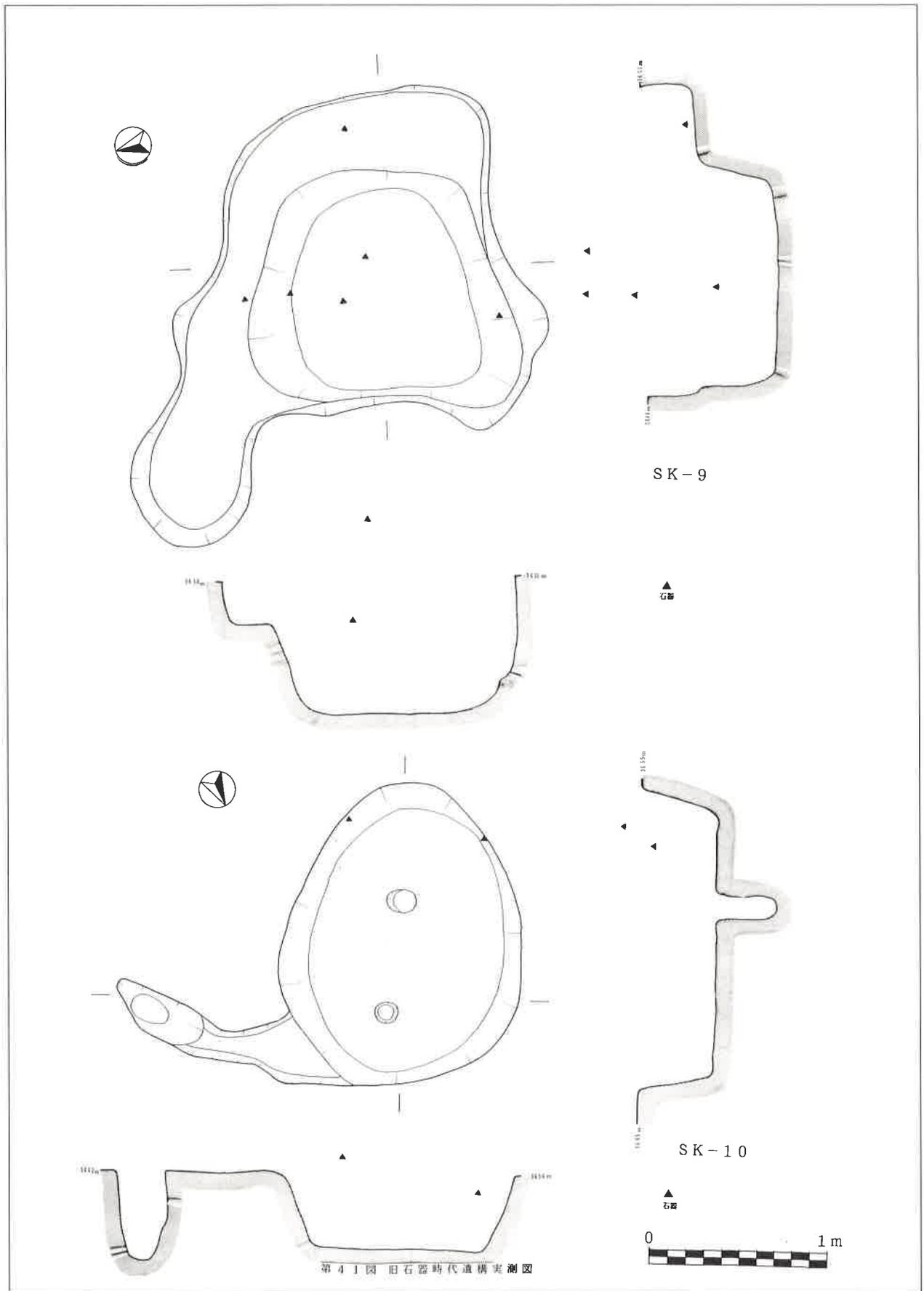
- ① 黒耀石A……黒色が強く良質の黒耀石
- ② 黒耀石B……灰色をしたガラス質流紋岩
- ③ 黒耀石C……黒みが強い灰色
- ④ 黒耀石D……透明で気泡の入った良質の黒耀石
- ⑤ 黒耀石E……透明で黒い筋の入った良質の黒耀石
- ⑥ 黒耀石F……鉛色をした半透明の良質の黒耀石

1. 旧石器時代の遺物（第44・45図）

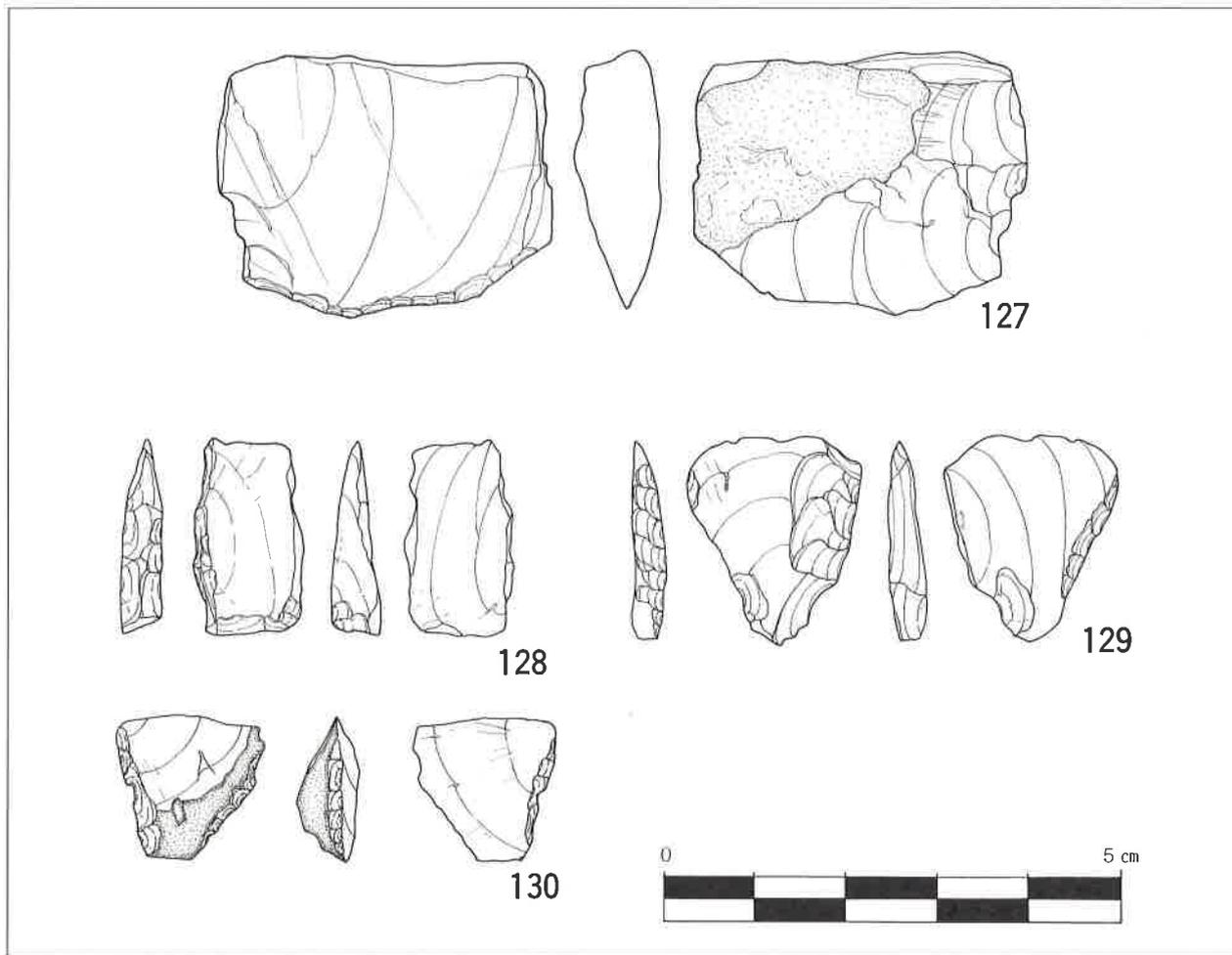
旧石器時代の遺物は、シラスの二次堆積層の上部腐食土から出土している。131～134は大型のナイフである。131～133はすべてDE-12・13区より出土した。134はD-11区からの出土である。大きさは131が3cmで、132は4.5cmで133は3.5cmである。石材は131・132が黒耀石Aで、133がガラス質流紋岩（黒耀石B）、134は透明で気泡があり良質の黒耀石Dである。131は基部及び左側縁部に調整が施され、右側縁部を刃部になっている。132は左側縁部は自然面を残し、基部及び先端部の一部を調整している。133は、左側縁部の調整で終わっている。134は、基部を残すだけで、その外は欠損しているため確認できないが基部について言えば細かく調整がなされている。135～141はすべて台形石器である。長さが一番長いのが2cmで138で、一番短いのが1.4cmで141である。石材は135～136が頁岩で、137は蛋白石、138～139・141はすべて黒耀石である。また140はチャート製である。138は黒色の良質の黒耀石Aで、139・140は透明で気泡がある良質の黒耀石Dである。135は左側縁部だけの調整に留めている。136は素材剥片の打点部分を左側縁に用い、調整は左右とも行なわれ、刃潰しを行なっている。137も左右側縁部に調整がなされ、刃部の一部は欠損している。138は細長い形をした台形石器で、左右とも調整がなされている。139は素材剥片の打点部分を利用



第40図 旧石器時代遺構



第41图 旧石器时代遺構実測図



第42図 SK-9 出土遺物

した石器で、ここでは台形石器に入れたがナイフの可能性もある石器である。左右の側縁部は調整がなされている。140も左右側縁部に調整がなされている。刃部が欠損している。141は撥形をした台形石器である。左右側縁部に調整がなされている。142・144・145はスクレイパーである。石材は142がガラス質流紋岩で黒耀石B，144・145がチャートである。142は左側縁部に調整がなされ、右側は自然面を残す。144は自然面に一部調整がなされている。145は自然面を残す剥片の右側縁部に調整がなされている。143は楔形石器で、石材は黒耀石Bである。146は剥片で、石材は薄くすじの入った半透明の黒耀石Eである。147は石核で、石材は黒耀石Bである。長辺の一端から細い剥片を剥いている。細石刃核の可能性もある。また、148・149の様に細石刃ともとれる剥片が出土している。両破片とも黒耀石Bである。

平成8年度 旧石器時代出土遺物一覧表

図	番号	遺物番号	出土区	層	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)	年代	備考
44	131	617	DE-12・13	II	ナイフ	黒耀石	3.0	1.6	0.7	3	旧石器時代後期	完形品
	132	636	DE-12・13	II	ナイフ	黒耀石	4.5	1.8	1.1	8	旧石器時代後期	完形品
	133	649	DE-12・13	II	ナイフ	ガラス質流紋岩	3.5	2.0	0.7	4.8	旧石器時代後期	完形品

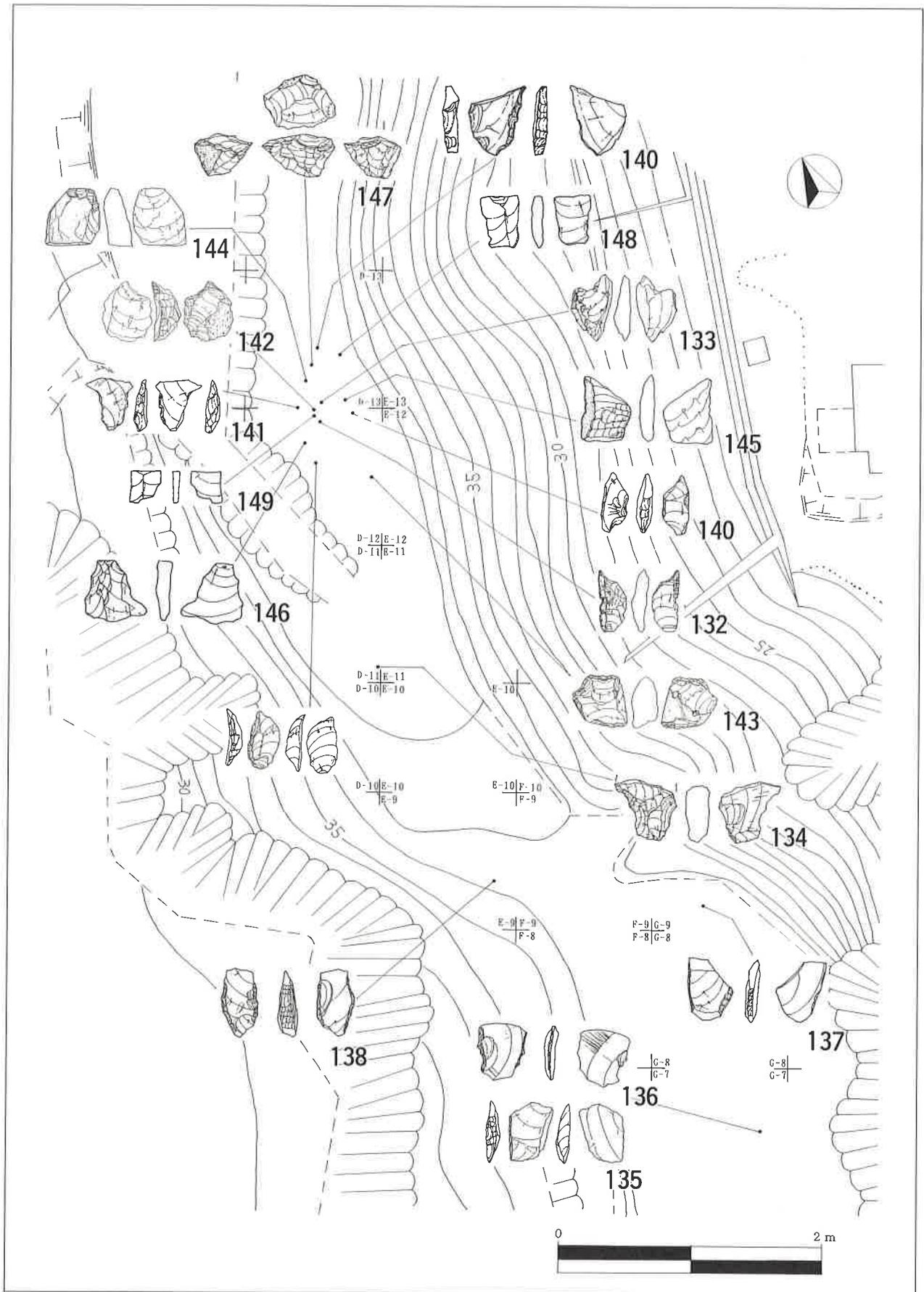
44	134	906	D-11	Ⅱ	ナイフ	黒耀石	2.2	2.2	0.8	4	旧石器時代後期	欠損
	135	878	G-8	Ⅲ	台形石器	頁岩	2.2	1.4	0.5	2	旧石器時代後期	刃部一部欠損
	136	一括	G-8	Ⅲ	台形石器	頁岩	1.7	1.4	0.2	0.8	旧石器時代後期	
	137	869	G-9	Ⅲ	台形石器	蛋白石	1.9	1.2	0.3	1	旧石器時代後期	刃部欠
	138	947	E-9	Ⅱ	台形石器	黒耀石	2.0	1.0	0.5	1	旧石器時代後期	完形品
	139	717	DE-12・13	Ⅱ	台形石器	黒耀石	1.6	0.6	0.4	0.2	旧石器時代後期	
	140	796	DE-12・13	Ⅱ	台形石器	チャート	1.2	0.9	0.2	0.1	旧石器時代後期	刃部欠
	141	747	DE-12・13	Ⅱ	台形石器	黒耀石	1.4	1.1	0.3	0.3	旧石器時代後期	
45	142	652	DE-12・13	Ⅱ	スクレイパー	ガラス質流紋岩	5.2	4.5	2.1	53	旧石器時代後期	
	143	602	DE-12・13	Ⅱ	楔形石器	黒耀石	3.8	3.8	1.9	30	旧石器時代後期	
	144	788	DE-12・13	Ⅱ	スクレイパー	チャート	3.4	3.1	1.4	21	旧石器時代後期	
	145	712	DE-12・13	Ⅱ	スクレイパー	チャート	1.9	1.4	0.4	2	旧石器時代後期	
	146	627	DE-12・13	Ⅱ	剥片	黒耀石	1.1	1.1	0.2	0.2	旧石器時代後期	作業面調整剥片
	147	684	DE-12・13	Ⅱ	石核	黒耀石	1.6	2.0	2.7	6	旧石器時代終末期	
	148	797	DE-12・13	Ⅱ	細石刃	ガラス質流紋岩	0.9	0.7	0.2	0.1	旧石器時代終末期	
	149	645	DE-12・13	Ⅱ	細石刃	ガラス質流紋岩	0.6	0.6	0.1	0.1	旧石器時代終末期	

2. 旧石器時代の遺構 (第40～42図)

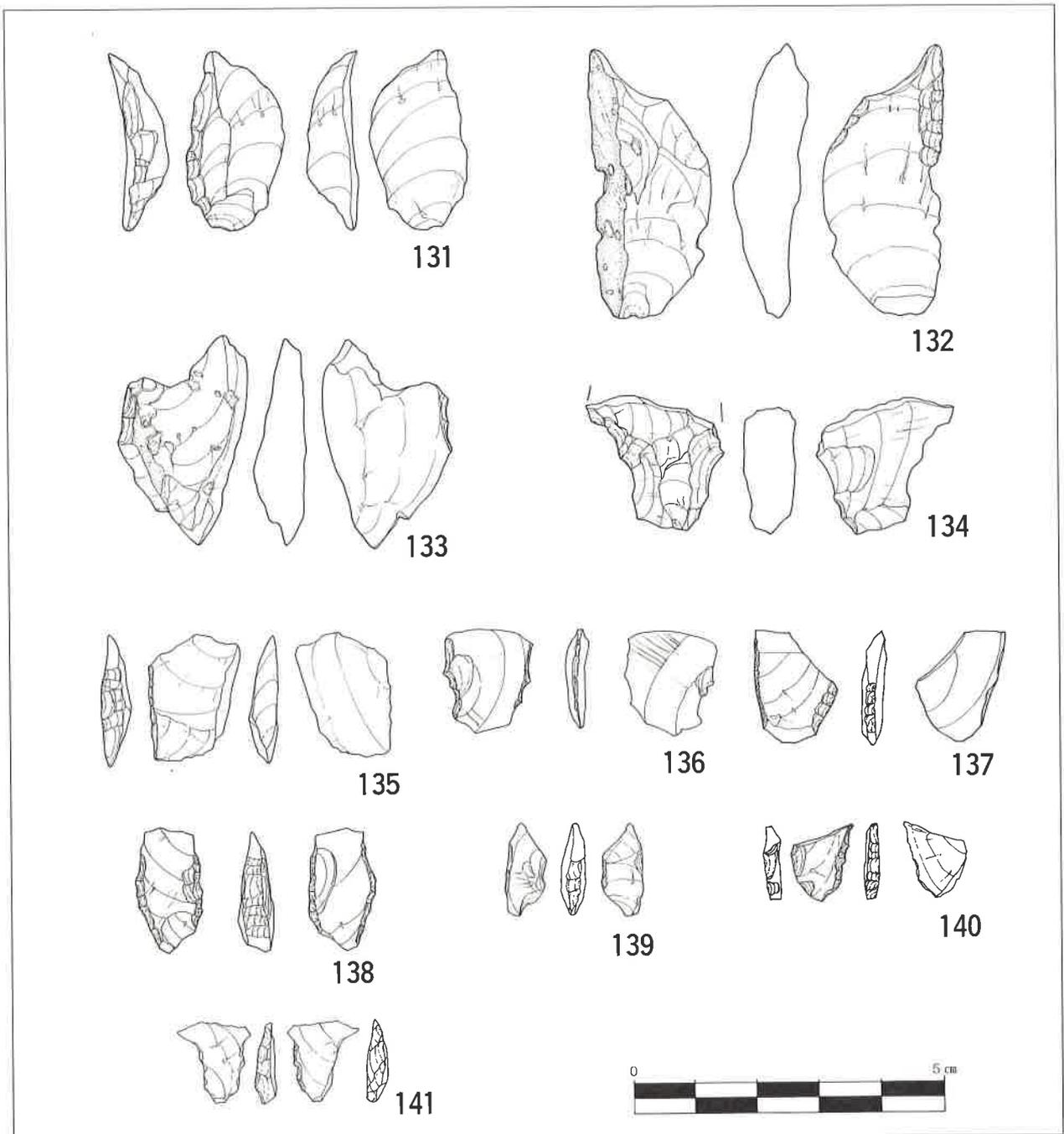
旧石器時代の遺構は、G-8区で竪穴状の土坑が2基検出された。第41図のSK-9, SK-10がそれぞれである。SK-9は長軸を東西方向に向け、大きさは長軸が1.8 m, 短軸が1.7 mありほぼ隅丸方形を呈す。遺物はスクレイパー, 台形石器3個出土した。図42の127はスクレイパーで一部自然面を残す。長辺の一端を細かく剥離している。石材は頁岩である。128～130は台形石器である。128は図44の138と同じく細長い形を呈する台形石器である。左側縁部と右側基部付近に調整がなされている。石材は頁岩である。129は素材剥片のバルブ裏側の面取り調整を行い、また素材剥片下端部を調整しそれらを台形石器の両側辺にしている。形はやや撥状を呈す。石材は頁岩である。130は小型の台形石器で、石材は黒色で良質の黒耀石Aである。素材となる剥片は自然面が残され、剥離された一端を刃部にし、両側辺を調整している。SK-10は、長軸を南北方向に向け、大きさは長軸が1.7 m, 短軸が1.4 mありほぼ楕円形を呈す。床面には2つの直径約13cmのPitが検出された。遺物は頁岩製の剥片が2片出土したが、図化できなかった。

平成8年度 遺構内出土遺物一覧表

図	番号	遺物番号	出土区	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	年代	備考
42	127	1	SK-9	スクレイパー	頁岩	2.9	3.5	0.9	12	旧石器時代後期	
	128	2	SK-9	台形石器	頁岩	2.2	1.1	0.5	2	旧石器時代後期	
	129	3	SK-9	台形石器	頁岩	2.3	1.9	0.4	2	旧石器時代後期	
	130	4	SK-9	台形石器	黒耀石	1.6	1.5	0.6	1.8	旧石器時代後期	



第43图 旧石器时代遺物分布图



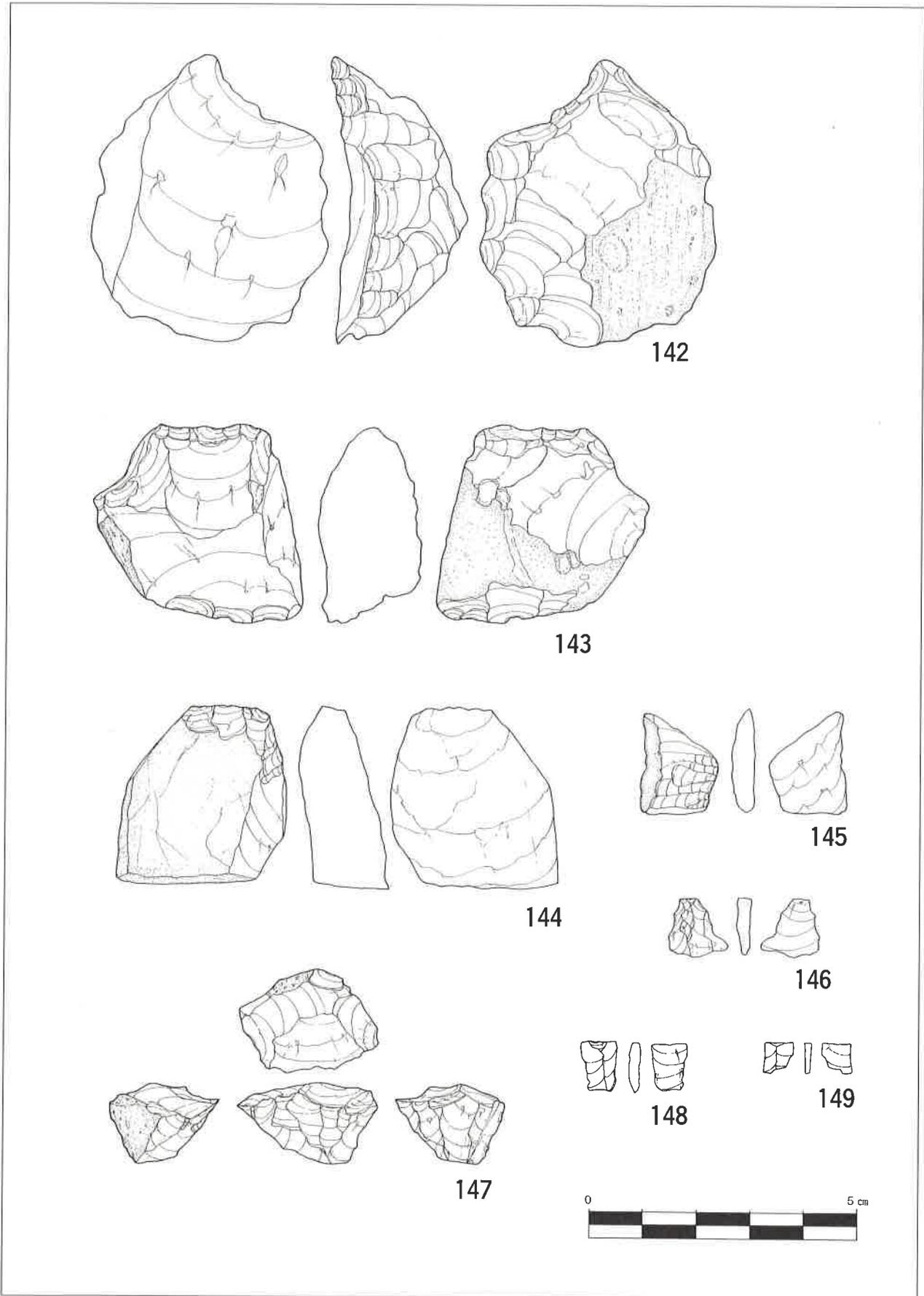
第44図 旧石器時代出土遺物（一）

第3節 縄文時代（第49図）

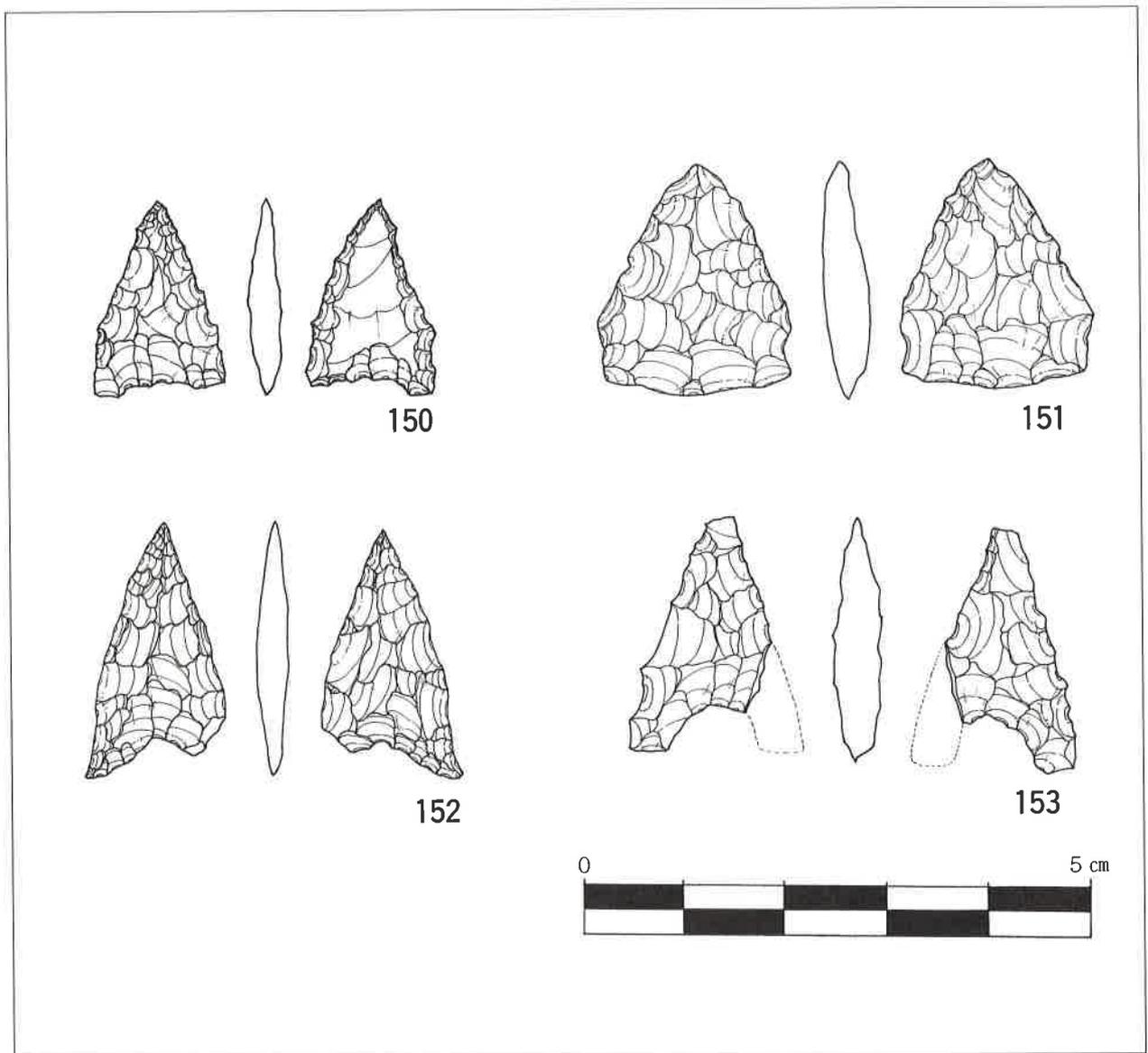
縄文時代の遺物は、暗茶褐色土層上部より出土した。遺物の分布は、E-9区～D-13区までに確認された。時期的には土器の年代から、縄文時代早期に該当する。以下、遺物・遺構について説明したいと思う。

1. 縄文時代の遺物（第46～48図）

150～153は表面採集遺物である。石材は、150・151・153が黒耀石である。しかし、150・151は灰色



第45図 旧石器時代出土遺物 (二)

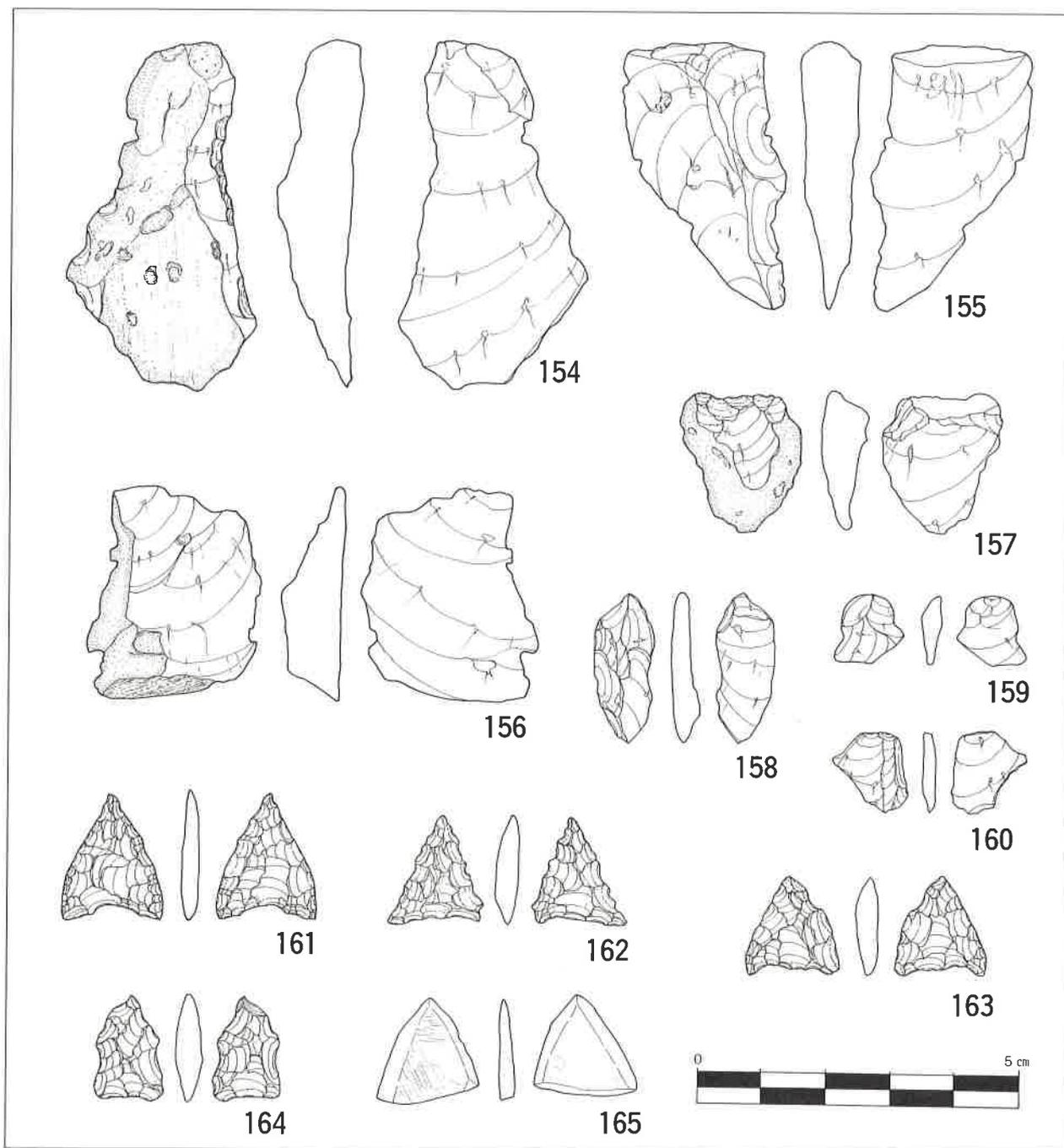


第46図 表面採集遺物（縄文）

の強い黒耀石で、ガラス質流紋岩とした黒耀石よりも黒みが強い。これは黒耀石Cである。153は黒色で良質の黒耀石Aである。152は蛋白石である。154～160は剥片である。石材は154～156が黒耀石Bで、157～160は黒耀石Aである。161～164は打製の石鏃である。すべて石材は黒耀石Aである。164は形が五角形をしており、縄文時代晩期の五角形鏃であろう。165は磨製の石鏃で、半分が欠損している。全体によく研磨されている。時代的には縄文時代から弥生時代までが考えられる。石材は頁岩である。166～167は磨石である。166は一端が敲打により破損している。167は半分が欠損している。168は敲石である。

2. 縄文時代の遺構（第50図）

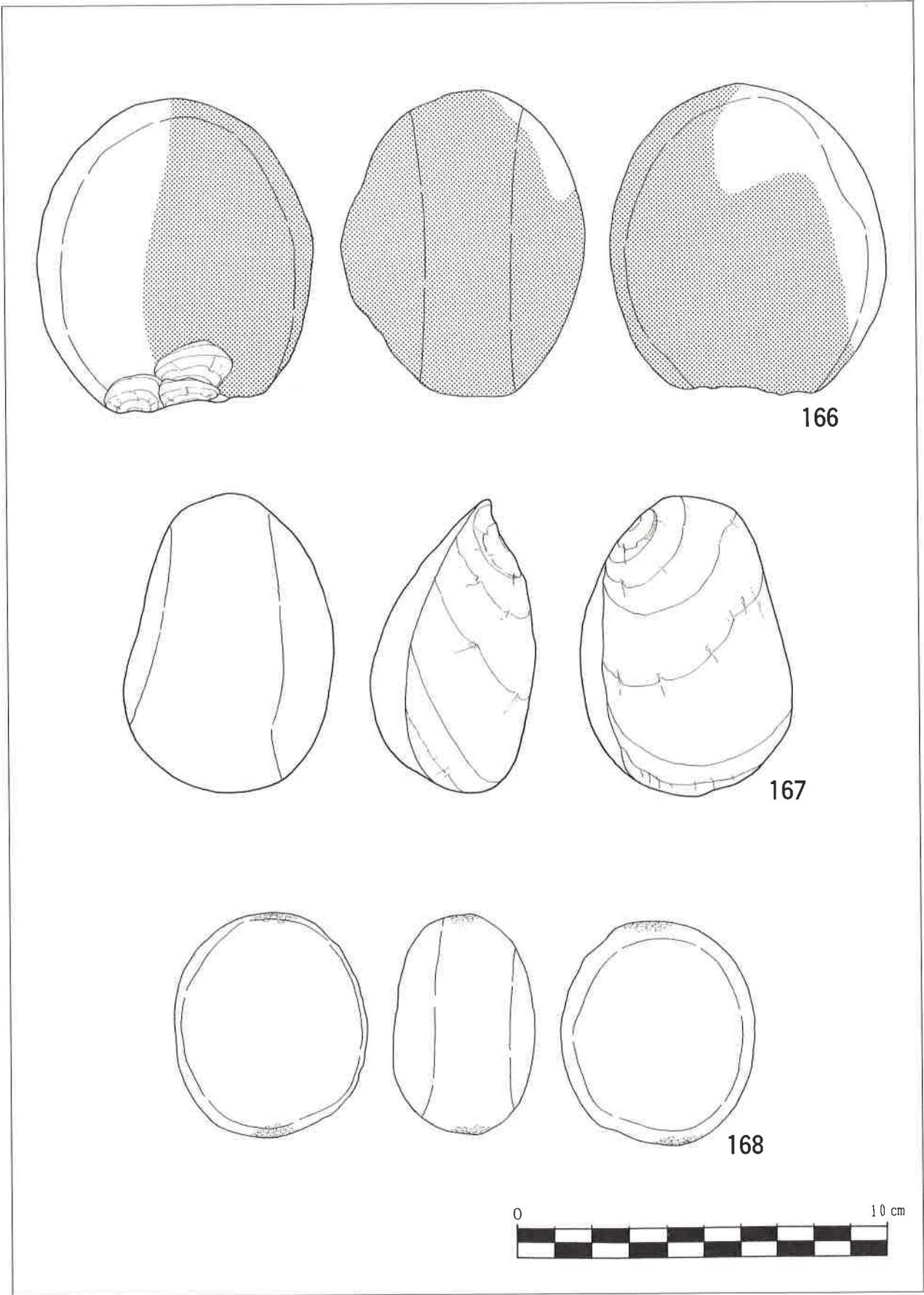
平成8年度の調査では、縄文時代の遺構は集石遺構が1基のみである。掘り込みは無く、約1 mにもみえない集石である。付近から貝殻条痕文土器が出土しており、縄文時代早期の遺構であると思われる。



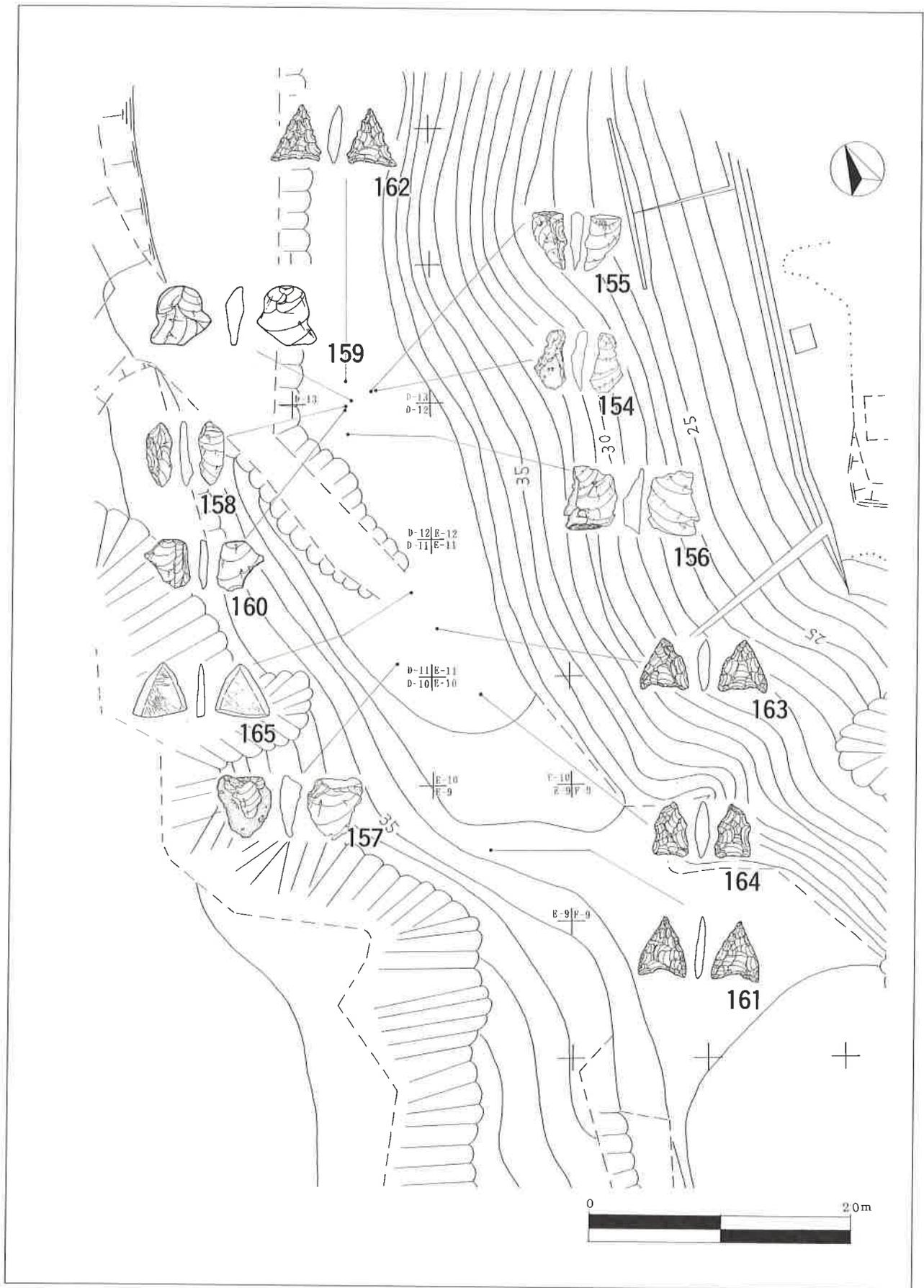
第47図 縄文時代出土遺物（一）

平成8年度 縄文時代出土遺物一覧表

図	番号	遺物番号	出土区	層	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	年代	備考
46	150	表	D-13・14	表	石 鏃	黒耀石	1.9	1.4	0.3	0.8	縄文時代早期	
	151	表	G-8	表	石 鏃	黒耀石	2.3	1.9	0.4	2	縄文時代早期	
	152	表	G-8	表	石 鏃	蛋白石	2.6	(1.3)	0.3	0.8	縄文時代早期	
	153	表	D-13・14	表	石 鏃	黒耀石	2.5	(1.2)	0.4	1	縄文時代早期	
47	154	764	DE-12・13	Ⅱ	剥片	珩質流紋岩	5.5	2.8	1.2	12	縄文時代早期	石核



第48図 縄文時代出土遺物（二）



第49図 縄文時代遺物分布図

47	155	767	DE-12・13	Ⅱ	剥片	ガラス質流紋岩	4.2	2.3	0.9	6	縄文時代早期	
	156	629	DE-12・13	Ⅱ	剥片	ガラス質流紋岩	3.4	2.7	0.9	6	縄文時代早期	
	157	898	D-11	Ⅱ	剥片	黒耀石	2.2	1.8	0.6	3	縄文時代早期	石核
	158	746	DE-12・13	Ⅱ	剥片	黒耀石	2.4	0.9	0.4	0.8	縄文時代早期	
	159	752	DE-12・13	Ⅱ	剥片	黒耀石	1.0	1.0	0.3	0.2	縄文時代早期	
	160	745	DE-12・13	Ⅱ	剥片	黒耀石	1.3	1.1	0.2	0.1	縄文時代早期	作業面調整
	161	945	E-9	Ⅱ	石鏃	黒耀石	2.0	1.6	0.2	1	縄文時代早期	
	162	773	DE-12・13	Ⅱ	石鏃	黒耀石	1.7	1.5	0.3	0.7	縄文時代早期	完形
	163	955	F-11	Ⅲ	石鏃	黒耀石	1.5	1.4	0.4	1	縄文時代早期	完形
	164	930	E-10	Ⅱ	石鏃	黒耀石	1.6	1.1	0.4	0.7	縄文時代晩期?	完形
	165	916	D-11	Ⅱ	磨製石鏃	頁岩	(1.6)	1.6	0.2	0.9	弥生時代?	欠損
48	166	690	DE-12・13	Ⅱ	磨石・敲石	安山岩	8.6	7.6	6.7	540	縄文時代早期	完形
	167	705	DE-12・13	Ⅱ	敲石	安山岩	7.9	5.4	(4.4)	241	縄文時代早期	欠損
	168	711	DE-12・13	Ⅱ	敲石	安山岩	5.9	5.3	3.8	153	縄文時代早期	完形

第4節 上城詰城跡時代 (第51～62図)

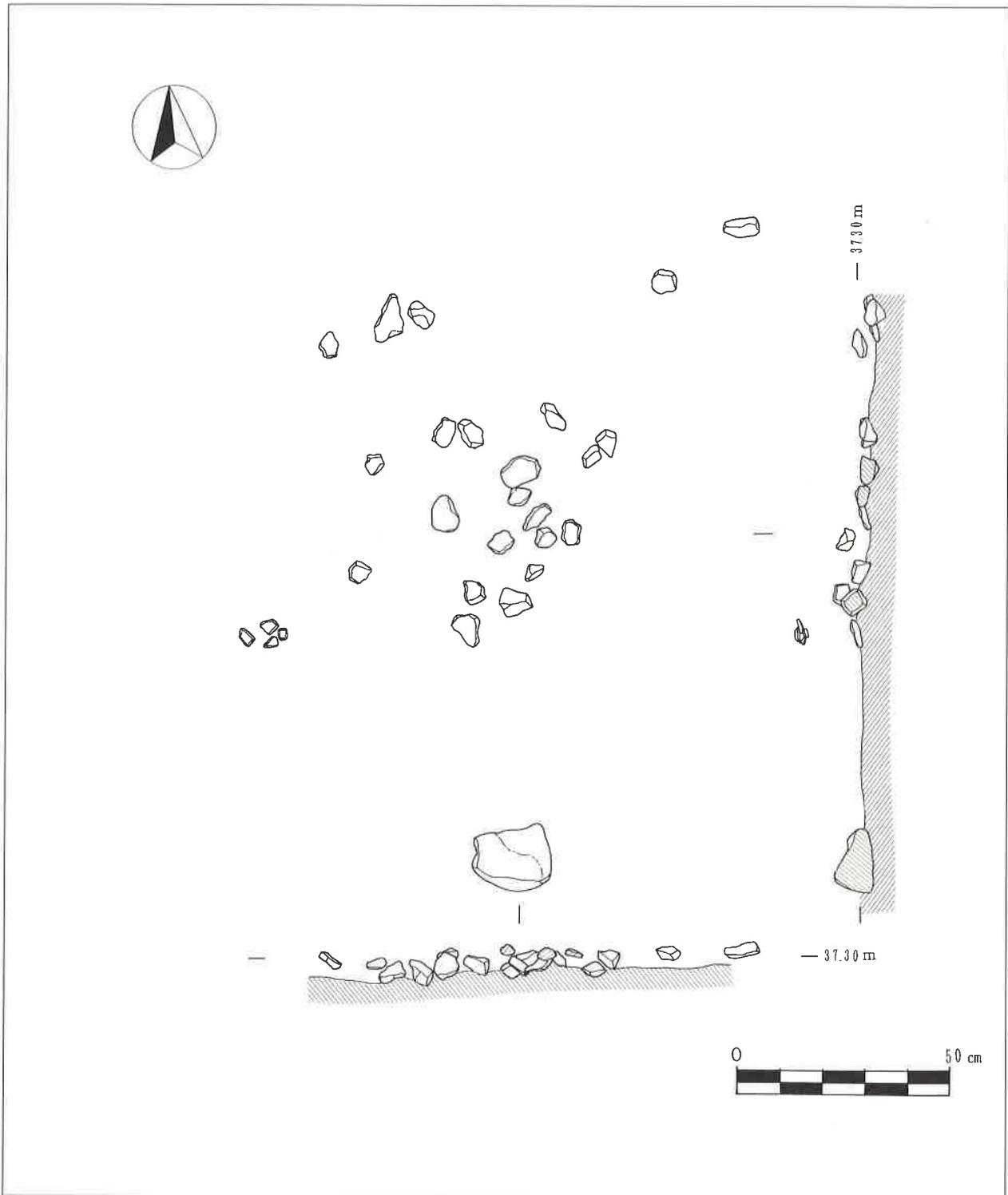
平成8年度の調査では7年度に確認された堀切(堀切1)の外に、もう一つの堀切(堀切2)が検出された。また、土坑や Pit 等も多く検出された。以下、遺物・遺構ごとに説明したいと思う。

1. 表面採集遺物 (第51図)

169～171はE-11区からの表面採集遺物である。他にもここには図化できず掲載していないが、滑石製の石鍋の破片が数点採集されている。169は玉縁口縁白磁碗で、口径は18.7cmを計る。やや黄色味を帯びた釉薬がかかり、釉垂れも見受けられる。170～171は土師器である。171は底部切離しは糸切りで、口径9.5cm、器高1.5cm、底径8.0cmを計る。171は、底部は糸切りである。口径は7.5cm、器高1.3cm、底径5.9cmを計り、SK-12から出土した土師器小皿の法量と酷似し、口縁部の特徴も同じで同一時期のものと思われる。

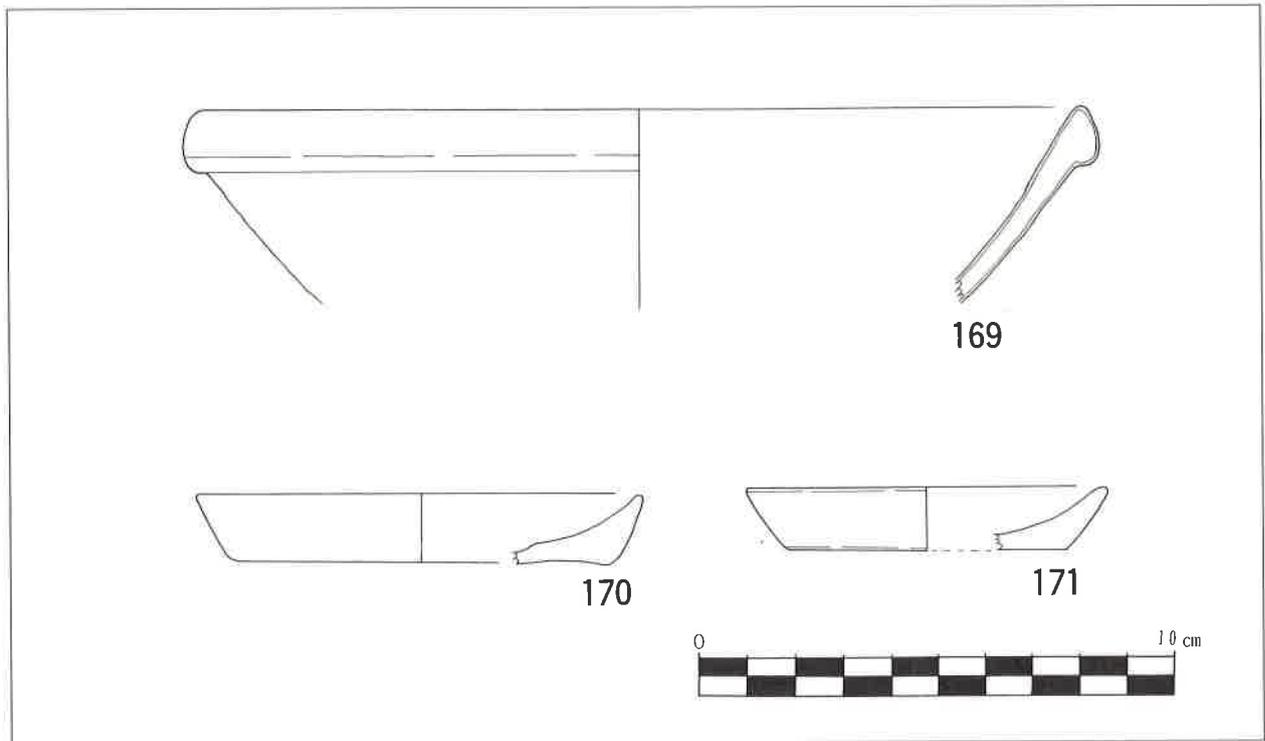
2. 中世の出土遺物 (第52図)

中世の遺物は、暗茶褐色土層上部の黒色土層を包含層とする。172はF-8区から出土したもので、玉縁口縁白磁碗である。口径は18.7cmである。173もF-8区から出土したもので、端反白磁碗である。口径は12.2cmである。174は青磁碗で、火を受けて釉薬が消失している。175はF-9区からの出土で、白磁碗である。内面に通称猫搔と呼ばれる櫛搔文が施文されている。176はF-8区からの出土で、土師器碗の底部破片である。高台は断面三角状で、短く外に開く。177はD-11区からの出土で、内黒土師器である。口縁部は若干内彎気味である。178はF-8区から出土したもので、土師器の碗の底部破片である。高台は短く、断面三角である。179はE-11区からの出土で、土師器の口縁部破片である。やや外反気味で焼成は良好である。口径は12.2cmである。180は、D-11区からの出土で、土師器小皿である。底部切離しは糸切りで、ナデ調整をしている。口縁部



第50図 縄文時代の集石遺構

は内彎気味で、胴部に一段の稜線が入る。181は同じくD-11区からの出土で、土師器の口縁部破片である。口唇部が外反気味になっている。口径は10.5cmである。182はD-12区からの出土で、火縄銃の玉である。直径約1cmで、材質はその重さから鉛であると思われる。その大きさから二匁（約7g）の玉を使用する火縄銃が想定できる。この二匁の玉を使用する火縄銃は、実戦向きで戦いに多く使用されている。玉は検出時に多少傷を受け搔落しており、現在は約4g程度である。



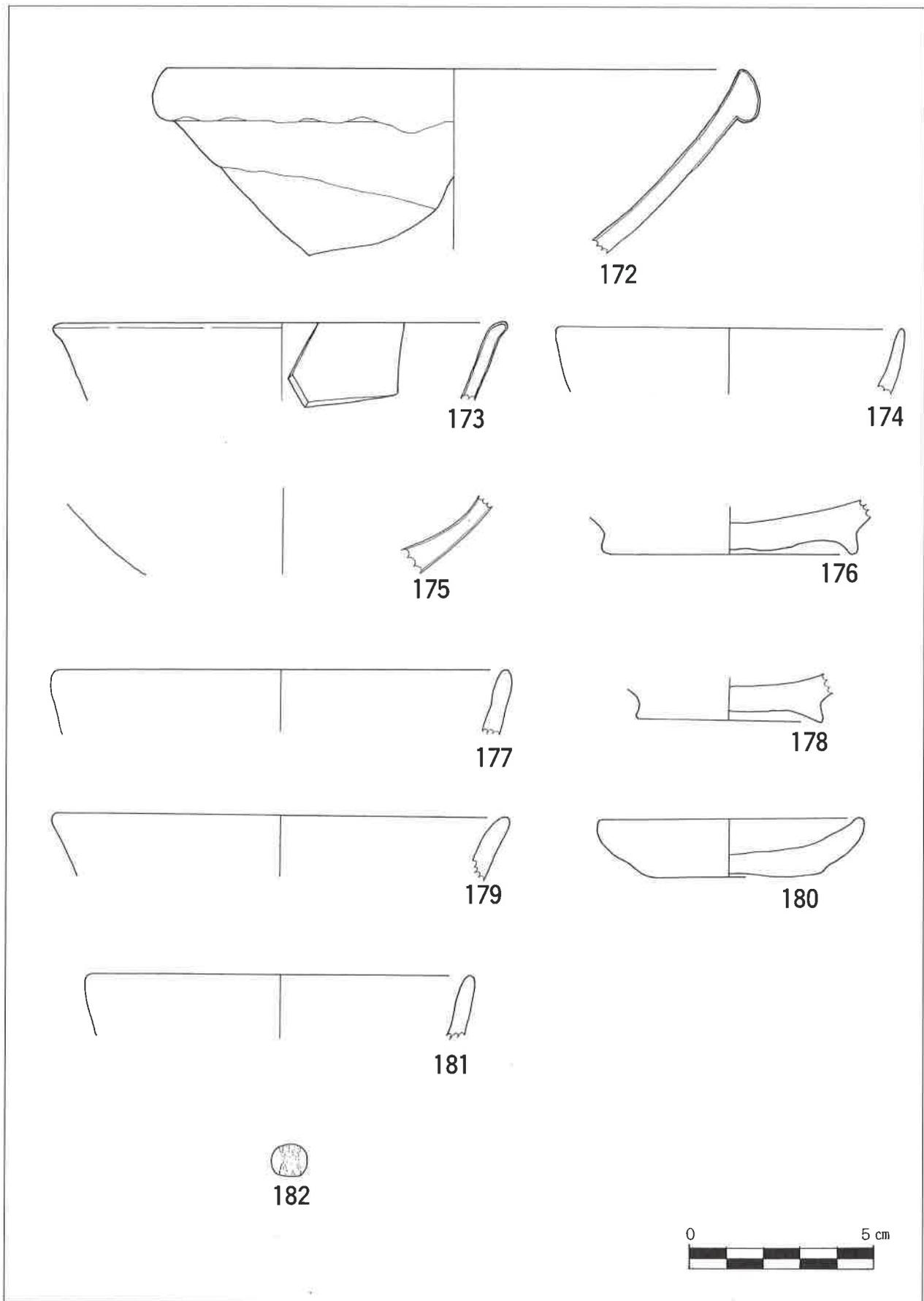
第51図 表面採集遺物（中世）

中世の出土遺物一覧表

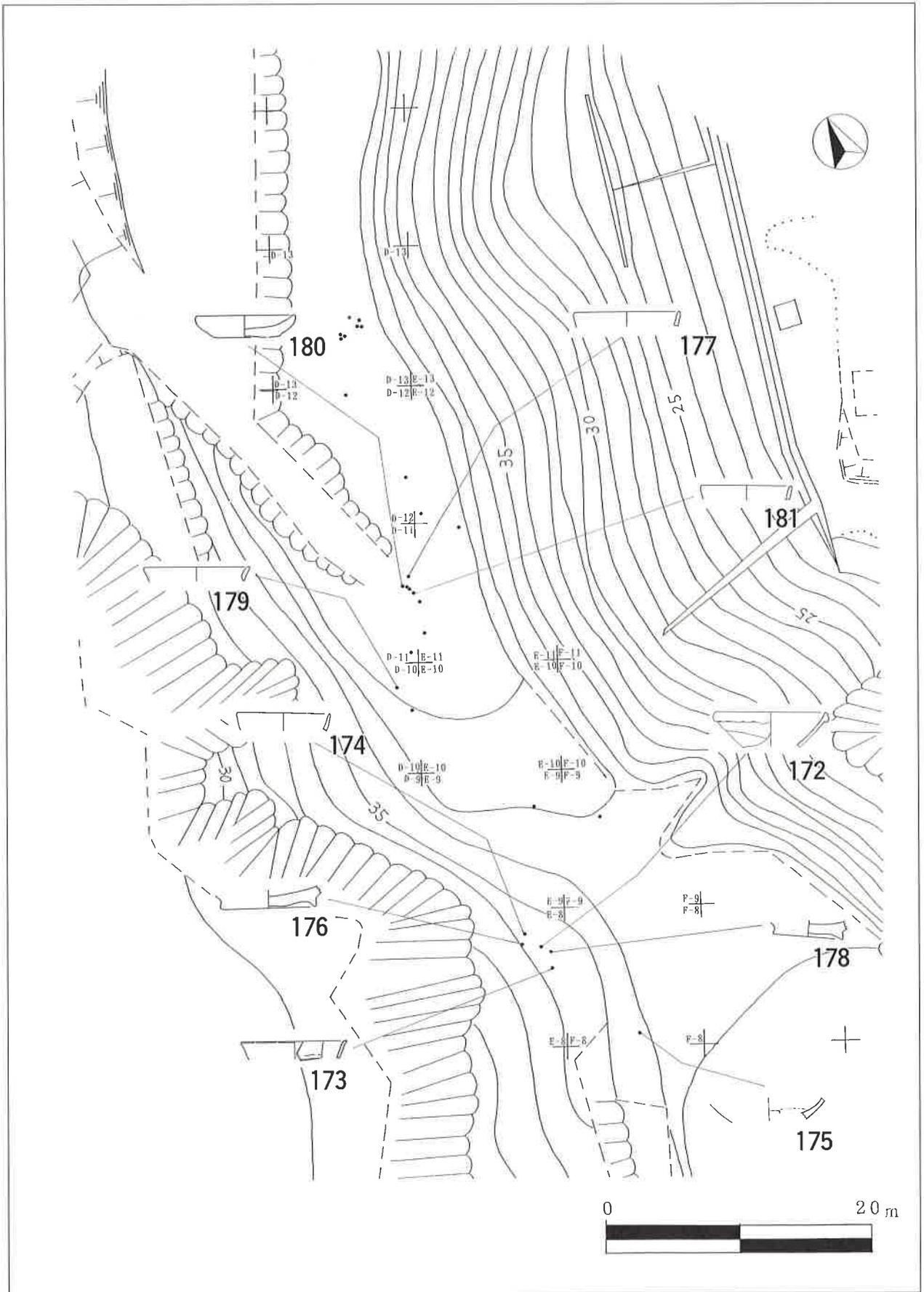
図	番号	遺物番号	出土区	層	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	年代	備考
51	169	表	E-11	表	白磁	碗	18.7	—	—	12~13世紀	玉縁口縁
	170	表	E-11	表	土師器	小皿	9.5	8.0	1.5		
	171	表	E-11	表	土師器	小皿	7.5	5.9	1.3		
52	172	858	F-8	II	白磁		15.6	—	—	12~13世紀	玉縁口縁
	173	860	F-8	II	白磁		12.2	—	—	12~13世紀	口縁部・端反
	174	855	F-8	II	青磁		9.3	—	—		口縁部・火を受けている
	175	847	F-9	II	白磁		—	—	—	12~13世紀	
	176	856	F-8	II	土師器		—	6.8	—		内黒?
	177	917	D-11	II	土師器		12.3	—	—		内黒
	178	859	F-8	II	土師器		—	5.0	—		底部
	179	953	E-11	II	土師器		12.2	—	—		口縁部
	180	918	D-11	II	土師器		7.0	4.7	1.6		底部ナデ調整
	181	924	D-11	II	土師器		10.5	—	—		口縁部
182		D-12	II	火縄銃玉	鉛	—	—	—	16世紀		

3. 堀切1（第55図）

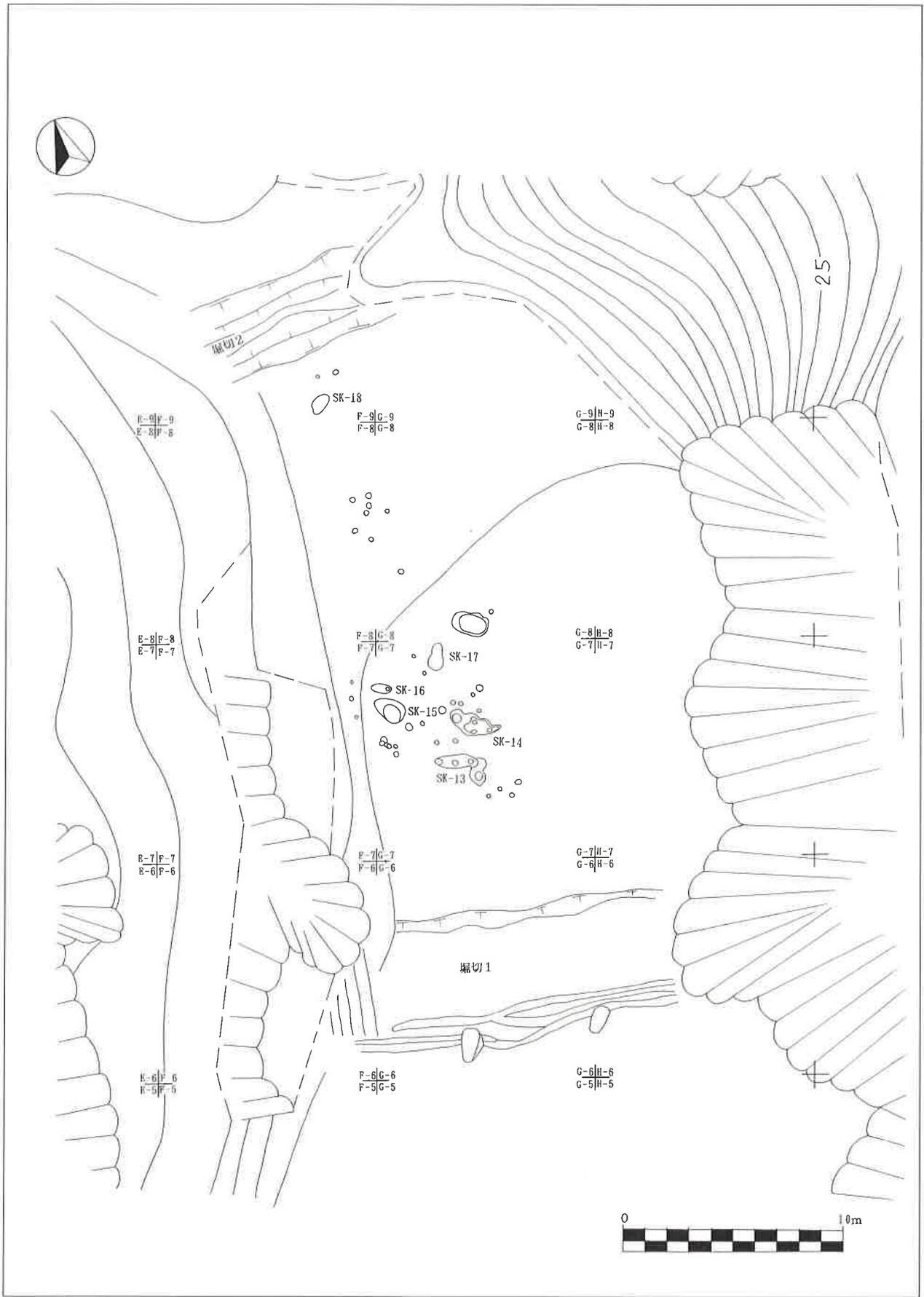
堀切1はGH-6区に台地を横断する状態で構築されている（第52図）。幅約6m、検出できた長さ約15mである。断面の観察から、堀の内部に2条の箱堀があったようである。堀切の最終的な



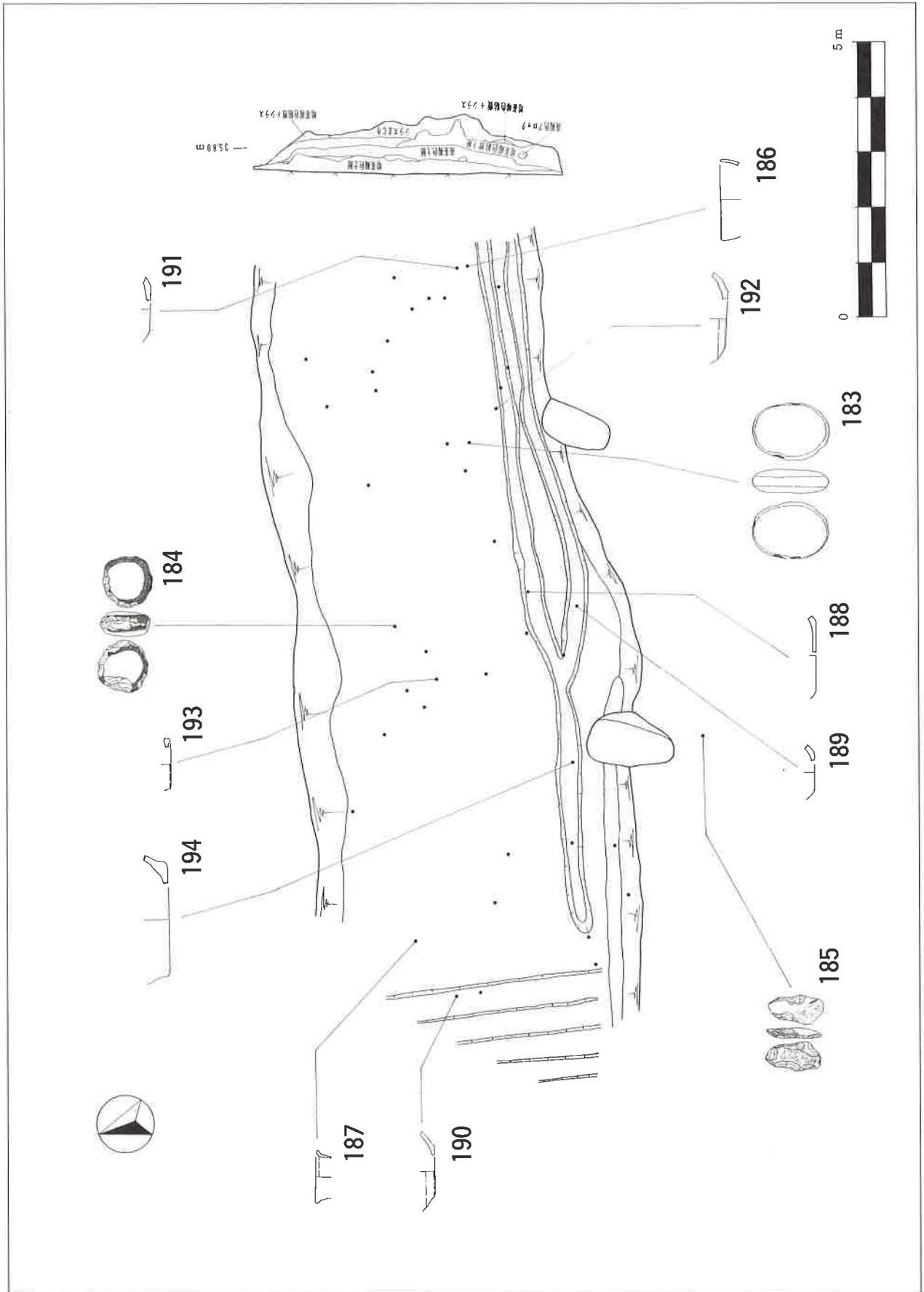
第52図 中世の遺構分布図



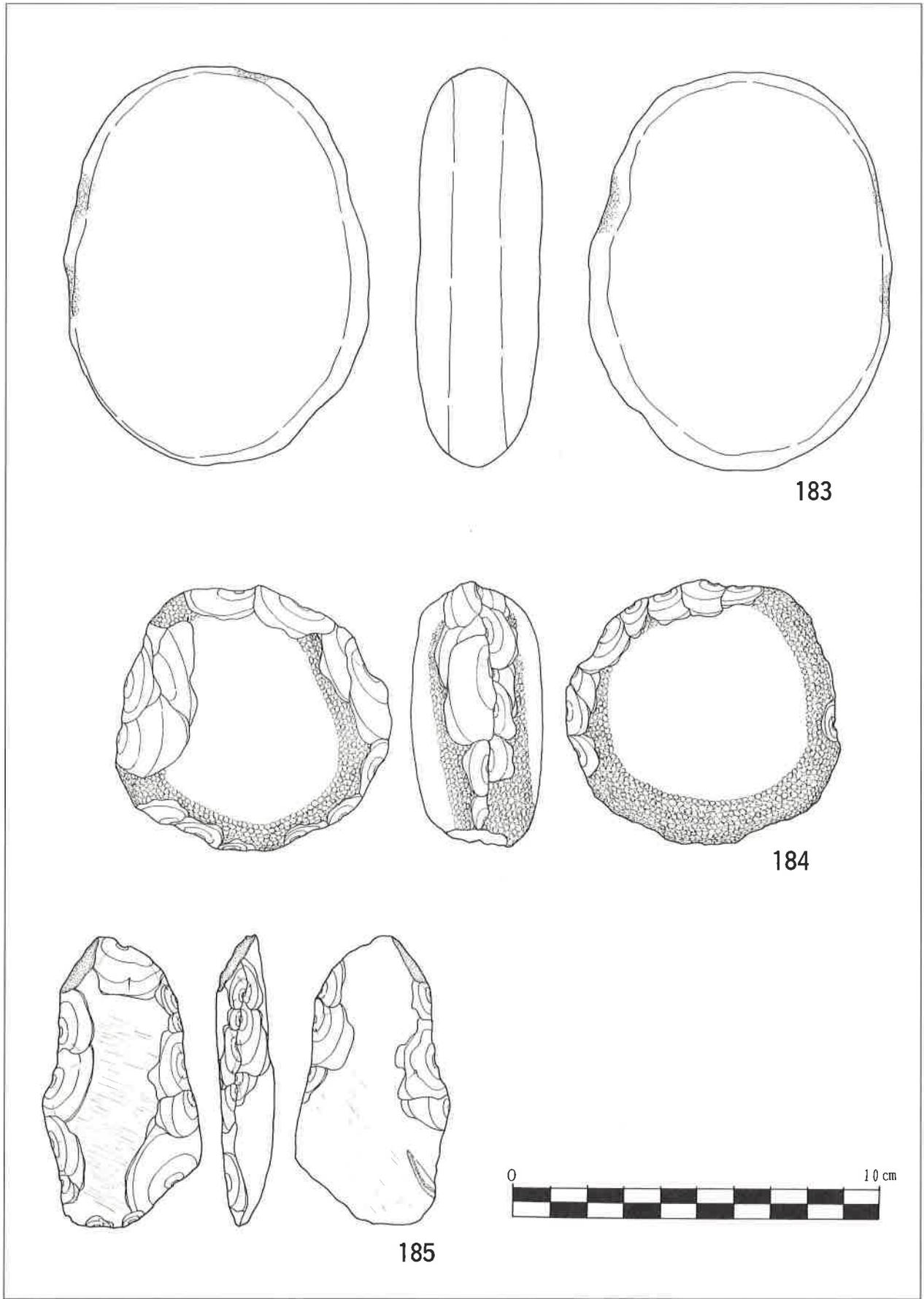
第53図 堀切1の平面及び遺構分布図



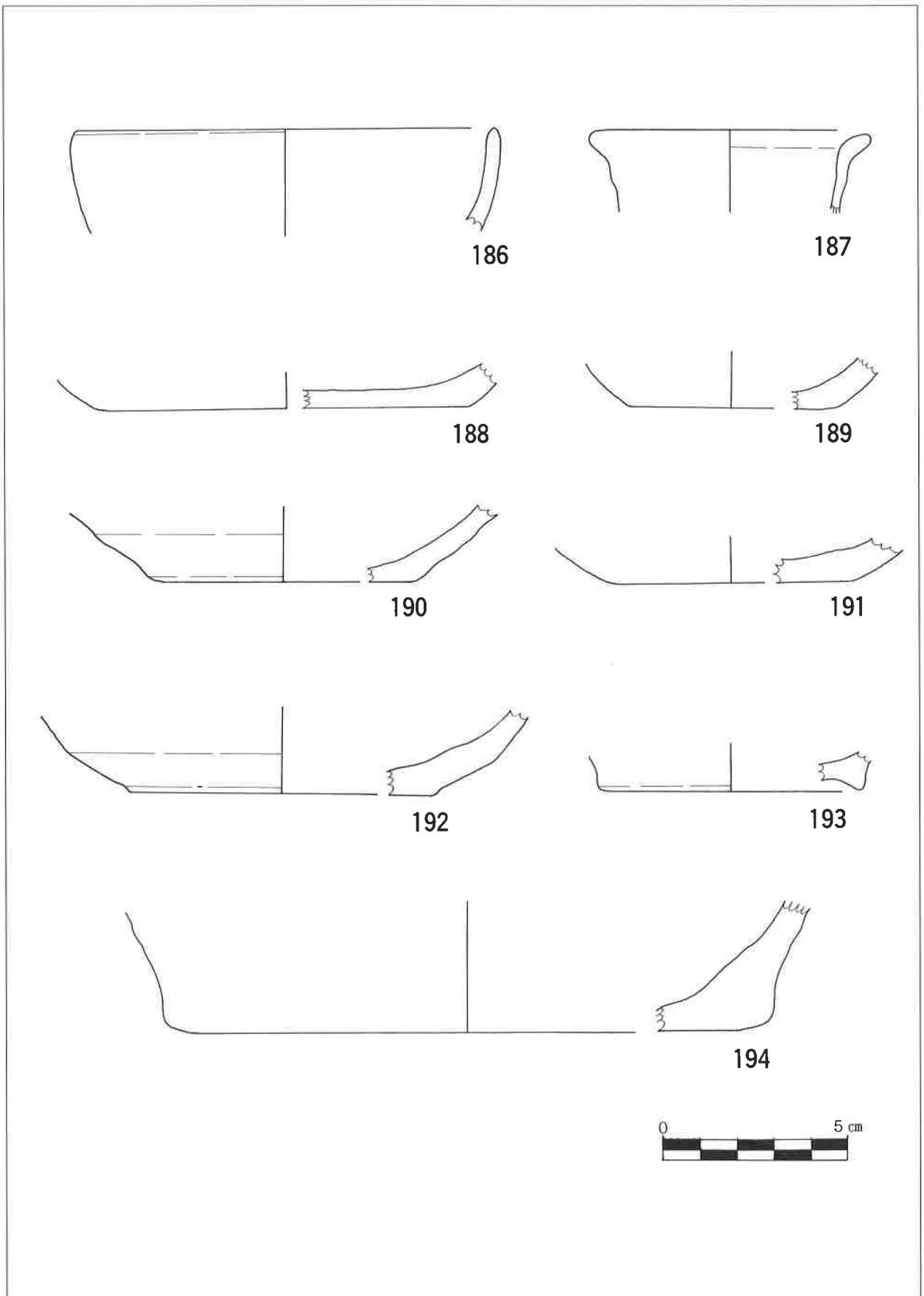
第54図 堀切1内出土遺物(一)



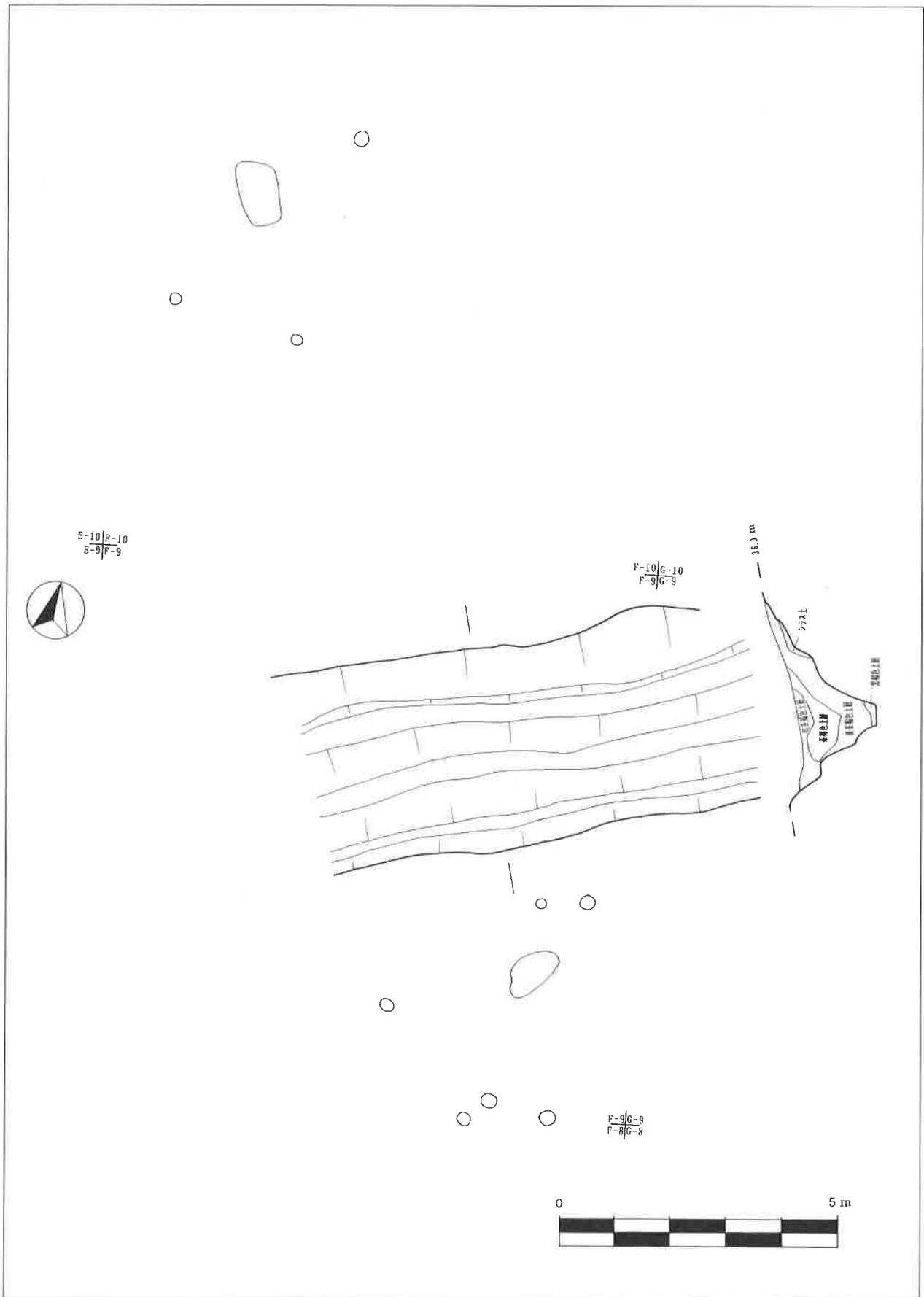
第55図 堀切1内出土遺物(二)



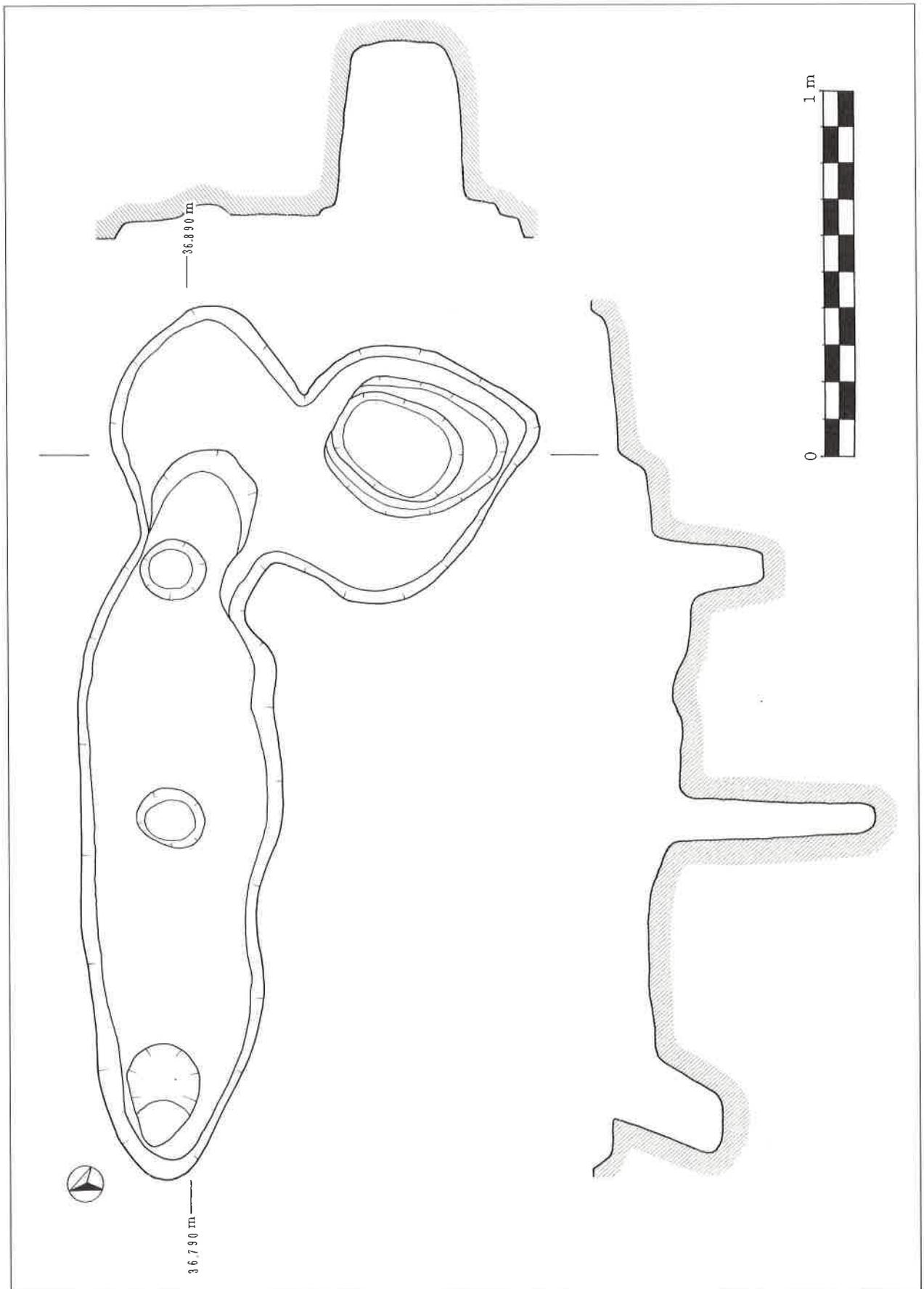
第56図 堀切 2 の平面図



第57図 中世の遺構 (SK-13)



第58図 中世の遺構 (SK-14)



第59図 中世の遺構 (SK-15・16)

立上り手前には、小さな溝が掘られている。堀切の西側では階段上の浅い段が確認できた。これが添え廓への通路としての機能も持ち合わせていたものなのか分からない。また堀切の南側辺に二個の土坑があり、焼けた礫が数点確認できた。吊橋の土台となるものなのかもしれない。

堀切1からの出土遺物（第56～57図）は、縄文時代から中世の遺物が検出できた。183は磨石と敲石の併用タイプで、側面に敲きの痕跡が残る。堀切1は、GH-6区にあり、付近では縄文時代早期の遺物が検出されており、恐らく縄文時代早期の遺物であろう。184も縄文時代早期の遺物で、磨石と敲石の併用タイプである。両面とも使用により良く研磨されている。側辺部は敲きにより剥離が確認できる。185は小型の石斧で、基部や側辺部を整形した後、研磨により調整している。石材は頁岩である。186は内黒土師器で、口径は11.3cmである。口縁部は内彎気味で、器壁は薄い。187は陶器製で、壺であろう。188は土師器の坏底部で、切離しは糸切りである。焼成は悪く、SK-12・P1の遺物と酷似している。189～192も土師器坏底部である。189も188と同じく、SK-12・P1の遺物と酷似している。190・191は焼成は悪く、器壁は厚い。192は190と同一個体ではないかと思われる。胴部に一段の稜線が認められる。193は土師器底部であるが、小さい高台が付く。高台は断面三角状を呈し、短く外に開く。194は、弥生時代の土器底部と思われる。

堀切内出土遺物（石器）

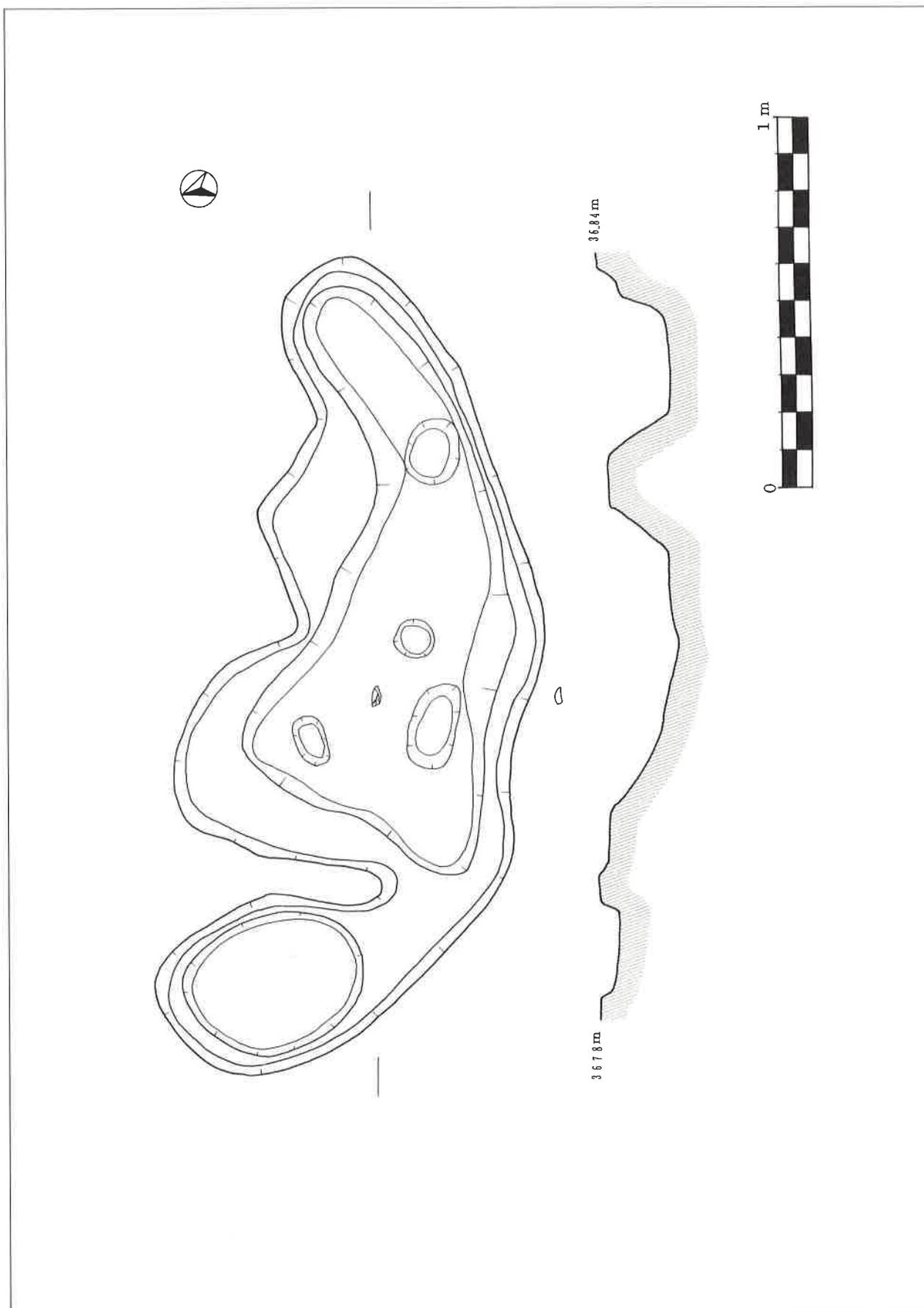
図	番号	遺物番号	出土区	層	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	年代	備考
56	183	816	堀切-1	—	磨石・敲石	安山岩	10.6	8.0	3.2	440	縄文時代早期	
	184	826	堀切-1	—	磨石・敲石	砂岩	7.2	7.5	3.5	290	縄文時代早期	
	185	820	堀切-1	—	石斧	頁岩	8.0	4.0	1.4	62	縄文時代早期	

堀切内出土遺物（土器）

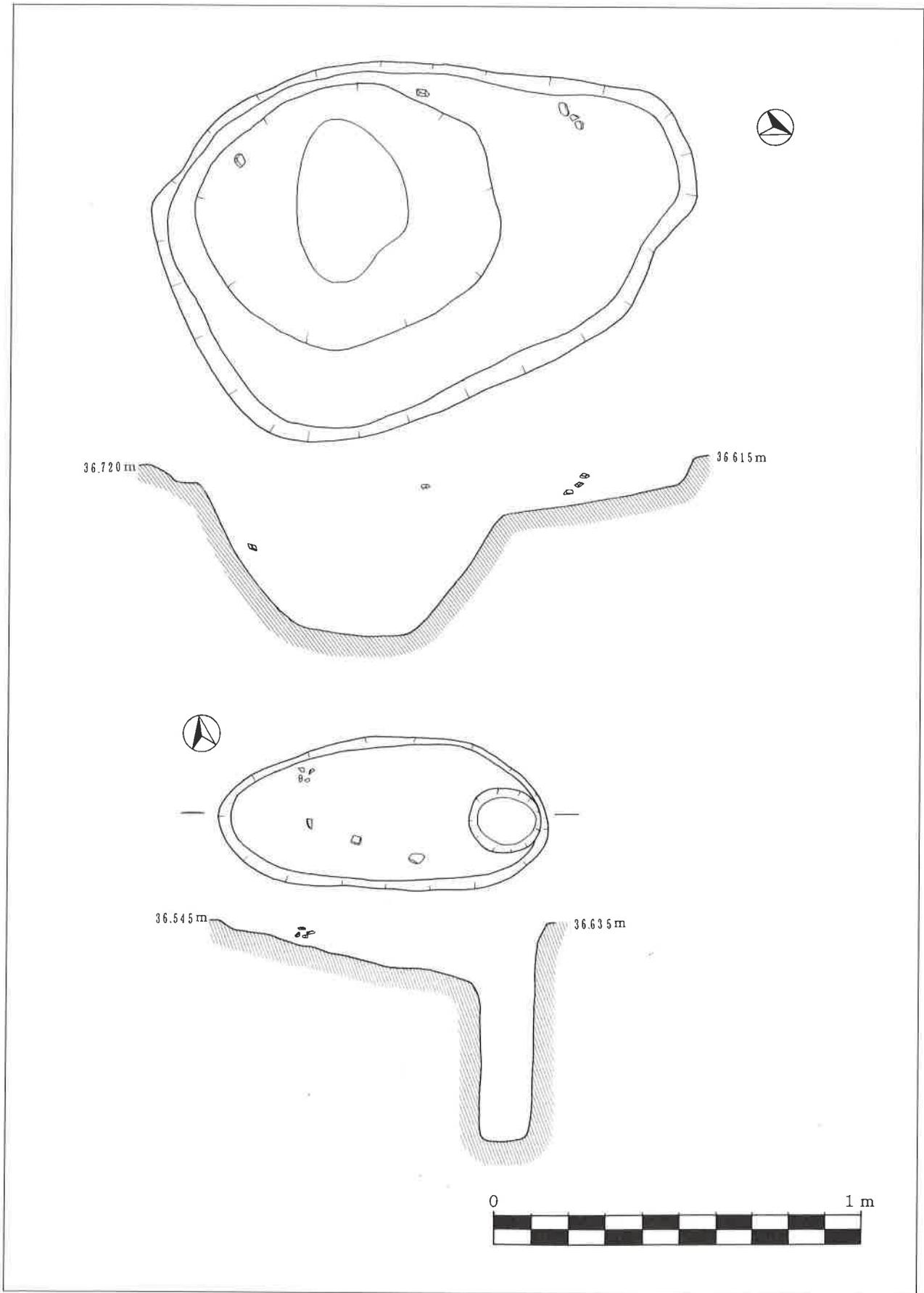
図	番号	遺物番号	出土区	層	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	年代	備考
57	186	811	堀切-1	—	土師器	碗	11.3	—	—		
	187	842	堀切-1	—	陶器	壺	7.3	—	—		
	188	824	堀切-1	—	土師器	坏	—	—	10.1		
	189	821	堀切-1	—	土師器	坏	—	—	5.5		
	190	841	堀切-1	—	土師器	坏	—	—	7.1		
	191	810	堀切-1	—	土師器	坏	—	—	6.4		
	192	815	堀切-1	—	土師器	坏	—	—	8.3		糸切り
	193	829	堀切-1	—	土師器	高台付坏	—	—	7.1		
	194	833	堀切-1	—	弥生土器	—	—	—	16.5	弥生時代中期	底部

4. 堀切2（第58図）

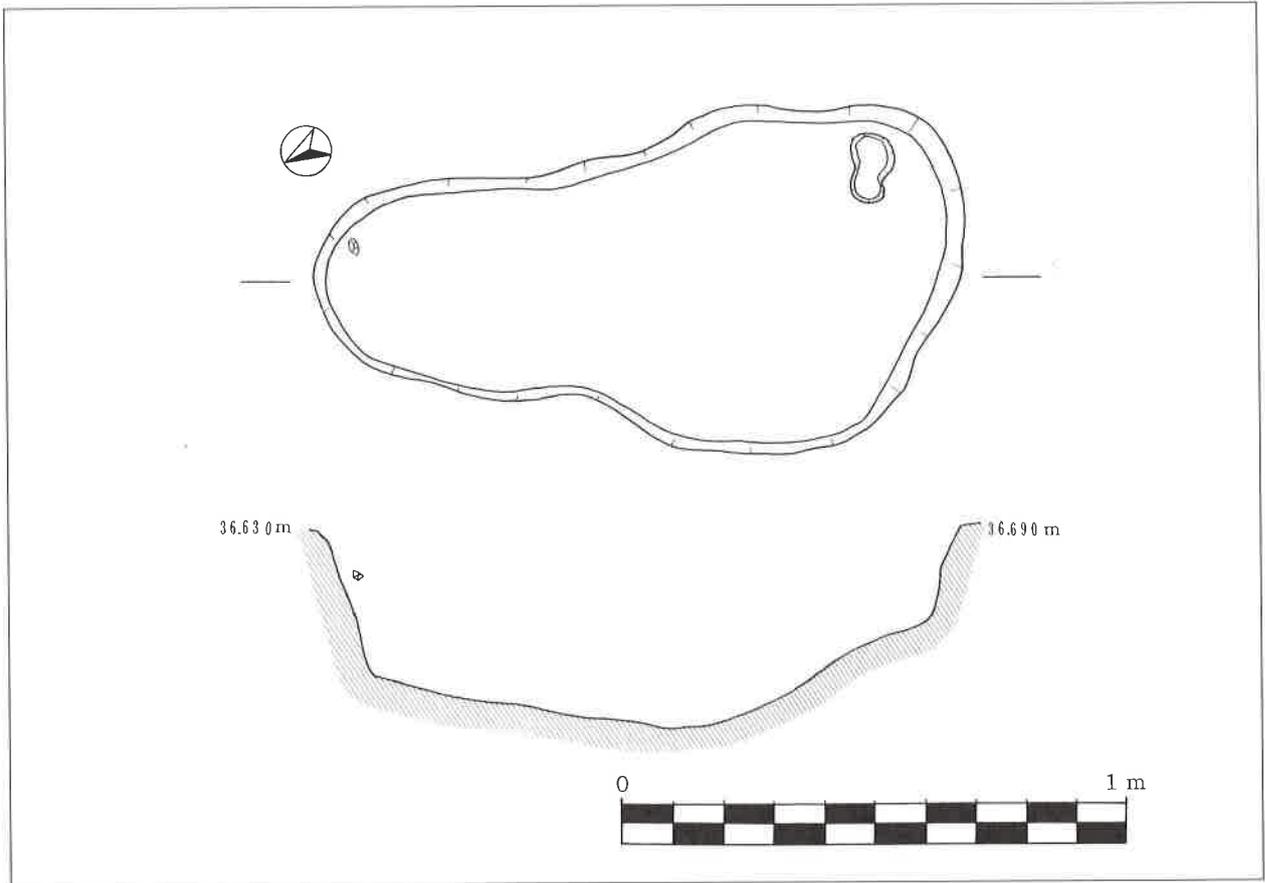
堀切2は、検出できた堀切の一番北側に位置し、幅約3.5m、長さ約8.5mある。断面の形状はV字状で薬研堀である。遺物等は検出されなかった。



第60図 中世の遺構 (SK-17)



第61図 中世の出土遺物



第62図 中世の遺物出土分布図

6. その他の遺構（第59～62図）

S K-13は、浅く掘られた土坑状の遺構の中に直径約20cmのものが3つと、約30cmのものが1つ検出された。S K-14は、浅い窪み状の土坑中に内黒土師器が検出された。状の窪みも幾つか検出されたが、何の目的の遺構であるかは不明。S K-15は、長径約1.45m、短径約1mの土坑で、一方が深くなっているタイプの土坑である。中からは土師器が検出された。S K-16は、長径約90cm、短径約40cmの土坑中に、が付くタイプである。土師器が検出されている。S K-17は、長径約1.30m、短径約70cmの土坑で、黒耀石破片が1点出土したが混入したものであろう。

第5節 小 結

〈旧石器時代〉

平成8年度の調査区では旧石器時代の遺構が確認された。シラス上部腐食土が旧石器時代の包含層に該当する。遺物としてはナイフ、台形石器などが検出された。遺構はS K-9が長径が約1.78mで、短径が約1.69mである。遺構内よりスクレイパーが1点、台形石器が3点出土している。S K-10が長径が約1.73mで、短径が約1.35mである。出土遺物は無かった。しかし、床面に直径約13cmと9cmのものが2つ検出された。埋土を観察する限り、長時間かけて埋まった事が見て取れる。その点から墓の可能性は少ないと考えられる。また、最近見つかった狩猟としての落とし穴とも形態が異なる。※₁ 今後の類例を待つしかない。

〈縄文時代〉

縄文時代の遺構遺物は、D-12・13区で主に検出された。遺物は縄文時代早期で、新東晃一氏の言う前平式土器である。※₂すべて円筒形で角筒は検出できなかった。また、磨製の石鏃が出土したが弥生時代の可能性もある。遺構は集石遺構が1基検出された。掘り込みは無く、まばらであった。

〈上城詰城時代〉

平成8年度の調査区は、詰城の北側部分にあたり、堀切や土坑などの遺構が確認できた。堀切は2基検出でき、箱堀、薬研堀と種類の異なる堀切の確認ができた。特に堀切1は、2条の堀切が重なって構築されており、防御を増していたことが分かった。また、D-12区では、県内の山城で初めて火縄銃の玉が検出された。鉄砲は大龍寺南浦文之玄昌の記した「鉄砲記」によると、天文12年（1543年）に、種子島へ漂着したポルトガル商船に乗っていたポルトガル人から種子島時堯が譲り受けたとされている。この時譲り受けた鉄砲を見本に、直ぐ様製造に取りかかり種子島銃を開発した。この種子島銃が実戦で使用されたのは一体何時からなのであろうか。鹿児島県史料旧記雑録前編二2629によると、天文18年（1549年）加治木城にいた肝付兼演方から対峙していた伊集院忠朗方へ弓矢とともに火縄銃が放たれたことが記されている。鉄砲伝来から6年後のことである。肝付氏本家は、大隅半島の最大領主であり、種子島は大隅に属している点から火縄銃をいち早く入手できた可能性が考えられる。さて、そこで上城詰城跡で出土した玉は誰が使用したのであろうか。市来氏は寛正3年（1462年）つまり、15世紀中頃には島津氏により滅ぼされており火縄銃を使用した可能性はないであろう。その後市来は島津家の直轄地となり地頭が治めている。その後島津が三州統一に乗り出すが、市来周辺の戦いはない。上城詰城跡は15世紀までの遺物は多いが、16世紀の遺物は2点である。そのことから上城詰城跡は市来氏関係者の山城であり、15世紀の中頃には廃城になった可能性が高い。市来氏の分家の河上氏は、市来氏が滅亡された後も所領を安堵されている。河上名主職と名乗る事や、所領安堵の書状に出てくる場所が河上周辺が多く、上城詰城跡が河上氏の山城であった可能性は低い。では誰が撃った玉なのか。時代が下り、島津氏は、九州制覇に乗り出し、ほぼその全部を制覇したが、豊臣秀吉が九州征伐に向かうと島津に降った諸城が寝返り、島津は撤退を余儀なくされる。そして天正15年（1587年）5月頃、川内へ秀吉軍が入ってきた。そして東市来まで秀吉軍の一部が入り、破壊行為を行なったという。このように、秀吉軍の破壊行動の中で火縄銃が使用された可能性も考えられよう。

（参考引用文献）

1982 『市来町郷土誌』市来町郷土誌史料編纂委員

1993 『鉄砲伝来450年』「種子島銃の合戦での使用」三木靖

1996 『考古学と自然科学第33号』「城廓の調査における物理探査の適用」小林恵他

1996 『黎明館調査研究報告第10集』「鉄砲伝来についての二・三の考察」濱田利安

※註1 埋蔵文化財センター宮田栄二氏ご教示。

註2 新東晃一氏の編年による。

第8章 平成9年度全面発掘調査

第1節 平成9年度の調査の経過

平成7年度を皮切りに約5ケ年の計画で発掘調査を実施することになり、平成9年度で3年目になる。

平成9年度は、前年度までの未調査区を中心に調査を平成9年9月18日から平成10年3月18日まで行なった。

第2節 発掘調査の組織

調査主体者	市来町教育委員会				
調査責任者	〃	教 育 長	松 崎	孝	
調査庶務	〃	社会教育課長	宇 都	隆 雄	
〃	〃	社会教育係長	吉 田	裕 史	
〃	〃	派遣社会教育主事	宮 司	和 弘	
〃	〃	社会教育課主事	芹ヶ野	幸 淑	
調査担当	〃	社会教育課主査	新 町	正	
〃	〃	社会教育課主事	西久保	敏 彦	

指導助言者（敬称略）

福岡県教育庁文化課 橋口 達也 氏 九州歴史資料館調査課 横田賢次郎 氏
太宰府市教育委員会文化財課 山本 信夫 氏 熊本市教育委員会文化課 美濃口雅朗 氏
兵庫県中町教育委員会管理課 宮原 文隆 氏
鹿児島県教育庁文化財課 鹿児島県立埋蔵文化財センター

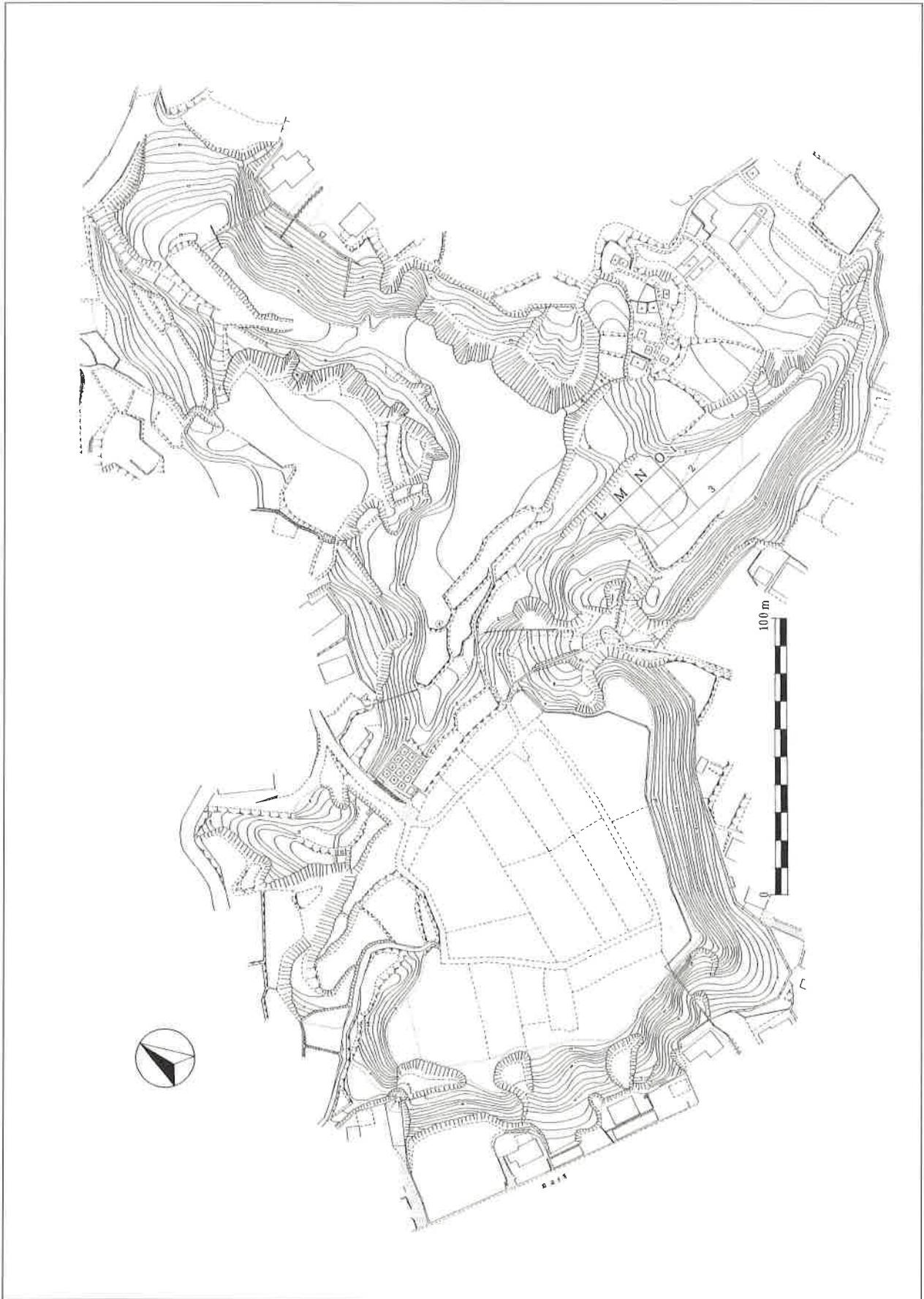
第3節 調査の概要

昨年度、調査を行なったD・E-10・11・12区の調査を引き続き行い、また、昨年度までの調査区B-1・C-2区にトレンチを任意で2つ設定し、下層の確認の確認を行なった。

その後、未調査地域に調査区L・M・N・O-1・2・3区を設定し、調査を行なった。平成9年度の調査面積は1,500㎡であった。

第6章の掲載は、L・M・N・O-1・2・3区の調査分である。

発掘調査は平成9年9月18日～平成10年3月18日まで行われ、その経過については日誌抄をもつてかえる。



第63図 平成9年度調査区位置図

【日誌抄】

9月18日～19日 現場入り口道・プレハブ周辺整備
E-10・11区掘り下げ

9月22日～26日 D-10・E-10・11区掘り下げ

9月29日～10月3日 D-10・E-10・11区掘り下げ
G-7・F・G-8・9区遺物取り上げNo845～890

10月6日 E-10・11区掘り下げ

10月13日～15日 D・E-10・11・12区掘り下げ・
E・F-9・D・E-10・11・F-11遺物取り上げNo891～950

10月21日～24日 D・E-10・11・12区掘り下げ・精査，遺構検出
堀切精査・写真撮影
A・B・C・D-1・2・3区除草 トレンチ設定

10月27日～29日 D・E-10・D-11・12区遺物取り上げNo951～955
B-1・C-2区トレンチ掘り下げ

11月5日～6日 B-1・C-2区トレンチ掘り下げ

11月10日～14日 B-1・C-2区トレンチ掘り下げ
L・M・N・O-1・2・3区伐採・重機による表土剥ぎ

11月17日～18日 L・M-1・2区掘り下げ N-2・3区重機作業

11月25日～28日 M・N-1・2・3区掘り下げ

12月1日～5日 M・N-2・3区掘り下げ
L・M-2・3区遺物取り上げNo956～1,100

12月8日～12日 M・N-2・3区掘り下げ
L・M・N-2・3区遺物取り上げNo1,101～1,256

12月15日～19日 M・N-2・3区掘り下げ

1月8日～9日 M・N-2・3区掘り下げ

1月12日～16日 M・N-2・3区掘り下げ

1月19日～22日 M・N-2・3区掘り下げ
M・N-1・2・3区遺物取り上げNo1,257～1,373

1月26日～30日 M・N-2・3区掘り下げ
L・M・N-1・2・3区精査・遺構検出

2月2日～6日 M・N・O-2・3区掘り下げ
L・M・N-1・2・3区遺構検出
N・O-1・2・3区重機による表土剥ぎ

2月16日～20日 N・O-2・3区掘り下げ・重機による表土剥ぎ
M・N・O-2区遺物取り上げNo1,374～1,411

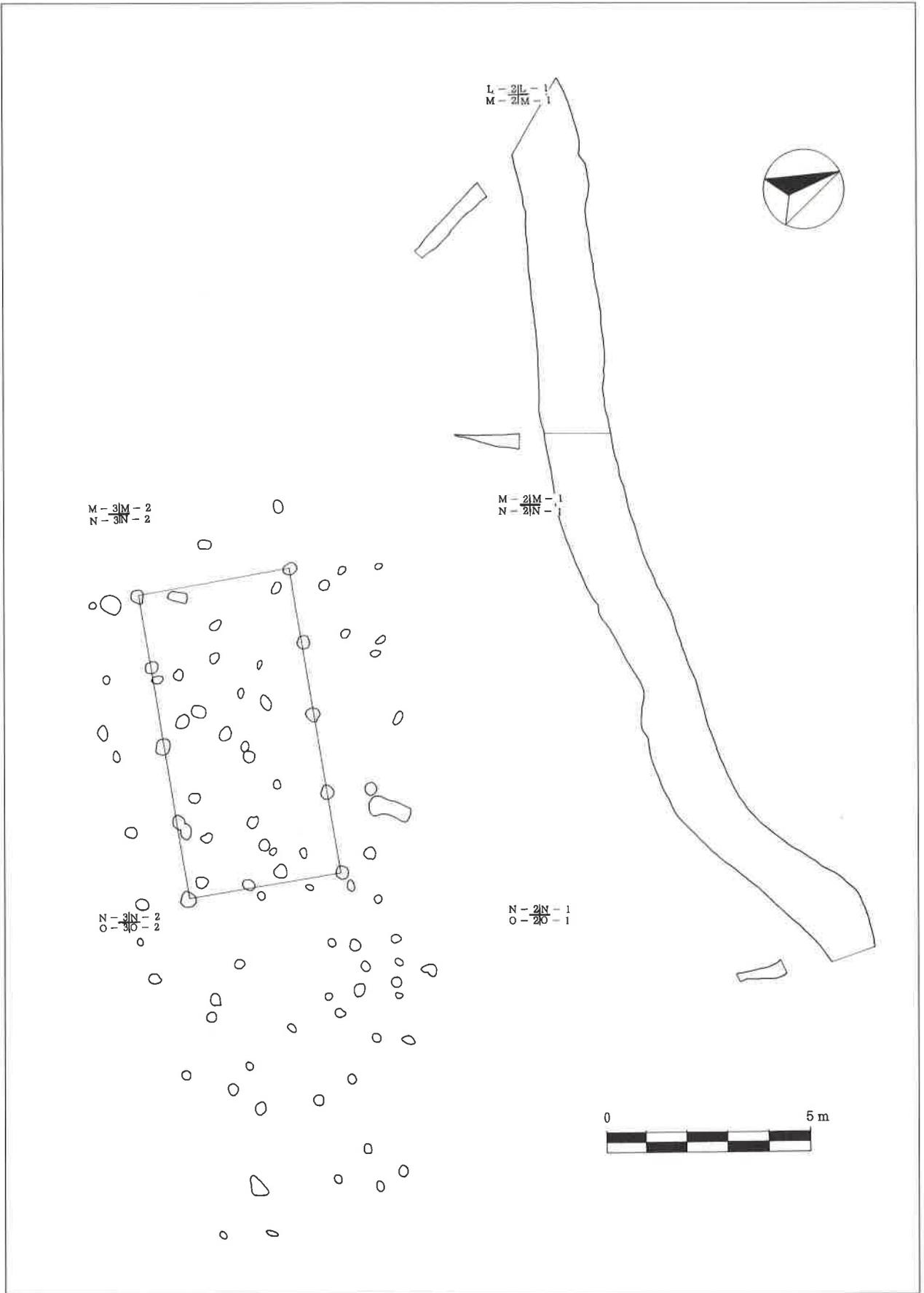
2月23日～26日 N・O-2・3区掘り下げ
M・N・O-1・2・3区遺物取り上げNo1,412～1,420

3月2日～6日 L・M・N・O-1・2・3区精査 航空写真撮影
遺物資料調査（4日～6日）

3月9日～13日 N・O-2・3区掘り下げ 遺物整理
3月16日～18日 遺物整理

第4節 出土遺構

L・M・N・O-1・2・3区では、96の柱穴と溝状遺構が検出された、柱穴から土師器の小片等が出土し、柱穴の時期は城の築城時期と同時期であると思われる。柱穴の配置から、掘立柱建物が1軒以上あったものと思われる。溝状遺構からは、遺物の出土がなく時代の確認はできなかった。



第64図 L～O-1～3区遺構配置図

第5節 出土遺物

出土遺物は、Ⅱ層を包含層とし約460点で、土師器を中心とし、そのほか土器、石器、白磁等が出土している。層の違いによる時期の区分はできなかった。また、磨滅の激しい物や、小片が多く、図化出来たものは少数であった。

1. 土 器

土器は195～203で、いずれも胴部破片である。195は横位に貝殻による条痕文を施されている。196～199は押型文土器で、196・197は山型の押型文が施されている。200は数条の並行沈線が斜位に施されている。201～203は磨滅が激しく器面の調整がはっきりしない。

2. 石 器

石器は204～211の8点である。204・205は黒耀石製の石刃である。206・207は黒耀石のフレイクである。204～206の黒耀石は樋脇町上牛鼻系のものと思われる。207の黒耀石はグレー色をしたものである。208は黒耀石製のスクレイパーである。209は針質安山岩製の石鏃である。210・211は磨石で、210は安山岩製である。

3. 土 師 器

212～219は皿で、口縁直径7.4～8.4cm、底部直径6.0～7.0cm、高さ0.9～1.4cmを測り、底部切り離しは糸切りである。220～223は坏で、220は口縁直径12.3cm、底部直径9.8cm、高さ2.6cm、221は口縁直径11.4cm、底部直径10.3cm、高さ2.7cmを測り、底部切り離しは糸切りである。

222・223は深い坏で、底部切り離しは糸切りである。223は口縁直径11.9cm、底部直径5.4cm、高さ5.4cmを測る。224は低い高台を貼り付けたものである。

4. 黒色土器

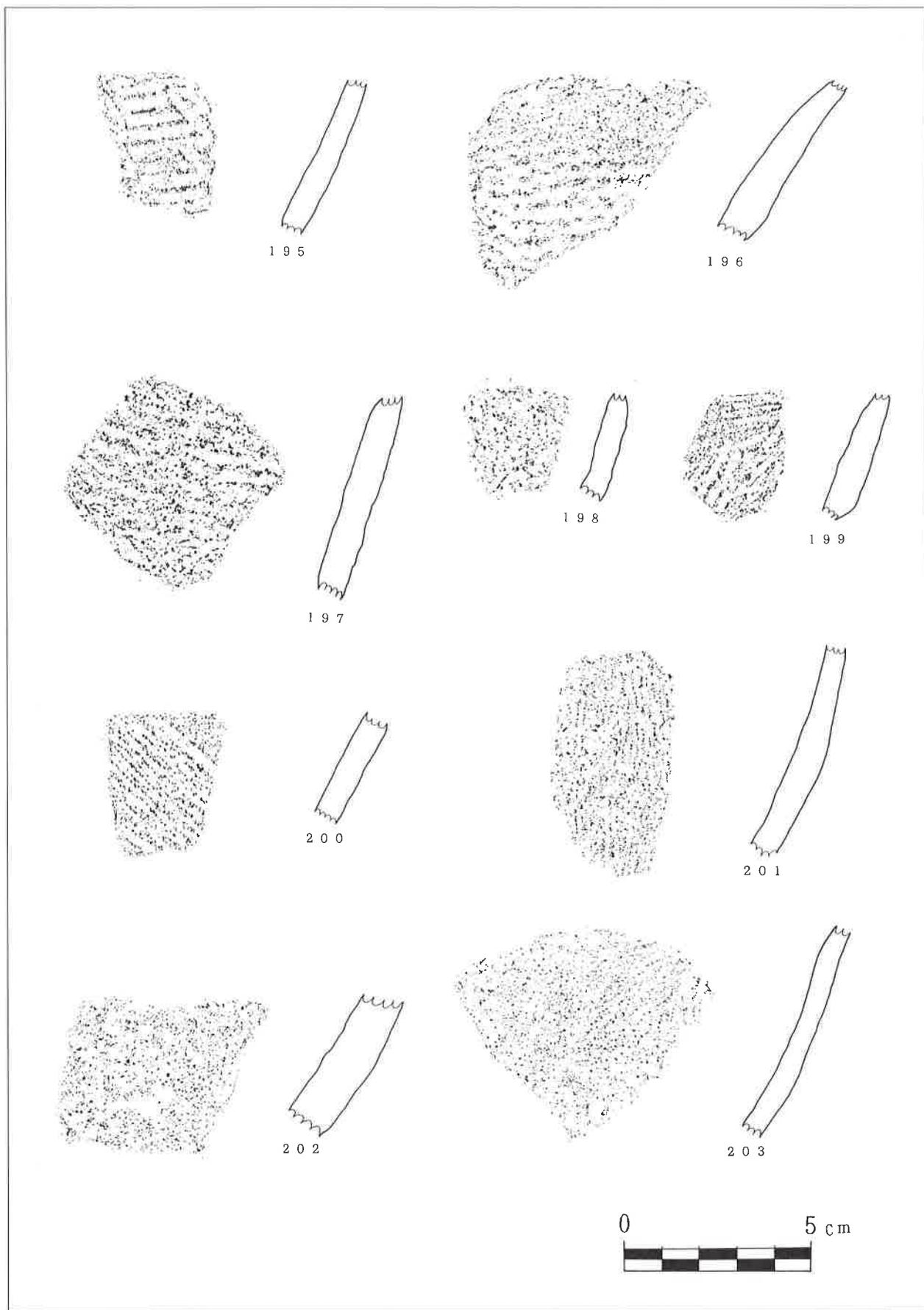
226は黒色土器で、内側だけ黒くなったもの（内黒土師器）の碗で、内弯する体部が、口縁部でわずかに外反する。

5. 須 恵 器

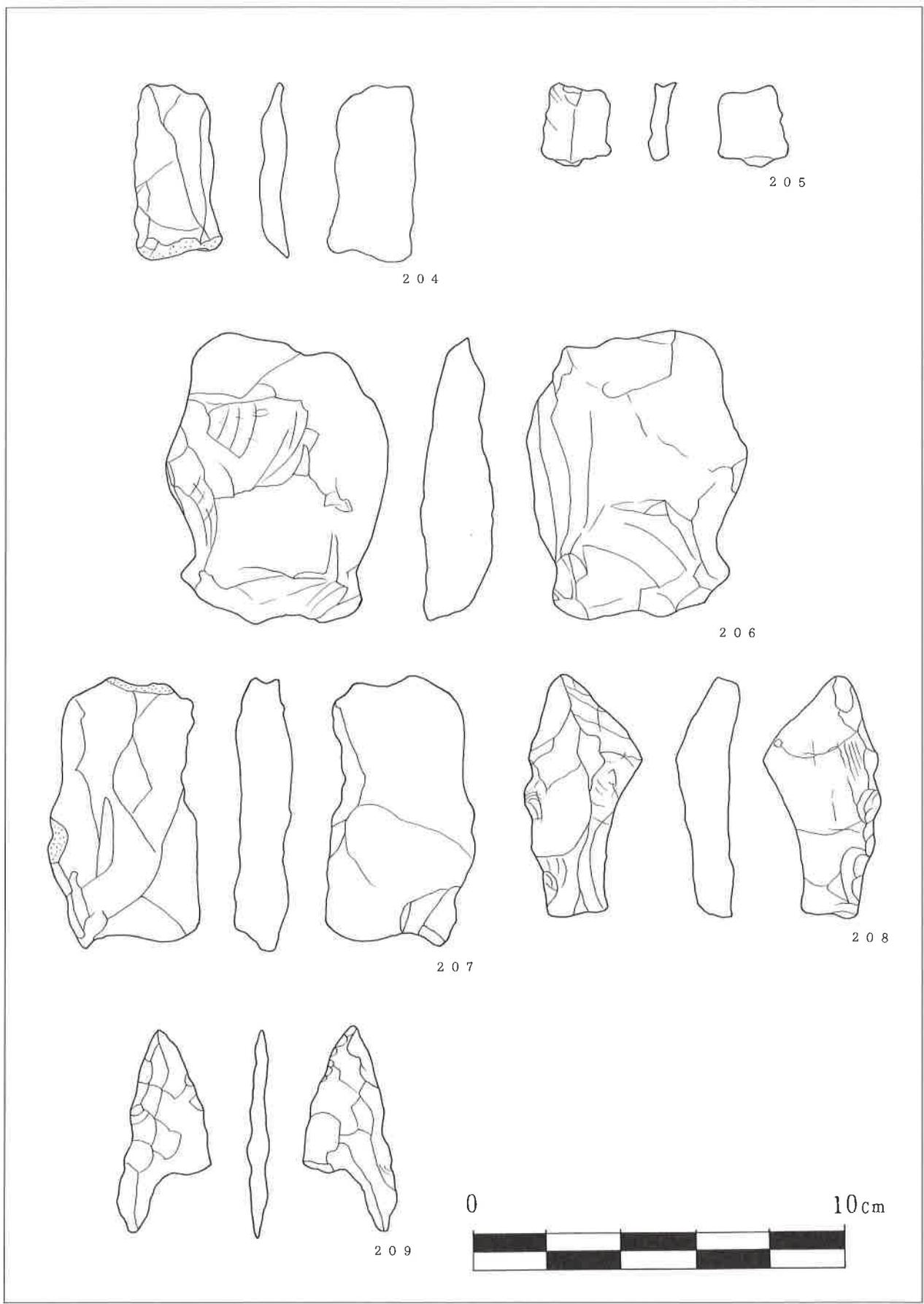
須恵器は碗・壺・甕が出土した。227は碗である。口縁直径11.4cmを測り、色調は灰褐色で、東播系に類するものであると思われる。口縁部には一部自然釉状のものがみられる。

228は壺の胴部で、外面に平行線状の叩きが見られる。

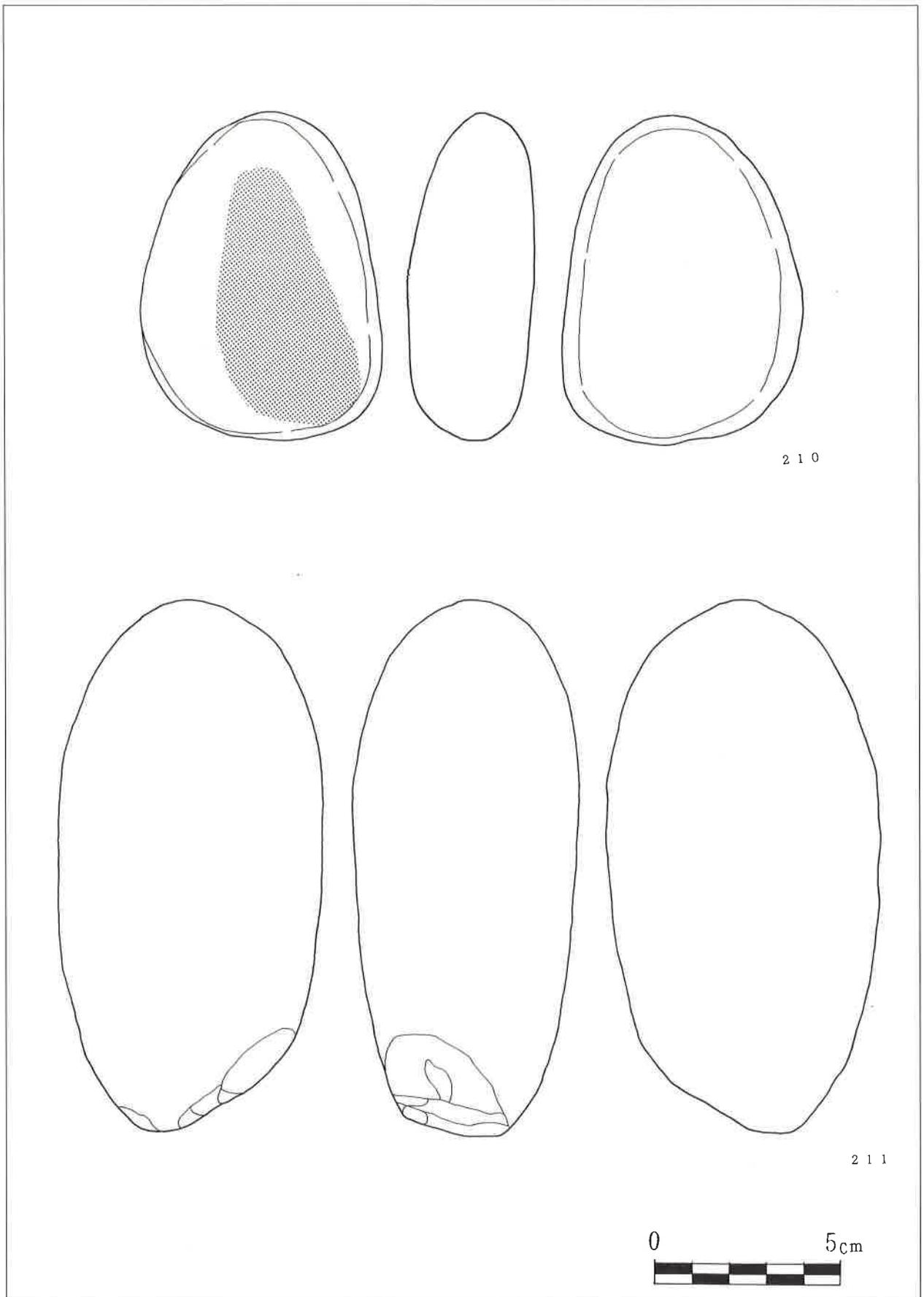
229は甕の底部で、底部直径22.8cmを測り、外面に格子目の叩き、内面に板状圧痕が見られる。外面の格子目は底部付近でズレが見られ、一部はヘラで削った痕が見られる。また、破片の割れ口の胎土は筋状に重なっている。異なる点が見られるが、熊本県樺番丈窯のものであると思われる。



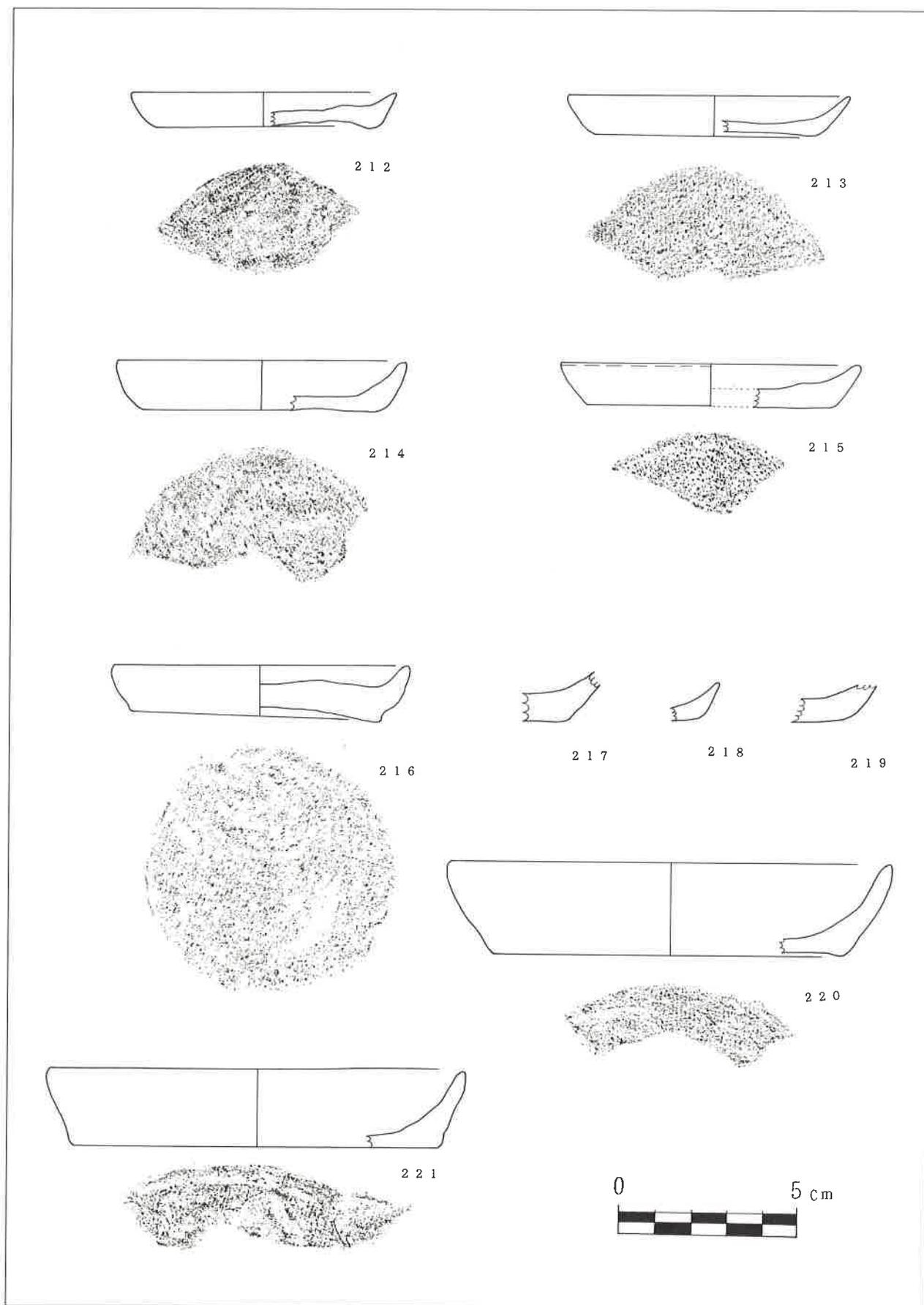
第65図 出土遺物（土器）



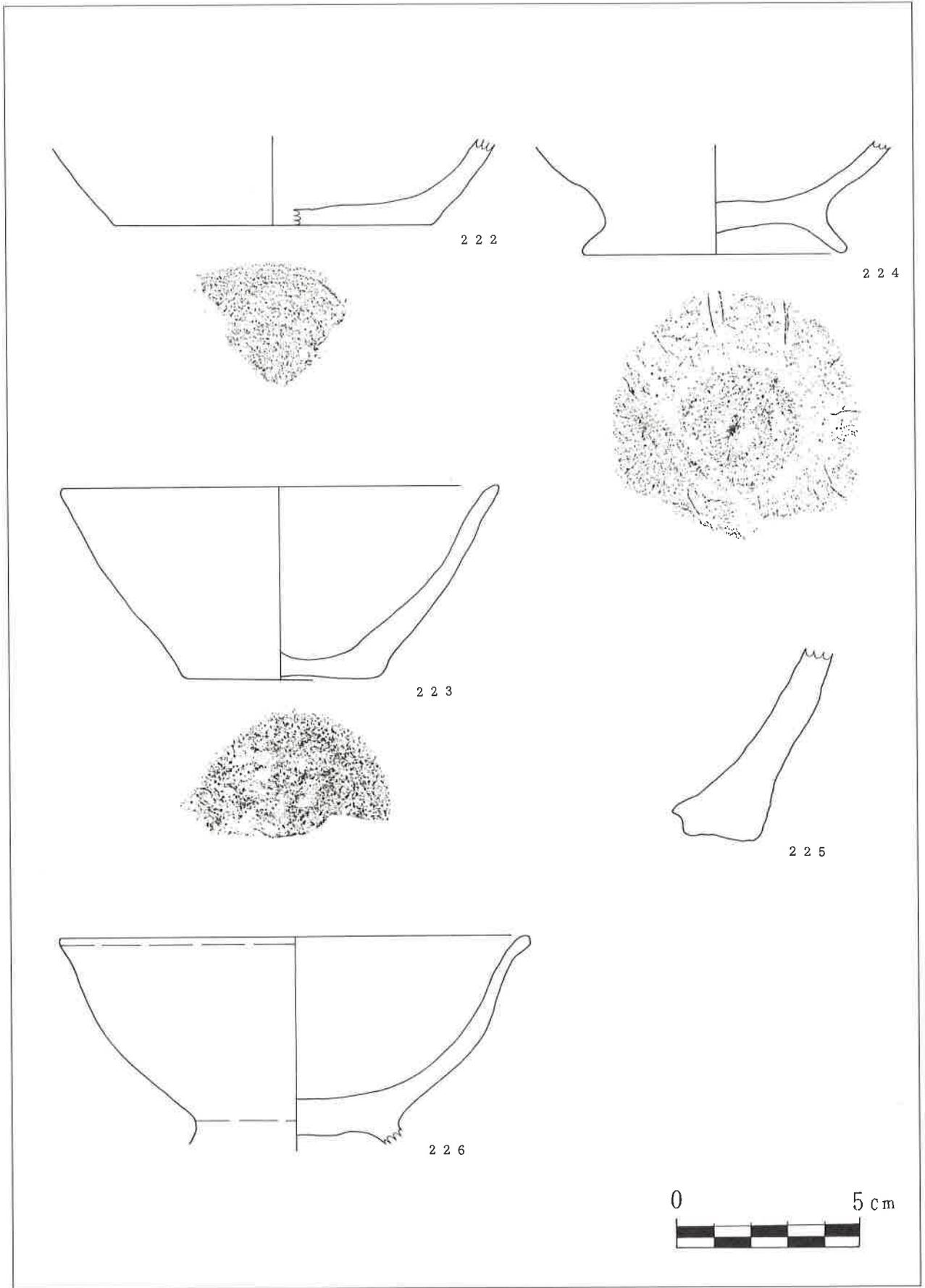
第66図 出土遺物（石器1）



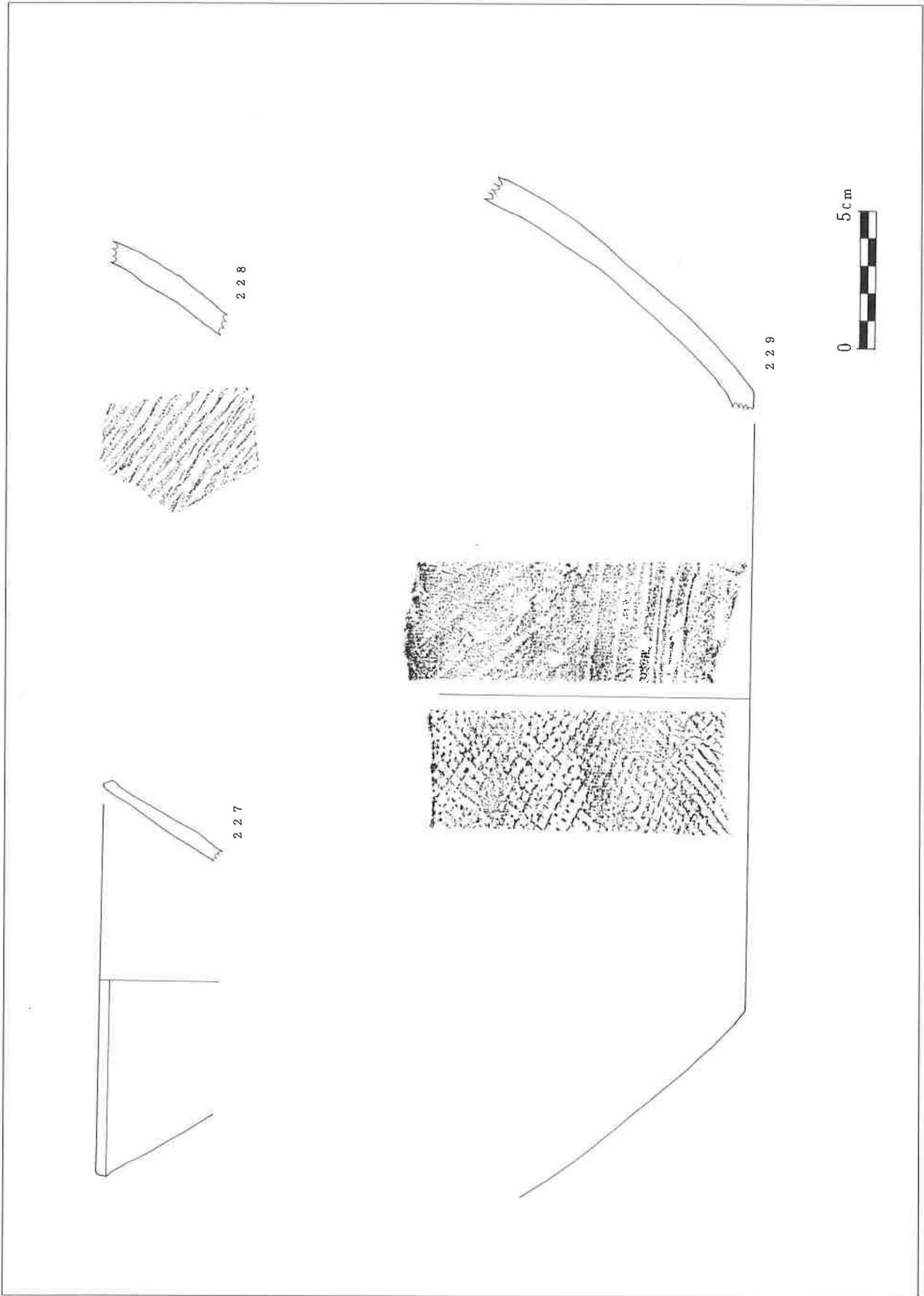
第67図 出土遺物（石器2）



第68図 出土遺物（土師器）



第69図 出土遺物（土師器・黒色土器）



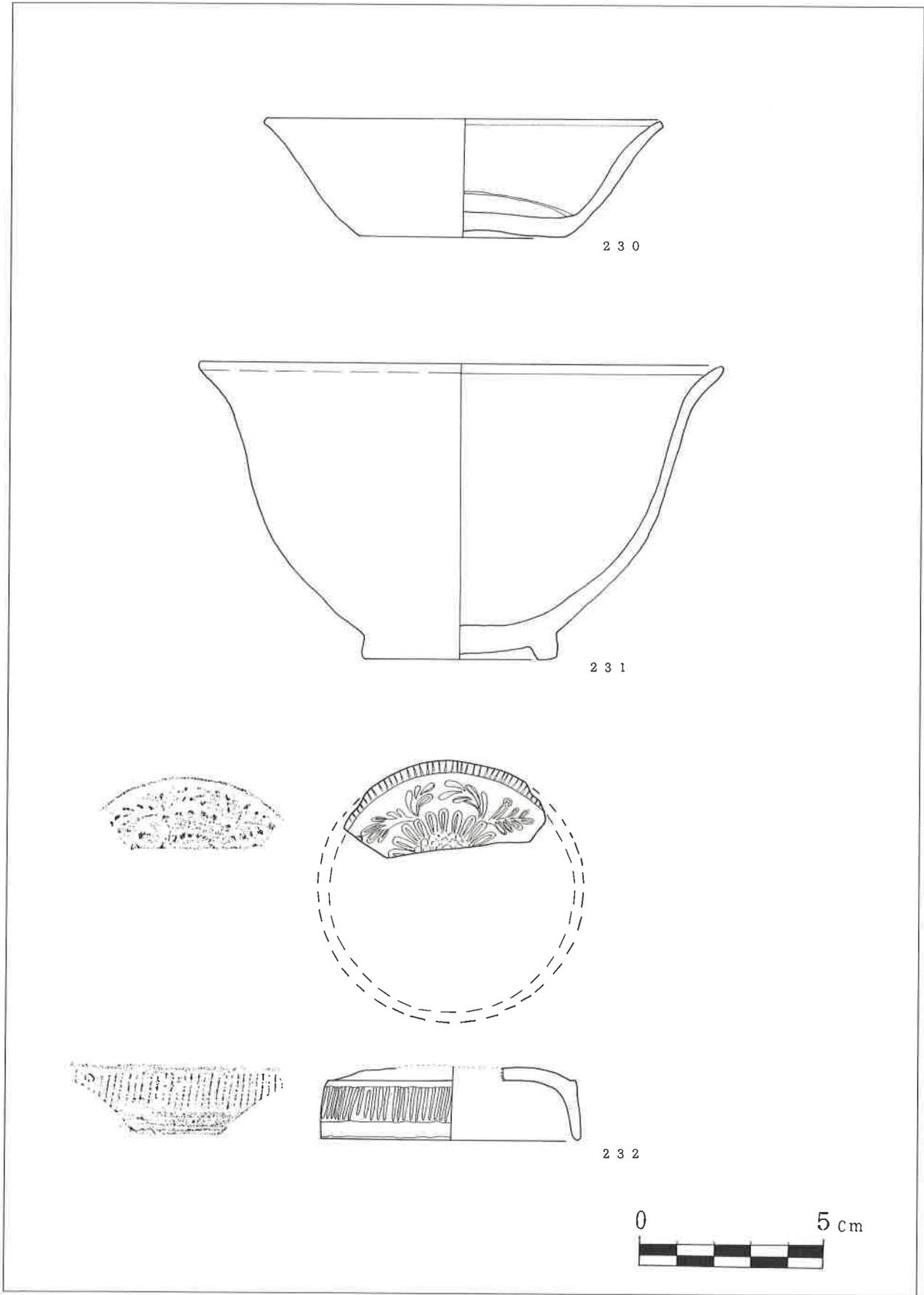
第70図 出土遺物（須恵器）

6. 磁 器

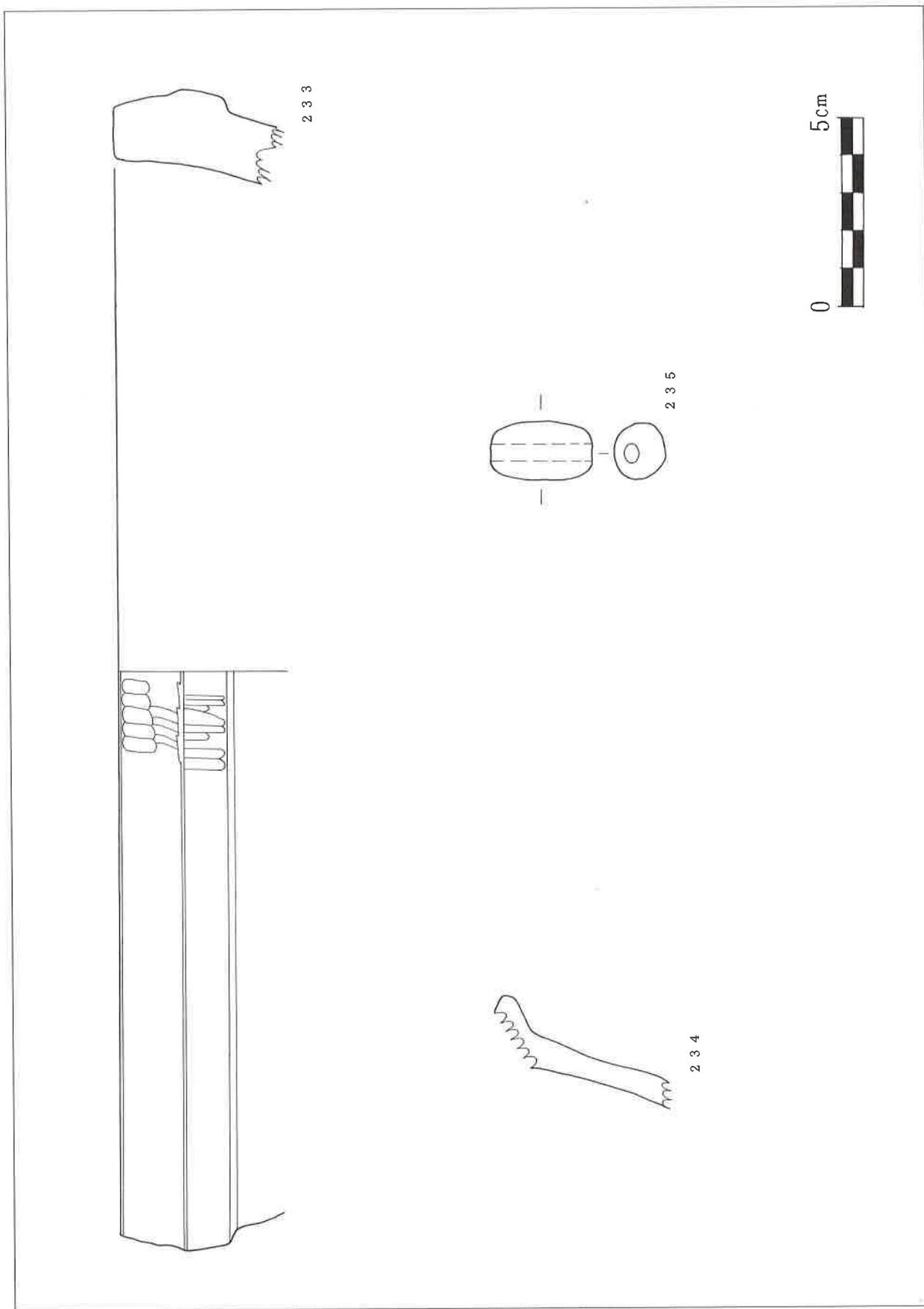
磁器は白磁の皿・碗・合子（蓋）が出土した。230は皿で、口縁直径11.0cm，底部直径5.6cm，高さ3.1cmを測る。231は碗で、口縁直径14.4cm，底部直径5.2cm，高さ8.2cmを測る。230・231は口縁部の釉がかきとられる口はげ口縁のものである。232は合子の蓋で、中国福建省一帯で作られたものではないかと思われるが産地は不明である。

7. 石 製 品

233・234は滑石製石鍋である。233は復元口径は29.8cmを測り，器面には2次加工の物と思われる縦位のノミ痕，破片断面には2条のスジ状の加工痕が見られる。234は器面に煤が付着している。235は滑石製の石錘状製品である。



第71図 出土遺物（磁器）



第72図 出土遺物（石製品）

第12表 出土土器一覽表

図	番号	遺物番号	層	器種	部位	調整(外)	調整(内)	色調	備考
65	195	1113	Ⅱ	深鉢	胴部	貝殻条痕	ナ デ	暗赤褐色	
	196	1257	Ⅱ	深鉢	胴部	山型押型	ナ デ	暗茶褐色	
	197	1404	Ⅱ	深鉢	胴部	山型押型	ナ デ	淡赤褐色	
	198	1288	Ⅱ	深鉢	胴部		ナ デ	暗茶褐色	
	199	1329	Ⅱ	深鉢	胴部		ナ デ	暗茶褐色	
	200	1238	Ⅱ	深鉢	胴部	条痕	ナ デ	淡茶褐色	
	201	1281	Ⅱ	深鉢	胴部		ナ デ	淡茶褐色	
	202	1332	Ⅱ	深鉢	胴部		ナ デ	淡茶褐色	
	203	1030	Ⅱ	深鉢	胴部		ナ デ	淡茶褐色	

第13表 出土石器一覽表

図	番号	遺物番号	層	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
66	204	1286	Ⅱ	石刃	黒曜石	2.4	1.4	0.7	
	205	1374	Ⅱ	石刃	黒曜石	1.1	0.9	0.3	
	206	1067	Ⅱ	フレイク	黒曜石	3.9	3.0	1.0	
	207	1376	Ⅱ	フレイク	黒曜石	3.7	2.1	0.7	
	208	1413	Ⅱ	スクレイパー	黒曜石	3.3	1.6	0.8	
	209	1335	Ⅱ	石鏃	針質安山岩	2.7	1.2	0.3	
67	210	1420	Ⅱ	磨石	安山岩	9.0	6.5	3.3	
	211	1193	Ⅱ	磨石	安山岩	14.5	7.1	6.0	

第14表 出土黒色土器一覽表

図	番号	遺物番号	層	器種	部位	調整(外)	調整(内)	色調	備考
69	226	1358	Ⅱ	碗	口縁～底部	ナ デ	ナ デ	黒・黄灰色	

第15表 出土土師器一覽表

図	番号	遺物番号	層	器種	部位	調整(外)	調整(内)	色調	備考
68	212	1206	Ⅱ	皿	—	ナデ	ナデ	淡赤褐色	
	213	1203	Ⅱ	皿	—	ナデ	ナデ	赤褐色	
	214	1201	Ⅱ	皿	—	ナデ	ナデ	淡赤褐色	
	215	1192	Ⅱ	皿	—	ナデ	ナデ	赤褐色	
	216	1205	Ⅱ	皿	—	ナデ	ナデ	淡赤褐色	
	217	1216	Ⅱ	皿	—	ナデ	ナデ	淡赤褐色	
	218	1210	Ⅱ	皿	—	ナデ	ナデ	赤褐色	
	219	1373	Ⅱ	皿	—	ナデ	ナデ	黄灰色	
	220	1209	Ⅱ	坏	—	ナデ	ナデ	淡赤褐色	
	221	1159	Ⅱ	坏	—	ナデ	ナデ	黄灰色	
69	222	1125	Ⅱ	坏	—	ナデ	ナデ	黄灰色	
	223	1117	Ⅱ	坏	—	ナデ	ナデ	赤褐色	
	224	964	Ⅱ	碗	底部	ナデ	ナデ	黄灰色	
	225	1344	Ⅱ		底部	ナデ	ナデ	赤褐色	

第16表 出土須恵器一覽表

図	番号	遺物番号	層	器種	部位	調整(外)	調整(内)	色調	備考
70	227	1207外	Ⅱ	碗	口縁部	ナデ	ナデ	灰褐色	
	228	1338	Ⅱ	壺	胴部	平行線状	ナデ	茶褐色	
	229	1372	Ⅱ	甕	底部	格子目	ナデ	灰褐色	

第17表 出土磁器一覽表

図	番号	遺物番号	層	器種	部位	備考
71	230	1200	Ⅱ	皿	—	
	231	1091	Ⅱ	碗	口縁～底部	
	232	1191	Ⅱ	蓋	—	合子

第18表 出土石製品一覽表

図	番号	遺物番号	層	器種	石材	備考
72	233	1199	Ⅱ	石鍋	滑石	2次加工
	234	1406	Ⅱ	石鍋	滑石	
	235	1401	Ⅱ	石錘	滑石	

第6節 小 結

L・M・N・O-1・2・3区はD・E-10・11・12区などの他の区に比べて標高が10メートル程低い地点である。調査の結果、最上部の台地側斜面は、L・M・N・O-1区となるが削平されて、包含層は残っていなかった。

遺構は中世の柱穴が96、時期不明の溝状遺構が1つ確認された。柱穴の配置から、掘立柱建物が1軒以上あったものと思われる。

出土遺物は縄文時代の押型文土器・石鏃など含まれているが、層位の違いは確認出来ず、包含層は中世のものであると思われる。中世の遺物は11世紀の内黒土師器などと、13世紀後半から14世紀初頭にかけての白磁・青磁・須恵器が出土しているが、土師器は13世紀後半と思われるものが多く、時期的には13世紀後半であると思われる。

《参考引用文献》

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(28)

『成岡・西ノ原・上ノ原遺跡』鹿児島県教育委員会，1983年

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(7)

『西免・栢場・山神・曲迫・桑ノ丸遺跡』鹿児島県教育委員会，1977年

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(18)

『牛之原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター，1996年

市来町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)

『落シ平・瀧之段・才野ヶ原遺跡』市来町教育委員会，1999年

第9章 ま と め

第1節 上城詰城跡について

1. 土師器の分類

土師器は、平成5年度・7年度から8年度までの調査で出土した遺物を使用した。そのほとんどが詰城部分からの出土である。詰城はその機能上から遺物が少ないので、できる限り実測を行なった。その為、多少計測のずれが生じる恐れは否めない。土師器は主に、口縁部の傾き、胴部の張り底部の切離しや調整などの器形と、焼成具合、内面や器面の調整、口径底径の比、器壁の厚さなどを観察し、分類を試みた。その結果、土師器は坏が4分類7細分、小皿を5分類7細分に分けられた。

坏Ⅰ類はSK-12から出土した一括資料である。口径は13.7cm～14.2cmの範囲にあり、底部径は5.5cm～7.3cmの範囲にある。口径に比べ底径が狭く、底部からはなだらかに立ち上り胴部中央で屈曲する。焼成はあまり良くない。更にabcの3つに細分され、aは器壁が厚いタイプのもの。bはaに比べ薄いもの。cは器高が低いものである。

坏Ⅱ類は平成9年度の調査で主に、鎬連弁文青磁碗と共伴して出土したものである。口径は11.6cm～12.4cmの範囲にあり、底部径は9.7cm～10.2cmの範囲にある。器高は2.2cm～2.6cmである。口径と底径の差が少なく、器高も低くなっている。底部角はなだらかではなくしっかりとしており、胴部は緩やかに湾曲し、口縁部は少々内彎気味になるものである。

坏Ⅲ類はFG-1区からの出土で、主に14～15世紀代の青磁と共伴して出土した土師器である。口縁部は確認できず、口径は計測できなかった。底径は8.8cmで、底部角が少々出っ張り、立上りには一段の稜線が認められ胴部は丸く彎曲気味になる。焼成は良好である。

坏Ⅳ類は器壁が薄く硬質、要するに焼成の良い土師器で、口縁部が外反気味のaと、内彎気味のbとに細分される。このⅣ類は上城部分からも出土している。

小皿Ⅰ類はSK-12から出土した一括資料である。口径は7.2cm～8.7cmの範囲にあり、底部径は5.3cm～6.3cmの範囲にある。器高は0.9cm～1.7cmである。No10を除けば口径は7.2cm～7.6cmの範囲にあり、底部径は5.3cm～5.9cmの範囲にある。器高は0.9cm～1.2cmである。要するにNo10だけ少々大きめであると言える。これをabcの3つに細分した。aは底部角がなだらかで、口縁部は外向である。他のものと比べて少々大きめであるのが特徴である。bは底部角がなだらかで、口唇部が外反気味になる。cは底部角がなだらかで、そのまま外向するものである。

小皿Ⅱ類は平成9年度調査分の土師器である。坏Ⅱ類と共伴する。口縁部形態も同様の傾向を示す。この土師器は(a)厚手のものと(b)薄手のものの2つに細分される。

小皿Ⅲ類は詰城のFG-1区並びに から検出された土師器である。焼成は良く、底部角が出っ張っており、口縁部端は、外反している。口径は6.8cm～7.6cmの範囲にあり、底部径は5.9cm出土した区である。小皿Ⅲ類は(a)口縁部が薄めのものと(b)厚手のものとに細分される。

出土した区である。小皿Ⅲ類は（a）口縁部が薄めのものと（b）厚手のものとに細分される。

小皿Ⅳ類は詰城のF G-1区からの出土である。他の土師器に比べて焼成が良く、硬質で薄手の土師器である。内面中央部がナデにより盛り上がる。底部角はシャープである。

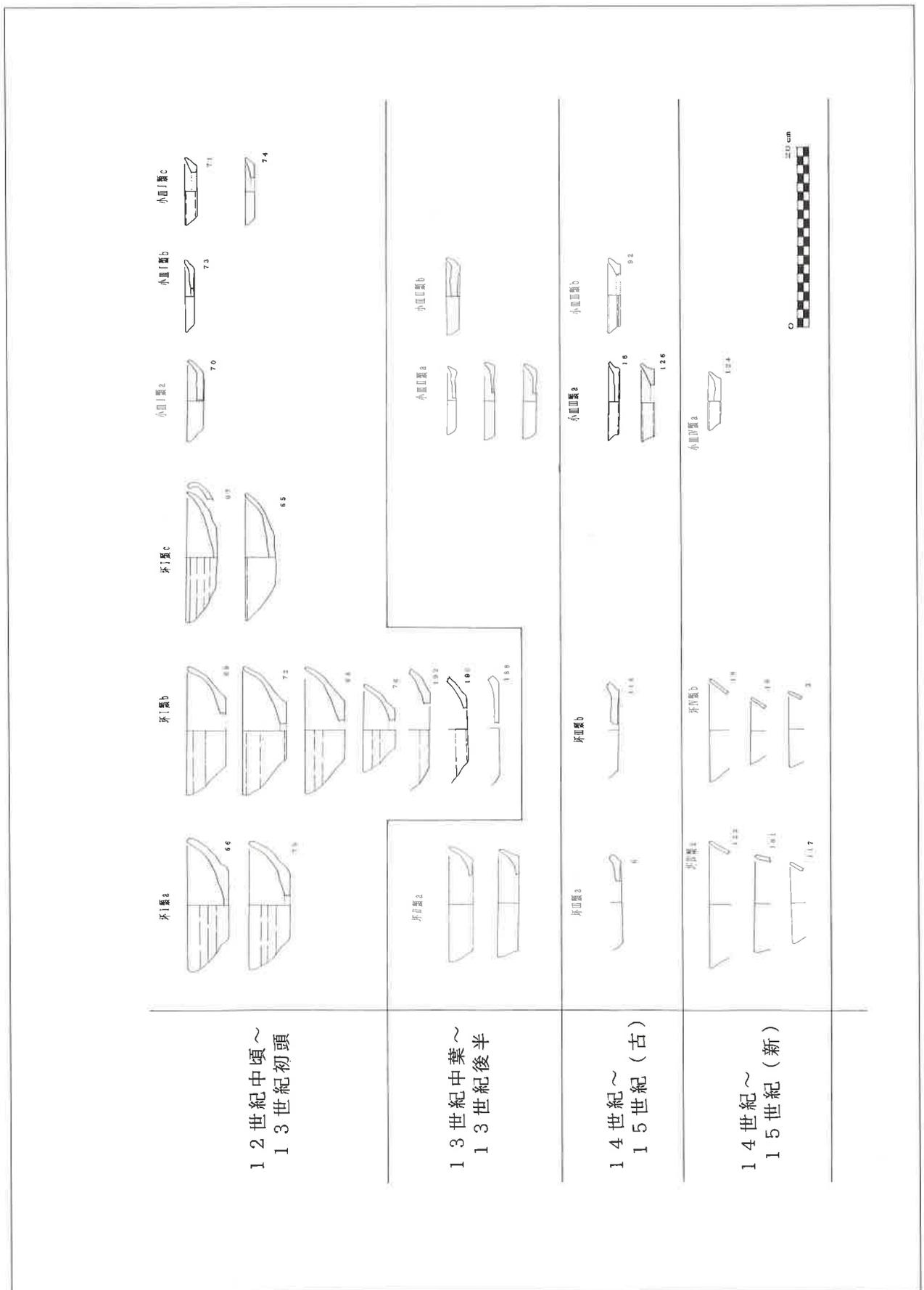
2. 年代について

上城詰城跡から出土した土師器について、器形や口縁部の特徴、法量、また土師器と共伴した陶磁器や太宰府編年を参考に推察してみたいと思う。上城詰城跡から出土した陶磁器やその他の遺物よりその大部分が、12世紀から15世紀の土師器に限定され、底部切離しが糸切りである点も考慮されよう。SK-12からは一括資料として坏7点、小皿4点出土し、すべて底部切離しが糸切りで、その内の坏の一つが耳坏風である。土師器は共通の特徴が認められ、その出土状態も重なったり伏せて置かれており特殊な状態で検出された。恐らくは祭祀遺構であると考えられる。検出された土師器の内1点が耳が付く土師器で、これは奈良平安時代より見受けられ、その用途は箸置きとも考えられている。この耳付きの土師器は、糸切り底の土師器で若干例があるが、13世紀まで遡れない。上城詰城跡から出土した土師器は完璧な耳皿と言えず、模したものとする。また土師器の口径も13.7cm程度であり、大きめである。これを太宰府編年に添って照らしてみると器高は若干上城詰城跡の土師器が高めであるが、12世紀中葉から13世紀初めのものと符合する。それに比べ底径は狭い。また器壁が厚く、焼成が悪いのが特徴である。これは南九州独自のスタイルなのかもしれない。故に一括資料である坏Ⅰ類と小皿Ⅰ類を12世紀中頃から13世紀初頭と推定した。坏Ⅱ類と小皿Ⅱ類は口縁部形態が極めて酷似しており、同地区より出土したことから同時期の物であることがわかっている。この平成9年度の調査区では、13世紀中葉から13世紀後半の鎬連弁文青磁碗や13世紀後半の東播磨系須恵器・口禿白磁碗が出土している。坏Ⅱ類と小皿Ⅱ類は、恐らくこれらの青磁白磁と同時期と考えられよう。坏Ⅲ類と小皿Ⅲ類は、主にF G-1区から出土したものである。F G-1区からは14世紀から15世紀の青磁盤や雷文青磁碗が数多く出土しており、坏Ⅲ類と小皿Ⅲ類はこれらの青磁と同時期のものと思われる。坏Ⅳ類と小皿Ⅳ類もF G-1区から出土しているが、Ⅲ類のものに比べて焼成が良く、薄手である。恐らくⅢ類よりも後出のものと思われる。

以上まとめてみると下記の通りになるものと考えられる。あくまで上城詰城跡の半分しか調査を実施しておらず、今後新たな形態の土師器が出土する可能性もあり、且つ出土遺物は詰城部分から出土したものが多く、廓の性格上出土遺物は少なく破片の実測も小さなものもできるだけ実測したため、多少のあいまいさや誤差がある可能性も否定できない。

時間的変遷

時 期	土師器分類	共 伴 遺 物
12世紀中頃から13世紀初頭	坏Ⅰ類小皿Ⅰ類	
13世紀中葉から13世紀後半	坏Ⅱ類小皿Ⅱ類	鎬連弁文青磁碗東播磨系須恵器
14世紀から15世紀（古）	坏Ⅲ類小皿Ⅲ類	雷文青磁碗青磁盤
14世紀から15世紀（新）	坏Ⅳ類小皿Ⅳ類	雷文青磁碗青磁盤



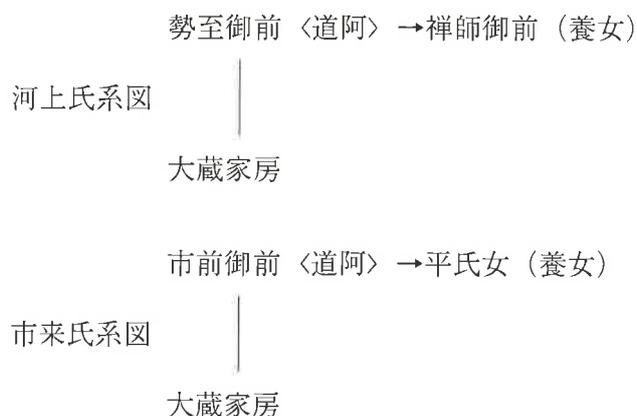
第73図 土師器編年案

第2節 市来氏について

市来の名が記録に出てくるのは、健久8年（1197）に頼朝の命令によって各地の庄園や所領などを記録させた健久図田帳（この中の薩摩国の国中惣図田帳）に初めてでてくる。

「市来院百五十町」 島津御庄寄郡 院司僧相印
地頭右衛門兵衛尉

院とは租税となる米などを納めていた倉庫で、延暦14年（795年）までは一郡一院であったが火災にあったときや、運んでくる不便さなどがあり近隣の郷ではその中央に、不便なところでは郷ごと置かれるようになった。当時は村は郷に、郷は郡に、郡は国に隷属されており、国には国衙があって国司が治めていた。郷には郡司がいて管理していた。それが健久3年（1192年）に鎌倉幕府は国には守護を置き、その下に地頭を置き、荘園・公領の警察権、荘園領主・国衙の租税を取り立てる役目を負わせた。市来院地頭職は島津氏が代々受けついている。地頭の下には直接管理する郡司（院司）がいた。市来院は寄進地系庄園（土地を中央高官に寄進し、自分が管理することで不輸不入の権を獲得した）で、島津御庄寄郡の一つである。市来院司（郡司）は院司僧相印と呼ばれる人が最初記録に出てくる。市来町郷土誌によるとこの院司僧相印は大蔵家房としている。大蔵氏は、市来氏の母方に当たる。ここで市来氏の母方の系図を見てみることにする。



河上氏系図と市来氏系図とは多少異なるが、法名「道阿」と大蔵家房は婚姻し、子供がいなかったため、養女をもらう。これが市来初代政家の母になる。養女である禪師御前は新田宮執印職、五大院院主職である国分左衛門尉友成と婚姻し、2人の子をもうける。政家と家忠である。市来太郎左衛門尉政家は父国分左衛門尉友成の姓である惟宗姓を名乗ることになる。弟家忠は母方の大蔵姓を受け継ぐ。政家は寛元2年（1244年）7月19日付けで、養祖母の道阿弥陀仏から市来院郡司職を譲り受け、同年8月18日幕府の確認がなされた。橋口次郎大蔵家忠は宝治元年（1247年）5月5日付けで、市来院の内河上名主職を譲り受けた。こうして市来氏・河上氏が市来院を直接統治していくことになる。

第3節 その後の市来氏・河上氏の動向

- 1262年（弘長2年） 二代島津忠義の催促で京都大番役に就く（友成(60)・政家(30)）
- 1333年 鎌倉幕府滅亡。
- 1334年（建武元年） 五代島津貞久は後醍醐天皇より市来院名主職に任是られる。
- 1336年（建武3年） 後醍醐天皇は吉野へ落ちる（南朝）
（市来時家〈市来鶴丸城〉・河上家久は南朝に加勢する。）
- 1339年（暦応2年） 後醍醐天皇が吉野で亡くなる。
- 1339年（暦応2年） 鎮西深題一色範氏から河上家久へ幕府に味方するよう催促状がくる（市来にもきたと考えられる。）
- 1340年（暦応3年） 市来鶴丸城は落ちる。
- 1350年（観応元年） 足利尊氏の弟直義の養子（直冬）が南朝について、河上家治に（恐らく市来氏にも）味方するように催促があった。
- 1353年（文和2年） （旧記前12467）で、六代島津師久の敵として市来氏家がでてくる。このころ島津五代貞久は薩摩守護を第二子の師久・大隅を第三子の氏久へ譲る。
- 1355年（文和4年） 市来氏家は島津貞久が引退して住んでいた木牟礼城を攻める。知識（出水城にいた師久はかけつけ、市来氏は退く。
- 1355年（文和4年） 市来氏家は島津貞久所領の櫛木野城を攻める。
- 1356年（延文元年） 足利二代将軍義詮が島津貞久に市来院地頭職ならびに市来院名主職の確認文書を出す。
- 1368年（貞治6年） 氏久から河上家長へ河上村地頭職安堵の書状。
- 1372年（応安5年） 島津師久が渋谷氏や入来院氏、菱刈氏、牛屎氏などに攻められ、志布志の氏久に救援を求めた。この時、氏久の救援部隊の邪魔だてをしている。
- 1376年（至徳2年） 氏久・伊久は犬追物を開催し、市来忠家が招待されている。
- 1392年（明德3年） 南北朝合体。
- 1395年（応永2年） 島津氏久は九州探題今川了俊と結託していた反勢力の渋谷一族を攻める。この時、市来忠家も島津氏に協力。
- 1400年（応永7年） 総州家島津伊久と奥州家島津元久が仲違いとなり、市来忠家は伊久に付いた。4月に元久の軍勢に市来鶴丸城が攻められる。
- 1410年（応永17年） 第7代島津元久が京都に上っている間に、渋谷一族が元久に反旗をひるがえした。
- 1411年（応永18年） 島津元久・島津久豊・伊集院頼久と共に市来家親も渋谷攻めに参加。
- 1411年（応永18年） 島津元久が亡くなった。後継ぎがいなかったため、伊集院頼久は自分の子を第8代大守にさせようとしたが、知らせを聞いた元久の弟である島津久豊が第8代大守となる。そして伊集院頼久の企みに対して怒り、攻める。この時市来家親も参加。
- 1416年（応永23年） 島津久豊の犬追物に市来家親が呼ばれる。
- 1425年（応永32年） 島津久豊が没し、久豊の長子の島津忠国が第9代大守となる。
- 1426年（応永33年） 市来家親が島津忠国の犬追物に呼ばれる。

- 1441年（嘉吉元年） 忠国の弟である持久が叛いた。市来久家（家親の子）は持久に味方した。
- 1446年（文安3年） 市来久家が島津忠国の犬追物に呼ばれる。
- 1448年（文安5年） 忠国と持久が仲直りをする。
- 1462年（寛正3年） 市来久家は島津忠国の嫡男の立久に反旗をひるがえす。立久は市来城を攻め市来久家は敗れた。こうして市来氏は滅亡する。その後、市来の地は島津の直轄地となり、島津の手の地頭が治めてゆくことになる。河上氏は市来氏滅亡後も所領安堵されている。

第4節 市来氏の貿易について

太祖李成桂が高麗を滅ぼして朝鮮を建国してから南九州との貿易は始められていたが、第4代の世宗の代になるとますます増大した。市来町郷土誌によると太祖から第3代太宗までは無名の貿易者がかかりいたが、世宗の頃になると、島津・伊集院・市来の3氏に限られてくるといふ。李王朝の「太祖実録」から「世宗実録」にかけてでてくる主な名前は次の通りである。（市来町郷土誌より）

島津 伊久	（太祖4年4月）
伊集院頼久	（太祖4年4月から世宗16年7月まで13回）
島津 元久	（太宗15年12月から世宗2年12月まで6回）
久豊	（世宗5年1月から世宗5年10月まで4回）
貴久	（世宗5年10月から世宗25年11月まで8回）
好久	（世宗16年6月から世宗18年2月まで2回）
伊集院常喜	（太宗10年9月）
為久	（世宗17年9月から世宗31年2月まで7回）
市来 親家	（太宗10年4月，太宗10年7月，世宗即位年12月）
久家	（世宗18年8月，世宗20年9月）

市来町郷土史によれば市来親家とあるのは家親の誤りであるという。その他「海東諸国紀」によると市来久重・国久，大蔵氏など市来氏の一族がみられる。市来家親の朝鮮に対しての輸出品には南方産の品が多く，琉球・明との交易が考えられ，こうして手に入れた品の一部を朝鮮との貿易に使用したと市来町郷土誌では考察している。また，栗林文夫氏は『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(8)』「針原遺跡」の中で市来貝塚や針原遺跡から出土した滑石製品などから市来・河上両氏が，肥前やその他の地域と交易をしていたことを指摘している。上城詰城跡では，12世紀から15世紀にかけての白磁や青磁器・滑石などが出土しており，この事を如実に物語っている。この市来においてこれだけの海外貿易品を持てるのは市来河上両氏に他ならない。

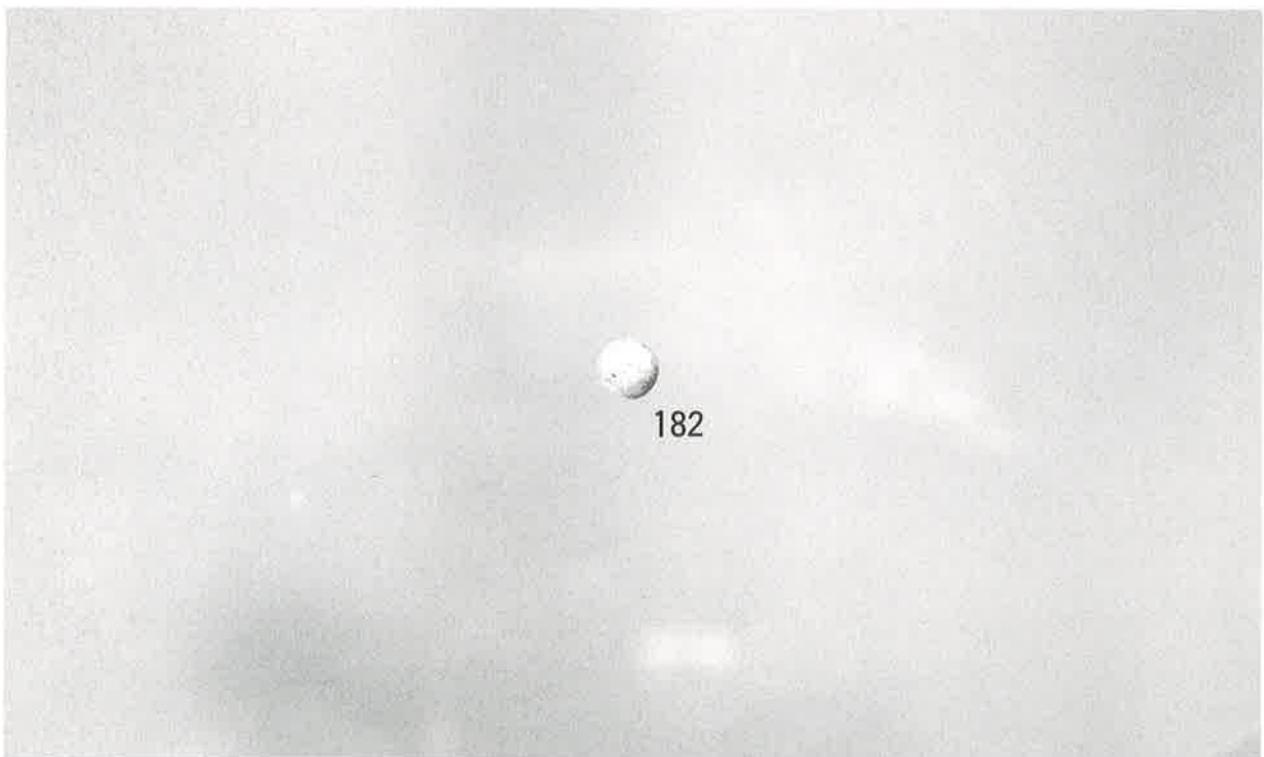
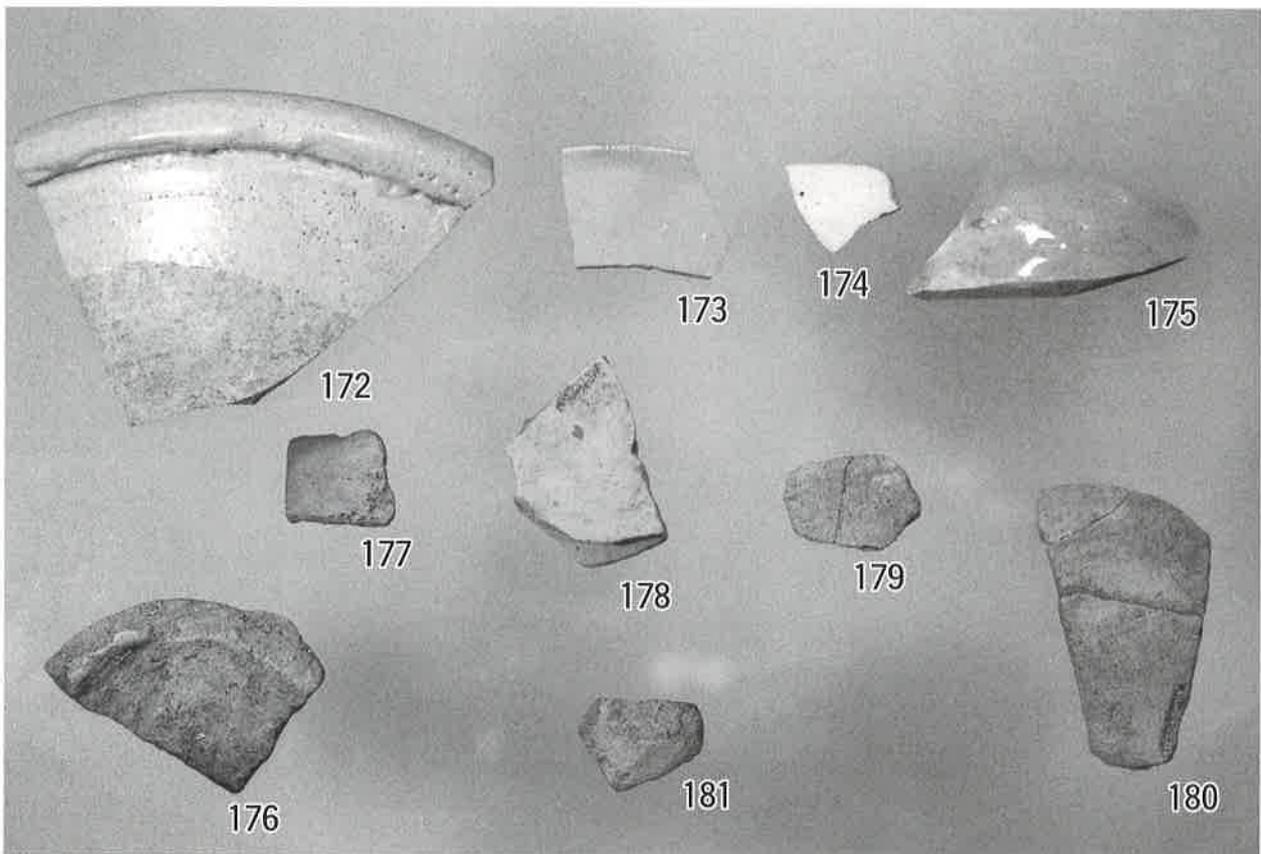
第5節 上城詰城跡の居住者

河上氏の系図によると大蔵氏の初代政房は上城詰城の隣の鍋ヶ城に居住していたとされている。時期は宝亀年間（770年から780年）で、奈良時代になる。大蔵氏は市来郡司であったということは先述しているが、奈良時代に山城などは考えられず恐らく院があったのではなかろうか。院を管理する官衙が発展し、城となったと筆者は考察する。また、上城詰城と鍋ヶ城はあまりにも近くであり一体の城として機能していたのではなかろうか。市来町郷土誌でも同様な事を指摘している。恐らく、市来氏初代政治家・河上氏初代家忠はここ鍋ヶ城で育ったものと考えられよう。市来氏3代時家の頃には市来鶴丸城に居たことはわかっている。また、市来氏の菩提寺である来迎寺は鍋ヶ城・上城詰城の大里田圃を挟んだ台地にあり、鶴丸城からは遠い位置にあり、鶴丸城へ移る前から来迎寺はあったものと考えられる。そうしたことから恐らく上城詰城は市来氏の最初の居城の一部であったと考えられよう。

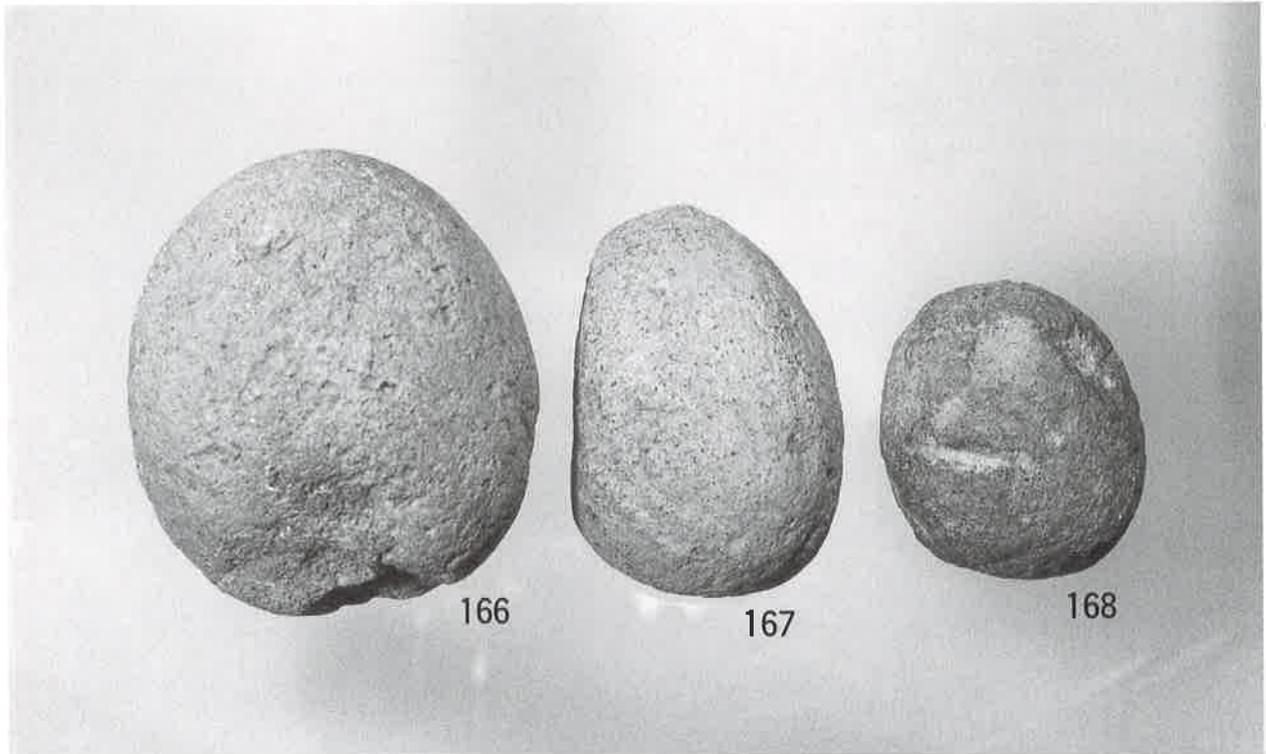
〈参考文献〉

- 1976 森田賢次郎・森田勉『九州歴史資料館研究論集2』「太宰府出土の土師器に関する覚え書き」
1977 森田勉『九州歴史資料館研究論集3』「太宰府出土の土師器に関する覚え書き(2)」
1978 森田勉『九州歴史資料館研究論集4』「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」
1979 森田賢次郎『九州歴史資料館研究論集5』「太宰府出土の土師器に関する覚え書き(3)」
1982 『市来町郷土誌』市来町郷土誌編集委員会
1982 森田勉『貿易陶磁研究No2』「14～16世紀の白磁の分類と編年」
1982 上田秀夫『貿易陶磁研究No2』「14～16世紀の青磁碗の分類について」
1982 小野正敏『貿易陶磁研究No2』「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」
1983 山本信夫他『太宰府市の文化財第7集』「太宰府条坊跡Ⅱ」
1985 山本信夫『貿易陶磁研究No5』「日本における初期高麗青磁について」
1988 二宮忠司他『福岡市埋蔵文化財調査報告書第192集』「田村遺跡Ⅴ」
1989 赤司善彦『九州歴史資料館研究論集14』「太宰府出土土器の検討」
1990 梅北浩一・宮田栄二『伊集院町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)』「一字治城跡」
1991 梅北浩一『伊集院町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)』「一字治城跡」
1992 梅北浩一『伊集院町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)』「一字治城跡」
1993 出口浩『鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(16)』「清水城跡」
1993 出口浩『鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(17)』「谷山菊池城跡」
1994 富田逸郎・栗林文夫『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(8)』「針原遺跡」
1997 堂込秀人『大口市埋蔵文化財発掘調査報告書(20)』「新平田遺跡・辻町B遺跡」
1997 宮下貴浩『鹿児島中世史研究会報52』「持躰松遺跡から見た中世の南薩摩について」
1997 山本信夫・山村信榮『国立歴史民俗博物館研究報告第71集』「九州・南西諸島」
1997 新町正『市来町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)』「鍋ヶ城跡」

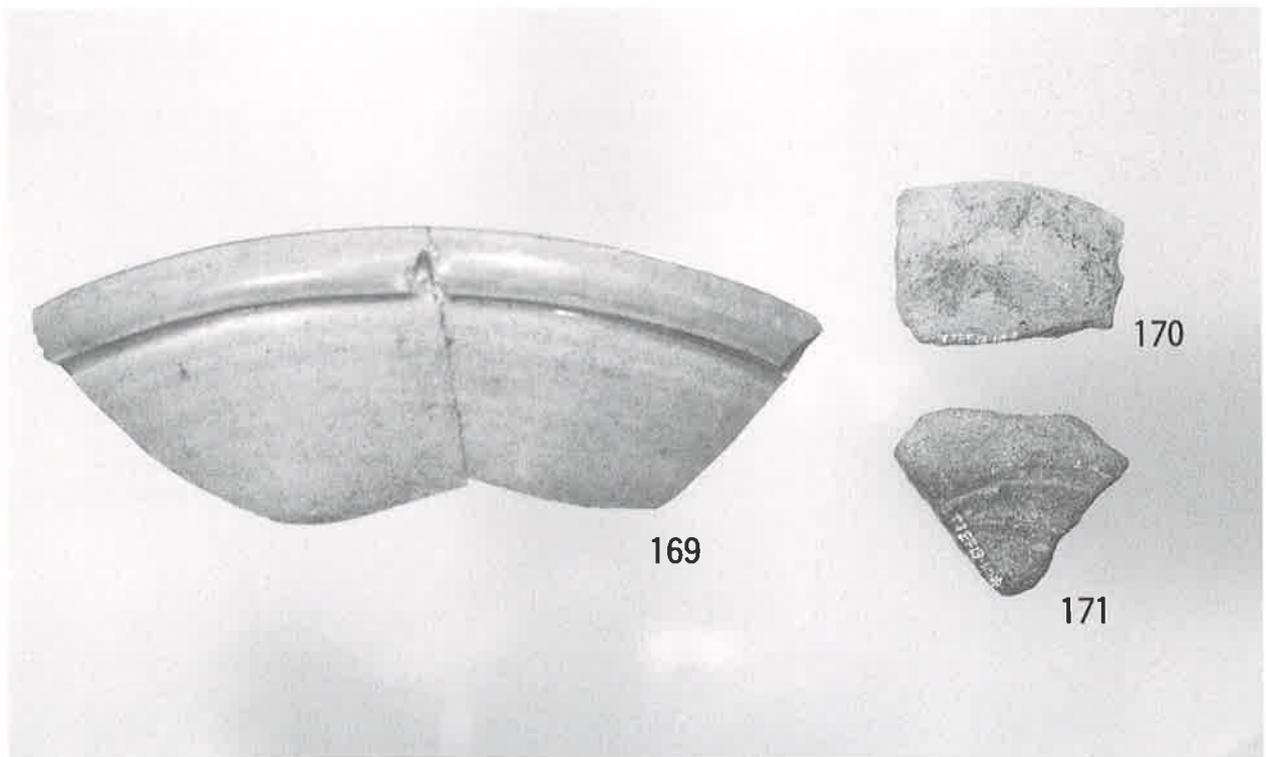
圖 版



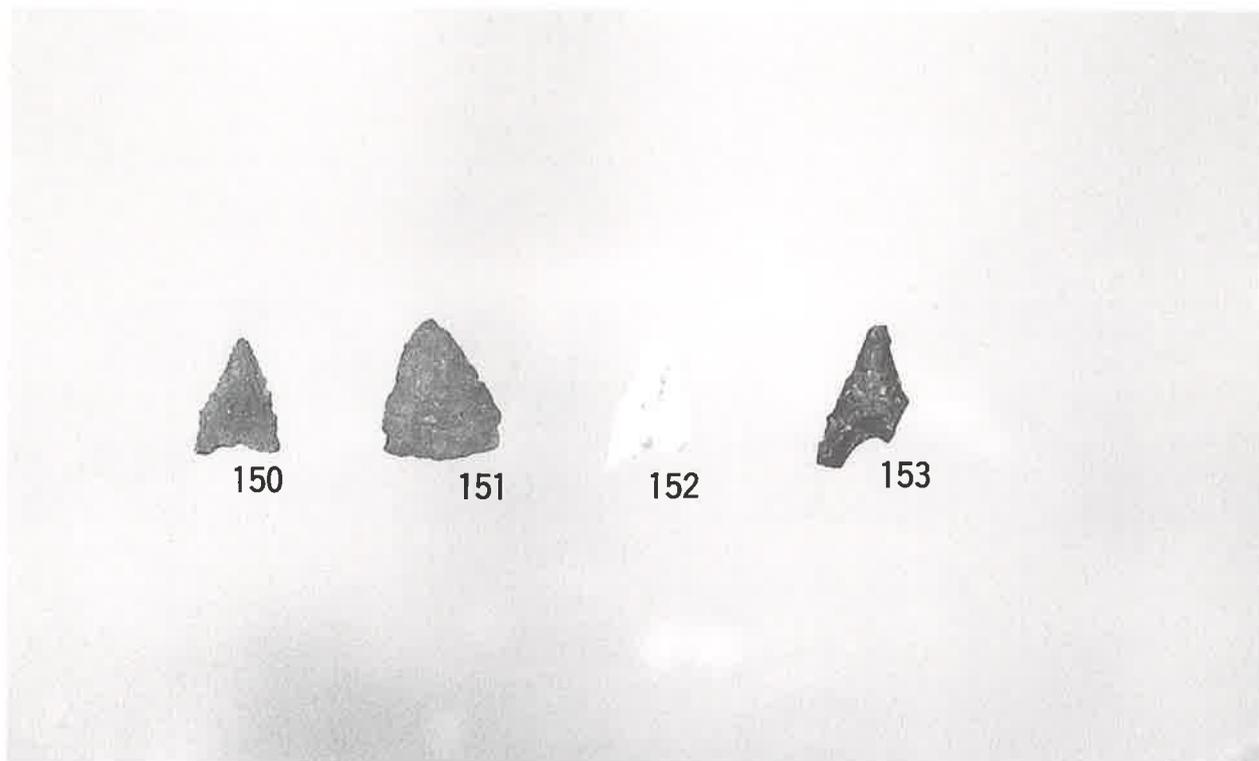
中世の遺物



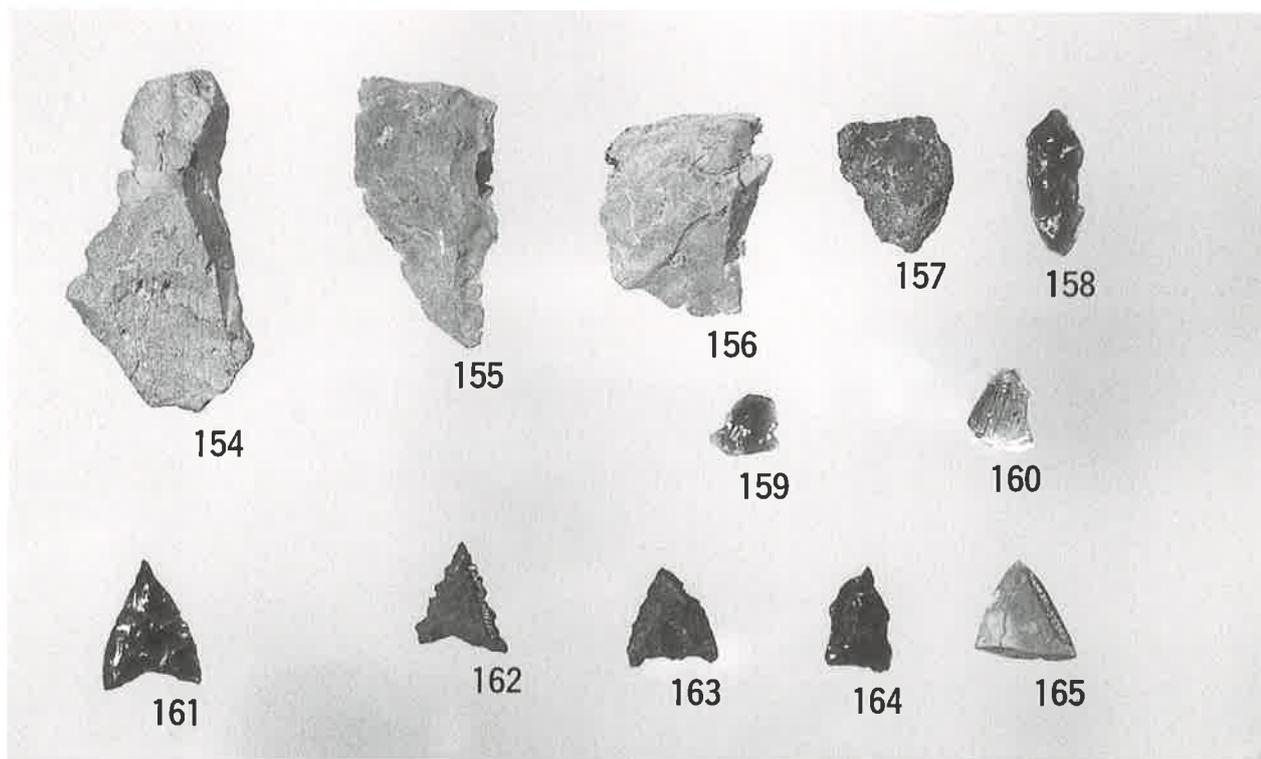
縄文時代出土遺物 (二)



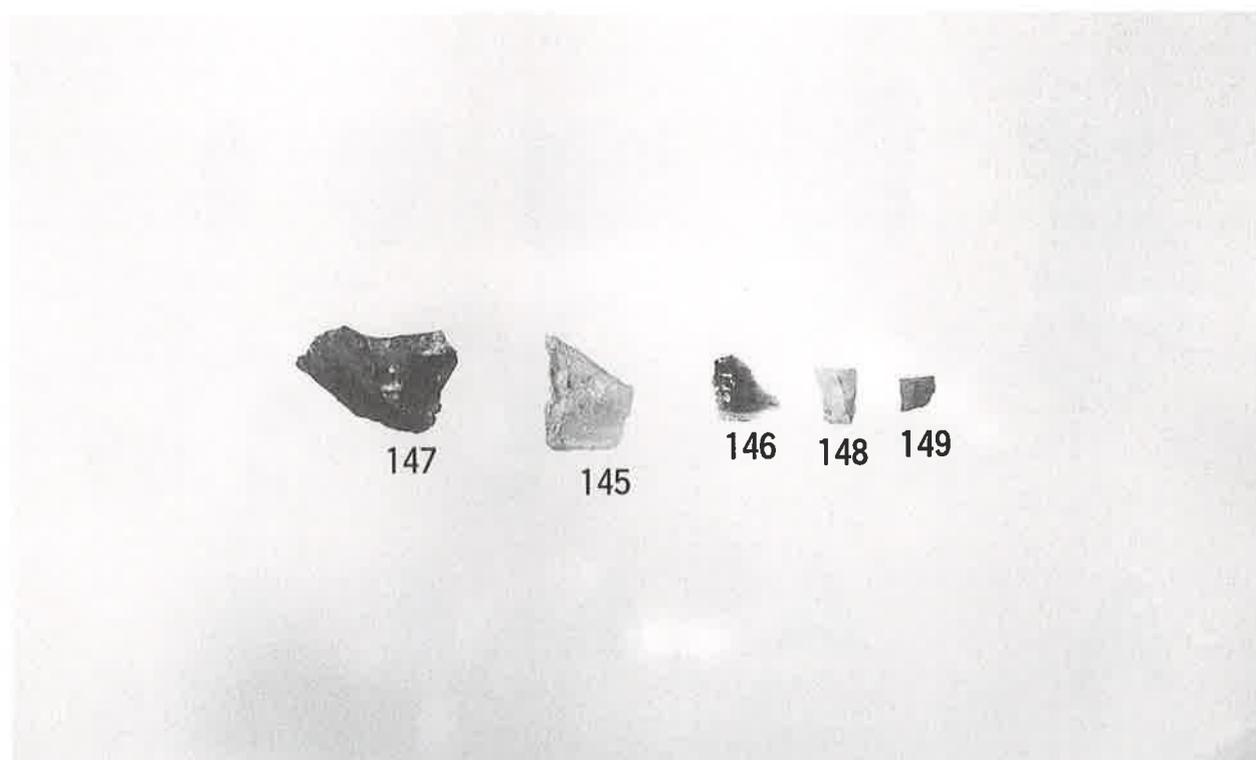
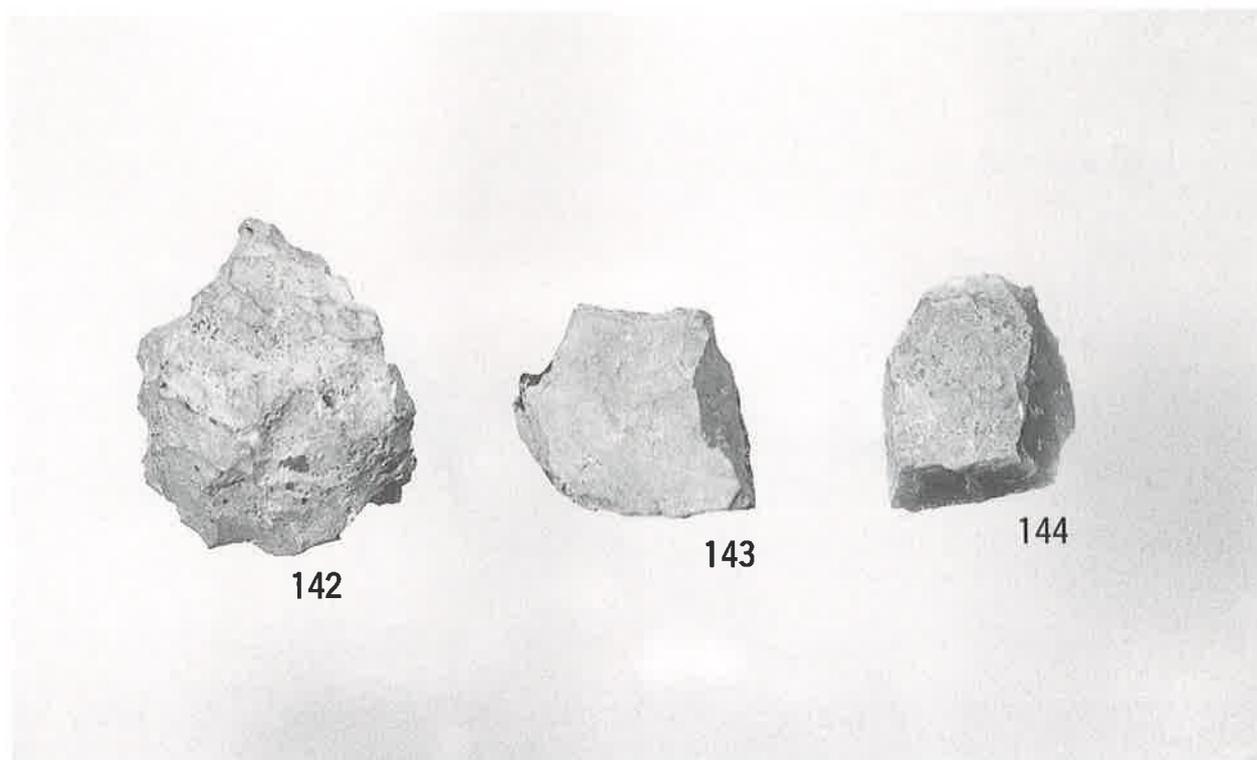
表面採集遺物 (中世)



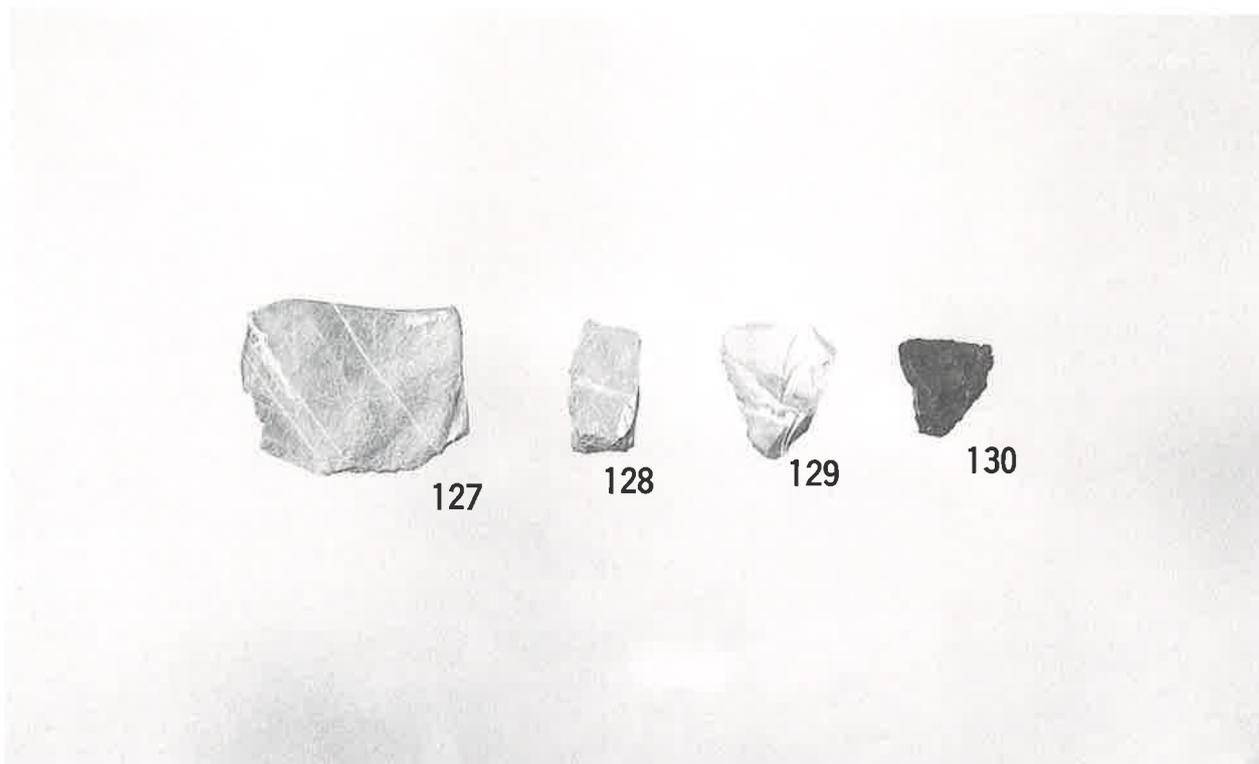
表面採集遺物（縄文）



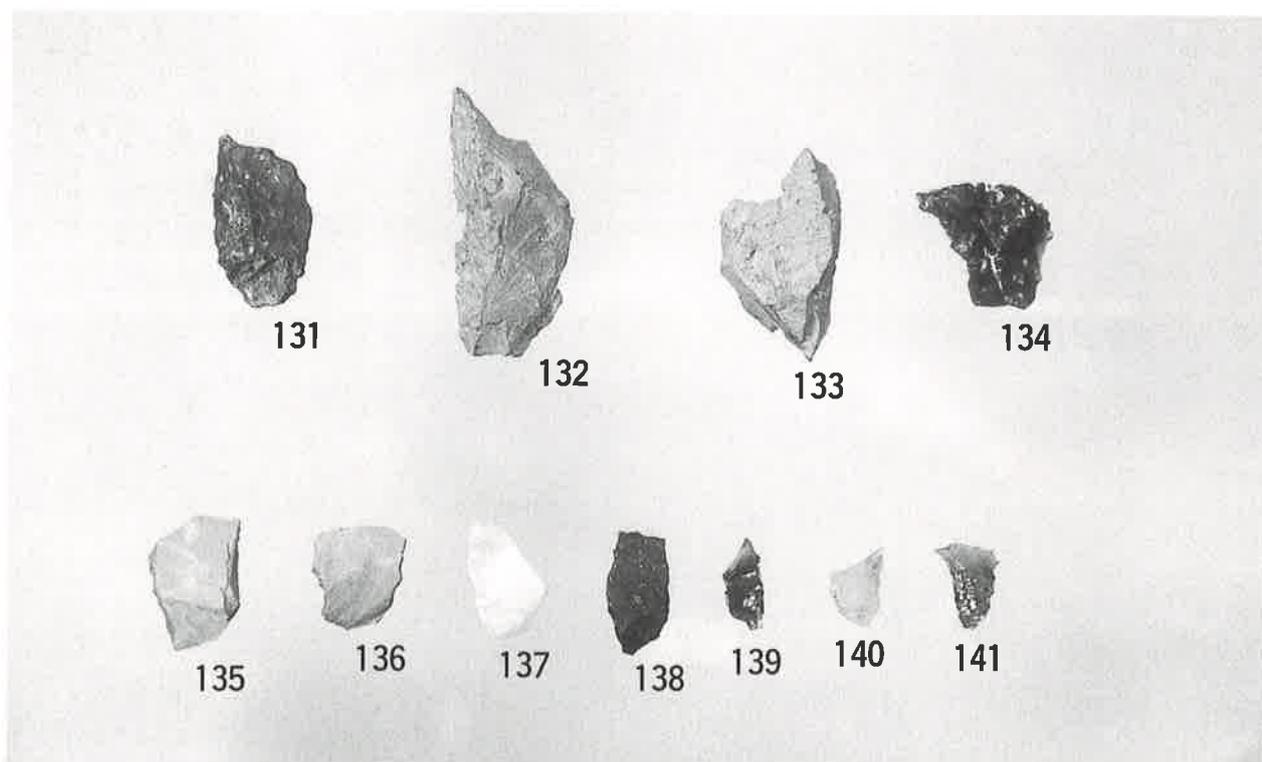
縄文時代出土遺物（一）



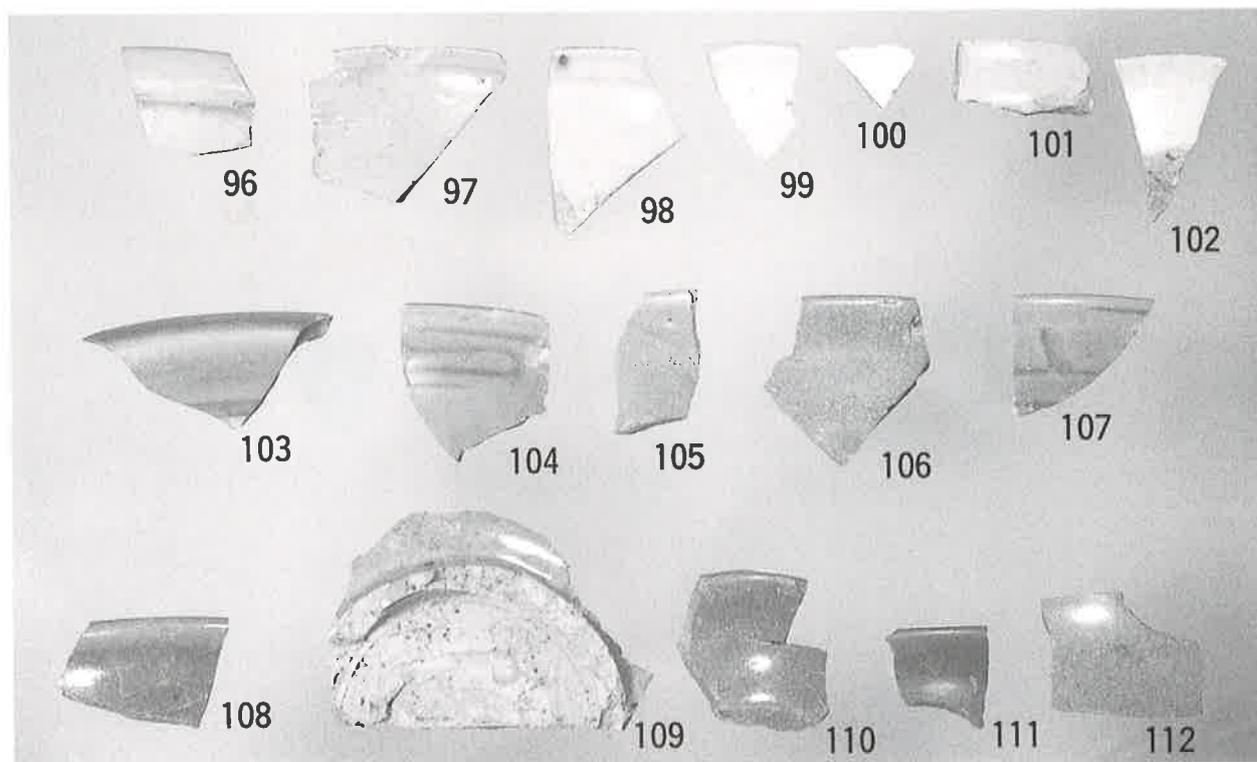
旧石器時代出土遺物（二）



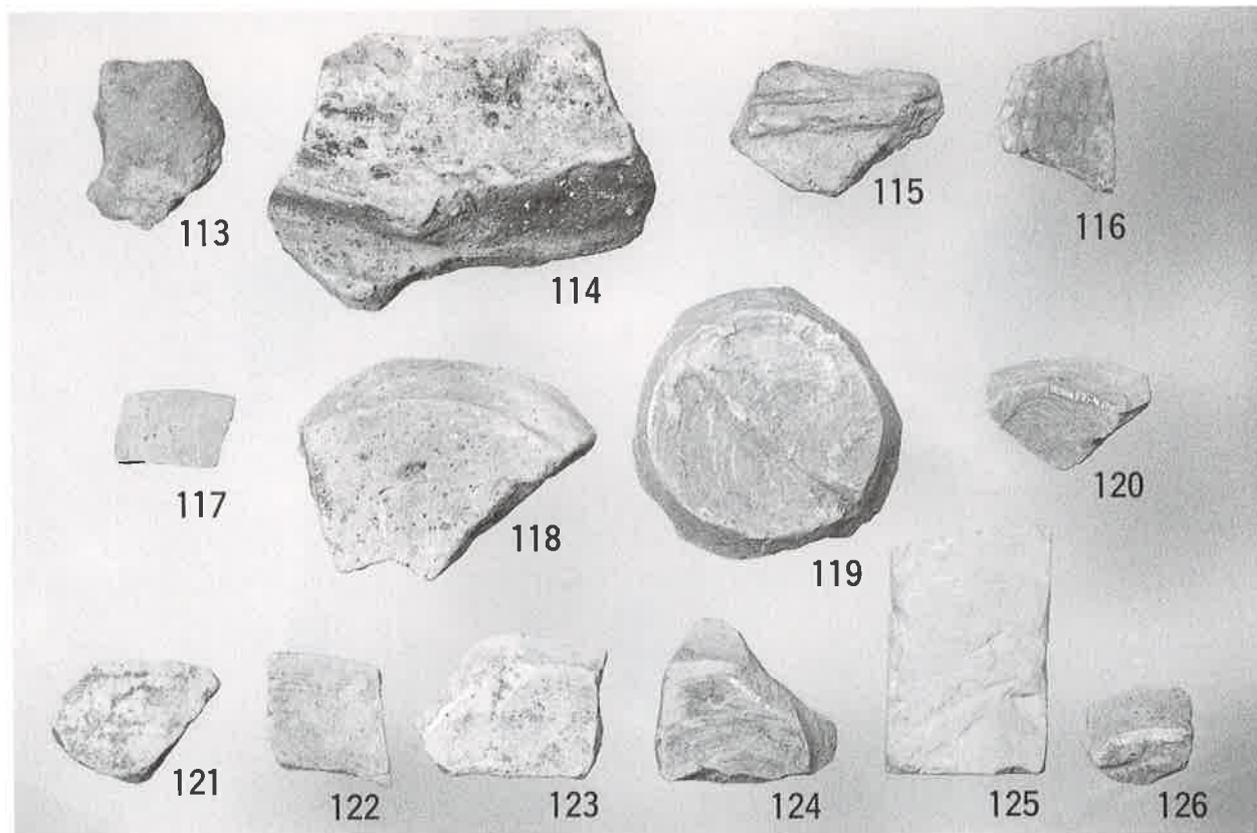
SK-9 出土遺物



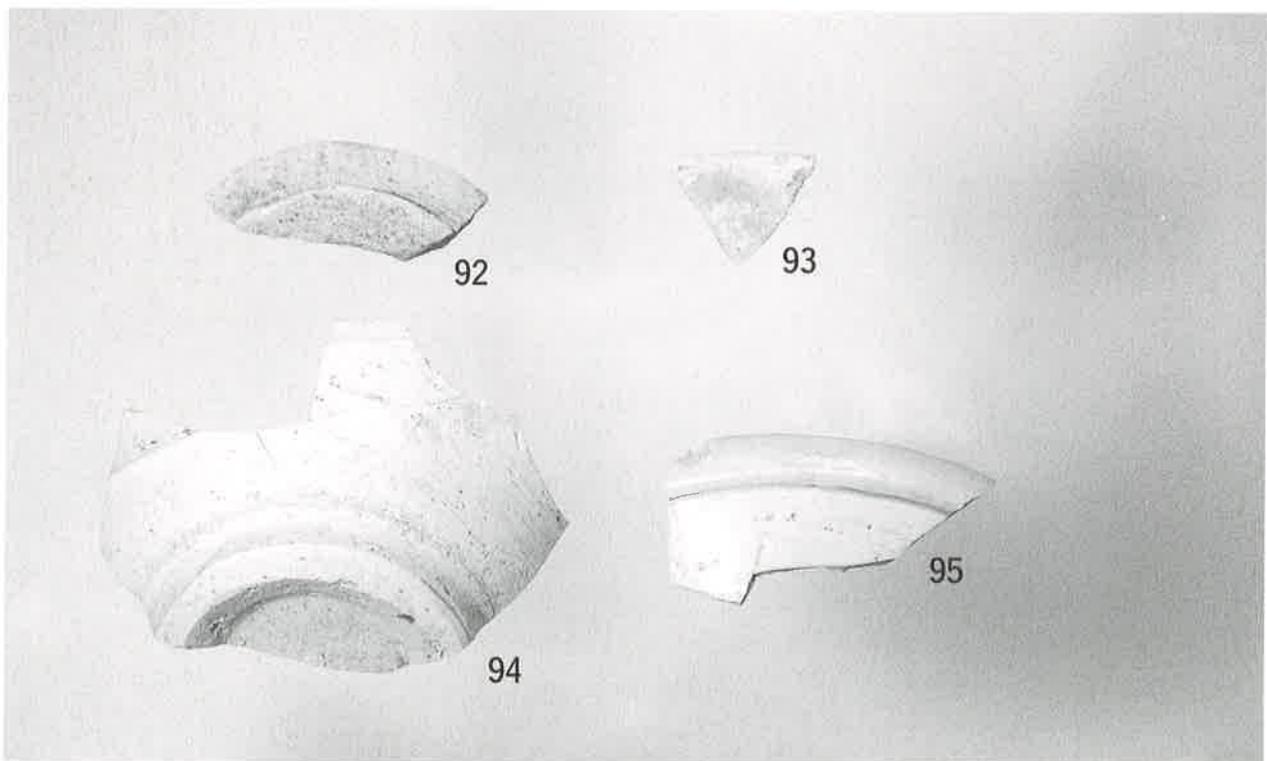
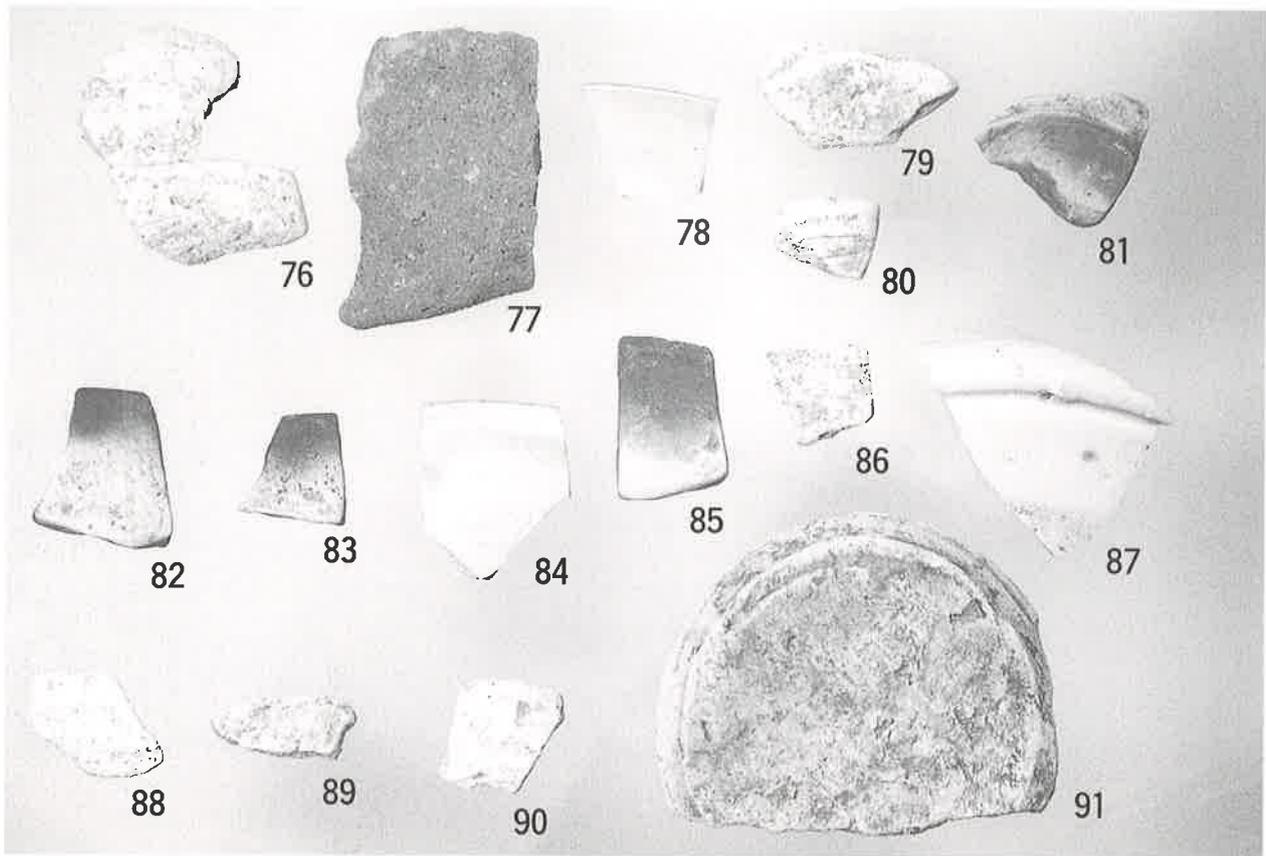
旧石器時代出土遺物 (一)



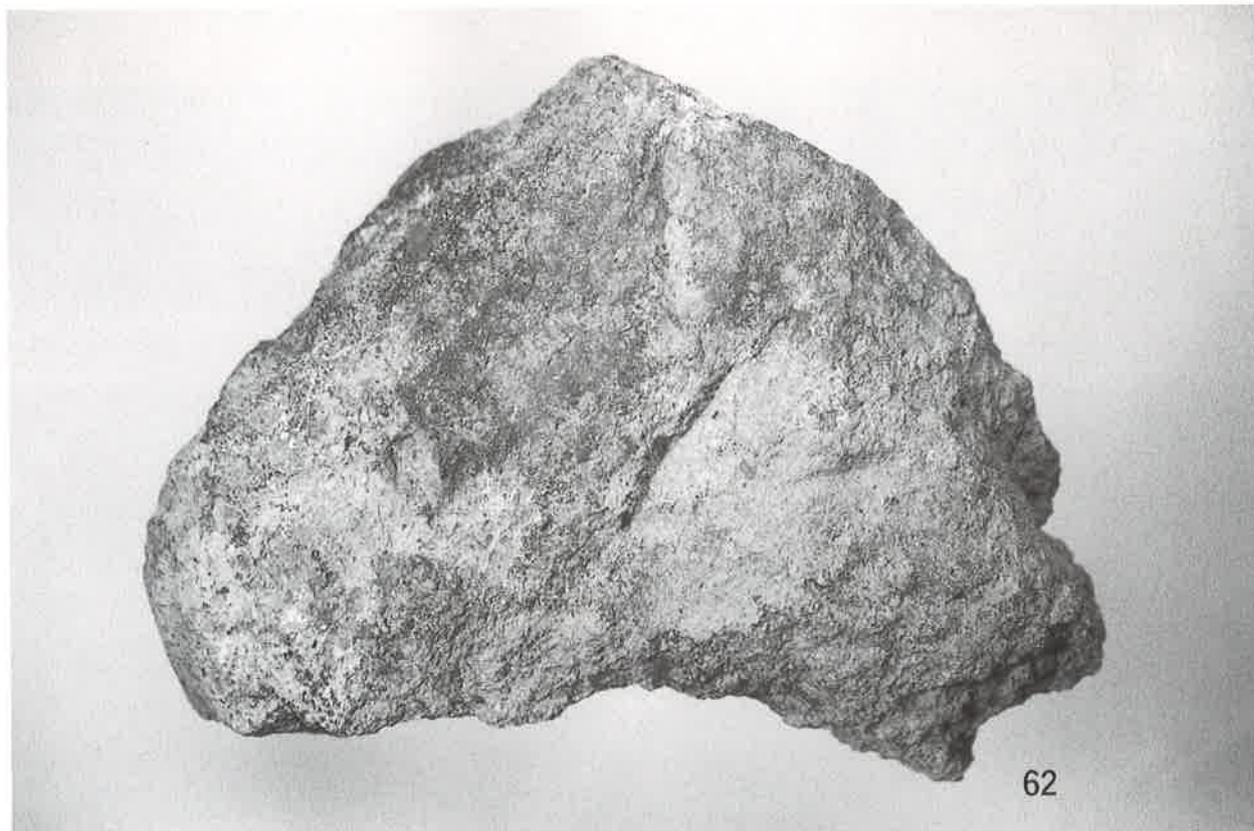
FG-1区 出土遺物(一)



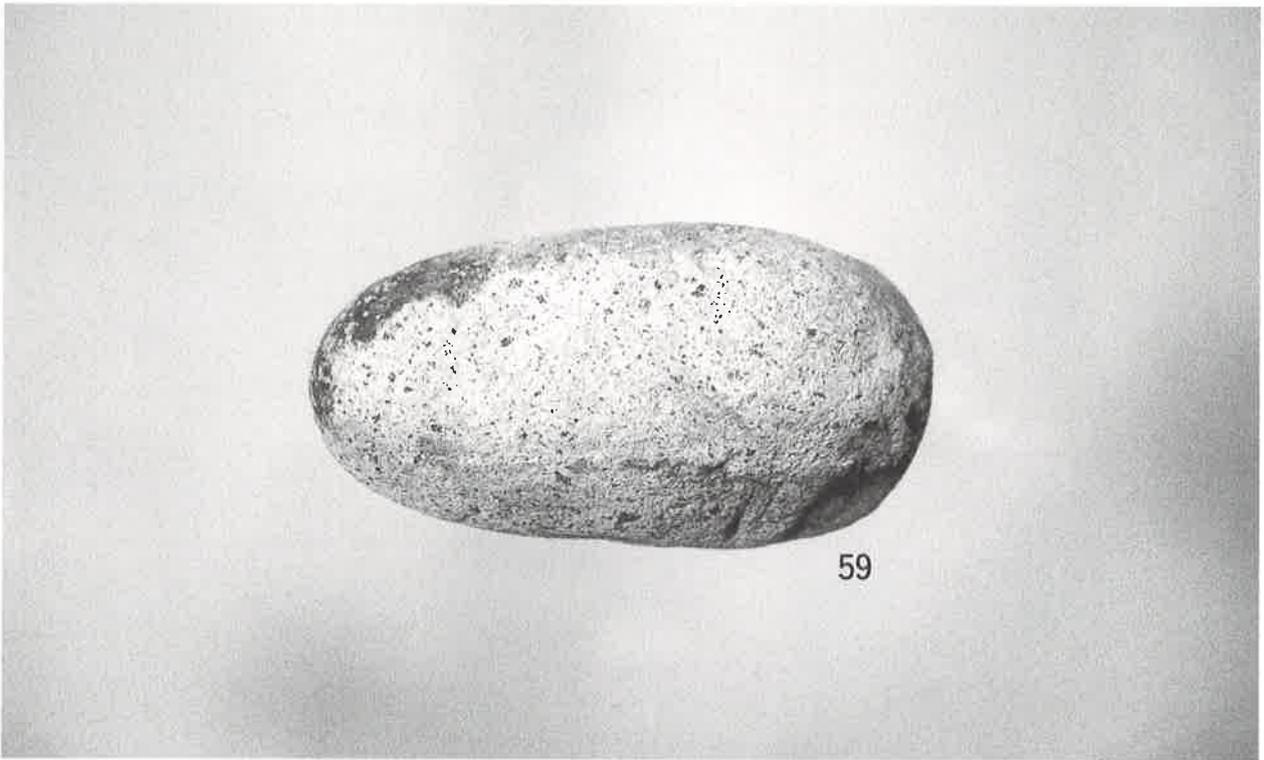
FG-1区 出土遺物(二)



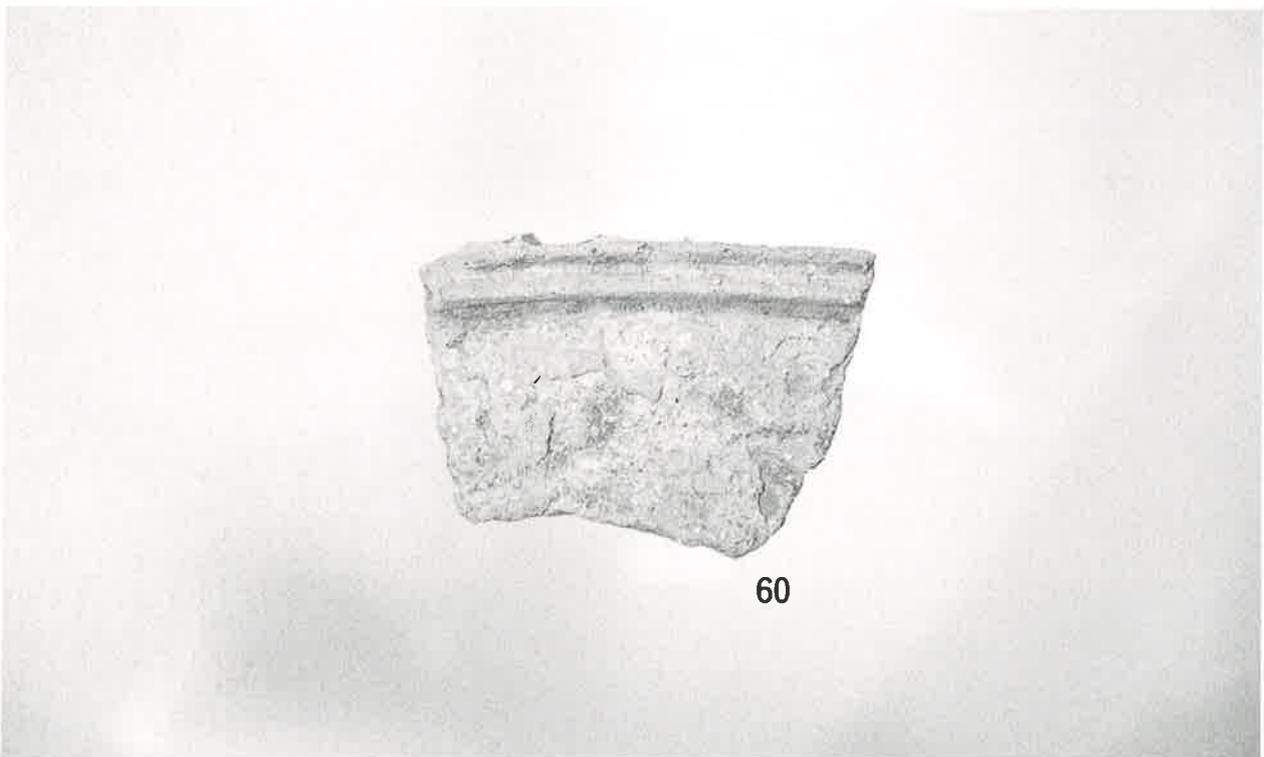
柱穴遺構内出土遺物



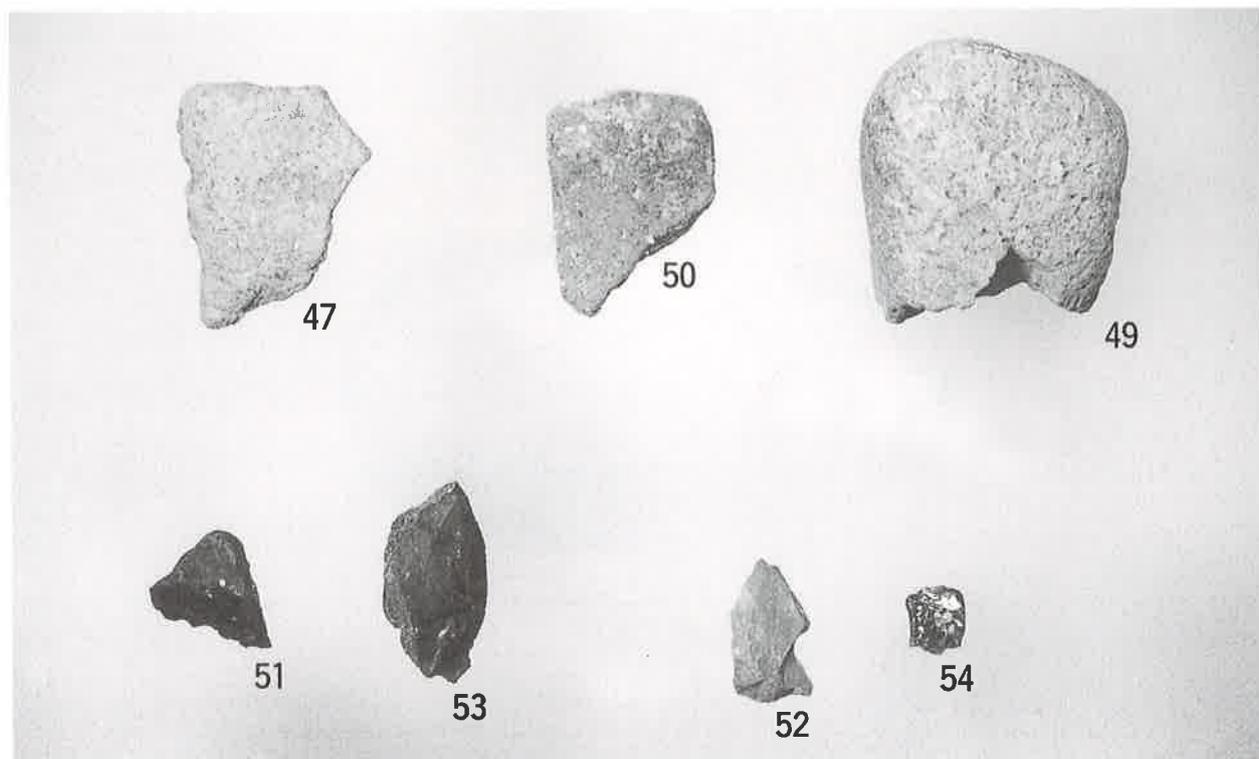
PIT内出土遺物



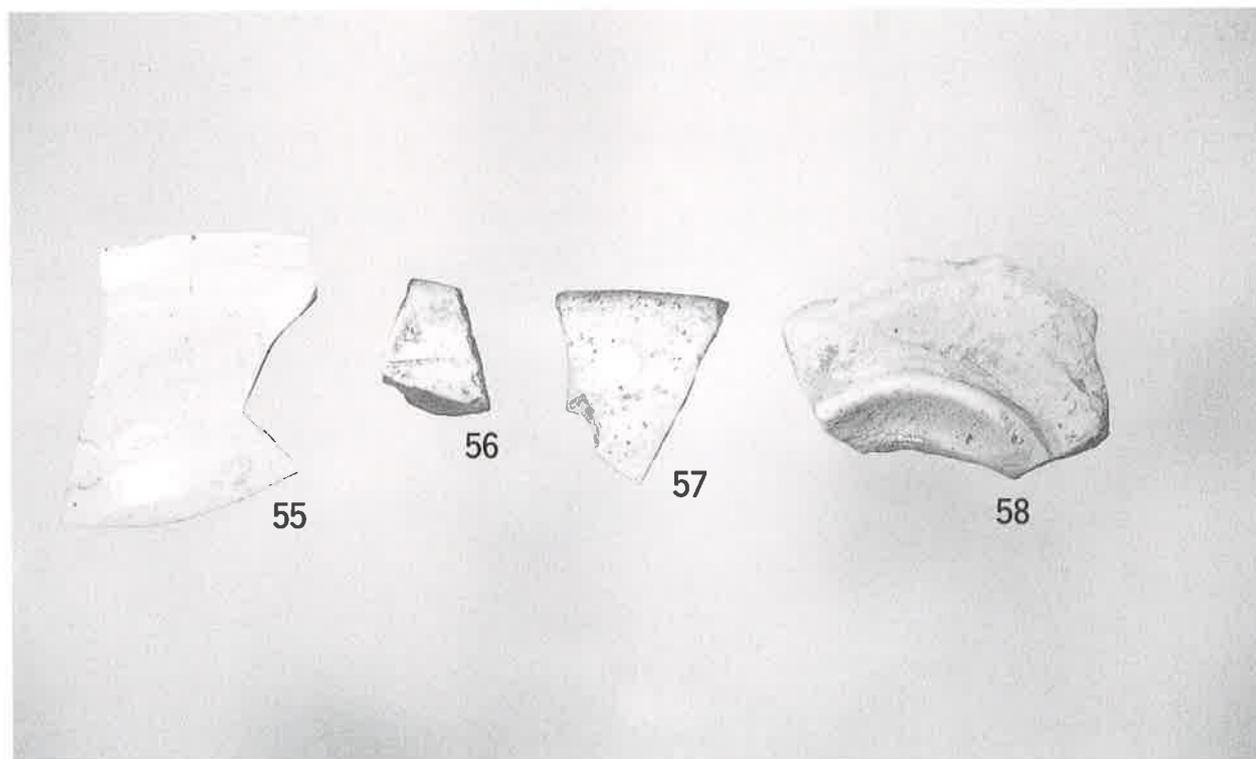
縄文時代遺構（三）



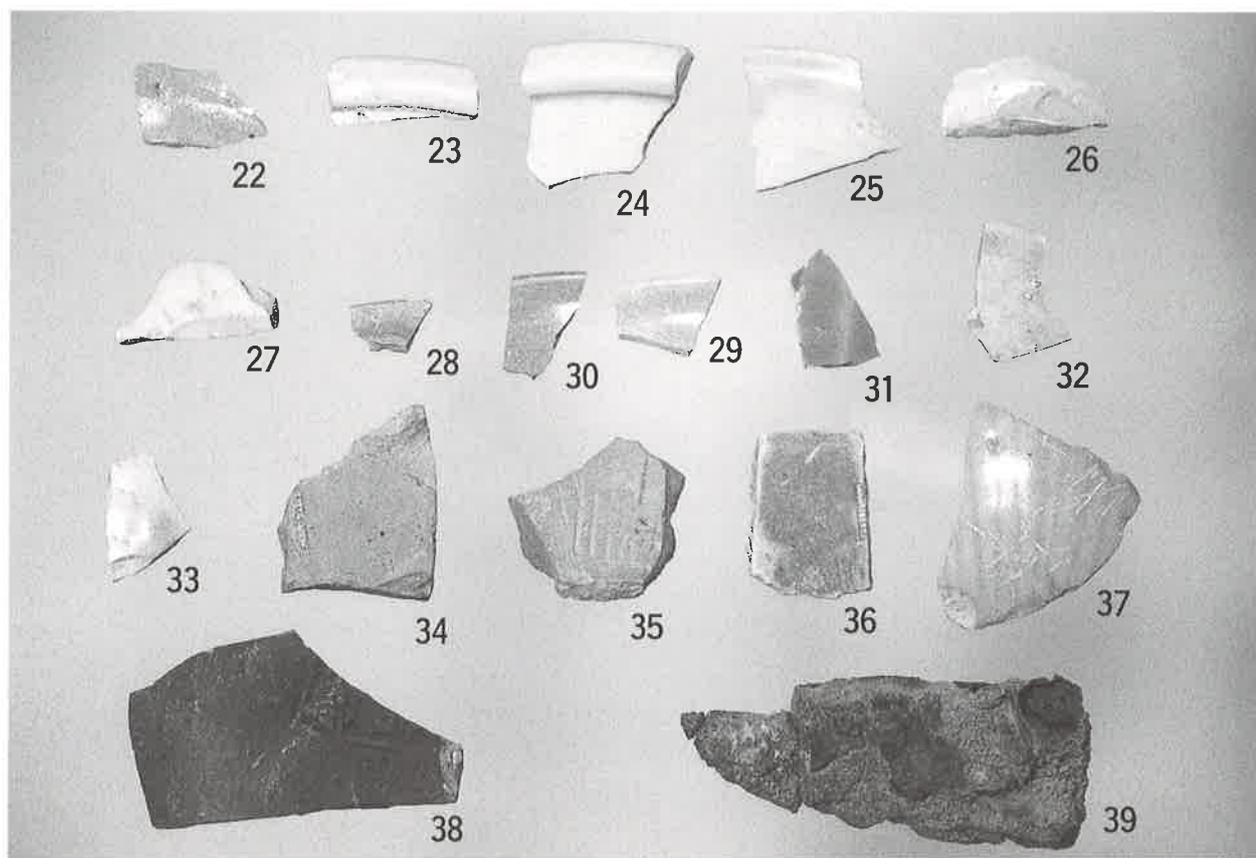
PIT内出土遺物



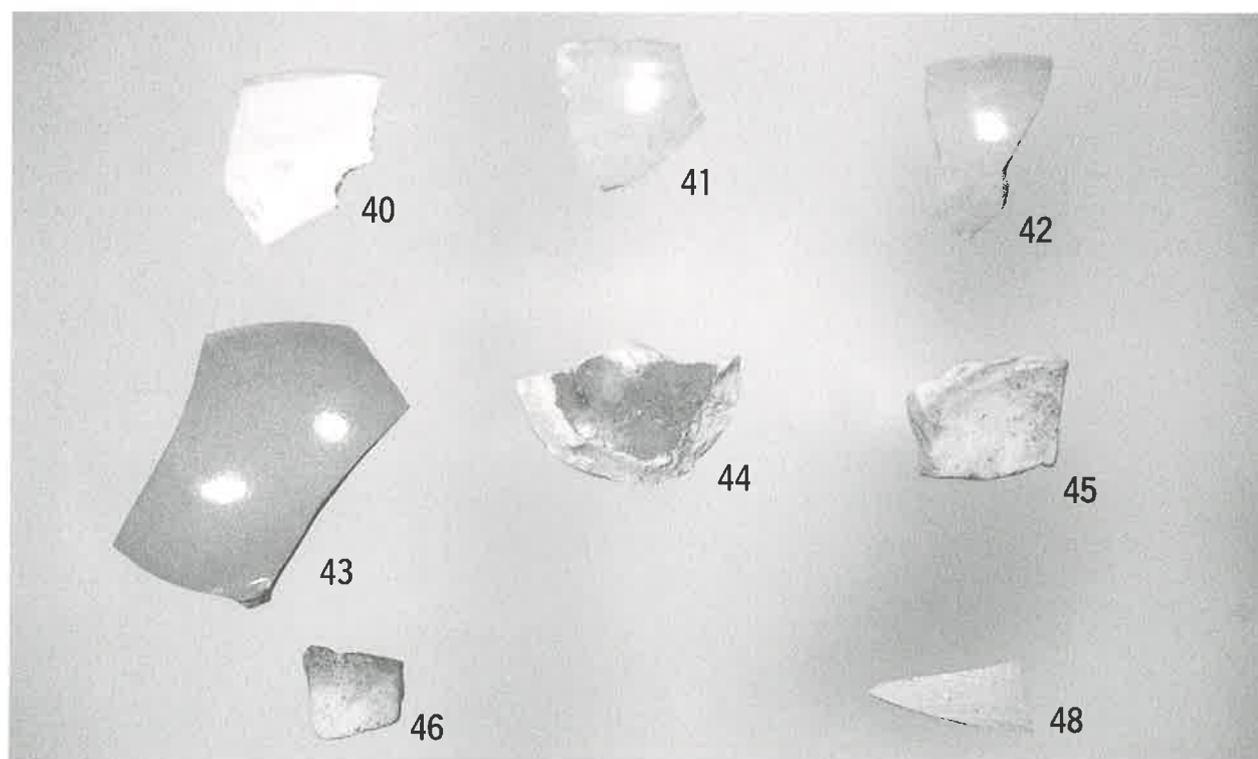
トレンチ内出土遺物 (二)



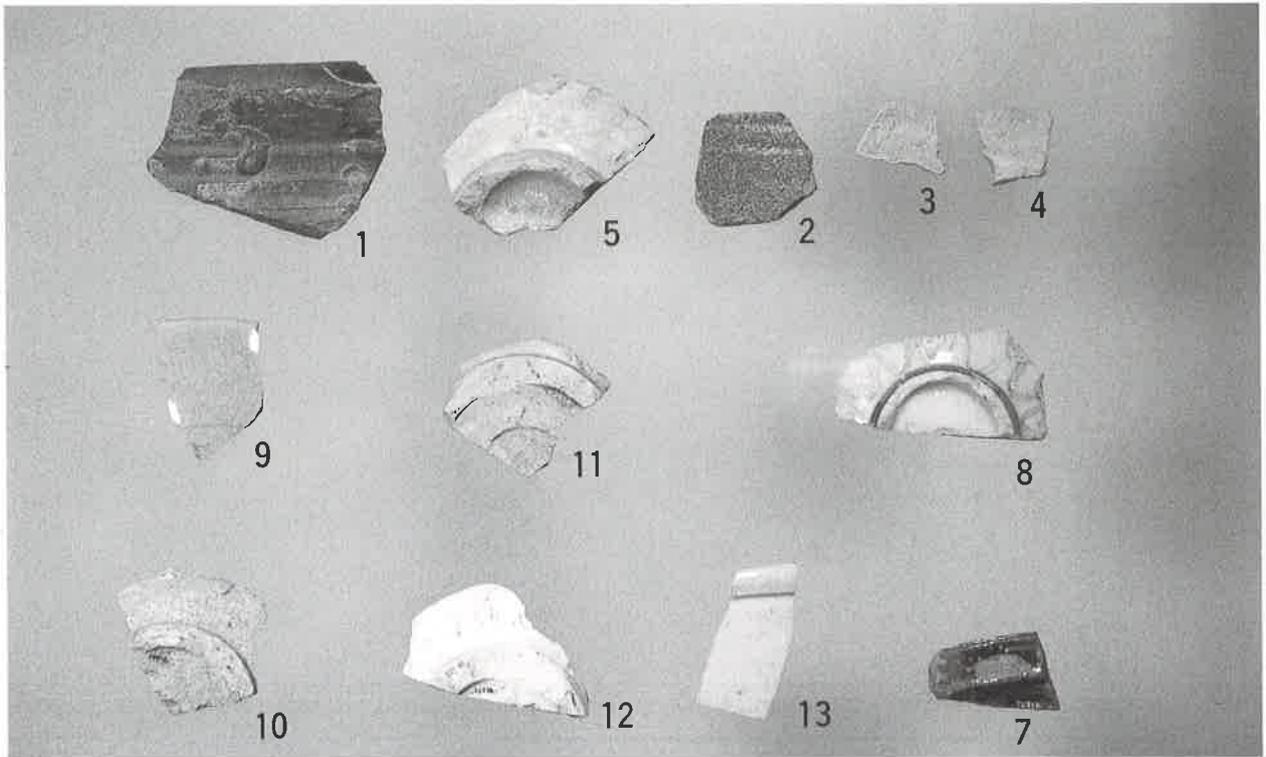
トレンチ内出土遺物 (三)



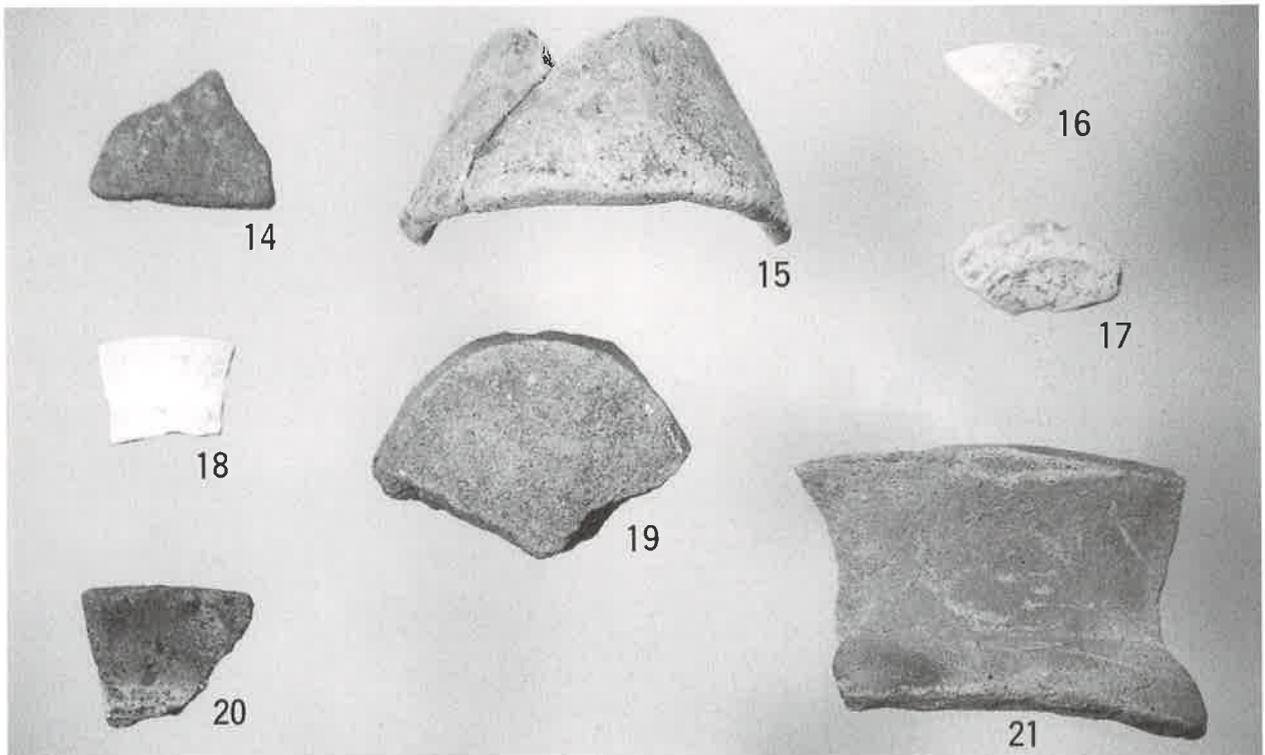
トレンチ内出土遺物 (一)



トレンチ内出土遺物 (二)



表採遺物



トレンチ出土遺物



L~O-1~3区
掘り下げ作業(1)



L~O-1~3区
掘り下げ作業(2)



L~O-1区
溝状遺構検出状況



DE-12・13区 発掘状況



旧石器時代遺構検出



白磁出土状況



FG-1区 遺物出土状況



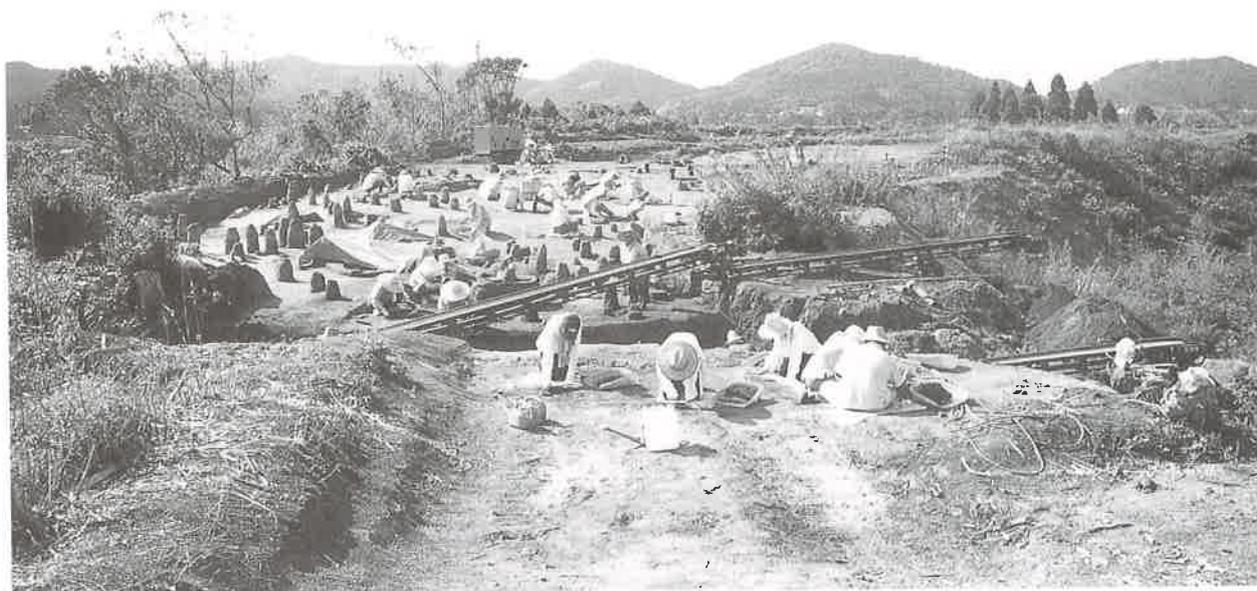
堀切2 土層断面



遺物出土状況（土師器）



遺物出土状況（青磁）



平成8年度 調査風景



三木靖先生指導



堀切1 検出状況



堀切1 遺物出土状況



SC-1 掘り下げ



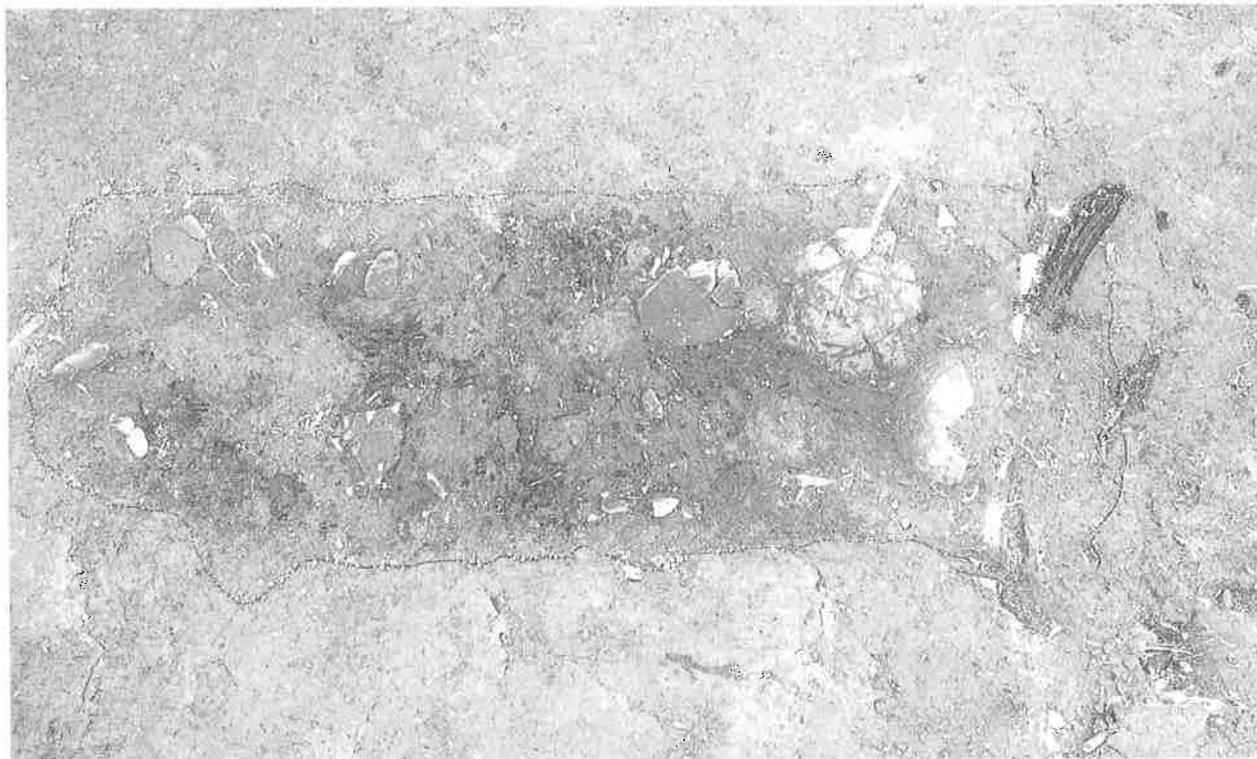
SK-3 (1/2カット)



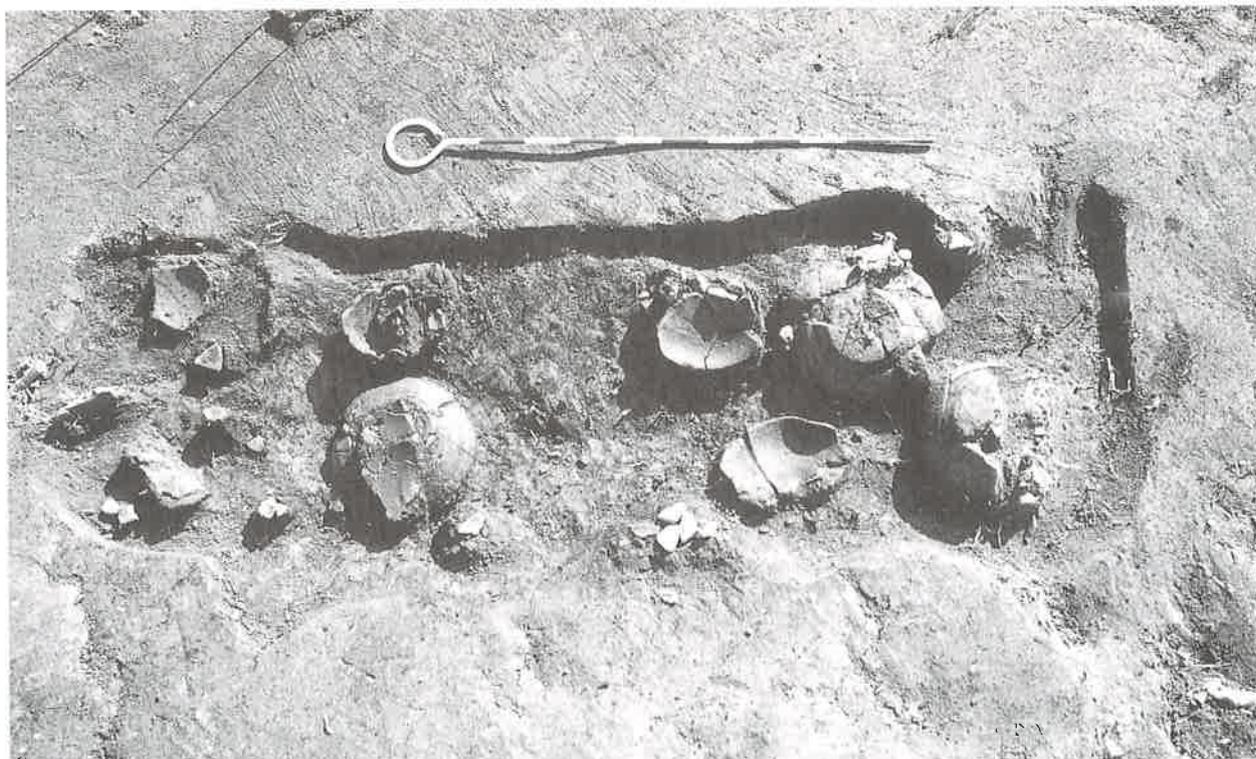
P₂₃ (遺物出土状況)



縄文時代遺構検出 (SC-1・SK-3)



S K - 12 検出状況



S K - 12 遺物出土状況



1 T 発掘状況



DE-2・3区 発掘状況



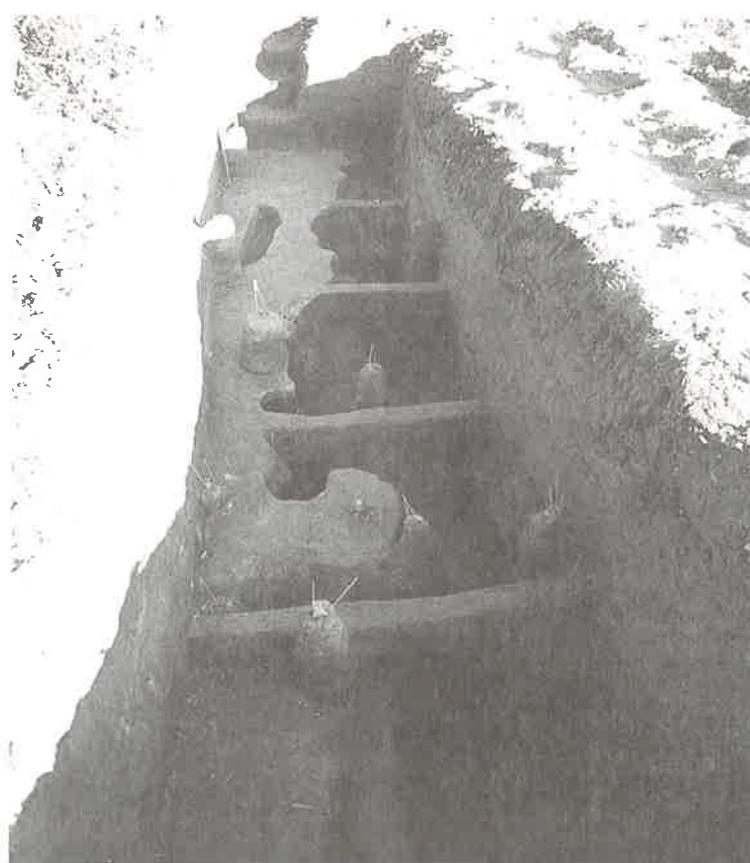
発掘風景



1 T 発掘状況



5 T 発掘状況



2 T 発掘状況



図版 9 堀切 1 地表面観察



3 T 発掘状況



19T 発掘状況



文化財保護審議会開催



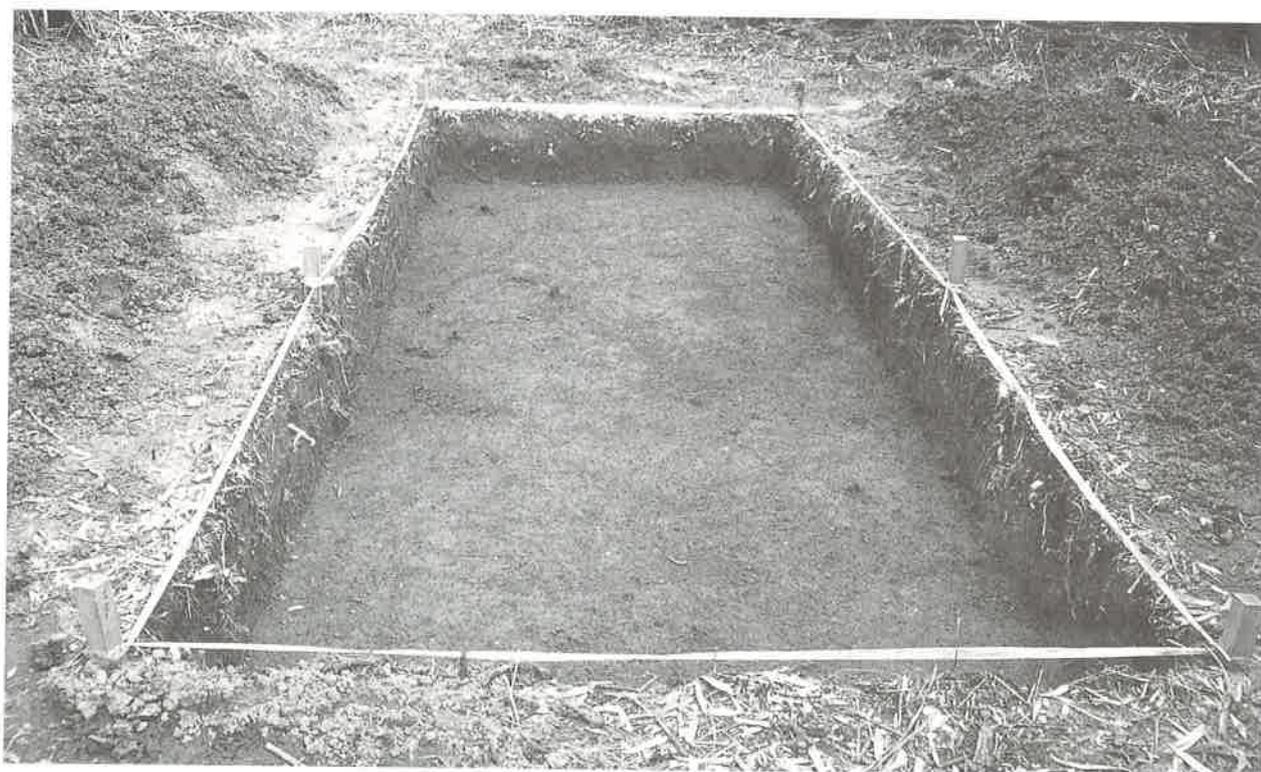
8 T 発掘状況



16 T 発掘状況



6 T 発掘状況



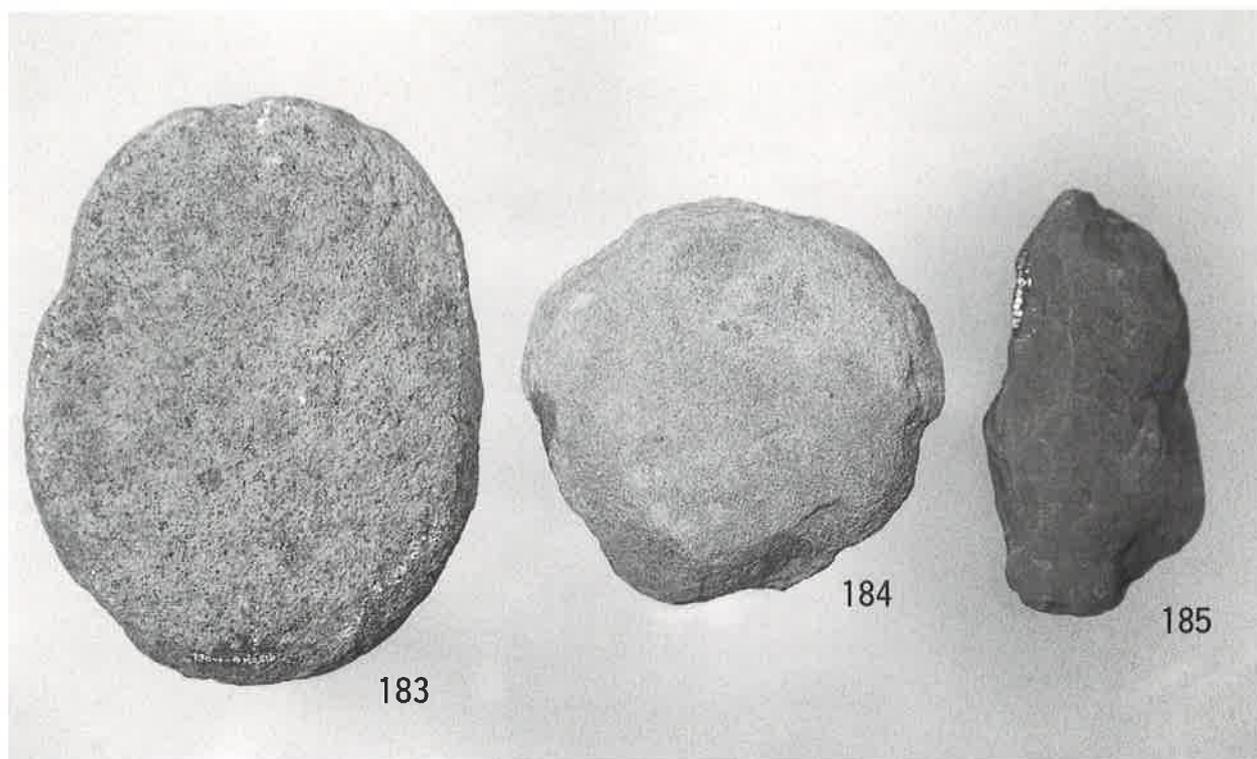
7 T 発掘状況



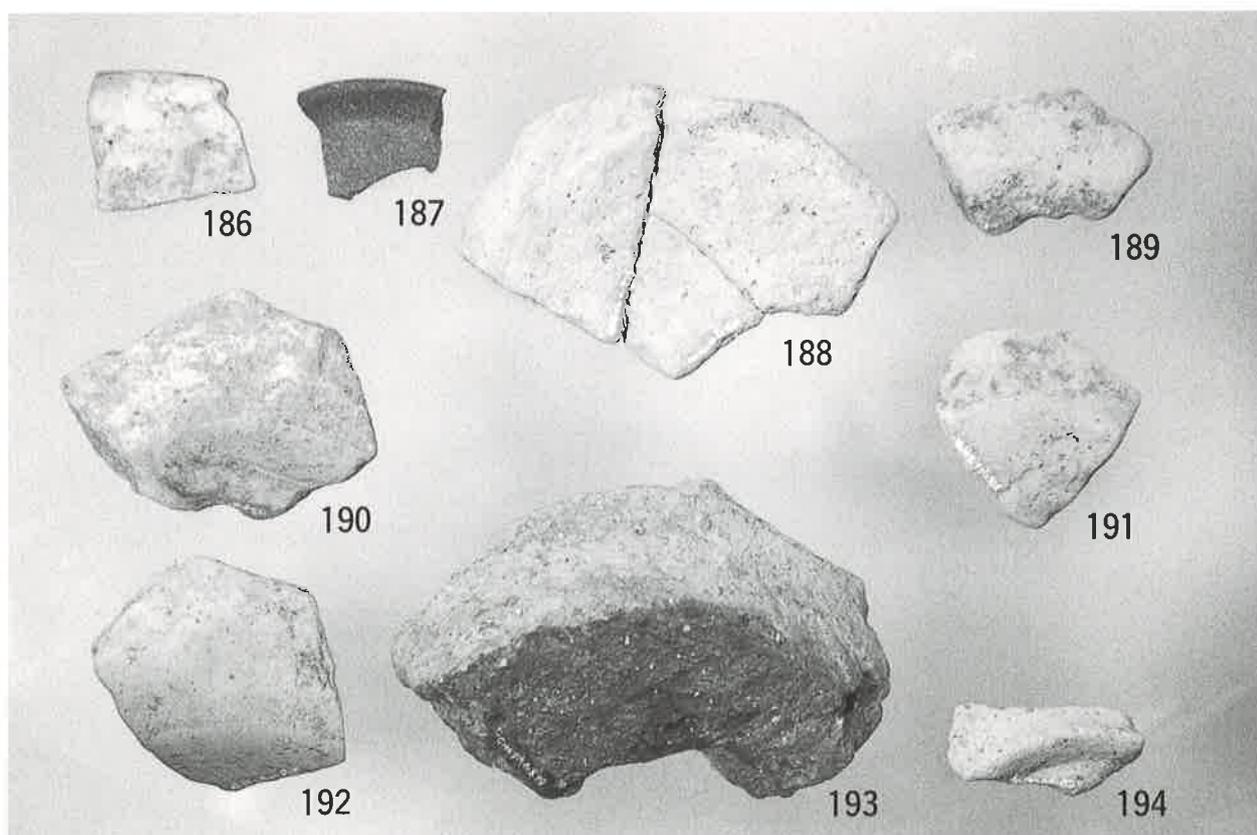
1 T 発掘状況



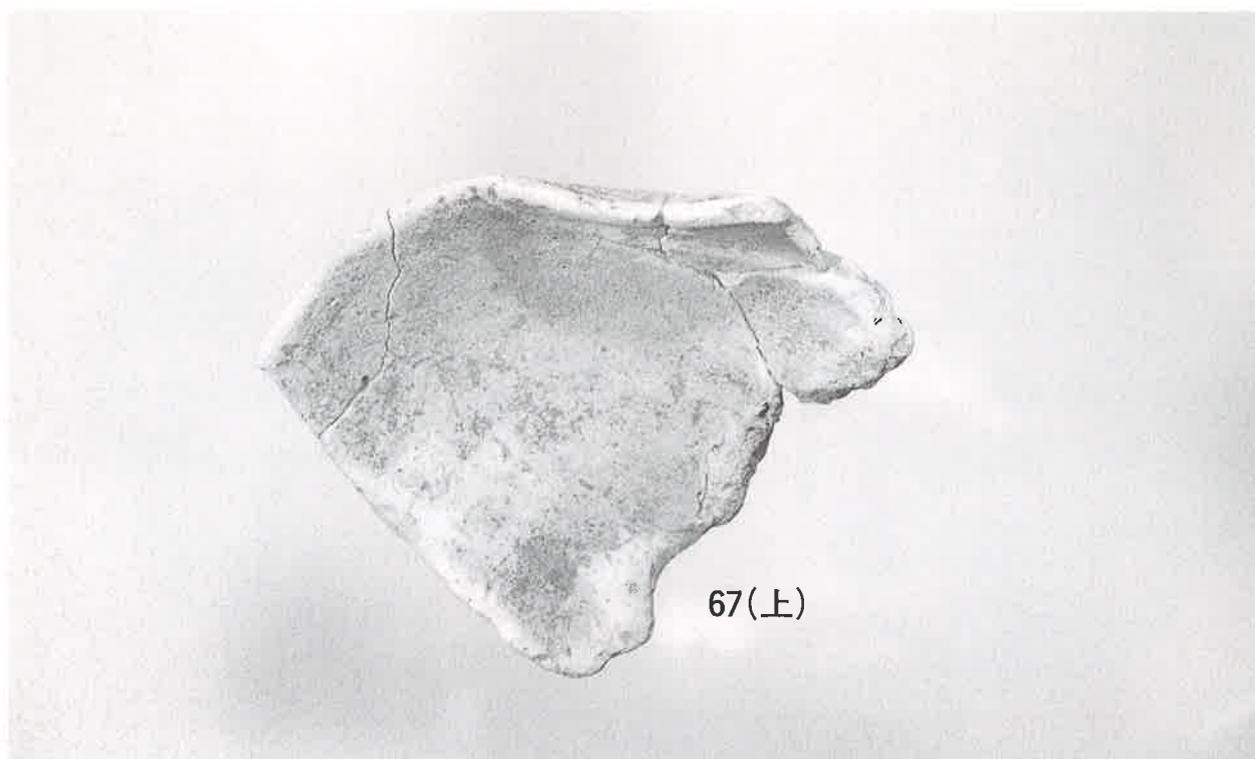
4 T 発掘状況



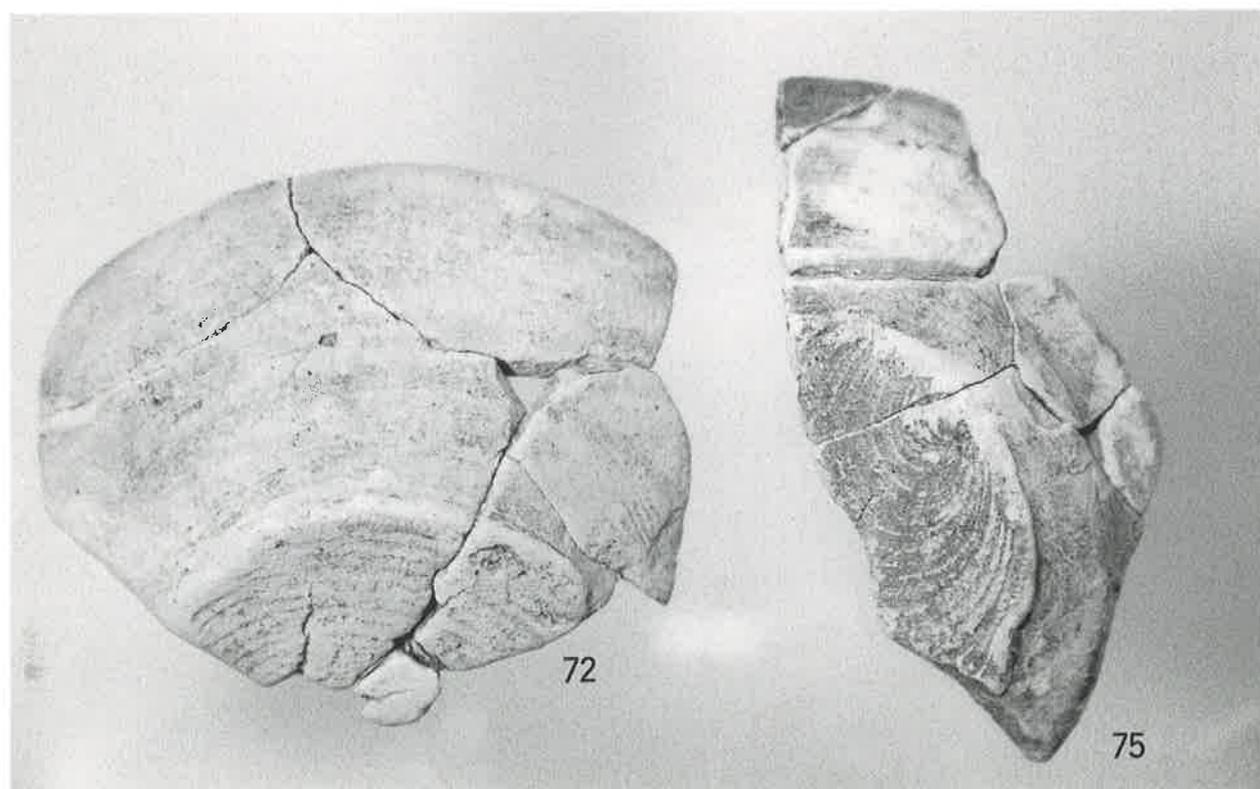
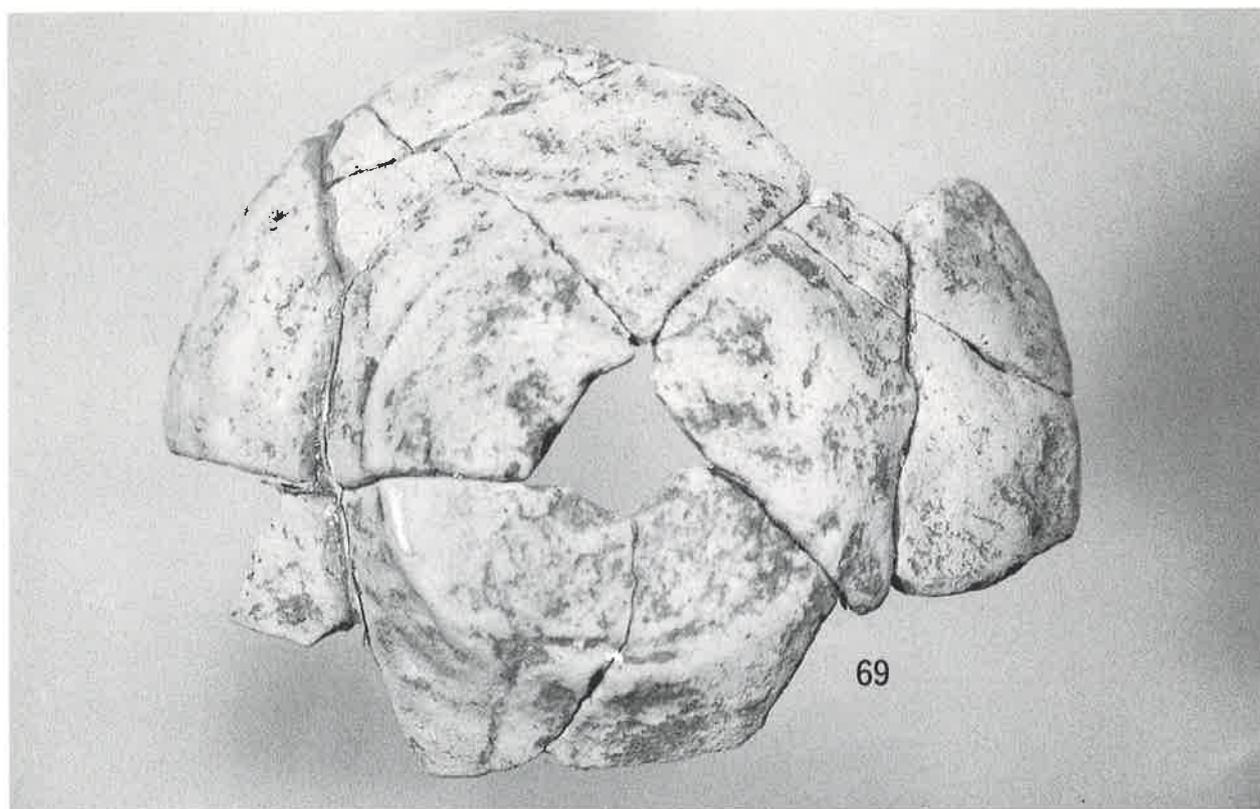
堀切1内出土遺物(一)



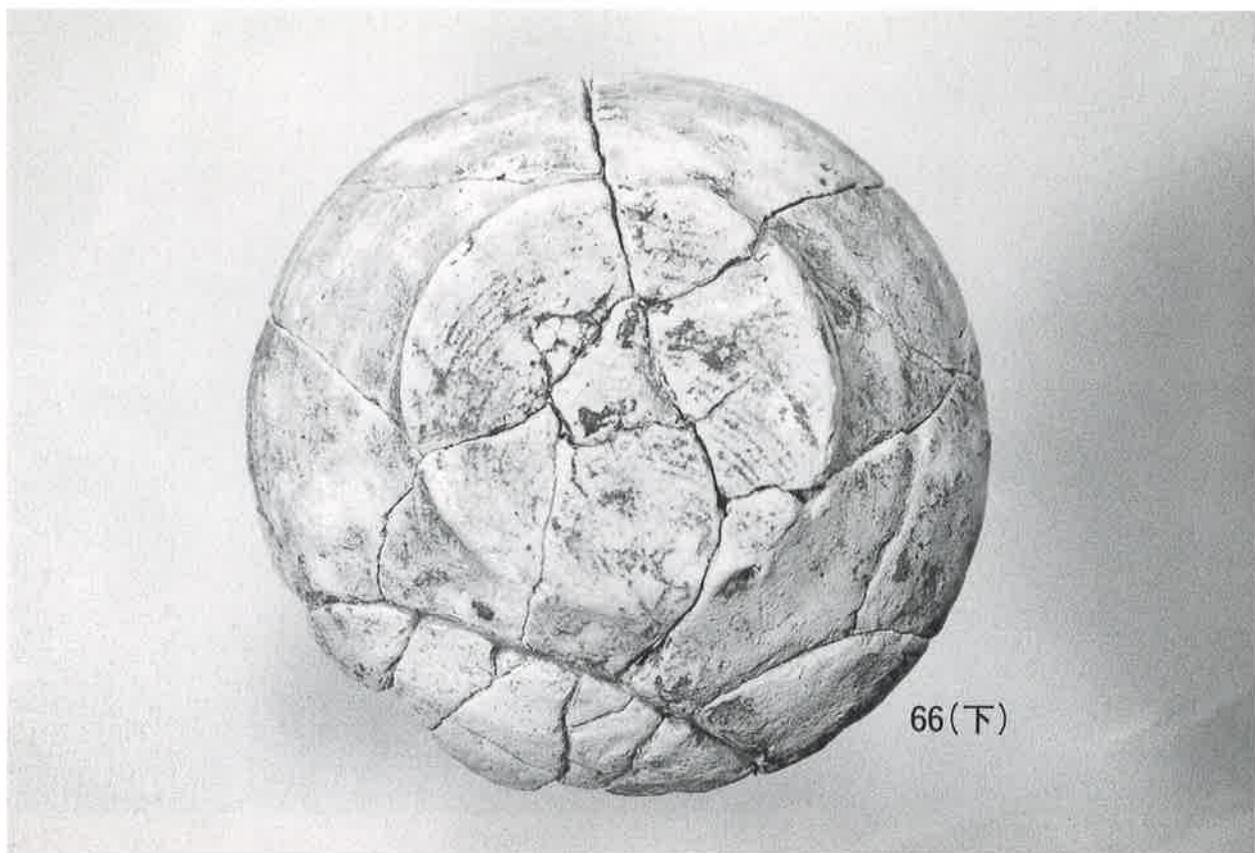
堀切1内出土遺物(二)



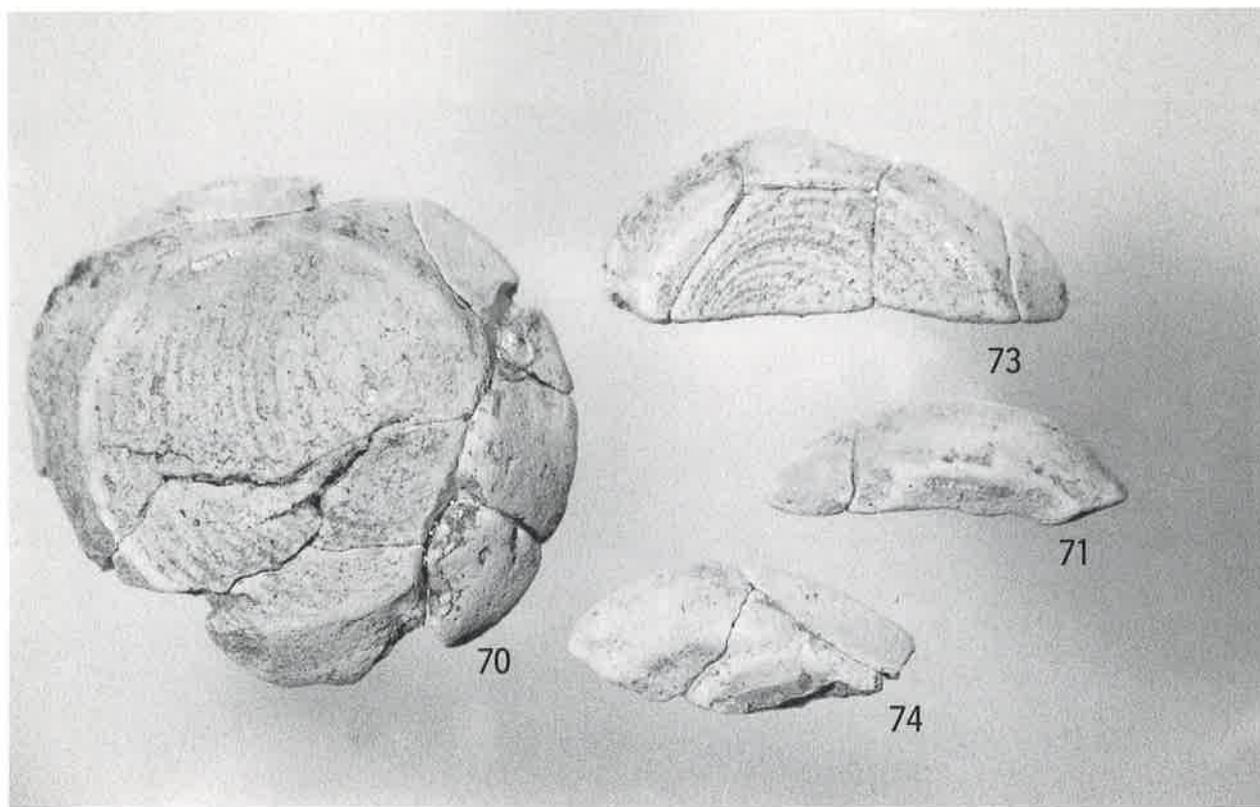
S K - 12 出土遺物



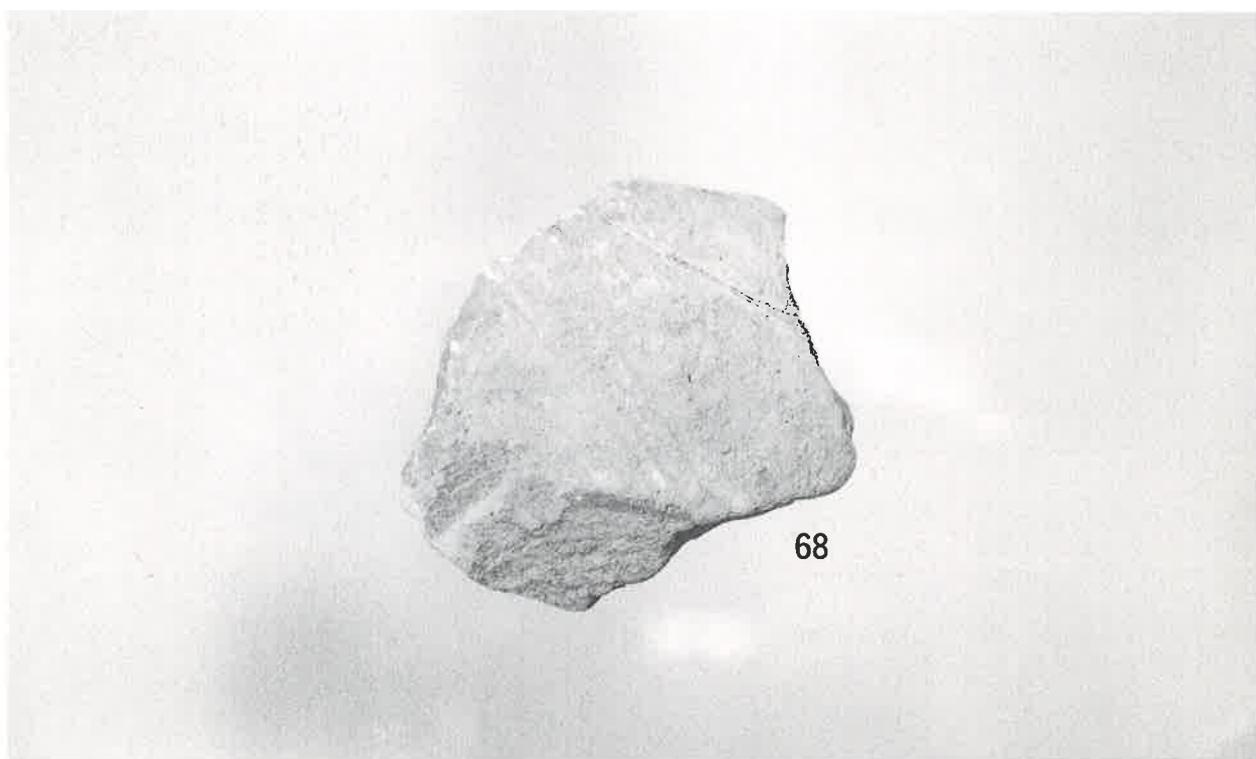
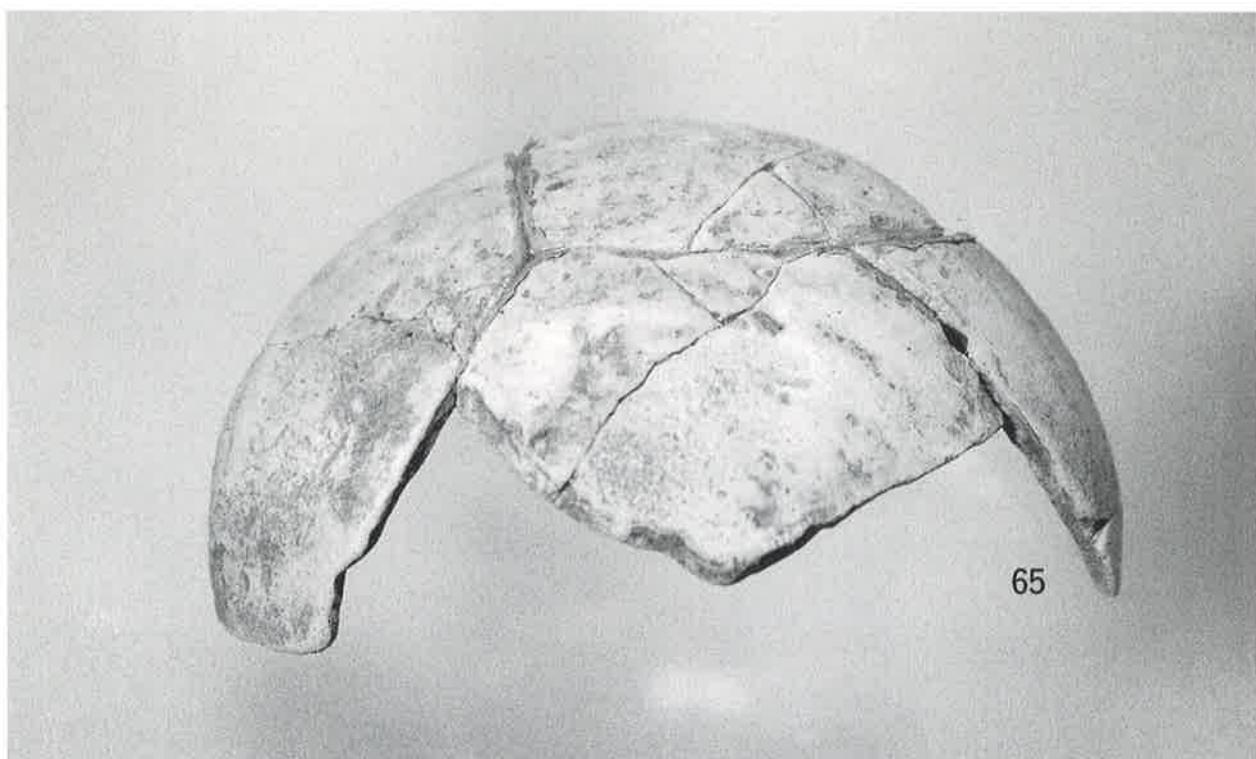
SK-12 出土遺物



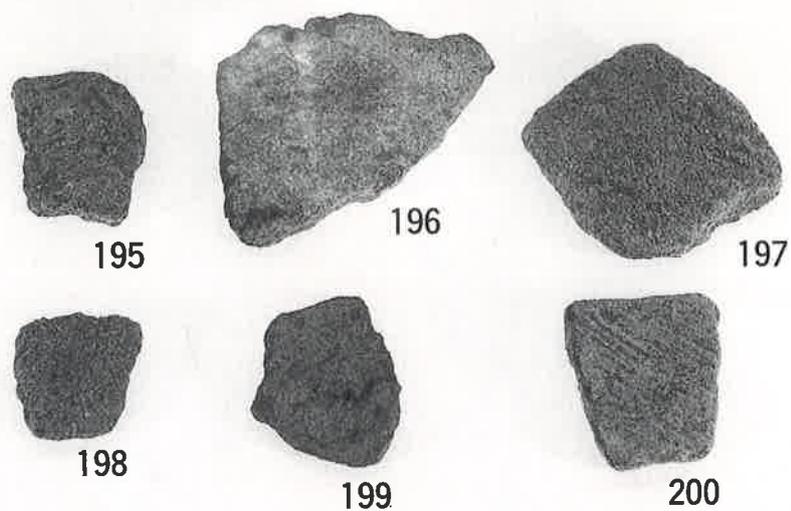
SK-12 出土遺物



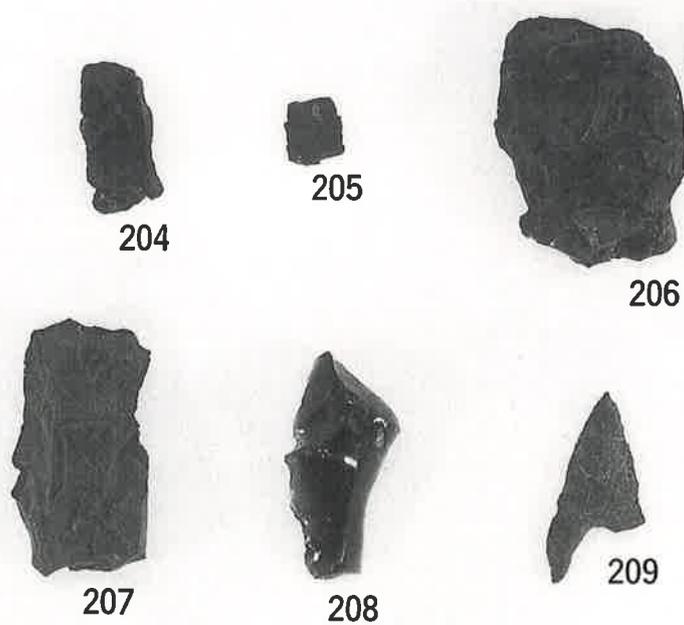
SK-12 出土遺物



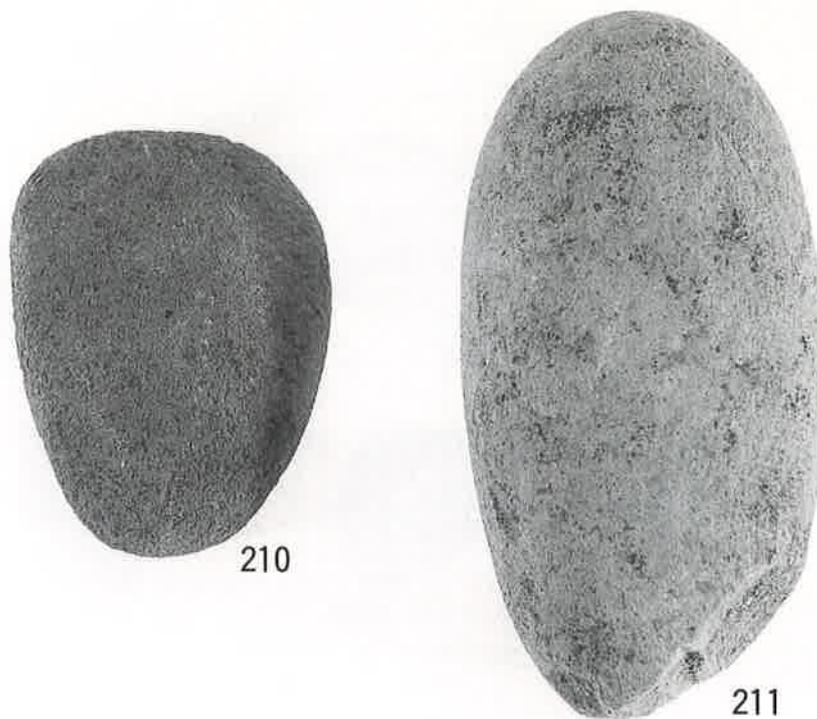
S K - 12 出土遺物



出土遺物（土器）



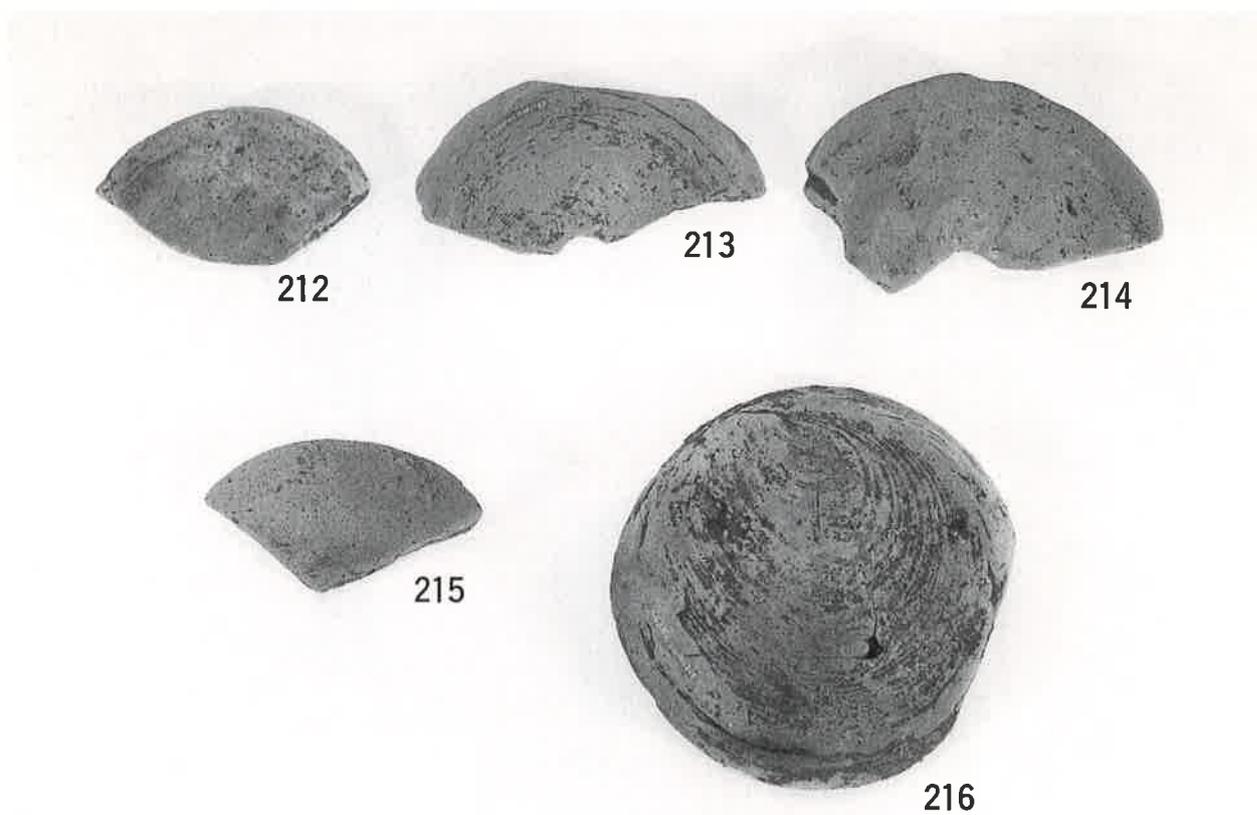
出土遺物（石器）



210

211

出土遺物（石器）



212

213

214

215

216

出土遺物（土師器）



216

出土遺物（土師器）

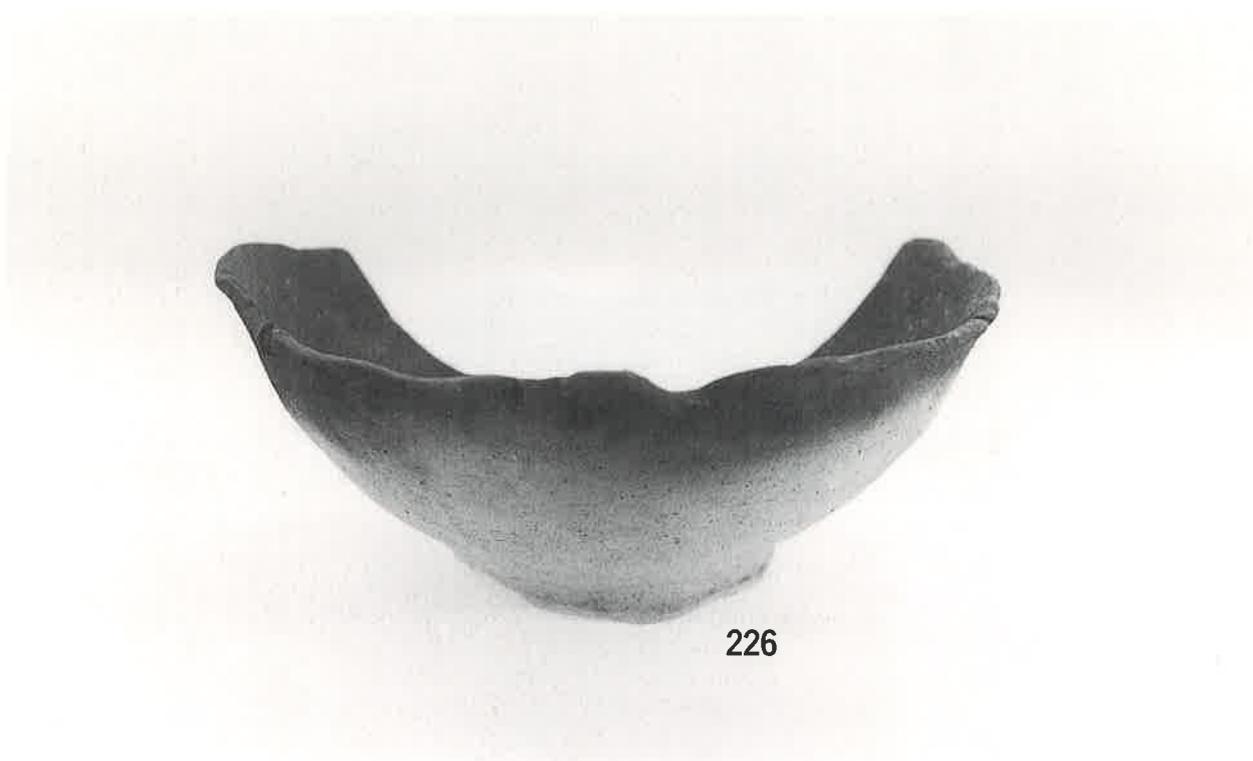


222

223

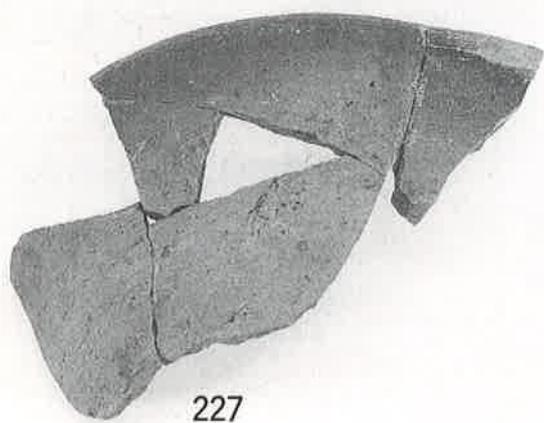
224

出土遺物（土師器）



226

出土遺物（黒色土器）

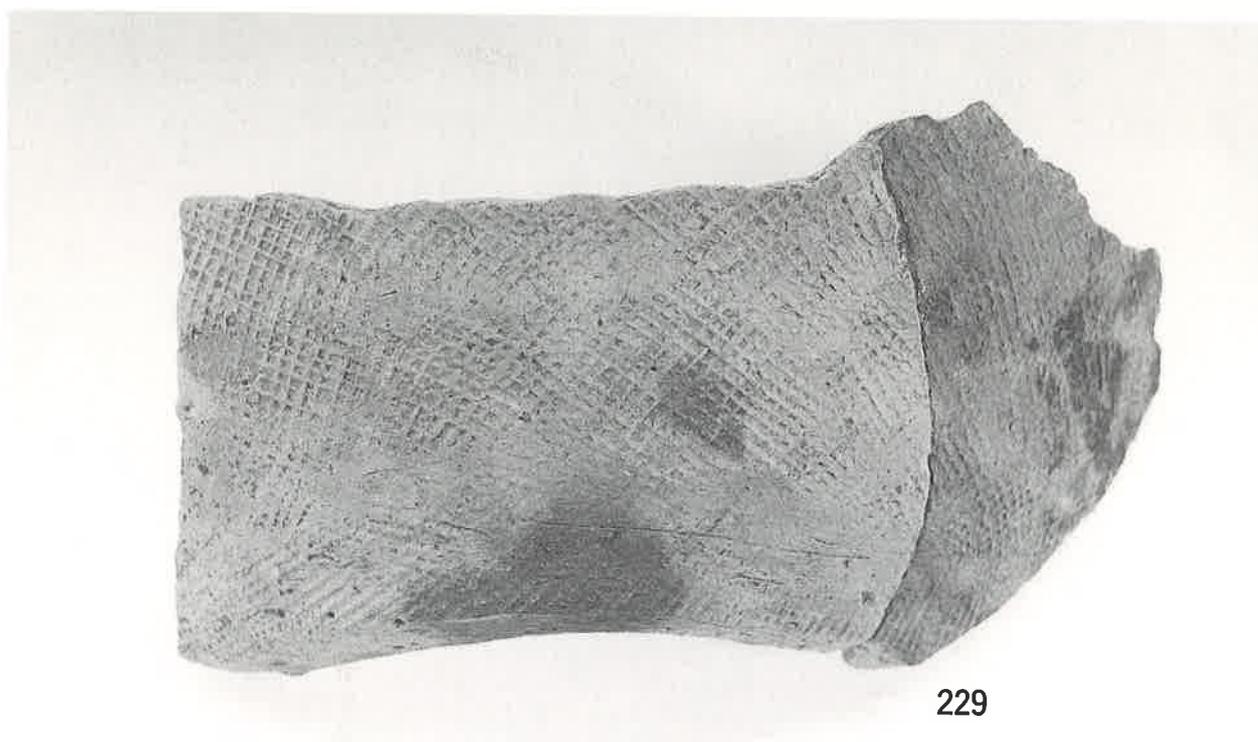


227

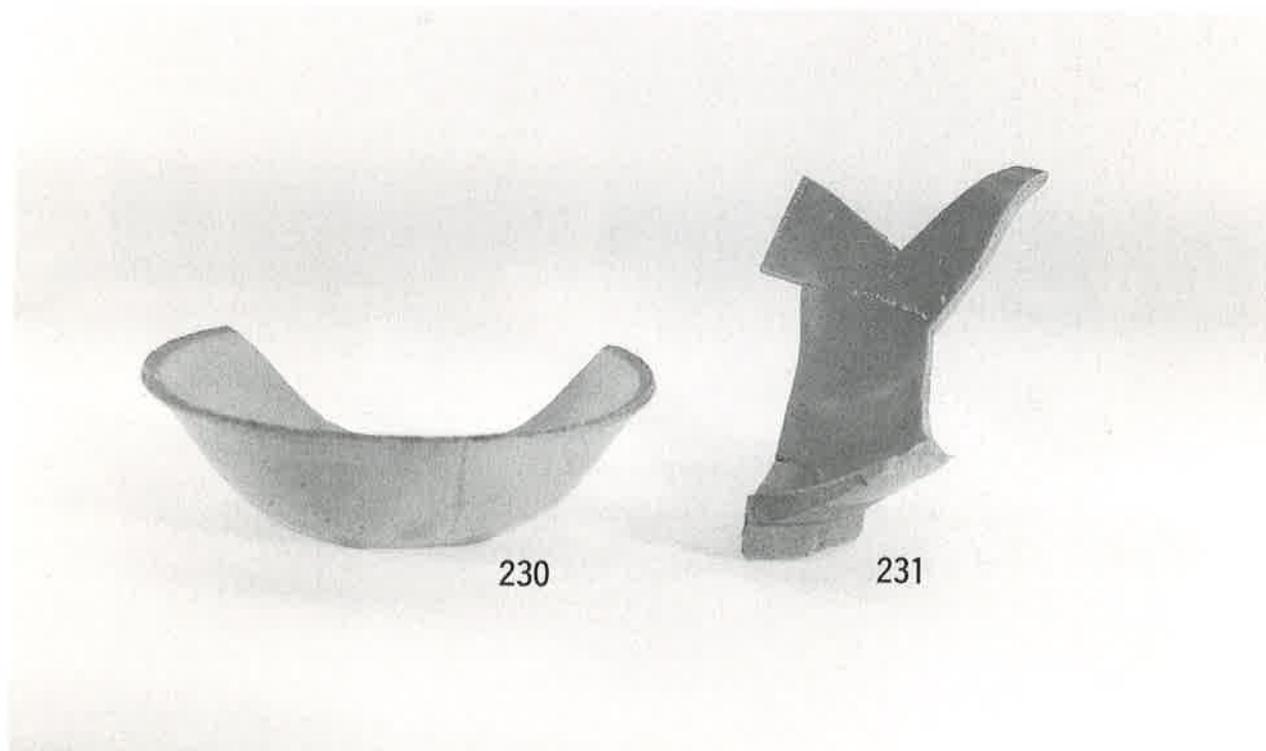


228

出土遺物（須恵器）



出土遺物（須恵器）

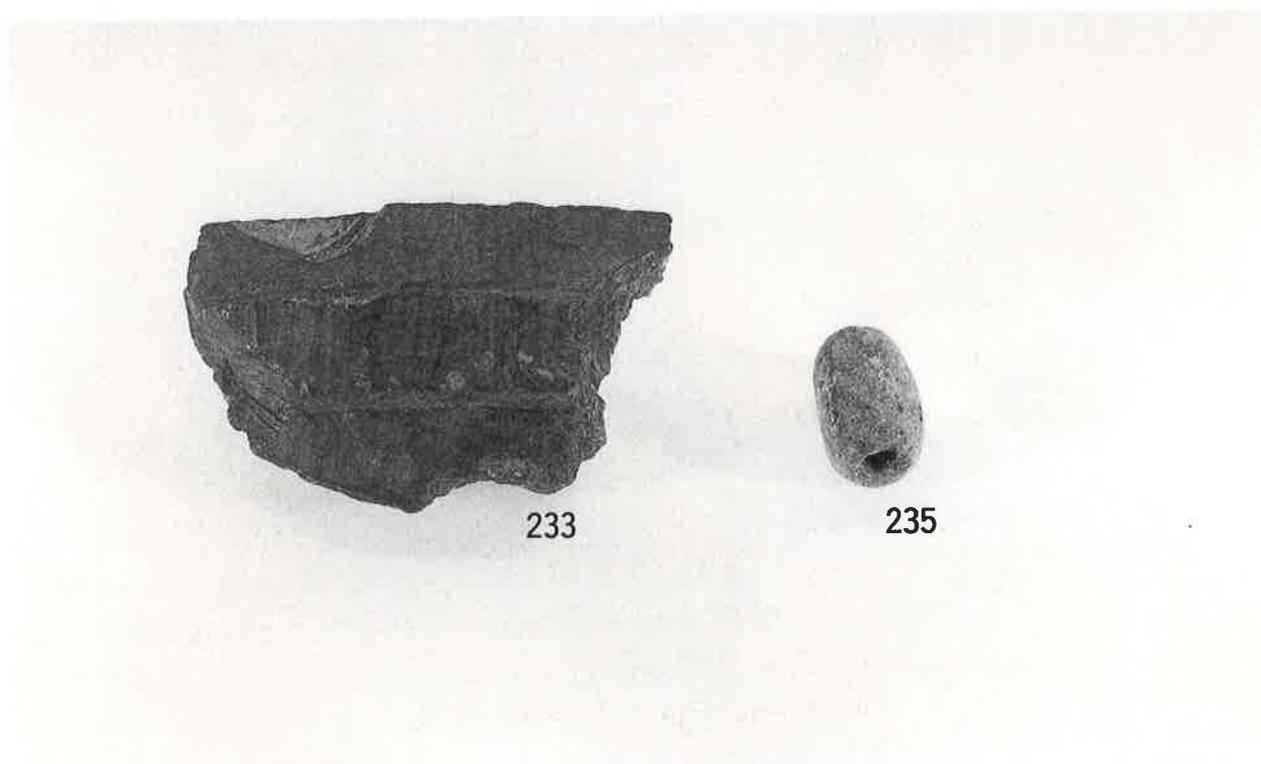


出土遺物（磁器）



232

出土遺物（磁器）



233

235

出土遺物（石製品）

あ と が き

平成5年に始まった上城詰城跡の発掘調査。私が市来町職員として勤務したのも同じ年である。平成5年・7～9年と月日は流れ、その中で発掘作業に従事されていた作業員の内、数名の方々は今この世にいない。目を瞑ると懐かしい笑顔が浮かんでくる。「あたいたちはとしじゃって、どこも働くところがなか。じゃってありがたか。」「ないな、こや土器じゃって?」「あたいは毎日が楽しか今、ここに上城詰城跡発掘調査報告書が出来上がる。整理作業をしていると手にした土器や石器を誰が見つけたのか思い出してくる。我々市町村では小規模な調査が多いため、出土した遺物がどこの区で、誰が見つけたかおおよそ覚えているものだ。共に生活した懐かしい思い出をしっかりと刻み、旧石器から現代という歴史に生きた人々の足跡を永遠に伝えてゆきたいと思う。

市来町埋蔵文化財発掘調査報告書(7)

県営農村活性化住環境整備事業大里地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

上 城 詰 城 跡

発行日 平成12年3月31日

発 行 市 来 町 教 育 委 員 会

〒899-2192 鹿児島県日置郡市来町湊町3305番地

印 刷 株式会社 秀巧社印刷

〒890-0072 鹿児島市新栄町25番地7

